

田所廣泰遺稿集

憂国の光と影



昭和十七年四月寫

廣泰

本書の標題に、「憂国の光と影」と題したのは、

岡倉天心の「東洋の理想」という書物の中にある

「詩の光と、英雄的性格の影との、愛国的思想が……」

という言葉から思い立ったものである。

田所広泰さんは、その短い生涯の中で、数多くの詩歌を作られ、多彩なる論考を重ねられ、しかも全国の青年学徒とともに、果敢なる思想戦に殉ぜられた。その悲劇的な一生を憶うと、この標題が、故人の在りし日の心情を偲ぶに、きわめてふさわしいことに思われた。

われわれ日本人の愛国の思想は、「詩の光」と「英雄的性格の影」から切り離されるものではない。日本の英雄のプロトタイプ（原型）ともいべきヤマトタケルノミコトの愛恋の歌も、その悲劇的生涯を偲ばせるし、万葉集の防人の歌も、雄々しく悲しい調べをたたえている。田所広泰さんの充実した短いその生涯と、雄渾な筆致による内心のその表現とは、まさに、このような愛国の、あるいは憂国の、「光」と「影」に強烈に色どられていると言えるのではなからうか。

序

(田所廣泰さんの一生と、その展開した思想運動について)

小田村 寅二郎

この遺稿集の筆者であり、かつ、また私ども編集陣にとっては先輩に当たる田所廣泰たどころひろやすさんは、終戦のあくる年、すなわち昭和二十一年に、三十六才の若さを惜しまれながら、東北地方の寒村、岩手県盛町さかきの疎開先の仮寓で、胸患の闘病生活について力尽き、敗戦後の祖国の前途に暗澹たる憂いを馳せながら、その酷しく短い憂国の生涯を閉じられた人であった。

その死に先立つ三年前、昭和十八年二月には、田所さんを中心にした同志十余名が、東条首相に直属する東京憲兵隊によって、「東条の政策に反対する言論は、すなわち反戦・反軍・反国家である」との嫌疑のもとに、百余日に及ぶ拘置を受けたが、田所さんは、なおそのあと同じ年に一回、翌十九年にも一回、と続いて拘置され、それによって既往の病痕を再発させられ、やがてそれが原因で、悲運の早逝となったのである。それとともに、この昭和十八年以降、田所さんは、

その政治的発言、學術諸活動を、ともに政府（憲兵隊）によって完全に封ぜられており、従って、今回の遺稿集編集に際しての基本方針、「既往に活版印刷によって世に公表されたものの中から選ぶ」ということともあわせ、ここに集録したものは、主として昭和十七年すなわち三十二才までのものうち、前記方針により、全作品から約半分のもので選ばれた。

（巻末に、わずかながら、終戦前後の日記から、「和歌創作」などを選んで、その頃の心境を知るよすがにするにとどめたことを、ご了承いただきたい。）

さて、この文集の目次が示すように、田所さんは、詩人であり、哲学者であり、思想運動家であり、青年指導者であり、憂国の志士でもあったが、とくに「天皇に直屬する生」（そういう題名の一文もあるが）を強く意識し、その見地に立って自己を敢しく猛省し続け、またその見地に立って世論に立ち向かい、大学学風への批判にも徹していった篤信の士であったのである。

田所さんの学歴は、もともと、学習院初等科↓東京府立一中↓一高↓東大法科、というように、どちらかといえばエリートコースと言われる道を進まれたが、一高生時代、すなわち昭和四年十才の折、黒上正一郎（聖徳太子が儒・仏兩教を体験的に摂取されたことを説かれた方）・三井甲之

（明治天皇御集の学問的価値を高く評価された詩人）という「学外」の篤学者に相逢う機縁を得てから、田所さんの精神生活、思想生活には、確乎たる人生觀の抛り所が得られ、しかも、持って生まれた「正しいと思ったことは直ちに実行」せざれば気がすまぬ一途な資質とも相俟って、他の追隨を許さぬようなきびしい「生の充実」が営まれていった。そしてそれ以後の生涯を通じ、おそらく亡くなられるまでの田所さんは、毎朝十数首の明治天皇御製を謹選しては、神前に二拝二拍手一拝をする作法とともに、御製拝誦のことを欠さず続けられたのである。

田所さんが東大生として在学した期間は、七年余（当時は、正規が三年間）という期間になっているが、これは、主として胸患による療養生活に起因することであった。ヘンシリンやストレプトマイシンのなかったその当時は、一たび胸の病に罹ると、数年間の学業を放棄して、療養生活に専心せねばならなかったからである。しかし田所さんは、その療養生活の中でも、自己の畢生ひつせいの事業としての、「祖国の伝統に立つ学問の確立」のために、まず一高学内の公認団体「一高昭信会」の創立とその相続に専念し、またのちに、東大内の公認団体「東大精神科学研究会」の創立に努力され、日本の思想、學術の是正に渾身の勇を振られたのであった。

この時期に田所さんが書かれた諸論文は、日本思想の中核たる「人間の心情」についての、真剣かつ体験的な考察であって、この文集の中の

(二一六ページ) 「明治天皇御製と作歌心理学研究の一階梯」(二六六才)

(二四六ページ) 「国家生活に於ける短歌創作の意義」(二七七才)

(二六三ページ) 「消息—短歌創作の心構へについて」(二七七才)

(二七九ページ) 「明治天皇御集に『たね』とのたまはせたまひたる大御言葉のうち仰ぎさとらしめらるゝふしづし」(二七七才)

(二四三ページ) 『『明治天皇御集』を『古事記』と照応せしめつゝ拝誦すべき理由について』

(二七八才)

などの論考を通じて、総合的な人生観を探求していかれた道程が、よく窺がられるようである。

またこのころ、同信相統を祈念しての、後輩を誘掖する心情としては、

(一五ページ) 「消息」—(註、一高昭信会の友らに訴へるがごときたより)(二三才)

(二二二ページ) 「消息—辻堂にて」—(註、三ヶ月を経た転地療養先から、過去五年間の体験を回想して、一高昭信会の友らに書き送ったもの)(二六六才)

(二三六ページ) 「消息—辻堂」—(註、療養先で六ヶ月を経た頃)(二六六才)

などに、赤裸々な心懐がよく見られる。

そして二十八才で東大を出られたその翌昭和十四年の夏には、早くも、多くの後輩たちとの協

力によって、神奈川県原当麻はらたけの無量光寺という寺院に、全国の高専・大学生、二十八校、一三〇名を集め、八泊九日間というかなり長期間の、「全国学生夏季合同合宿」を開催された。そしてその終了直後、参加者全員とともに都内に繰り込み、たしか今の九段会館であったと思うが、そこで大演説会を開かれた。この年の全国的規模の学生合宿が、田所さんの学生運動の第一歩であり、この演説会が、田所さんが対社会的に発言した第一声でもあったと思う。

こうした学生運動、正確に言えば、西欧の思想を生かじりのままに日本の高等学府の教科目に羅列したに過ぎないような高専・大学の文化系列の諸学風、に対する熾烈な改革運動は、それからの田所さんの、全力を傾注する対象になったのである。その頃の論考に

(二五四ページ) 「所謂『日本学』の建設と『帝国大学』改革」(大学教授の適格性についての正しき規定を大学令に挿入せよ、而して胎動する全国的学生運動の将来に刮目せよ)(二十九才)

(二六〇ページ) 「教育の意義は一変せり」(二十九才)

(二八二ページ) 「学術的迷信から正信へ」(新潟高校生有志に)(二十九才)

およびその前後の時期に発表した諸論考には、田所さんの指向する思想改革運動の骨格が展示せられていると思う。

かくて田所さんは、この学生運動を、本格的に全国的視野のもとに展開しようと積極的に決意され、かつ、大学学風の余殃を反映する日本朝野の時流思想の誤謬指摘に、真っ向から取り組まれたが、その翌年、すなわち昭和十五年には、三十才の若輩ながら、近衛文磨公、末次信正海軍大将、中島知久平氏ら当時の大御所を動かして、この方々に顧問になっていただき、「日本学生協会」という学生思想運動体を結成した。

この「日本学生協会」は、直ちに、有志学生による全国大学高専校への巡訪グループを結成、その趣旨の宣布を開始し、その年の夏には、信州の菅平高原で、全国の学生が九泊十日間の思想修業を行なうことになった。今日と異なつてまだ学校の数の少なかった当時であったが、実に八十四校の学生、約四〇〇余名の学生が集まった。遠く満洲の建国大学からも、台湾の台北高商からも、何人かづつの学生が馳せ参じてきた。

この「菅平合宿」といわれるものは、その指導者と言へば、田所広泰さんの三十才を筆頭に、二十六才までの東大の卒業生、在学生がこれに当たり、修練を受ける側は、十七才から二十八才くらいまでで、まさに指導者も被指導者も、すべて青年づくめのものであった。その意味でも、わが国における劃期的な学生運動であった、と言えるのではなからうか。

この「菅平合宿」のときも、前年の「原当麻合宿」の時と同じように、全参加者は、菅平合宿

を終えたその足で、東京に編隊を組んで上京した。そして先発隊によって準備された日比谷公会堂における、都民に訴える演説会に臨んだのである。山焼けした面貌と、心身を労しての十日間の思想の修練の結果、眼光はランランと輝く学生たちが、その緊張した体験からにじみ出る心境——時代の動向に対する憂念、学問の概念思弁化に対する心中からの疑惑——などを、切々と壇上から訴え続けた。文士の尾崎士郎氏も、激励演説に登壇され、立錐の余地なきまでの聴衆は、公会堂を埋めつくしたのであった。それまでの学生運動といえ、マルクス主義の専属物のように考えられていた時期でもあったので、右翼というセンスとも全く異なるこのグループの発言は、「宣戦の布告なき変態戦争」ともいうべき「支那事変」の長期化に、ようやくさまさまの不安と懐疑を感じ出した当時の有識者たちに、かなりの注目を払わせたようであった。

（なおついでながら付記するが、田所さんは文化・芸術に深い関心を寄せた人でもあって、この四〇〇名の菅平合宿と日比谷公会堂における講演会的情況とを、トーキーフィルムに作成しておこう、という卓絶したプランを強行された。大変にお金のかかる企てであったが、どうしても実行しようと主張された。そして当時たしか東京の田町あたりにあった藤原ラボラトリーという、破産寸前の六、七人のトーキー作成スタッフをある学生が見つつけてくるや、これを説き伏せて、一緒に菅平に来てもらい、十日間の合宿情景を事細かく撮影させた。このフィルムは36ミリ三巻（八二〇メートル）にまとめられ、「文化

の戦士」と題されて、後日、内務省の検閲（昭和二五・一一・一、B 第四参八式号）を得、さらに文部省から「一般用映画」認定（昭和二五・一一・一、ろ第4195号）を獲得して、今日まで大切に保存されているが、このトーキー映画の構成・監督は、すべて大学生たちによってなされたものであった。ちなみに、このフィルムには、尾崎士郎氏のその演説の一コマが、生まのまま集録されて残っており、また、当時のNHKの名アウンサーといわれた竹脇昌作氏が、全三巻にわたって解説を吹き込んでくださっている。とにかく、弊衣破帽、手ぬぐいを腰にぶら下げたホウバ下駄の当時の学生たちが、菅平高原で過した十日間の情景が、いまでも彷彿として生き生きとうかがわれるのも、田所さんの果敢な実行力によるものと偲ばれる所である。）

田所さんは、この「日本学生協会」の結成に先立って、青年たちだけの手で、別に「精神科学研究所」を創立された。一口に研究所をつくると言えば簡単に聞えるが、これは容易ならざる企画であった。研究所運営の資金も持たず、いまだその目当ても立たないのに、また研究所にする部屋一つ持たない段階で、「二高昭信会」以来の東大出の友だちを、一流銀行・官庁、教職など、れっきとした職業の場から、一人二人とくどいてその職場を辞めさせる作業を開始したのである。田所さんは、一人一人を訪ねては、祖国の運命と日本の現状とを、夜を徹して説き尽して廻わられた。そして遂に、約二十名近い同友を、悉くその職場から退職させてしまったのである。

辞めて集まった人びともえらかったが、これをやり遂げた田所さんの企画と実行力は、なみなみのことではなかったと思う。こうして生まれたのが、「精神科学研究所」であった。そこには、田所さんを中心にした同信のグループが成り立ったのである。そしてこの同人たちにとっては、当面の、資金活動が何よりも急がれたのは、もとより当然のことであった。

田所さんはそのために「精神科学研究所要綱」という冊子を書かれたが、その中の二つの文章は、当時の田所さんの物の見方を端的に示していると思われる。それで、同書の

〔三三〇ページ〕 「現代に於ける精神科学の使命」(三十一才)

〔三三六ページ〕 「本研究所構成生命体の生成史実」(三十一才)

の二文を、集録することにした。

また、

〔三五三ページ〕 「天皇に直属する生」(三十一才)

〔三六二ページ〕 「概念思弁の対立抗争より直接経験の協力世界へ(責任・指導者、創造的綜合)」(三十一才)

合」(三十一才)

〔三六七ページ〕 「人間性の復活に開導せらるゝ現代神話の生成」(三十一才)

〔三八四ページ〕 「現代の性格(ヒポテーゼの時代)」(三十一才)

などは、「日本学生協会」と「精神科学研究所」とを並立させながら、運動と研究とを平行して積極的に開始した時の論考である。

こうした田所さんに対して大ぜいの方々力が添えられたが、中でも、政友会の長老、(元鉄道大臣)小川平吉翁と、(元大蔵大臣)三土忠造翁の御力添えは、格別のものではあった。小川翁は、「自分は長い間政治生活をしてきているので、『政治浪人』というものがこの世にいることは知っていたが、君らのような『学問浪人』が、この世にいるとは思ってもみなかった。」と言われ、お亡くなりになられる前には、三土忠造翁に、「あの連中のことを頼むぞ」、と御伝言なされた、ということであった。そのほか、内務次官をしておられた萱場軍蔵氏、経済学博士の山本勝市氏、当時大阪工業会の専務理事であられた吉野孝一氏その他の方々が、田所グループ応援のために、筆舌に尽し難い御支援の道をひらいてくださった。

かくするうちに、わが国は、昭和十六年十二月八日に対米英戦争に突入することになった。A、B、C、Dライン(アメリカ・イギリス・支那・オランダ)に経済封鎖的の包囲を受けた日本は、逆に自衛のために遂に立ち上がることになったが、緒戦の勝利は、まことに華々しいものがあり、ハワイのパール・ハーバーの奇襲、南方海上での、不沈を誇っていた英軍艦プリンス・オブ・ウ

エールスとレバルスの撃沈をはじめ、皇軍将士の活躍はまことに目をみはらせるものがあり、翌昭和十七年春には、早くもシンガポールが陥落するに至った。都内では、その祝賀の提灯行列が、盛大に皇居前広場でくりひろげられたのである。

田所さんの炯眼がひらめいたのは、このあたりの時期であった。それまでも、支那事変の長期化のもとで、「永久戦争論」や「百年戦争論」が国内に横行して、国民の長期忍耐と志気を鼓舞するだけならばまだしものこと、本来、戦争は短期たるべきものを、強いてそれを常態化しようとする思想動向が拡がってゆき、その中には、おぞましくも、戦時下に国内で政治の変革をはかろうとする「戦争から革命へ」の論調さえ散見し出してきた。田所さんは、シンガポール陥落に当たって、日本の朝野が、上^{うわ}調子になり出した時に、「時代を洞察する必要あり」と、研究所々員を督励し、その共同研究のもとに、二つの重要な問題点を提示することになった。

その一つは、かつての日清・日露両戦役の折の日本では、政府・軍部協調の体制下に、出来る限り早く終戦の好機をとらえるための機能が、開戦直後から慎重に準備せられていたが、今回の東条首相の周辺には、それに類するものが、どうも用意されていないように見受けられること。従って戦争それ自体の終結のけじめについて、その最低限度の条件というものが樹立されておら

ず、下手をすれば、戦争は拡大の一途を辿り、やがて收拾すべからざる破局に至るおそれなしとしない、という点であった。

その二つは、戦時下では勢い物資の欠乏が生じて来るので、消費については統制経済が必要になり、国民は窮乏に耐えてその統制に服すべきであるのは、もとより当然のことであるが、当時の日本の言論界には、「統制経済ではだめで、計画経済に移行せよ」という声が、次第に高まってきていたことである。一体、「統制経済」は、物資の欠乏に対する政策的措置であるが、「計画経済」といわれるのは、国家社会主義、ないしは共産主義体制のもとに布かれる経済機構である。いなそれは、経済そのもの本来の、需給関係に立つ機能を否定して、一切の経済諸活動を政治に隷属させるものとなるから、その結果は、創意工夫と人間の意欲とを減殺していくことになり、ことに、戦時下にそのような本質的の切り替えを断行するとせば、当然に革命を招来せしめずにはやまぬ、と考えるに至ったことである。

この二つの問題提起と同時に、田所さんは、自分らの同年令の人びとは、次々に応召して「死地に身を曝らして」いるのだから、われわれも決死的覚悟で、この二点を国民の前に明らかにしなければいかぬ、そして東条内閣をして出来るだけ早く退陣に向かわしめねばだめだ、という決

意を固められた。直ちに「精神科学研究所」は、少数ながら全機能を挙げて、東京に、大阪に、そして全国に、数十回に及ぶ講演会を打ち出し、また「思想国策叢書」、「世界観大学講座」、機関誌「新指導者」誌上などによって、これらの主張が果敢に開始された。一方東条首相は、東京憲兵隊をその手中におさめ、反東条的言論には殊更に神経をとがらせ、この年（昭和十七年）の暮ごろから、田所逮捕の肚を固めたといわれる。伝え聞く所ではあるが、東条首相は、はじめ内務省と検事局に、田所たちの検挙を命じたが、両当局とも、「あの連中は、決して個人的な思惑で行動しているのではなく、よく勉強しながら真面目に国家の前途を憂えている連中だ」と、いつて取り合わなかったため、ついに、昭和十八年二月に、東京憲兵隊の直接の出動になった、と言われている。その以後のことについては、この「序」の冒頭に記した通りであって、田所さんは、一切の活動を封じられたばかりか、その拘置生活における不健康がたたって、遂に早逝される原因を生んでしまったのである。この文集の後半に載せた昭和十七年の諸論考、すなわち

〔四〇一ページ〕 「文武論」(三十二才)

〔四〇九ページ〕 「軍政論」(三十二才)

〔四一八ページ〕 「戦争遂行の内面的力」(三十二才)

〔四二九ページ〕 「歴史必然論とソ連礼讃論」(細川嘉六氏の『世界史の動向と日本』について)

(三十二才)

(四三六ページ) 「人間性の危機」(三十二才)

(四五七ページ) 「現実感覚の鈍磨」(三十二才)

などは、当時すでにきびしくなった出版物検閲を意識して、注意深く書かれたものではあったが、なお雑誌が発行される都度、その一部に削除命令をうけたものが少なくなかった。

以上、田所広泰さんの思想運動、ならびに学術改革、教学刷新に捧げられた一生を、一応ご紹介させていただいた。田所さんの生前の悲痛な御心情を思うと、つい筆が走り過ぎてしまったかもしれない。不行届きの段は、どうか御寛恕を得たいと思う。

それにしても、一昨年昭和四十三年以来、日本全国の大学で続発した擾乱の真の原因は、一体どこにあったのであろうか。田所さんが、若き情熱を傾け尽して指摘したように、「概念思弁」をもって「学問」と勘違いしてきた弊害が、いみじくも露呈したのではなかったであろうか。こうした時期に、本書を作成して有識者各位のお手許に差し上げることになったのも、何かの因縁のような気がする次第である。田所さんの時事的論考その他が、すべて肯綮に当たっているか否

かは別にして、もし本書の御精読を忝うすることが出来れば、地下の田所さんの霊もいかばかりか感泣されることと思う。

(昭和四十五年一月二十三日記)

例言

一、本書の編集には、「一高昭信会」時代から田所さんと行をとともにされた（労働科学研究所員）高木尚一さん、（千歳高校教諭）桑原暁一さん、（日特金属工業常務取締役）加納祐五さん、（亜細亜大学教養部長）夜久正雄さんに、主としてご協力をいただいた。約一年の月日を費して、遺稿の中から選んだ。その選択作業ならびに、巻末の年譜の作成は、主として、前記の高木さんと加納さんが当たられ、とくに長詩と短歌の選択は、前記の夜久さんにお願した。また、（講談社社員）磯貝保博さんに編集連絡係と校正の作業に、（川崎製線取締役）三浦貞蔵さんのほか、浜田さん石井さんにも色々手伝っていただいた。

一、当初の編集方針が、既往に、活版印刷にされて世に公表されたものから選ぶ、ということであったので、書簡その他広汎な資料には、手をつけることがなかった。また、活版印刷されたものの中にも、まだまだ沢山のものがあり、とくに、昭和十六年十月に、田所さんが一気呵成に書き上げられた「思想戦戦闘綱要―百八カ条」は、大変に力強い筆致のものであるが、紙面の都合から残念ながら割愛することになった。

一、また、昭和十八年二月十五日（この日に田所さんはじめ同志が検挙されたが）の第八十一回帝国国会（衆議院）の決算委員会の速記録（第三回）、および、同月二十五日の同じく決算委員会の速記録（第十回）には、田所さんの言動に関する質疑応答が記されており、時の湯浅三千男内務大臣と翼賛議員今井新造

氏、および情報局次長奥村喜和男氏と同今井新造氏とのあいだで、かなり長い問答がなされておるので、参考のため巻末にでも掲載しようということになったが、これも紙数の都合で割愛することにした。

一、遺稿の出典はすべて明示したが、

「原理日本」というのは、三井甲之・蓑田胸喜・松田福松氏主宰の月刊誌。

「伊都之勇建いづのむけだち」というのは、「一高昭信会」の月刊誌。(時折欠巻があった)

「学生生活」というのは、はじめ「東大文化科学研究会」のちに「日本学生協会」の月刊誌。

「新指導者」というのは、はじめ「日本学生協会」のちに、「精神科学研究所」の月刊誌。

「思想国策叢書」というのは、「精神科学研究所」の定期刊行物。

であり、右のうち「原理日本」を除き、他はすべて田所さんが主宰されたものであった。

一、出典の原文には句点が多く余りに少なく編者において適宜句点(、)、を挿入し読者に便ならしめた。

一、昭和十七年最後の二つの文章「人間の危機」と「現実感覚の鈍磨」は、検閲を避けるためか、文意が通じ難い難解の箇所が多すぎるので、編者の責任において加除を試みざるを得なかった。

一、巻頭の遺影(および筆蹟)は、昭和十七年四月に田所さんから編者に贈られたものを掲載した。

一、各奇数ページ上段の「柱」に、年号と年令を入れたのは、各文章の各箇所ごとにこの若き学徒の姿と年令と、その書かれた年代とを、できるだけ印象的に想起していただきたいためであった。

目次

序 (田所広泰さんの一生とその思想運動について) ……………	小田村 寅二郎	1
例言 ……………		15
昭和五年——二十歳——		
詩歌(明治神宮参拝) ……………		1
病あつき師を偲びまつりて ……〔註、間もなく三十歳の若さで亡くなられた黒上正一郎先生のこと〕 ……		2
昭和六年——二十一歳——		
消息・詩歌 ……甲府の三井甲之先生に ……………		7
昭和七年——二十二歳——		
詩歌(五月二十四日)(くどもるおもひ・かなしきいのち・まことのねがひ・うた・夜)(友らを迎へて)		
(蠟燭・病床吟) ……………		9
昭和八年——二十三歳——		
消息 ……〔註、「一高昭信会」の友らに訴へることきたより〕 ……………		15

大丈夫論	22
不可避の将来と現実の用意	28
詩歌（鹿島灘）（土用浪・合宿にて・友に）	34
昭和九年——二十四歳——	
「蒼海遺稿」摘録研究（上）	37
「蒼海遺稿」摘録研究（下）	46
晩春・初夏を詠ませ給うた明治天皇の御製	59
明治天皇御集に表はれたる時代区分と日本文化史研究の基礎問題についての暗示	
〔叙事詩と抒情詩との関係〕	67
詩歌（夜の参拜）（一月十一日）（鶴ヶ峯・畠山忠重をおもふ）（光のしぶき・朝）（述懐・ある日）	
（虫・神）（事務所にて）	79
昭和十年——二十五歳——	
乃木大将の和歌	90
亡き黒上先生の御遺著の末尾に載せた「後記」の一文	96
久坂玄瑞の和歌	101

短歌作品と作者の生涯	104
詩歌（黒上先生を偲びまつりて・室戸崎をおもふ・故黒上先生の御母堂より密柑をいたゞきて）	
（昼）（江差追分をきく）（九月二日の夜・正述心緒・また・臣道・思・秋・栗・松茸をもらひて）	
（歌・道）（献上）	107
昭和十一年——二十六歳——	
明治天皇御製と作歌心理学研究の一階梯（例会の兼題「待春」に関連して）	116
消息（辻堂にて）……〔註、三ヶ月を経た転地療養先から、過去五年間の体験の告白と、さまざまの心境を「一高昭信会」の諸友に書き送ったもの〕	122
消息（辻堂にて）……〔註、療養六ヶ月を経た折のたより〕	136
詩歌（父）（夕・冬夜・歌・雪）（九月二十一日・豪雨の報をラヂオにきゝて・祈願）	142
昭和十二年——二十七歳——	
国家生活に於ける短歌創作の意義	146
詩歌（意欲・五月・第二行進曲）	151
独白か主張か	157
願ふべからざることを願ふのが人間である	159

詩歌(進軍)	160
消息……〔短歌創作の心構へについて〕	163
詩歌(歳末・知らぬ儂・悲歎独白)	173
明治天皇御集に「たね」とのたまはせたまひたる大御言葉のうちに	
仰ぎさとらしめらるゝふしぶし	179
意志の実現(作歌体験に於ける小論)	186
明治天皇御集研究(「御集」共同研究の開始に当りて)	204
詩歌(汽笛・鳥・江の島ゆき)(江の島にて)(夜・初夏・蝶・感謝・友のたより)(夕みち)	
(無題)(月夜・けふ)	217
のりと……〔黒上正一郎先生のみ霊のみ前に〕	226
昭和十三年——二十八歳——	
歌壇論評(子規の歌、茂吉の歌)	230
「維摩経義疏」研究(人生の共感より出発せる精神生活の行くべき方向とそこに越ゆべく	
現はるゝ段階とは如何)	235
詩歌(嵐)	239

「明治天皇御集」を「古事記」と照応せしめつゝ拝誦すべき理由について	243
詩作漫言	246
詩歌(雨)(歩む人―ロダン―)(隣人)(列車)(無題)(夕)	246
昭和十四年――二十九歳――	
所謂「日本学」の建設と「帝国大学」改革(大学教授の適格性についての正しき規定を大学令に 挿入せよ、而して胎動する全国的学生運動の将来に刮目せよ)	254
教育の意義は一変せり(学生運動の必然性とその方向)	260
學術的迷信から正信へ(新潟高校生有志に)	282
「マタイ伝」私講(一)・(二)・(三)・(四)	284
詩歌(潮汐)	303
昭和十五年――三十歳――	
道元研究の基礎的注意	304
知的「革新」理論を襍破して全人生的改革の意志行動へ	307
長詩・北白川宮永久王殿下	317
三井甲之先生の論文集の「はしがき」の一文……「日本文化の勝利」の	320

教育者の苦悶（某県下教育者の指導者講習会の指導に行った経験の記録）	324
現代における精神科学の使命……〔註、故人主宰の「精神科学研究所」の「要綱」の「序文」〕	330
「精神科学研究所」構成生命体の生成史実	336
別離……〔註、黒上正一郎先生の御臨終近きころの思ひ出〕	348
天皇に直屬する生（浅野晃氏著の「楠木正成」を読む）	353
概念思弁の対立抗争より直接経験の協力世界へ（責任・指導者・創造的綜合）	362
人間性の復活に開導せらるゝ現代神話の生成	367
現代の性格（ヒポテーゼの時代）	384
日本必勝戦論	389
昭和十七年——三十二歳——	
歴史を経験する者	397
文武論	401
軍政論	409

一、「軍政論」は実際上の必要からでなく、ある一つの理念に基いてをることに注意すべきこと

二、文・武の性質の根本的相違と両者の相互補足的関係

三、「軍政論」は統帥権の神聖を犯すもの、従って国家を弱体化するもの

四、戦時強力政治運用の正しき実際的方法は如何

五、「軍政」の歴史は国家を必ず弱体化してゐることを証してゐる

六、「軍政論」横行を憂ふるもの、祈念する全国民的協力の具体的方途如何

戦争遂行の内面的力……………418

歴史必然論とソ連礼讃論（細川嘉六氏の「世界史の動向と日本」について）……………429

人間の危機……………436

現実感覚の鈍磨……………457

詩歌（白浜）（九月十九日）（北白川宮永久王殿下御二年祭献進歌）……………462

昭和十八年——三十三歳——

詩歌（折にふれて・御製拝誦）……………466

昭和二十年——三十五歳——

「病床雑詠」抄……………（八月八日より九月二十一日に至る終戦前後の日記より）……………467

田所広泰 年譜……………489

田所廣泰

遺稿集

昭和五年——二十歳——

詩歌 明治神宮参拜

ひしがし
東の

大海原に、

千早ぶる神の御代より

一すぢに貫き来し

敷島のやまとのくに、

その国に生れあひしかしこぎえにし

そを信じつゝ

そを現実を感じつゝ、

まめやかに我が大君につかへむと

大神のみまへかしこみ

あかきこゝろに誓ひまつるかも。

〔原〕日本
昭和五年三月号

病あつき師

問もなく三十歳の若さで亡くなられた黒上正一郎先生

を偲びまつりて

黒上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」(隱写版刷)の「序文」として昭和五年に執筆した

今より二年前我等が黒上先生に遇ひまつり、先生によりはじめて

明治天皇 聖徳太子の大御教おほみかほしにめさめしめられし尊き機縁によつて、我等は混沌として帰趨に迷ふ現代日本青年の行手に、定かなる道が示されたのである。先生に遇ひまつりしことは我等の生をつくし忘れられぬ感激であり、この大御教を仰ぎまつる我等の任務のいよ／＼重きことをさとらしめらるゝのである。我等は、国民帰趨の大道を示させ給ひし大御教を仰ぎまつり、永遠の国民教化を念じたまふ広大の大御心に撰取せられつゝ、同じき心の友らと共に師の下につどひ、痛苦と努力の一生を、祖国日本の為に捧げつくさんと誓ひてつとむるものである。

明治天皇 御製

友

もろともにたすけかはしてむつびあふ友ぞ世にたつ力なるべき(明治三十六年)
あやまちをいさめかはして国のため力をつくせ益良雄ますらをのとも(明治四十三年)

思想的に経済的に迷ひ苦しむ国民生活の苦難を除き、永遠に若き日本生命をこの現実生活に顕はさんことは、我等現代青年の等しき念願である。我等はこの同じき念願に生くる故に、心を一つにしていさめあひたすけかはし、こゝに全体協力の威力を発現して祖国日本の為につくさねばならぬのである。聖徳太子が憲法第九条に、『群臣共に信あらば何事か成らざらむ。群臣信なきときは万事悉く敗る』と宣ひしは、まことに、この国民融合協力のうつつしき威力発現を念じさせ給ひし大御心と拝察しまつるのである。

大陸文化の渡来と閩族の専横の下に、国民的帰一の大道に迷ひし当代国民に対して、太子は、『若し自行能はずんば安んぞ衆を濟ふことを得ん』とのたまひ、国民の教化救済は先づ自らの内的改革に基かねばならぬことを信知せさせ給ひ、国民生活の教化開導を念じて努力精進し給うたのである。国家の運命と国民生活の安危とを一身に荷ひ給ひしこの悲壯の大御心は、名もなき国民の痛苦をもみそなはし、『共に是れ凡夫のみ。是非の理詎ぞ能く定むべき。相共に賢愚なること銀の端なきが如し』と自らの足らはぬ生にめさめ、その故に、内的平等の同胞感に国民協力の威力を念じ給ふのである。勝鬘經義疏撰受正法章に『友は是れ相救ふを義となす。然れども請ひて後に救ふは真の友にあらず。故に不請の友と作ると言ふ』とのたまふは、全体協力の同胞感に個我の全体生命への没入の信に徹したまひ、国民永遠の教化救済を願ひたまふ広大の御精神に

して、こゝに『和を以て貴しと爲し、忤^{さか}ふことなきを宗^{しゆ}と爲す』と示させ給ひしまことの国民生活は成就せらるゝのである。太子一代の大陸文化批判総合の国民帰趨開示の偉業も、『共に是れ凡夫のみ』と告白したまひ、『群生と苦楽をとみにせん』と念じさせ給ひし大御心によつてこそ実現せられたのである。殊に大乘仏教は、太子によつて政治道德活動を内容とし苦痛の世を照らす人生宗教として宣布せられたのである。こゝに我等が大御教を仰ぎまつり大御心に摂取せらるゝ感激は、同信同朋生活に精進せしめらるゝ力にして、この同朋生活によつてこそまことに我等は明治天皇の仰せられし『世にたつ力』として、祖国日本の爲つくすことを得と信するのである。我等が自らの足らはぬ姿にめさめ、苦惱濁乱の世をおもひ、国民永遠の大道たる大御教を仰ぐ同信同朋生活へ歸入するは、現代青年のまことの道と信するのである。今や、国民生活の苦悩救済とまた、東西文化融合の重大使命に面接して、我等は深く大御教を体し、国民としての具体的生活の求道体験によつて、即ち国民協力の信によつて、この大業を成就せねばならぬのである。而してその源たる同信同朋生活より、この大業は次第に開展せしめられねばならぬのである。『群臣共に信あらば何事か成らざらむ』とのたまひし大御言葉を再誦して、我等はこの同信同朋生活によつて如何なる国家の難業をも成し得べしと信するのである。

黒上先生は、半世の御研究を以てこの大御教を世に広めまつらむとする『聖徳太子と世界的日

本精神』の稿を草し給ふ重荷と、その中にも常に我等をみちびき給ひし御労苦によつて、去年歳暮病を得たまひ、今尚郷里徳島に長きみ病の床に臥し給ふのである。先生の御帰郷の後は我等の拙き共同讀仰研究によつて、例会をつゞけて来たのであるが、大御教をうつしくいたゞきまつる道には遠く迷ふのみであつた。今二月、先生の命によつて、右記の書をその既稿の分のみを謄写刷にして我等のテキストとする為、整理して題を『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』となすことゝなつたのである。爾來三ヶ月の長き、我等は只管にこの完成につくしたのであるが、高き大御教と深き御研究とは、我等の手を以てしては如何ともする能はざりしことをおそるゝのである。然し拙いながらも先生の御著発行の重任を終へんとし、我等はまことに深きおもひである。新学年新入の諸兄を迎へて共に先生の御講義の下に例会をつゞけ、親しく導かるゝことの出来ぬことは我等一同のなげきであるが、今本書を得て、先生のみ教をうつしく仰ぐが如く、同信同朋生活の枝折を見出すことは、せめてものよろこびである。我等は一同一層協力して一日も早く先生の御病の癒えんことをいのり、聖王の大御教を仰ぎつゝ同信協力の生を持續してゐるのである。

最後に、我等は共に黒上先生を仰いで我等と同じき信の下に大御教を戴きまつり、国民生活に努力精進せんとする東京高等師範学校の信和会と共に、いよ／＼力協せ助けかはし、将来の任務に進まんと願ふものである。

詩歌

たより

次々によせます友のみたよりを師の君のもとにつげやらましを

よろこびにまたかなしみに師のもとにつげまつらなむ事は多かれど

こやします君のなやみをおこさじと友らと共にみたよりせざりき

きのふけふ手にせしみたよりこれもまた告げえずとおもへばかなしくなりぬ

音信のかよはずなりし今は更にかへりてうれひ深かまさりをり

みやまひのいえし日いかに師の君のおもひふかゝらむその日まちをり

遠きさきのことをおもふこゝちしてはかなき日のみくらしてあるかな

〔原理日本〕
昭和五年八月号

昭和六年 —二十一歳—

消 息 (註、世田ヶ谷の自宅から甲府の三井甲之先生に手紙と和歌を)

〔原理日本誌
昭和六年三月号〕

先日は故黒上先生の追悼会(六年二月八日)に御いそがしきところを御いで下され難有御礼申上げます。もうおなくなりになりましたしてより百五十日となり、月日の経つの早いことにおどろきおそれ、只今ひたすらに一致団結して御遺教にたがはざらむと、共に努力いたして居ります。このころは、道の話としいへば涙もろくなりまゐるのでございますが、ふりかへり身の行ひまた信仰思想の徹底といふ様なことを考へるとき、まことに至らぬ様を見せつけられて嘆いて居ります。遣されし子等を御あはれみ下さいますして、この上とも御指導下されんことを願ひ奉ります。私共もいよく卒業(註、一高の卒業、東大への進学)となりましたが、追悼会もをはり、これより思ふ存分の活動をせむと無疲倦のたゝかひをくりかへし念じて居ります。丁度私の二階より甲斐の山々をのぞみ、三井先生の在す方を直接にのぞみ得ますのも心づよく存じて居ります。

冬ごもり春さりくれば日の本のゆくへのこともおもほゆるかも
春きなば楽しき日をとおもへどもかなしきおもひふかまさるかな
師の君のみまかりましゝ去年こぞの秋の遠ざかり行くもかなしとおもへり
あはたゞしき悲嘆もすぎてしみとほるこゝろとなりぬ月日経ぬれば
春来こむといふことのはにさまゝのふかきおもひをこむるころかな

きのふの天気

春立つと思ひしこともたがひけりけふ吹く風のまた寒くして
消えのこる雪はこほりて夕べより雨ふりいでぬ風ふきやめば
天つ日のかげもかくろひさびしらにけふひの一日を送りけるかな
まちわびし春の近しとうちふるふわが胸わびしけふはくもりて
あたゝかき風は吹かぬか光さすみ空はれぬか春近けれど

詩歌

五月二十四日

初夏の日かげともしみ植込みのみどりかげさす窓辺とめ来ぬ
板びさしふかくおほへる茂りばのかそかにゆれつすゞしき窓の辺^へ
砂利^{じやり}の上にさす木々のかげあざやけき初夏の日の光ともしも
まどの下の庭木の根がた土くろくしめれる色のなつかしきかな
見上ぐれば風にさゝなり青空に光りてゆるゝよもちの若葉は

詩歌

くぐもるおもひ

浅間山ゆ天ふき上ぐるけむりこそあが胸はらせけむるいきぶきよ
大なだの山なす浪のさかまかばあがこゝろやゝになくさむらむか

「伊都之男建」
昭和七年六月号

「原理日本」
昭和七年七月号

電いなづまのくろくもやぶりたどなはる山裂きひらめきあがむねなくさめよ

いかづちに山なす浪よ黒雲よなが荒れざればあが胸裂けむ

男の子われ天地おどろかし大砲おほづつのとどろきさけばむ胸さくるまで（七・五・二八）

かなしきいのち

おしつまりはりさけむ胸おさへてもわが歌よまむいのちのかぎり

悲しみはかぎりなけれど力なくもだへあるべしや男おとこの子われはも

ほろびなきいのちのために生くべきが男の子のつとめぞやまと男の子の

動き動きやまぬいのちをもとめゆきたふるゝまではわれやすむまじ（七・五・二九）

まことのねがひ

みとめにしすべての光り消えはてし今ぞひらかむ新たなの生を

再生を念ぜしこゝろはかなくも欺あざむかえしと思ふもこゝろよき

力なき理想かなぐり動乱の現実そのまゝ生きむぞ今日よりは

うた

いきをつくいとももあらずひとゝきによみ下すつよきしらべにうたはむ

ますらをのつよきいのちをゆるみなくながるゝしらべにうたはむひとゝき

ひとよきのいのちを得なばもよとせのよはひもさらにかへりみはせじ(七、六、二)

夜

ほそ雨のかゝる夜くだち道の上にうつるともしび見つゝかへりく

家々の障子あかけど立ちならぶ門辺をぐらし行く人もなみ

おくまれるかたにしづまるわが家のいこふがごときにくゝろひかるゝ

家いづるときゝつけおきしきざはしの上のともしび一つともれる

くらき灯のさびしきあかりもかへりくる子をむかふるかなしきひかり

たらちねの母のいませばさびしかる我がやもたゞにこひしくあるか(七、六、三)

詩歌

友らを迎へて

〔原理〕日本
昭和七年九月号

たからかに寮歌をうたふもろごゑの門辺にきこゆ友ら来るらし
はだへ切る北風すさび夕やみのやぬちをこむるたそがれのころ
玄関にどよめく声に戸開けば友らの面のゑまひて立たり

手にく杖つゑなすほそき枯枝を持ちたる友らはいづくのかへりか

あたゝかき茶なりとすゝりて行きたまへ休みたまへとうちに招じぬ

山なかの木々には春のおとづると語りし友のこゝろのうれしき

山々のかひをし行けばあたゝかき冬日のてりて風吹かずとふ

人の来ぬさびしき公園のましらゝに果物あたへたはむれしとふ

ブランコに乗りて興ぜしけふ一日子供のごとしと友は語りぬ

やまひして久しく遇はざりし一年の友らにあひて去年を偲びぬ

かはりなき友らの姿けふこゝにむかへしことのうれしかりけり

しばらくは机かこみて冬の夜のたのしきまどあとなりにけるかな

西寮にうつるといひしことのはに友の決意のほのめくごとし

用意なきまゝに買ひこし山もりの菓子を出せば友らは平げぬ

語るべき話題もなけれどわかるゝがをしさに友の帰るを止めぬ

しかれどもかへりのみちをことさらに止むるもあしと送りていづる

塀にそひて町吹きはしる北風の夜みちに寒したもとひるがへして

友ら送りしばしかたらず寒空に停車場さして歩きゆくなり

上りの車にまつまをやゝにかたからひてしばしの別れをしみけるかな

註、「一高昭信会」の部屋は、西寮十三番室であつたので「西寮に移る」とは、会の部屋に同居するの意味。

昭和7年(22歳)

車来ぬと走る友らのかげははや車窓によりてわかちもつかず
赤き灯をしりへにともして走りゆきし車にうごく友らの姿
こゝろゆくゑまひをふくみ家路さしてかへるわが足いつかいそげり
つどひてはまたわかるゝがうつしよのならひかかりそめのけふのつどひにも

詩歌 蠟燭

蠟燭の

きえゆく

かなしみ

ま白き

はだへに

おとすは

涙か、

きえはてゝ

いづちゆく、

なが

たまの

かなしき

ゆくへ。

〔原〕理日本
昭和七年十一月号

病床吟

とらへえぬ
まぼろしに
たけきこゝろ
たゝかひ
つかれぬ――
あゝ
いつの日
おほきいのち
あまかける
うましいのちに
あを忘るゝか。

み空のみ
仰げども
あはとはに
地上の人！
おもひなく
みくのために
ゆきにし人の
たまこそ憶へ、
のこりなく
祖国のいのちに
いそぎし
そのひと時
あはれ
そのひと時を！

昭和八年 — 二十三歳 —

消息 (註、「二高昭信会」の友らに訴へることきたより)

「伊部之男建」
昭和八年九月号

いまこのおもひを客観化するいとまもなく、消息を以て同信諸兄のみこゝろに訴へ、懺悔告白
決意俱誓せしめられ、論文また創作の論述表現を補ふ意味といたし度いのであります。私共は近
く故黒上先生の御三周年の御命日を迎へようとして居ります。故先生の許に同信求道の一路に導
入せしめられましてから、こゝに五年半の歳月のことをおもひますと、無力無慚愧無感恩にひた
すら泣血悲嘆いたすのみであります。心も落着かず筆を走らせて居ります只今、きのふから吹き
晴らした空は深碧に澄みとほつて一点の雲もとどめて居りませんが、机をおいてある北窓は吹き
あるゝ風にしめきつた硝子戸がゴトゴトと言つてをり、埃をまじへた乾燥した空氣がのどをいた
めるやうのこゝちがいたします。短いやうに思つても長かつた夏休みが終つて、この年も秋とな
つたのであります。僕の心には、ま近に冬が予想せらるゝのであります。

昭和8年(23歳)

現代教育に圧曲せられつゝ、求道の血涙の不足のために、中学一年父を亡うしなひましてから五年間闇黒のうちに摸索してまゐりました私の心に、蘇生のみ光を投ぜられたのは黒上先生のみ教へでありました。それから五年半の今日までの同信生活は短いとは申されませぬが、実際に先生のみ教を受けることのできましたのは、一年半に過ぎなかつたのであります。昭和四年の冬、おしせまつてから、み病のみからだを揺るゝ汽車の寝台に横へて御帰郷遊さるゝのをお見送りいたしてより、遂にお目にかゝることができなかつたのであります。今日のやうの秋の日には、九月十三日の夜行で、御危篤の先生をお見舞すべく、道を中央線にとつて途中甲府にて三井先生にお目にかかり、尾花のなびく車窓の景色を印象せしめつゝ名古屋へ出て、徳島にわたつた時のことを思ひ出します。そのころの私共のおもひは何とも申上ぐることばもありませぬ。先生の御病氣御帰郷と共に多く集つて居られた方々も次第に去つて行かれました。その時の四肢をもぎとらるゝやうな苦しさは今も骨身にしみて居ります。私共は結局何もわからずに、会を守ることことに専心いたしましたのであります。相続といふことの重大であることを痛切に知りましたのもそのときでありました。しかし、要するに無力のいきもろく／＼つけぬやうの努力であつたのであります。いまからおもひましても、そのころの会は暗澹たる感じがいたします。先生御逝去の年には河野兄くわのが病の床につかれました。その翌年の春の戸田たの合宿のことはいろ／＼の意味で印象にのこつて居りま

す。その秋、満州事変がおこり、丁度今日のやうの天気がつよぎましたころ、焦燥か内攻する激情か、終日のぼせはてるのを感じ高く晴れた空を見、堅い緑に赤いもみぢに、木々の葉のかはつてゆく山の色を見ますと狂気のやうのきもちがいたしました。僕も、原理日本社主催の慶大講堂での満洲事変講演会の感激の夜、ひいた風邪をこじらせて長い病床に臥したのであります。翌年正月の新井、河野両兄の御長逝、その後のことは今、一同の心に新たなことであります。

かういふ訳で、稀有（稀）の内的願求によつて生れた会は、また稀有（稀）の悲劇の創立史をつくつてきたのであります。その上に病氣と怠惰に何ごともなかりし自分のことをおもひまして、ここまで書いてまゐるのもやつとのおもひであります。古人のことをおもひ、維新の志士の苦闘のあとをたづねますにつけ、迂路にさ迷うて居つた過去に愧死せしめらるゝ心地がいたします。み国につくすべき身の無力は不忠であると覚悟いたして居ります。副島蒼海先生は、「春興四首」と題した詩の中で、『君子自多千歲憂、小人歷像豈知愁』と慷慨してをられます。ぼくらにとつては、鉄壁を通す意気こそ信なれ、と知らしめらるゝのであります。それだけの力を持つて居らぬ者が、先生方の口真似をして、あゝも言ひかうも言ひしてまゐつたのは、皆真剣の求道でなかつた証拠でありました。まはりくどい概念の遊戯に陥らずに、何故真率の表現と内心の決着を求めてまゐらなかつたかと自責いたします。先生方のみ教をなぜそのまゝにいたゞか

ずに、それに自分の考へで言ひまはして見ることに時間を費したのかと悲しみます。

黒上先生の御遺稿をまとめることもまだ実現の時に至つて居りません。河村（幹雄）先生の御遺稿が御逝去一年にして出ましたことゝ比べまして、故先生に対しまつりても申訳なきことでありませぬ。また、昭信会自身未だく到底、全一高生活に浸透する力を得てをらぬのであります。

しかし、つまらぬ愚痴はこれで止めます。私はいま、この深まざる悲嘆と対照せしめられつゝ、翻然たる決意にみだしめられてをるのであります。或は、この決意によつて対照強化的にやうやく、まことの悲嘆・憂苦が湧いてまゐつたのかもわかりませぬ。しかし、これは決して私事ではありませぬ。

それは、この夏の合宿の不可思議の開展であります。その同信生活そのものゝ開展と、現下の時局の趨勢との微妙の関連であります。実際この夏の合宿は記念すべき合宿でありました。それは参加した者のおもひにきけばわかることでもあります。又、それは参加できなかつた者の心にも伝つてをるものであります。中ごろより毎夜つゞいた一年の諸兄の告白をきゝまして、全く一つおもひであることにおどろいたのであります。また、合宿前の個人的期待緊張感を外れてしまひ、全体没入のよるこびになすこともなく、報いられし努力もありませんでした。迫りくる予感もありましたが、それは清流のごとき爽快の感といふよりも、覆はるゝごとき把握しきれぬ力で

ありました。学ぶべきことのみことに果しなきことをつくぐと知らしめられ、うるはしくなつかしき山水と農村青年等のまごころに接して、自然と人生のたちがたき関係についてさとらしめられるものがありました。これらのことは、これ迄の合宿ではなかつたことでありました。しかし、分るゝときには心機一転を相約したのであります。

合宿後一ヶ月余を経た今日であります。その間、佐藤(賢吾)兄御母堂の御逝去、加藤(鉄夫)兄御父上御逝去についで御祖父上の御逝去、高木(尚一)兄の御発病、それらのことがさまざまに織りなされてまゐりました。又、在京の者の語り更かしゝ夜のことゝ月見の夜のこと防空演習の夜のこと観艦式拝観のことなど、いそがしき思出で、いま一つ一つ分ちていふべき時ではありませぬ。しかし、ぼくにとつては、佐藤兄御母堂の御三周日忌の御墓参の一日は、観艦式拝観の一日と共に、非常の印象をとどめしめられて居ります。会の上を常々おもはれて御涙催されしといふ亡き御母堂の御霊が、私共の上へのぞまれしことは、実際その日体験したことであります。それについてもいまはしく述べて居る暇がありません。天皇陛下の御親閲の下に行はれし大観艦式の壮観感銘、それらは連作の方にゆづりまして、かへすゝも、倫敦条約の屈辱を悲憤せしめられましたことのみにとどめます。たゞこゝに川出麻須美先生の

天もつちも清まはりつゝ大君の大御幸をぞまちたてまつる

といふ雄大の調べを共に忘れぬやう記しておき度いとおもひます。

志のみ速^{はや}り為すところなくまゐりました過去をかへりみまして、道遥かなりの嘆をくりかへして居ります。さきの詩と併せまして、『独善憂愁独善歌、千年忼慨此身多』の蒼海遺稿の「有感」と題した詩の一節は、私の腸^{はらわた}を絞^{しぼ}ります。自らの愚鈍を顧みず、日本の生命に帰入し千古の精神を打建つべき切願のみ断ちがたきおもひであります。

五・一五事件の陸海軍被告の陳述は簡単に評し去るべきものではなく、私も複雑の気持で読んでまゐりましたが、大事決行の意志をたゞすために、お互ひの腹のさぐり合ひをしなければならなかつたといふことをきいて、人生の虚^{こが}仮^そ相^{そう}に今更ながら長歎息いたしましたことでありました。非常の時に当つてこそ、信はあらはるゝのであると思ひます。私共も、これよりまことの精神運動を開いて行かうとするのに、一人でも多くの同志を求めねばなりません。古の人々の信の集ひの少かつたことなどをおもつて、少くともよい、と満足するのは、外形を見て精神を知らぬものであります。私共は同志の連結は私心の襖^{あは}被^ぎ（みそぎ）とおもつてをります。

親鸞が、『如来の本願をとくを経の宗致とし、仏の名号をもて、経の体とす』る大無量寿経を仰いで、『形もなくまします』弥陀に帰依した、といふことをかへりみ、歎異抄と末燈抄、和讃、

御文などの関係をおもひ、論語、経文、バイブルなどを中心經典とせねばならなかつた儒教、仏教、キリスト教と、かしこくも時空をこえて全日本国民生活の開展を統一せさせたまひし 明治天皇の御集を、また、臣民を率ゐる摂政のみ位くわらにあつて国民の信を撰受せさせたまひし 聖徳太子のみ文まなを經典として仰ぎまつり、ことに 明治天皇御集によるづよのたからとして反覆誦誦せさせたまひし大み心を示します建國の經典古事記を、そのまゝに生たらしめむとねがふ昭和の御代の日本国民同信生活との差異関連を知らしめられ、不可思議の恩寵と使命を痛感せしめらるゝのであります。こゝに私共の集ひは、たゞ全国民唯一信の信により、同じき信の友に遇ひ、友を信する外に別の仔細なき簡單の生でありまして、友の少く己がねがひのせまきをなげきつゝ、しかしゆるぎなき信を高く掲げまゐらねばならぬ、とおもふのであります。

中学の友らも、若き心に悲壯の決意をしてをらるゝのでありまして、そのたよりは、ある時は決意の宣言であり、あるときは苦悶の訴へであります。みな、唯一信婦命ひとよの一すぢの道の上のことでありまして、その一つに、ゐたゞまれぬおもひにてハガキをとるなり書きつけました。うたを、いまこゝに記します。

かへし

あゝ、心より願ひしことの、くりかへし／＼計画せしことの、

ことごとくこぼたれなば、

そのときぞ、起つべき まことのをのこは！

感激とは何ごとぞ、期待とは何ごとぞ、はた悲痛とはそまなにごとぞ、

捨つべし、心のこさず、凡てのはからひを！

いま、みくにたぶならず！

失敗と窮乏と絶望と悲苦と、その底ひより、

あゝ、起ちいづる、まことのをのこよ！

日の本のまことのをのこよ！

大丈夫論

〔伊都之男建
昭和八年十月号〕

覚如が撰んだといふ『本願寺聖人親鸞伝絵』は、短いものであるけれども要を得て、親鸞その人を偲はしむるにふさはしきものである。

建仁第三の暦春のころ、聖人二十九歳隱遁のこゝろざしにひかれて、源空聖人の吉水の禅坊

に尋参りたまひき。是則、世くだり人つたなくして、難行の小路まよひやすきによりて、易行の大道におもむかんとなり。

今は末法思想の時代史的意義を考察しようとするのではない。『世くだり人つたなくして』とは、親鸞自身の求道生活に善悪邪正一切の過去のせまりくる現在の綜合感であつたのであつて、そこに親鸞のまことの発心出家の機縁が純熟したことを示すのである。引用文の前には、『九歳の春比、阿伯従三位範綱卿前大僧正の貴房へ相具したてまつりて』剃髪し、『それよりひろく三観仏乘の理を達し』、『ふかく四教円融の義に明かなり』と記されてをるのである。この親鸞自身の痛感を、世くだり、人つたなくして、といふことばを以て表現せしめられてをることの意味は、いまいふ必要はないであらう。

論語には、孔子の語として、『子在川上曰、逝者如斯夫、不_レ_レ舎昼夜』と印象的のことばをとどめてをるが、逝ぎてかへらぬゆゑに逆にこゝにおしかさなりくる時間の痛感、感情の纏綿と論理の旋廻とを切断し去るのであらう。まことにいつはりなきありのままの人の心ほど、たふときものはない。古来の聖賢の生涯に於けるこの一大事因縁の容易ならざりしことをおもへば、

明治天皇御製の

誠

とき遅きたがひはあれどつらぬかぬことなきものは誠なりけり (明治三十八年)

思

国民のうへやすかれとおもふのみわが世にたえぬ思なりけり (同)

を拜誦せしめられ、悲壮のおもひせしめらるゝのである。

三井先生が本誌前号に『間』、『中』、『空間』といふことを説かれてあるのであるが、『決定論的運命観』と、『非決定論的努力主義』の間の可能の世界に遊戯する我等をして、この論理的対立を滅却せしむるものは、信である。その対立論理滅却の一瞬にあらはるゝものが、実行であり、発心出家の機縁である。それは、認識の主体たる自我の心理法則と、その対象たる全体の開展法則とを混同せぬために、一々の事物についての実地の研究を要せらるゝのである。しかし、善といひ、悪といひ、邪といひ、正といふ、その他さまざまの判断と、それに要せらるゝ概念の対照感は、それが、小さき人間の広き世に生くるためのまことの力たる、ひろきこゝろのもともなるべきことをおもうて、われらは、それを唯一の帰決にみちびくべき全生命的推進力に協力せしむれば足るのである。「教行信証」の「化身土文類」の末尾に、親鸞は自らの信樂発入の良縁をかへりみて告白してをる。

然るに愚禿釋の鸞、建仁辛の酉の曆、雑行を棄てて本願に帰す云云、……慶哉、樹心

弘誓之仏地、流ニ念難思之法海、深知ニ如来矜哀、良ニ仰ニ師教恩厚、慶喜彌至、至孝彌重……
 『難行』といひ『本願』といふも、この唯一の帰決にみちびかれしあとであつて、そこに、教義の体系と論理の展開との痕跡は熔融滅尽せられ、唯一の生命の帰入を見ることゝなつたのである。しかしながら、親鸞自身の思想的彷徨と究尽の努力とを偲ばしむる一事として、伝絵には、『信不退、行不退』の御座を設けるといふ一場の作略を伝へてをるのであつて、

予、難行道を闍て易行道に移り、聖道門を遁て浄土門に入りしより以来、芳命をかうぶるにあらずよりは、豈生離解脱の良因を蓄哉、喜の中の悦何事か加之。しかあるに同室の好を結で、ともに一師の誨をあふぐともがらこれおほしといへども、眞実に報土得生の信心を成じたらんこと自他おなじくしりがたし、故に且は当來の親友たるほどをもしり、且は浮生の思出ともし侍らんがために、御弟子來集の砌にして、出言つかふまつりて、面々の意趣をも試みむとおもふ所望ありと云ふ。

と言つてをる。こゝに、僅かに教人の法然の門弟が信不退の座につき、やがて法然自身その座についたので、この意を解せざる他の人々は、『或は屈敬の氣をあらはし、或は鬱悔の色をふく』んだのであつた。『自他おなじく知りがた』きこの生の中にあつて、『當來の親友たるほどを』もし』らんとするといふ悲しき矛盾を、親鸞自身いかやうのおもひにきはめたのであつたらうか。

大燈は、かゝる消息を『虚偽を以て真実を示す』といった。されば「真実信文類」に於て

真知二河譬喻中、言二白道四五寸二者、白道者、白之言対レ黒也、白者即是選拈撰取之白業、往相廻向之浄業也。

といふ、切実の告白は、親鸞の全体験の中について深き意義を示すことをおもふのである。

以上は、発心出家の意義が、古人の生涯にいかにあつたかを偲び度かつたのである。山鹿素行も、「配所残筆」に、

内匠頭方に九年有之、存寄之子細御座候て書付を差上、子年大島雲八殿へ奉頼、知行断申上候て上り候

と言ひ

拙者事は、当分永の浪人と覚悟仕候故、諸事逼塞仕り罷在候所存に御座候由、其節申上候といつたころ、また道元が

山僧歴叢林不多、只是等閑見天童先師、当下認得眼横鼻直、不被人瞞、便乃空手還郷、所以一毫無仏法、任運且延時……

といった。みな、古人のまことのおもひの極まりであつたのである。「伝絵」の著者が、

聖人しやうじん、故郷にかへりて往事をおもふに年々歳々夢のごとしまぼろしの幻のごとし、長安洛陽の栖すまも跡をとどむるに懶ものろしとて、扶風憑翊もつりとくろどくろに移住したまひき

と親鸞を偲んだのであるが、山鹿素行自ら、赤穂謫居たかの折、『凡知道之輩、必逢天災、其先蹤尤多』といつてをる。これは諸事逼塞なげ、永の浪人と覚悟した素行が、しかもなほ謫居せられての痛嘆であつた。

草の庵いほにねてもさめてもまふすこと南無釈迦牟尼なまあはれみたまへ
山深み峯にも尾にもこゑたてゝけふもくれぬとひぐらしぞなく

と詠じた道元は、また、『永平雖谷浅、君命重重重、卻被笑猿鶴、紫衣一老翁』と運命の皮肉を嘆じたのである。

『唯観世間生滅無常心、亦名菩提心』(学道用心集)といはるゝ一念発起は、われらにとつては、わかりやすきことばにて、『やむにやまれぬこゝろ』といはう。後に退ひけぬ男の子の意地といはう。ぼくらには、むづかしい時空の定義も耳にいらぬ。一向直進の帰向一念に縦横にかけまはり、大君の御ためにつかへまつらむとねがはしめらるゝのである。松陰が、『かくすればかくなるものと』と絶叫したその一切の煩累を断滅せしむる生の信受こそ、我等昭和の大御代に生くる者の発心出家である。かくして集ふわれらの生は、いかに開かるゝであらうか。それを、おもひわづら

ふ心のほだしも、いまは失せしめらるゝのである。

明治天皇御製

折にふれて

むらぎもの心のかぎりつくしてむわが思ふことなりもならずも（明治四十四年）

なすことのなくて終らば世に長きよはひをたもつかひやなからむ（明治四十五年）

不可避の将来と現実の用意

〔伊都之男建〕
昭和八年十一月号

陸奥宗光は、その著「蹇々録」に、實際に局に当つた体験的結論を告白してをる。『要するに兵力の後援なき外交は、如何なる正理に根拠するも、其終極に至つて失敗を免れざることあり』と。これは誰でも言ふことであるが、このごろ皇道とか世界平和とかのことばが個人的計量によつて殊更に外に向つて口にせられてをるのは苦々しいことと言はざるを得ない。蹇々録についてもそれが正理と兵力とを別々に見てをる点で、思ひ至らざるところありと言はねばならぬ。それは日本の国体のまことの意義は勿論、世界現勢の推移の内的動力についても無知であるといつて

よからう。それで、こゝでは戦争の不可避性とその道德性について論じようとおもふのであるが、不可避といつても、戦争がまるで目の前に来てをるやうには我々は予言をせぬので、ただ、四囲の複雑の情勢と歴史的地理的条件にせまつてくる予感にうごかざるゝ内心を、現在の国民生活の内的交通に鑑照せしめて非常の不安を覚ゆるからして、不可測の国民生活の開展に随順しつつも、充分の努力を遂げようと念願するのである。これが青年男子の責務であると信ずるのである。男の子はつとめなくして生くることはできぬ。功なくして死することを得ぬのである。

それで、この問題は重大の問題であるから、適確の文献を渉猟して客観的証明を与へようと思つたのであるが、多忙のためそれもあまりできなかつた。又、直接文献を調べるとは、その当時の詳密の歴史と照応せしめて洞察することを要するので、これは将来にのこされたる緊急の問題の一つであると思ふ。何分、力の足らぬことを自責せずにはゐられぬ。

前々号で、み国生みの神話にいさゝか論及し、こゝに自然と人生との融化を究めようとしたのであつたが、『衆生は必ず定んで己が国と称するの義』(維摩經義疏仏国品)があるので、土に親しみえぬ民族は滅亡の危機に近づくものである。日本民族は、神武御東征より次第に拡がつてそのよるべき国土を見出し、その生活の地域的拡充と外国文化の摂取といふ二つのことが外面的に平和時代の形式をとつて並行して行つたのが、奈良平安朝ごろまでであつた。欽明朝の仏教輸入

による思想的対立が氏族闘争と結びついたことは、不純ではあるが、民族発展途上の一事件であり、更に大いなる統一を実現すべき民族の内的苦悶であつたことをおもふならば、その苦悶が一層内的化せられて、新興武士の抬頭と共に、鎌倉時代の国民宗教として明治維新によりて開かれたる今日の日本の内的根柢を打立てた順序を追ひうるのである。それゆゑにその鎌倉時代の日蓮が、他宗ことに、浄土宗に対する論難を以て信仰問題を解決しようとしたことは、幾分外的ではあるが、思想信仰と国民生活の運命、国家の前途とをはつきりと結合せしめたことは、国民的自覚の曙光をうけたものと見るべく、外面的には動乱兵馬の時代がつゞいたが、やむにやまれぬ民族の開展力は、うちに一つの精神を培うて来たことを察するに足るのである。徳川の鎖国の余殃が、明治以後に外国文化に対する受動的態度として表はれてゐたことは言ふまでもないけれども、さうしてそれが、北条の下剋上の最後の顯著の現はれとして、日本国民として倒置的生命逆位の『民政』主義の害悪を深刻に遺伝せしめた罪は大きいけれども、国民生活を安泰においたことは、王政復古の内的素地を作つたといつてもよく、自家の安穩を企てたことが、消極的に反対の結果にをはらしめたことは、その怪我の功名である。

それで、今日は外に向つて力を伸すべき時代であるといふが、それは一層深刻な内のたゞかひを要求するのであつて、それは国民思想生活上に激化してこねばならず、思想・宗教・芸術界の

活潑な活動となり、国民一人々々の生のたゞかひとなるべきである。しかし、さきに言つた受動的態度がそれを阻んでをるのであつて、これが統一を要求する強靱の忍辱力を持続せしめず、眼前の効果を求めて政策的になり、満洲の開発も大亜細亜主義の運動も、そこに日本の君臨の立場を主張してはをるが、それが国民的信仰の問題より遊離しようとして、デモクラシーまたコスモポリタニズム化しようとしてをるのである。これは危険である。そして、これが所謂『皇道』の内容にならうとしてをるのである。

我々は簡単に統一とはいはせぬ。思想が簡易になれば外面に複雑化せられて機械主義となる。さういふことではなく、内心の複雑の戦闘に統一の原理を見出してゆくのである。しかし、その内心の戦は、決して一つの絶対的精神の自己廻転といふやうのバカげた概念ではなくて、対象に接触したときの感覺表象意識の具体的根底に立つ思想の動乱であるからして、それは外界と交渉をたつた内心ではなく、外界に敏感の内心が外界を把握せむとして、そこにうつる交錯陰影のたかひであり、つまり外面的闘争を内的化して、こゝに統一の原理を見出すのである。

それであるから、米国の世界第一主義、英国の太陽不没矜持、旧カイセルの軍国主義、支那の中華、赤露の世界赤化などの浅薄幼稚の空元氣を苦にせず、世界文化に於て重要な努力をつゞけ来りしわが歴史の事実、われらが帰依の一路を見出してをるのであつて、世界文化は、また

それゆゑ、世界民族は、その融一を三世一貫の日本国民の内心のたゞかひに規定せられをること
を信ずるのである。最も複雑の原因を有する戦争の惹起しやくには、その直接の原因たる政策上の衝突、
当局者の態度、経済的争鬪等の周到の調査は勿論必要であるが、同時に、交戦国相互のまた第三
者を加へての文化的交錯影響が、国民内心に及ぼしたあとを研究すべきであつて、それは直接戦
後の世界状況に前者よりも却て重要な役割を演ずべきであるからである。それゆゑ、いま、もし、
われが米国に対し或は赤露に対し戦争が不可避であるといふならば、それに大勝してその文明の
カラクリを白日に露呈せしめて、わが国民生活そのものを健全ならしめねばならぬのである。こ
の用意が必勝の用意である。

本日の夕刊（十一月十九日付）によれば、米大統領は赤露代表リトヴィノフとの間に八ヶ条の覚
書を交換していよ／＼国交回復と決定した由である。これはおどろくに当らぬことだが、この前
のモロトフの対日挑戦的演説もこの準備であり、北鉄の交渉の遷延、その怪文書事件も米国を釣
る鈎かぎであつたといはれてをるが、かういふ外交的技巧の上手なことはロシアが第一である。十一
月十五日より新聞『日本』は、佐藤清勝氏の『赤露の禍心を防げ』の論文を連続掲載してをる
が、その初めに、五ヶ年計画の成否を論ずる者の一方的見地を排し、成否の中間にあり、重工業
の成功と農業ことにコルホーズの失敗との中間だと言つてをるのは正当の見解であるとおもふが、

内的矛盾に気づきえぬ、気づくとも如何ともしえぬこのラディカリズムが外交上の利を制し、さういふ外交家を出して来た原因であつて、それが、生活分割技巧の支那と通ひ、また更に支那以上の将来を予期せらるゝ米國と通うて行つたのである。いま、日本をめぐる三國の強力の同盟とその牽制のうちに、われらはこれらを『仮想敵國』とする以前に、自らの生の統一を見出してゆかねばならぬ。日本は到底外交技術ではそれらの國にかなはぬので、さういふもので対抗しようとするのが結局わが内心の外國屈伏となる。それであるから、外交といふことの意味が各國に於て異ると同様に、戦争の意味も各國で異つてくるのであつて、外交と内政との関連といひ、内政は國民の思想信念に帰着せしめらるゝのであるから、各國の文化史的地位と性質とに緻密の研究を加へそしてその虚をつくよりも、その文化をわれらが内心に確しし内心に戦はしむることを先決要件とすべきである。滿洲事變も王道國家などといひすぎるところにこの政策的墮落を感じせしめらるゝ節があるのであるから、その政策的走作を統御するものがいま緊急に要求せらるゝのである。それは宗教と芸術ことに文芸の批判を要求するのである。神武天皇の御東征の大御歌の大精神がいまこゝによみがへるべきことを念じまた国民生活の充実に、動乱のうちに宗教改革を成就した鎌倉時代を想憶するのである。日蓮の安國論の思想と、親鸞道元の信との内的関係も重要なことゝおもふのである。しかし、今日の日本にその方面の重大の欠陥を感じるから、これより

敵密の批判と実修実行とをつゞくることを予告するのである。今はその時間がない。最後に三井先生の「人生と表現」第七卷第二号（大正四年二月）の『經濟生活より軍事活動に入る倫理的條件』より、その一節を引用しまつるのである。

「それ故に戦争は、勝敗それ自身に重大なる意義を示すと同時に、そのために新に生じたる局面と道德觀とに最後の意義を尋ぬべきである。それ故戦争開始前に於ける国民道德、宗教的確信、教育界現状の如きは、一方經濟的情態と相俟つて、之を軍事的活動に具現して有效ならしむるためには極めて重大である。」

この歐洲大戰の客觀的研究が、いまわれら直接の事態として迫りつゝあるのだ。

詩歌

鹿島灘（航空母艦の友に）

〔伊都之男建〕
昭和八年九月号

わけゆく浪は

空ほの白き

銀翼一機、

昭和8年(23歳)

たちまち遠し

闇わけ走る、

思ひのまゝに

いまかへるさの

のぼる朝日の

黒けれど、

鹿島灘、

爆音の

雲のうち。

潮ざゐの

大洋を。

鱸の辺に

かけすがし。

詩歌

土用浪

土用浪荒磯にうつか遠浜のひゞきかしこし闇つたひくる

大浪のいそうつひゞき背におへる山にどよもし夜すからやまず

合宿にて

はらからの手もりつくりしことそげるいひはみわれはこゝろになかゆ

友とかたり友とはげまし日の本のくにたみのみちしらしめられぬ

よろこびなやみおもひつくせぬはらからの生にはてなきうつしき信あり

はらからの道ははらからの死によりていよ／＼あきらかになりゆくといふか

友に

海山はもだしてあれども国のゆくてわれはかしこみ胸さけむとす

たちならぶくしき山々あがむねにつげなむなれがもだすいのちを

〔原〕理日本
昭和八年八月号

「蒼海遺稿」摘録研究 (上)

〔伊都之男建〕
昭和九年一月号

明治十三年、副島種臣伯が侍講の職に在りながら、病氣のため久しく宮中に出仕せず、やがて職を辞して地方に身を養はうとする志があつたのに対して、明治天皇は畏くも宸翰を以て勅語を賜り、『職ヲ辞シ山ニ入ルカ如キハ朕肯テ許サマル所ナリ。更ニ望ム、時々講説朕ヲ賛ケテ晩成ヲ遂ゲシメヨ』と優渥の御信任をかけさせたまうたことは有名のことである。その識見誠忠、維新功臣に冠しながら、処を得ずして失意に終つた一生は、明治史の趨向と対比せらるゝとき、時代批判の標準を与えられ、また我等一生の学について、名もなき民の忠誠原理を示さるゝものである。

蒼海伯には全集がある。その行、賦、古、また論をよめば右に言つた直接の史的研究と別に、

かしこかれども、明治天皇御集の大御歌をおのづからに照応連想しまつらしめらるゝものが多くあつて、それらの綿密の研究と、また書翰・言行録・伝記等との連携研究は学生の身としていまだ時間もなく、資料もないので後日にゆづることゝするが、いま、蒼海先生薨後間もなく出版された伯生前の写真数葉を挟んだ蒼海遺稿についても、詩は略し、僅々十数篇の論文について、簡単な摘録的研究をなし、総合的研究の素材とし度い。それは、ほくらにも、伯の学問が特異卓犖たつらつのものであつたことを慶嘆せしめらるゝからである。

遺稿の風格について全貌を叙述することは容易でないが、先づ感ぜらるゝことは語脈の緊密剛健のことである。また字の上から言えば、最も多く気づかしめらるゝものは悲とか憂とかいふ字が多く用ひられてをることである。『与何如璋書』の中には、『故能悲于君則成忠。能悲于父則成孝。能悲于兄則成悌。能悲于弟成友。能悲于子則成慈。能悲于国家則成仁。能悲于難則成烈……且夫四海因窮堯悲也。堯悲而天下樂……』とある。又、蠟燭説には『辞令味味。緯言。是小丈夫述弗取。事欲朗朗。氣貴烜烜。心処明明。志期焯焯。勿事于闇。一事之闇人疑。勿言于蒙。一言之蒙衆惑。惑乱之罪。刑辟難遁。誣罔之辟。昭代之禁。努力努力。生乎進取明。切磋切瑳。姪也退勿闇。天地大明懸日月。席上光明假蠟燭。吁吁』といい、又、『妙興乘矣。蠟燭竟能輝射于

彼我心腹腎腸。而道義見矣。今余醉矣。舞盤跚矣。歌磅礴矣。蠟燭又能照于余氣自若。是蠟燭雖云燭心之器。不為未可也。且夫清夜讀書時。蠟燭常照于古人千萬元之誠吁。』とある。敏感の感受性と強靱の意志力との結合を、いかほど僕ら青年はこひ願うてをるであらうか。敏感の者は弱く流れやすいといふのは俗見であつて、不動底といひ一向直進といふ、そこにぼくらは敏感性の存在を知る。これについては以下の所論に簡単に學術的に敘述する。たゞ、これをこゝで一言につくせば悲劇的人生觀といへるであらう。

かうして書いてゆくと、緊密の文章を分析するために長くなるので、自然引用文がゴタゴタしてしまつて、それで埋つてしまふのだが、雜駁のところはどうか補つていたゞき度い。

以下仁義礼智の各論についてのべようとおもふが、蒼海先生は、この支那式の対立概念的羅列法式を排して、義論、智論、礼論、仁論とやうに、心理学的順序方向によつて儒教の道徳を學術化し、これによつて眞の宗教的実行に近づかしめようとしていることに注意すべきである。道徳はとかく徳目になりやすい。徳目は人生そのものに対する『思ひつき』の対立概念処置の傾向を示すものと言つてよい。しかし、それを心理的に正しく誘導すればそこに芸術と宗教とに現実的内容を与へる學術の使命が見出さるゝといはるゝであらう。これが外来文化摂取の方法である。

『夫論義者。常以為仁之一節目。茲論非也。夫義者。以勇精德為名。決果敢毅是其行。武勇進德是其行。健邁剛耐是其行。弗拒弗容是其行。非如仁之汎愛無焯着節目。今夫人愛情過發。則失其全体力。仁之幣也。勇猛心興。而筋張威生。義之則也。……是義万行之帥也哉』（義論）。『ヒキク跡アル方』と素行は言つた。それは學問の根拠としての直接の經驗内容を言つたのである。直接の經驗は、全人格的直觀であつて、この全人格的活動を統御驅使するものは、蒼海先生の所謂『勇精德』たる『義』であり、それは『節目』ではなくして総合的意志である。ウントが実験心理学より出發して、意志の心理学を提唱したことも思ひ合さるゝところである。この文中には『全体力』といふことばも見出さるゝ。『万行之帥也哉』。帥は武の統率者であらう。

『智者。知也。知行事之所宜為。而能与義抱合。則義者之知也。与仁抱合則仁者之知也。与礼抱合而適宜道立焉。是以智為万行之宰也。……而智為計量。以謂令彼精神。与体分離。而從變化之道。則彼漸次改旧想觀』（智論）。『礼者德之制也。天有制而聖人則焉。……故人有五倫。君臣之者。以天為帝。而以君配之。以地為后。以君配之。而有臣從真向之義。父子之者。以神為父。而已子之也。而父子繼續。保護之道就焉。孝道興焉。兄弟朋友之者。四魂相交之要則。四魂也者何。仁義礼智也。……於此天亦垂制。人寿百年内外。宜僊去而与神同居。此定制。人以為哀。而神則

不。神人之別也歟。……」(礼論)

義に次いで智。義は『万行之帥』、智は『万行之宰』。義を全情意生活とすれば、智は知的分析作用、義を武とすれば、智は文であらう。智は『变化之道』である。

しかし、分析的活動は個人的主観的偶然性を帯びて来るから、義と抱合し、仁と抱合すべきであるが、これに客観的根拠を与ふるものは、内的思想的秩序たる礼である。こゝに言ふ秩序、即ち義より智、智より礼と推し及ぼし来らしめられたものは、体験内容を失つた体系ではない。以天為帝。而以君配之。以地为后。以君配之』といふ。『臣従真向之義』、『以神為父。而已子之也』といふ『孝道』こそ、内的秩序であらねばならぬ。『四魂相交之要則』もこゝに基く。

自由がいかにと言つて統制を説く。しかしそこに反映せらるゝものは同じき個人的強制意志である。官僚政治の悪弊に反抗して起つた政党も、いまは官僚以上の腐敗に墮してこゝに來つた。それが非常時であつた。官僚的固着にさすべき油は、その反対概念たる自由ではなかつた筈であり、自由主義がいかにといつてもそれを緊扼すべきものは、決定的高圧意志ではなかるべきである。ぼくらは、統制を説く人の求むるところと、自由を言ふ者の求むるところと同じき欠陥を見る故にかへつてそこに一つの帰結を見出し、その両者に処を与へてゆくべきである。個人的偶

然性を排して必然の道を求めてもそこにかち得らるゝものは同じき偶然の幻像に過ぎない。ぼくらはひたすらに自然の生に生きしめらるべきである。イデオロギーは、自分の描いたものによつて自分を束縛する以外の何ものでもない。否、ひるがへつておもへば、人間はみな己が心に映りくるものを見るものである以上、そこに自分以外の力の支配をみとめることは、古代の外物支配の野蛮にかへることかも知れないが、限界のある人間認識能力をおもうたならば、無理をねがふ人として、なぜにその外の世界を偲び、そこに己が生を拡充することを排するのであるか。

『無慚愧は名づけて畜生となす。』人間万能を求むるものは、知的生活の踰踏にすぎない。全情意生活の自然は、帰嚮一念の生々無息の歡喜をめぐましむる。通俗かも知れぬが、認識論偏重の哲学といふものは、要するに知的反省の増上慢であるといへよう。こゝに正しき方法論は、退歩、回光返照であるといへよう。『自他の二境を平等にす』といふ聖徳太子のみことばは、認識の主体と客観との微妙の關係を、示されたものと仰がしめらるゝ。また道元は、『正法眼藏柏樹子』の中に、『この一則の公案は、趙州より起首せりといえども、必竟して諸仏の渾身に作家しきたれるところなり、たれかこれ主人公なり、いましるべき道理は、庭前柏樹子、これ境にあらざる宗旨なり、柏樹子これ自己にあらざる宗教なり云々』といつてゐる。

人間生活の疲労は結局、人間能力の過信の結果であらうから、疲労病氣もまた回光返照の機縁

としてたふとむべきものであるとおもふ。ぼくらが同信生活につながるのには、友情は私意であつてはならぬからであつて、神意随順の生に、全人生の正しき経路によらしめられつゝ、友と友との生が無限に開展してゆくのである。もつとわかりやすく言へば、個人と個人との交りは畢竟対立破綻となるからである。これが秩序であると共に、融化一体の協力、一向専念の信仰である。

『嗟嗟。昊天之溥。以現相而覽之乎。有日而煦之。有月而臨之。有夫坤輿而載之。四時行之。孰及其仁哉。嘆息天亦所未免焉。天憾于人不知天也己。抑天於人。若是其切切惻惻也。人知之乎。造花之道。天実司之。孳育之道。天尚為之。稱人父母者。当是際猶自茫乎昧乎。弗相覚知也。而生兒若美冠玉。是殆乎人邪。天也。既生而為夫其子。則曰非天也。人也。詎知人皆天造。生孳之道已天也。氣血之運行。一切亦皆天。天意在焉乎。仁也。人而弗省恩。不仁也。天豈不仁者哉。

……『仁論』

こゝに仁論に及ぶ。下学して上達すといへば、日常卑近の顧慮と哲学的形而上学的原理とに區別せらるゝ語感を禁ずるわけにはゆかない。そこに、やはり宋学のおこつた原因を知ることができし、仁義礼智といふごとき、その各言葉の關係と方法とを無視した排列に仄伏せらるゝ無彈力思想の根底が見らるゝこゝちがする。昨秋よりの福建省独立に際して、独立政府が寄り合い世

帯であることはまだ恕すべきとして、その宣言そのものが、共産党の思想を利用するといふ自滅的政策をとつてをすることは、ムロンこの度に限つたことでなく、友邦のために憂へねばならぬことである。かくのごときは、実に西洋諸国にとつて此の上なき誘惑の種であつて、全人類の道徳的見地より断乎として之を排せねばならぬ。西洋諸国は、少くとも日本に手をつけることは出来なかつた。(勿論日本内部には西洋に屈服した者を多く出し、また現にさ様の者が多く生きてをるが、日本全体の威力はそれを覆うてゐる。)日本の西洋研究は、今やこの西洋に侵されたところの支那を通し、印度を通してなざるゝが、一つの喫緊事となつてきた。このとき、明治の初年に當つて、対支、対欧米外交の基礎を立て、今日の外交と異なる真乎日本の外交を行つた蒼海伯の思想は、支那人自ら讃歎措かなかつたその詩文によつても知らしめらるゝところである。

蒼海先生の仁は、実に天地生々の不可思議、造化の妙であつた。言ひ換へれば、究極調和の世界であらう。かくのごとき宇宙觀を撰取しえざる人生論は、人生を論じつゝ却て抽象化せらるゝ運命を免かれぬ。こゝにわれらは、自然の鑑賞より究極の思想詩に到達したまひ、こゝに至つて自然の叙景に超論理の人生原理を示し、道徳的垂訓のうちにまでも、全宇宙総持の大人主義の波動を伝へさせたまうた明治天皇御集のかしこき大みいのちを仰がしめられねばならぬのである。

以下、道論、聖論、明論、神論、天論、人論、造化論とつゞく内容は、以上義智礼仁の四論につゞくものであつて、いまこゝに筆をおくことは不便であるけれども、紙数の制限を慮おもんばつて、上下次号に延し、更に意を練り義を究めて筆を執り度いとおもふ。勿論、題にも示すやうに摘録研究にすぎぬのであつて、総合的文化史的またことに批判的研究に及びえぬことは御有恕あり度い。因ちなみに、蒼海先生の『天』ということばは、次号で『天論』に論ずるが如く、決して単なる支那式の天思想ではないことに注意すべきことと思ふ。『蒼蒼之天也』と示してある。これは
明治天皇御製の

天

ひさかたの空はへだてもなかりけりつちなる国はさかひあれども (明治三十九年)

天

あさみどりすみわたりたる大空の広きをおのが心ともがな (明治三十七年)

折まにふれて

久方のあめにのぼれるこゝちしていすゞの宮にまゐるけふかな (明治三十八年)

等に、凡て、目にみゆる、しかしはてしなき、眼の力及ばざるみ空におもひかよはしめられ、そをよませたまひたることを偲おもはしめらるゝことである。

「蒼海遺稿」摘録研究（下）

〔伊都之男建〕
昭和九年三月号

明治天皇の御集の中の自然を詠ませたまひたる御製については、三井甲之先生著『明治天皇御集研究』中、『自然と人生』、『自然鑑賞と表現技巧』、『有限自然より無限人生へ』等に研究せられ、これが研究の特殊の意義について暗示せられてをる。

唯物論が自然科学の興隆によつて生れたといふが、それが決して自然、物についての正しい見地に立つてゐるものでないことは、今日では容易に明かにせられることで、それはつまり、自然科学興隆時代の論理学の誤謬によつて生れたものである、といへば簡単であらう。今日の自然科学で問題の諸学説も、論理的正誤またはその学者の自然観内容が要点である。その意味で、精神科学者の自然科学についての研究の不足と発表の無能とは、その学問に対して義務を果さぬものと言はねばならぬ。分子より原子電子と行つて、量子波動となつても、物そのものゝ認識はむしろ充足されてをらぬ。こゝに論理学というのは、認識の主体客体の関係を正しく規定すべき、思

想的秩序であるから、思惟の要求と可能性とを無制限に追及してゆく観念論でないことはいふまでもない。

帝国大学新聞、第五百十号には、鎬木外岐雄氏の『千古の疑問、謎としての生物』と題する論文を掲げてをるが、自然科学の根本問題に対する氏の見解は正しい。

『宗教の根本となるのは体験そのものであり、宗教は吾々をしてその体験の世界に没入せしめること即ち解脱せしめることを翼こひねふものなのである。而てその体験の世界に没入するとき、始めて自己の思惟の根源が判つて来る訳であつて、そこに正しい世界観が樹立されるのである。普通自然科学の根本問題は哲学的に論究せられるが、自然科学者自身、宗教によつて根源を会得するやうになりたいやうに思はれる』

つまり自然科学の研究と雖も、悟入こひねせねば正しい研究と言ひ得ぬのである。鎬木氏は宗教ということばについて示すところはないが、この自然科学者のいつはらぬ体験告白をもととして論をすゝめてゆき度いと思ふ。

研究と応用とが無限の展開を示す今日の自然科学時代、その自然観が必ずしも正しいと言ひ得られぬと同様、林檎の墜つるを見て引力の説明さへつかかなかつた古代人の自然観必ずしも誤れり

とのみは断言出来ぬ。古代人にとつて炭とは何ぞやの問題は、現代人にとつては炭素とは何ぞや元素とは何ぞやの問題であつて、共に火そのものは問題の問題である。それゆゑ論理の正誤は智識体系の整齊せるか否かにのみあるのではない。古代人にはその有せる智識の限度に於いて正しい見地が見出されたのであり、現代人またしかりである。智識内容は思惟の要求に従つて拡張される。しかしその正誤はその要求の方向にある。言ふまでもなく部分的見地が誤謬であるけれども、外的体系の合理的整理のみが全体の関係を規定しうるものではない。こゝに籙木氏のいふ宗教の問題が、自然科学者としての良心に要求せられたのである。それゆゑこの『宗教』について、前号に、理想十二月号の批判をしたのとも関連せしめて、以下蒼海遺稿により論ずるのである。

『道也者。非至極之名也。相往来弗支障之謂。蓋天有仁義礼智。相行而弗悖。故以作可行之路。仁義礼智之行也。小分之。就事事而有道也。』(道論)

ぼくらの研究は毎に史的條件を克明するのである。仏教で平等と差別とがいつも問題となるやうに、無限と有限、連続の区分等の矛盾概念は人間思考要求の二傾向として、この功罪をつゞけてきた。この迷妄を救ふものが史的精神である。たとへば無限を求めてもその状態を措定すれば

それは無限とはいへなくならう。考へうるかぎりには有限のものであるからして、その停止せぬ開展がまことの無限であると言ふべきである。不断の開展はその遅速をも予定することは出来ぬのである。故らに、『無限』と計量せずして、かぎりあるものゝ開展に随順して限りなき世界を究めるのである。『仁義礼智固物而已』(後出)といつた蒼海先生は、その往来支障なき現実のありさまを『道』といつた。永久生命は限りある個体の生の、一瞬に味はれ、そこに現実の姿として生くるものである。それは無論前後の脈絡なくして味はるべくもなく生くべくもないが、同時に不断に変化する条件に作用せられつゝあるのである。

地点をつなぐ道路は、その道によつて人の行くことを要求するが、人生の道は行く人を措いて道はない。外にあらはるゝ道はなく人の行くところを道とする。されば内心にこめらるゝ憧憬はたゞちに人の心と心とを交流せしむる。人生の道は感応道交の世界である。こゝに『道論』には奇異の論がある。即ち

『道之為四字。从目。目之横画四也。譬猶直字从心。則為惠也。从之彳為德。而德字純然顯四心之象也。其在人。仁義礼智。藏之心臟四房。而懷字又从四。人以此為自。而自字又从四。曰鬼曰魂。曰魄曰神曰思曰慮。字皆从田。田者。心臟象也。……』されば蒼海伯にとつては、仁義礼智と共に、道もまた直接の感覚に訴へられるべきものであつた。勿論感覚と言つても、実験心理学

的感覚とは違ふ。言ふべくは全体的感覚であつたので、それ故『道』は道徳律というふうには抽象化せられずに、飽までそこに動く要素を総合護持し得たのである。たゞ、いまは心臓の四房について生理学的解釈を与ふる時ではないが、人間精神の統攝に神経系統のみを中枢とせぬ見地は、興味あることと思ふ点を指摘するに止める。

『聖者。非人自聖也。天尊之使聖。其故何哉。天以人為愛子。故導之以聖也。……夫人欲聖。則宜從事於斯。天未嘗挾於人也。欲聖者之於天。天意豁如。其保覆如何哉。天非高也。而卑也。天非遠也。而近也。天非疏也。而親也。天非愚也。而明也。一心誠欲聖。而神斯感格。』(聖論)

『人有長於義而短於仁者。有長於仁而短於明者。性行之偏倚。隨其所好而有此歟。傲其所習而此歟。且明之長者。其類甚多……夫才識豈有限也哉。有限者。非天也。非性也。明欲發人之非而仁動掣其肘也。欲露人之隱。而義不屑之也。是仁者義者之過也。堯舜未嘗不知人。而難之者。不易之謂。故今志於明者。不為仁義之間而可也。智者円徳也。明所由生也。念此哉。』(明論)

カントは、『道徳哲学原論』に於いて、善を人間の凡ゆる氣質才能等を超越した先天的原理か

ら求めようとした結果、『其故に理性は常に無制約的必然者を索めて休む時がない。さうして自分にその無制約的必然者を理解せしむる何等の手段なくして然もそれを仮定するの止むを得ざる状態にある』といひ、『かくて我等は道德的命法の実践的無制約的必然性を理解しはしないけれども、しかも我等は実はその命法の理解すべからざることを理解せるものである』と言はるゝにいたつた。つまりそれは人間理智過信に酬いられた失敗の悲鳴であつた。かうなると究極の原理は結局不可解に終つてしまふ。それはつまり『先天的』を『仮定』するといふ順序顛倒をしたからであつた。仮定の心理こそ人生そのものゝ『他律』である。『聖者。非人自聖也。天尊之使聖』。といはるゝ『天』は、既にあつてわれらに与へられたる全体であつて、仮定せられたる『先天的概念』ではない。それゆゑ、我等の道德はこの全体に随順することでそれは即ち宗教である。しかしばくらにとつては、全体は固定せられたる虚仮の概念ではないからして、未知の対象によつて全体を暗示予想せしめられつゝ、個体は全体の中に正しき關係に生くることを得るのである。究極の原理が理解しえられぬといふことが理解されたといふのは、それが実は、後天的に分析せられたる理性によつて仮定予測された結果であるからで、こゝに人生觀そのものゝ重大の差違がある。『天非高也。而卑也。天非遠也。而近也。天非疏也。而親也。』といふ。つまり帰衣の対象たる全体は遠隔の地に求むべくもなく、部分の動きの中に見出さるゝと知らねばならぬ。『有限者。

非天也』といつて、こゝに無限究極の原理は正しく理解せられてくる。

『夫仁義礼智之行。其在人居心臟空窠内。是有四房。細心而觀此。是真有物。色香臭味俱存。然則仁義礼智。固物而已。』『心王者。神也。主也。心数者。我魂也。伴也。』『毋論空中室内。水裏林際。牆壁間。人頭上身边。皆有是氣也。其状粲粲澄明白清者。智也。銀輪王也歟。其姿紛紛紜紜。如烟如霧。黑鬚鬚者義也。鉄輪王也歟。時見紅氣横曳。仁也。銅輪王也歟。見金氣者。礼也。金輪王也歟。夫有物則有香。有香則有味。未須論也。久之而自驗。人皆知之也。此不要論也。夫仁義礼智之在人。毋作物蔽而可也。唯神之教也。』(神論、一)

『夫至小之神明。奚能作夫大物歟。合抱之力也。神明合抱猶一也。夫神在天。皆以為己乎。非也。不皆以為己乎。非也。皆以為己者。有為而然也。不皆以為己者。無慾而然也。以夫非平等也。造化物異同不均。以夫平等也。神神不相争。天天比麗。色色相光明。故神者。德之至也。』

……『(神論、二)』

『愚者將至明也。枉者直之也。不肖者至於賢之序也。賢則聖。明則睿。此順也。天以順為德。而

人・從・之。故・幼・之・期・畢。而・丁・而・壯。而・老・成。而・神・明・也。……』(神論、三)

以下簡單の引用にとどめて、最後の結論にいそぐこととする。たゞ『天論』のみは長くなるが、結論にとつて重要な文献であるから全文を引用する。問題は大きくなるが、自然科学が今後如何に発展すべきか、自然と人生の關係は正しくは如何に認識せらるべきか、の問題に触れ度いからである。

『茲云天也者。蒼蒼之天也。說者曰。天無色也。而氣之積層。自然作茲蒼蒼耳。若余見則不然。夫天氣之積層云耳茲當。雖然。曰為無色。則余以為不然也。氣亦物也。物之微微。以為氣也已。茲有形異同。夫有形異同。則有色異同。可理推也。殊氣狀。恂亦微不至矣。些至矣。就一物難見其形。難見其形。而難弁其色。故玄玄遠遠之遼邁。則視積層斯為青耳矣。青者。雜色也。是為蒼蒼之天也。人動言天無形無色。故試論茲已。夫觸膚入鼻。涉目在耳。係心一切物也。一切物。則一切動也。一切動。則有香有味。有聲而色矣。』(天論)

『天有氣狀。茲皆物。所謂精氣為物也。精氣者。有靈動力。有靈覺智。茲與氣游離者為神。又所

謂游魂為變。……仏説心王如來。又秘密主者。中也。故又稱秘密中央主也。問人性無惡乎。曰天無惡種子。〔人論〕

『夫盈於天地間者。莫不有仁義禮智之性。……故自古至今。有以性為善為不善。有性善惡混。説說相雷同附和。説說相抗抵拒。何日窮極也。以余察之。是不知天性故也。不察神情也。神思唯。吾日知善在無始之始。吾自顧吾善自如乎。吾日知一事。則吾智於一事長也。吾月行一德。則吾業於一德長也。……何物不日新。何物不日進。由小往大。自愚趁善。從幼臻壯也。今夫不善者。菓之未熟也。未熟者必有熟日至焉。』〔造化論〕

『天咫尺之間可問。吾前後左右何処非天。』〔同〕

怪力亂神を語らなかつた孔子の後に、程なくその門流によつて性善性悪が論ぜられた。宋学は支那に於ける宋期仏教の直観偏重の退嬰的態度と教化主義との影響の下にあるといへるが、その源泉は孟子であり、遡つて孔子であり、その文化主義・実用主義・現世主義であつたといつてよい。そこに、科学的利用を必要とする戦争に常に敗北せねばならなかつた漢民族の運命があつた

のである。武力を以て政權を把つた君主が天子と称して天を祭つたけれども、その天は、全生活に感得せらるゝ天ではなくして、現実合理化の標語に過ぎなかつたから、やがて天意に添はぬものは放伐せられた。その天意の標準は、結局実力・智力・武力であつたのである。

西洋文化の源流に於いて、早くも数学がその体系ある学術的存在を贏ち獲たといふことは、自然科学発達の原因であり、その傾向の前駆であるとも言はれようが、自然科学が部分的顧慮実用的駆使に過ぎなかつた時に、この経験科学の総合力不足に対して性急せいきゅうに現はれたものが、数学的形式観念論哲学であつた。

かくのごとき両者間に介在した印度は、宗教・形而上学の国として未だ嘗て、国家的統一を實現する現実的威力を有してをらなかつたのである。これは、西洋思想に批判的態度をとる聖雄ガンデーも余程考へねばならぬ問題と思ふ。

これら以上に述べた究極予定の思想法は、凡て、人類無限の思想的開展に対して悲觀的運命のもとにあるものと言はねばならぬ。これらの思想は、形而上と言ひ、超感覺と謂つて、実は形感覺そのものをも知ることを得ざる、狹隘偏頗の迷信である。つまり所謂哲学、形而上学とは鵜飲

みの学問といふことだ。それでほくらは、超感覺的世界とは、感覺統一拡充の世界である、と考へ度い。超感覺世界は感覺しえらるゝのである。しかしながら感覺世界は感覺しつくされぬのである。東洋精神文化と西洋科学文明との融合といふのは、外務省や文化協会あたりで事新しく提唱せらるゝ言ひ古された俗論であつて、ほくらの志すのは、それら眼に見ゆる二つのものゝ^シ結合ではなくして、ほくらには目に見えぬ所与の全体がある。それは実に日本である。そこにほくらの宗教があるのである。

撰取して捨てず、と親鸞が言つたが、世界文化が流るゝごとく来つてその安住の地を見出す日本を信ずることこそ、凡ゆる學術研究の根本的基礎である。それゆゑ、精神科学は言ふに及ばず、自然科学もまた、その研究の原理は日本であり、その応用の標準は、総合的に言つて日本の国防でなければならぬ。自然科学に於いて、その法則と要素とを見出す方法は、個別的差異の抽象と分類的定型の設定であつたが、それは既に自然そのものと離れたる架空の仮定をしてゐる。それは、思考の便宜を以て、先天的対象の存在を犠牲に供したものである。精確の科学的研究に於いては、微細のところには実は大いなる作用を見出すべきであつて、無法則の法則と言はるゝは、ここにはたらく順序顛倒の無理をなだめることであり、力の濫用を防いで運轉の適中を期することであり、それを言ひ換へれば凡てを生かす史的・精神である。即ちこゝに蒼海伯のいはるゝ『愚者

將至明也。狂者直之也。不肖者至於賢之序也。賢則聖。明則睿。此順也。天以順為德。而人從之。』と言はれ、『由小往大。自愚趁善。從幼臻壯也。今夫不善者。莫之未熟也。未熟者必有熟日至焉。』と信知せしめらるゝのであつて、この撰取總合作用の中に真に客觀的普遍的秩序体系が備つてをるのである。

『科学』第三卷第二号(昭和八年二月)にも、その巻頭言は『自然科学と哲学』と題せられてをり、自然科学・実験觀察の『材料が材料として役立つものであるが為めには、提供に先立つて厳格なが行はねばならない』と言ひ、『自然科学者のみが客觀の世界を把握するのではなく、科学一批判般は、何れも事物の客觀的把握を目的として居る。併し把握するものは主觀であるが、主觀は科学によつては把握出来ないものである。しかし主觀を把握するとき初めて客觀把握の根柢が得られる。茲に科学者は哲學者であると同時に宗教的体得を必要とする所以が見出される。蓋し宗教は主觀の把握を目的とするからである』と結ばれてをつて、科学と哲学・宗教との相互また補足が力説せられてをるけれども、哲学・宗教についてのまた、批判といふことばについての正しき見地は、示されてはをらぬのである。宗教は、こゝに書かれてあるごとく、『主觀の把握を目的とする』ものではないのであつて、これは未だ旧時代哲学の迷妄に仮託せしめられて、自然科学者自らの研究を尽してをらぬものと言ふべきである。しかし、同じく『科学』第三号第五号の卷

頭には、『哲学者と進化論』といふ題の下に、ダーウイン進化論の時代遅れの誤れる自然人生觀について指摘してをることは適當のことであつて、今日に至つて自然科学者の間にやうやく総合的研究が覺醒せらるゝに至り、こゝに宗教が求められたと見るべきであらうが、同時にそこに正しき解答を与へえぬことは、今日の精神科学者の自然無研究に歸せられねばならぬことであつて、いま、兩者の研究に与へらるゝ原理と方法と対象とであるところの、日本の国民生活体験の世界史的重大意義が明かにせられねばならぬ時である。

自然と人生は微妙の關係につながれつゝ展開する。そこに發見せられ適用せらるゝ法則は多様に分化してをつて、両科学の相即不離の、相伴ひつゝしかしながら相同じからざる關係を組成する。自然と人生とは、混同せらるべきものではなくして、而も相離隔せらるべきものではない。それゆゑ、自然科学者の宗教的要求は、総合的研究の結果であつたのであつて、こゝに全体的帰依の対象日本は、所謂自然と人生、東洋文化と西洋文化との総合原理であることを結論とすべきである。

蒼海遺稿の研究はひと先づ終る。筆者自身、今更自然科学の無研究をなげかざるを得ぬ。これから大いにやるつもりである。しかもぼくらは、青年自然科学者に、僕らの信をきいてもらひた

昭和9年(24歳)

いのである。昭和の古事記は、自然科学の登場を要求してをる、この広大の舞台に。

更に、自然科学と芸術との正しき研究と創作鑑賞が、中学時代の最も重要な課程となつたならば、こゝに高等専門学校大学の精神科学、歴史社会科学の正しき研究は、順調に実現せられ、世界的日本の活動に参与する宗教的信念の確立せらるべきことを思うて、自分らの来た迂路をかへりみざるを得ぬのである。(昭和九・一・二八完)

晩春・初夏を詠ませ給うた明治天皇の御製

〔伊都之男建〕
昭和九年四月号

僕らのつねに試みてをる連作短歌の内容については、僕の創作体験上、明治天皇御集によりて新しく示されし節々が多く、それについて簡単な告白と暗示とを記しておく。

連作短歌は、短歌といふ形式的原因よりして作歌の体験としてどうしても一首々々に解脱するのであつて、こゝに、各首の個性が成就されつゝ内的関連を以て発展して特殊文学としての長所があるけれども、同時に連続間断なき、動乱のいきづかひが、最後の一行をよみをはつた時、その初めよりをはりまで、またをはりよりはじめに押しかへして、一時に調和完成せらるべき全一

的統括力は示されうべくもないのである。しかしながらそれは、七五調五七調式の平板單調を救ひ、『つらなりながらとき／＼』といふ生命の性質たる連絡的發展創造的綜合を実現するのであるから、これを棄つべきでは無論ないのである。又かくのごとき文学は、世界のいづくにも求めえられぬところであつて、その使命を主要視せねばならぬのである。

しかしながら、明治天皇御製が連作的形式をとらせたまはぬことは、多く御繁忙の御うちに侍臣をして筆記せしめ給ひしと承る外的条件にもよらせたまふべきことながら、大み心の偉大の統御力が、唯一の決着せる統一を求めたまひしによるのであつて、これは、聖徳太子片岡山の御歌によりても偉大の意志によりて示さるゝこの傾向を肯きまつらしめらるゝのである。明治天皇御集が、形式的にはむしろ万葉調といふよりも古今調をとらせたまひつゝ、いさゝかもその分裂遊戯的傾向をとらせたまふことなく、このごとき内容を示させたまひし基底は、かしこかれども思想的相統統御力にましましゝと仰ぎまつる外はなく、そこに御晩年表現形式の極度の單純化よりして思想詩の内容をとらせたまひ、こゝに、俳句の生命をも撰取せる短歌の間然するところなき最高形式を完成せしめられしは、必然の道なりしことを偲びまつるのである。これ実に、シキシマノミチの大開展であつて、われらはかしこかれども、この明治天皇の日本文学史上の御偉業を紹述しまつらむと庶幾こひれがふのである。しかしながらこれ、天皇としての大御身の御痛感によりて成就せられしにて、

昭和9年(24歳)

われらは連作短歌より長詩へとすゝみ、長詩の創作に連作短歌の努力を随伴せしめつゝゆくべきをおもふのである。長詩は、実に最後の一行に全動乱が雄大の調和を見出す総合的文学形式であつて、建国の古と現代文化生活とを一貫融化する最高文学である。それは神人交通を実現する。その内容が 明治天皇御製に短歌として示さるゝことの意義は、既に論じたところであつて、それを法学者は、天皇の自然意思即ち国家意思と粗雑に表現するのである。

これより、晩春・初夏の御製についてのさゝやかなの研究を發表しようとするのである。御集研究の研究範囲と方向とは広汎多様にして、いま筆者が当面に志しつゝあるところは、かしこかれども政治的御体験の御苦闘内容を偲びまつりたのであるが、その前駆として自然について詠ませ給うた御製の御表現について、細密の研究を志さしめらるゝのである。いま、こゝに發表せむとするに、手もとにはたゞ、御集一卷の外に参考書はなく、対照すべき歌集もなく、しかし、材料の不足はそれさへあれば容易に補ひうるのであるから、不完成ながら根源的研究として足らぬ努力を試みようとするのである。

池落花

池水にちりうく花のかたよりてひれふる鯉のかげも見えつゝ (明治三十二年)

池梅雨

すむ魚もいぶせかるらむ池水の浮藻しげりてさみだれのふる
(明治三十四年)

池落花

池みづにちりてうかべる花をまたたゞよはしても春風ぞふく
(明治三十五年)

池落花

はまだのゝ庭のいけ水あさしほのみちたるうへにちる桜かな
(明治三十九年)

これらはみな春の池水を、ことに、第一をのぞきて外の三つは池の水にちる花を、よませたまひたる御製である。これらを相互に比較しまつれば、用語の微妙の相違によつて、空間の展開と時間の把握に重大の変化を及ぼすを知らしめられ、やがてそれ／＼の感興の全的分化を明示せしめらるゝのである。即ち第一首は、絵画的印象にわづかに鯉の動きを、しかして之と最も相似たる第三首は、全然ことなりたる連続的動作をよませたまひたるものである。更に分析しまつれば、第一首の、『ちりうく』の『ちり』は殆どその動詞的用途消失して、『うく』が眼前の光景として映じきたるのであるが、その『うく』も、『ちりうきし』といふやうに過去の変化による順次的動作の暗示は施されずして、『うく』と現在形となつてをるところに、一瞬の光景といふよりも直観の抽象性が前出しきたつて、それが読者の心に不安を催さしめ、池水にうかぶ動揺感を切実ならしむる

のである。『ひれふる』も同様に、鯉の『泳ぎゆく』全身の運動は見えず、わづかにその鱗のさきが目にうつるのであつて、この微かの動きが、一層清澄静寂のおもむきをさそふのである。また、『かたよりて』といふは絵画的配置の妙であつて、こゝにこの一首の視覚的效果を顕著ならしめてをるのである。しかるに、第三首は、交代する動作の叙述であり、目に見えぬ春風をこの動作によつて時間的に人の感覚に訴へしめたまふのである。『池みづにちりてうかべる』花を、散らしめしものは『春風』であつて、その動作は、言葉の上でははぶかれてをるが、時間的感覚の上にはあきらかにあらはれてをるのであつて、第一首の『ちりゆく』の語感とは全然ことなるのである。又第四首は、現在ちりつゝあるさまをよませたまひたる御製であつて、その落花のあはれさは、『あさしほのみち』みつるといふ動乱的作用をひそましめたる一瞬の横溢的光景によりて強化せられてをるのである。三つのうちこれが最も動的の感興を示させたまひしものと拝誦しまつるのである。

動静遠近の交代は、人生の法則であり、自然の秩序である。

多春雨

燕とぶしたり柳に夕日かげかつさしならはるさめぞ降る (明治三十八年)

朝

おきいでゝまづ見る花の下枝よりこてふも夢をさましてぞとふ（明治四十二年）

自然人生の交代変化には、さまざまの態様がある。しかも、このわづか二首の御製に、相互に
いかに懸絶せる対照をなして相ひくかを偲びまつり度いのである。

終日ふりくらしした春雨は夕べに至つてかすかに暗るゝ。しかしながら、夕日は光白く気象の変
化はそれさへもさまざまたげむとする。『かつさしながら』と稀有の御表現は、うす白い春の夕日を
緑あはき柳糸の間に燕の飛翔と共に閃照せしめ、しかも、春雨との交代を、いきもあらせず『さ
しながら……降る』と同時的緊密に接続せしめたまひたることのありがたさよ。

また、春暁の禁庭のしづけさに、やうやくみとめらるゝ蝶の飛立ち『おきいでてまづ見る』と
静中の静を示したまひ、花の下枝より飛びゆくあとをみ守るこゝろもなく、わづかの動作に大み
心さそはれましゝ御表現である。これは小さき周囲と蝶の動作に明けゆく天地を象徴したまひ、
かつは燕の動作に間断なき夕の気象の変化をまのあたり連結せしめたまふ。

雨中落花

春雨のふる日しづけき庭の面にひとりみだれてちる桜かな（明治三十一年）

雨後落花

はるさめのなごりの風にやへ桜はなぶさながら散るもありけり（同）

雨中浴化

ふく風をふりしづめたる春雨になほととまらでちる桜かな (明治三十八年)

はじめの二首については『明治天皇御集研究』中の叙述が心にうかびていま記すべくもない。

第三首『ふりしづめたる』と春雨にもこゝろあるかにみそなはし、その春雨のやさしき心はやがて大御心を表現しましたし、『なほととまらで』と追ふべくもなき運命の悲哀を痛惜したまうたのである。かくのごとく他動詞を以て意志的動作を自然の景観によみこませ、そこに複雑の変化を内的単純化せさせたまふは 明治天皇御集の特長と仰ぎまつるところであつて、かくのごときは、やがて思想詩としての開展をしぬばしめらるゝのである。かゝる引例は適當のものが外にもあるか、いまはこれにとどめておく。しかしながら

春山

山はみな緑になりてふじのねのほかには雪もみえぬ春かな (明治三十二年)

河母雨

つくばねは雲にかくれて利根川の瀬の音たかしさみだれの頃 (明治三十一年)

のごときは、概括的表現を充分に生命化したまへる適例であつて、こゝにも思想詩化の前駆を見らるゝのである。

行路霞

つゝみゆく人の車のおとはしてかすみ小暗き川ぞひのみち (明治四十二年)

里春雨

いはほきる音もしめりて春雨のふる日しづけき白川の里 (明治三十九年)

音はさまざまの光景を聴覚に伝ふるのである。「つゝみゆく人の車のおと」によりて景色は一層近くせまり来て、かたきするどき岩きる音もしめりては遠く、遠き山近き里すべて静寂につまらるゝ。

月前蛙

夕月夜にほひそめたる池水にかしましからずなく蛙かな (明治三十六年)

いま、この大み歌さながらのさびしき蛙のこゑをきつゝ、ことにこの御製は、いまなきわが友がことに好みまつりて誦しまつりゐたりしことをおもひて、この小論の筆をおかうとおもふのである。

(昭和九、五、一)

昭和9年(24歳)

明治天皇御集に表はれたる時代区分と日本文化史研究の

基礎問題についての暗示—叙事詩と抒情詩との関係—

「伊都之男建」
昭和九年五月号

—夏の御製—

歴史研究の上に於いて、時代の区分は、直接史家の人生観・哲学内容の価値を決定する問題である。

歴史とは神代より現在に至るまでの歴史であり、その間の時代的変遷はこの歴史の二極点をつなぐものとして、その史実内容に選択統一が加へらるゝ時にはじめて史的価値が賦与せらるゝのである。それ故、時代的変遷の意味内容を決定する時代区分はこの目的と方法とに従つてなすべきであつて、それは直接史家の人生観内容によつて遂行せらるゝのであるから、それは同時に因果・正像末といふごとき個人思惟能力に根拠を有する教義に依立する既存個人世界的宗教に代るべき近代的国家的それゆゑに、まことの世界的宗教の教義としての歴史哲学また文化史の、教化的意義に於いて重要な問題として顧みらるべきである。この近代的宗教は世界文化の最高開展

階次に立つ日本が『明治維新』によつて天皇親政・臣民忠節の国民生活実内容として実現したのであつて、『明治維新』の理想たる『神武復古』が、七十年前の問題たりしことを回顧すべくもなく、明治・大正・昭和と一括せらるべき現代史の問題として、ことに、国際関係の複雑輻輳とそれによつて激発せられむとする世界戦の危険に直面しつゝある現代日本、しかしながら、それによつていよ／＼人類運命の将来と世界文化の理想に不可替の使命を負荷する唯一人たる確信を断行すべくせまられつゝある現代日本の最重要の問題たることを反覆強調せむとするのであるが、このわれらの信に客観的根拠をあたへたまふ『明治天皇御集』の研究によつて論証せむとするのがこの小論の目的である。即ち、『明治天皇御集』による明治時代の時代区分が、現代史上如何なる意義を有するかを、またそれを研究することによつて、現代は全日本文化史上如何なる地位をとつて如何にその理想を実現すべきかについて知らしめらるゝところを論述しようとするのである。我らは明治の大御代を統一せさせたまひし明治天皇が維新の国民的信念を『さま／＼にかはりゆく世をへにし』と告白せさせたまひし大み心に、遂に究尽完成せさせたまひたることを『明治天皇御集』によりて仰ぎいたゞかしめらるゝのであつて、それは維新の理想『神武復古』が、その政治的変革の原理たりしのみでなく、現在のまた将来の国民にのこし与へられたる不断の任務であることを証するものと信知する。くりかへして言ふが、この信は『明治天皇御集』をその中に

歴史的事件が如何に反映するか、の学術的見地より拜誦することによつて客観化せらるゝのであつて、かくのごとき御集拜誦をなくして現代史を、ひいて全日本文化史を論ずることは出来ないのである。また最近『文化史』は現代文化のうちに成立せる歴史形態としての特質と任務とを認識せられてきたのであるが、『神武復古』の要求こそ、文化史成立の学術的根拠たることを論ずるところに日本文化史の存在があるので、この論証は『明治天皇御集』研究の、ことに右にのべた方法によつてなされるゝところの研究の任務であると信するのである。

明治時代は之を三期に分つのが普通である。その区分によれば、西南戦争以前、急速の新施設と新旧階級の渾融を以て第一期とし、その後日清戦争に至るまでの立憲政治の確立条約改正等の事件を一括する期間を第二期、その後の国力の伸張を第三期とする。この一般的区分も成立するものと考へ、僕らは特に別に日清戦争及び日露戦争の相違を闡明し、それによつて時代区分に新しい方法を提示しようとおもふのである。一般的区分は国内国民生活に局限しての区分であるが、両戦争の相違を論ぜむとする我らの区分は、世界文化史の見地より、またはそこに使命を有するところの世界的日本の文化史の見地より論ぜむとするものであつて、之を戦争を区画線とする旧式の方法と混同してはならぬのである。明治史を現代史として論ずる時には、史実的事件の

羅列に対する区画といふごとき局部的見地によることは出来なくなつて、国内的限界より世界的広袤に拡張せらるゝのである。またそこに時代区分は、内心の信を標準として決せらるゝことゝなるため、唯一の道として、『明治天皇御集』拝誦の研究を発表せむとするのである。

『明治天皇御集』は同じく三期に分たるゝ。文部省発行の御集の三巻の分類は内的に適當のものであることを肯か^{うなづ}しめらるゝ。上巻の明治初年より三十六年までは、専ら自然を詠まれた御製が集められてをり、御格調もまた素朴晴朗のものと拝せらるゝのである。しかしながら、中巻の三十七・三十八・三十九年の御製を拝誦すれば、かしこかれども国家興亡戦の悲苦が胸おしつまるばかりに迫りくるのであつて、深夜なほ御衣をとかせられず戦況を待たせたまひしといふ御多忙と御深痛の中に、殊の外に御多作であらせられし御ことを拝察しまつるも悲しく、

折にふれて

さまざまにもの思ひこしふたとせはあまたの年を経しこゝちする（明治三十八年）

の一首に御感懐の全部をいたゞかしめらるゝ。しかし下巻の四十年より四十五年に至るまでは、円融完成の境に入らせたまひしと仰がしめらるゝのであつて、中巻には人生をよませたまひし大御歌多く、こゝに上巻の内容がすべて燃鎔深刻せられて酷烈にも感ぜしめらるゝのであるが、下巻に至つては却てまた自然を詠まれた御製多く、しかしながらその自然の御製には全人生が融化

渾成せられ、音楽的律動に、宇宙的大調和を實現せさせたまひしを仰ぎまつるのである。

こゝに、夏を詠まれた御製のうち、夕立をよませたまひし数首の御製を引用例証しまつらむとするのである。

たかまやま空にとどろくいかづちの声にきほひて夕立ぞふる(明治十五年)

村雲のおほふと見しは夕立のみねより嶺にかゝるなりけり(同)

かきくもり降るゆふだちに荒磯の波もしばしは音なかりけり(同)

空は晴れ風はのこりてゆふだちの過ぎしあとこそ涼しかりけれ(明治十六年)

はたゝがみ光きらめく夕立に薔しよみおろせといひさわくなり(明治三十九年)

かゞやきし入日のかげもきえはてゝふじの裾野に夕立のふる(同)

俄にも照る日のひかりかきくらしいらかをたゞく夕立のあめ(明治四十年)

夕立の雨は高嶺をこえにけり並木の松に風をのこして(同)

これらを拝誦しまつりて、三十九年四十年の御製の、ことにすぐれたまへるを仰ぎまつるのである。

ハ a a、ガ ミ i i、ヒ カ リ キ ラ、メ ク ヲ フ、ダ チ ニ シ ト、ミ オ ロ セ、ト イ ヒ、サ ワ、グ ナ、リ

かく音調を分析すれば三十一字中 a 音十字、i 音十一字であつて、連続せる a 音の威圧的光閃と a i 音の交代に表現せらるゝ急速の運動、やがて i 音の連続に清爽の風雨を感触せしめてやうやくきこゆる人間の喧騒を配置したまふ。また

i a a i
ニハカニモテルヒノヒカリカキクラシイラカタ、クニフダチノアメ

a 音十一字、i 音の句切九字である。『かきくらしいらかをたゝく』と i 音の連体形をもつて全体をひきしめそこに寸分の間隙をおきたまはぬ御表現の文法的効果は、こゝにも a i 両音の交代に変化をあたへて、殆ど瓦をうつ音のきこゆるばかりの音響を発せしめたまふのである。この二つの御製は共に夕立を読者の感覚に間近く近接せしめたまふものであつて、このごとき自然の動作そのまゝに呼応することばの発現は、単なる自然の鑑賞を志すものゝ企て及ばざるところである。堪へがたき復雑深酷の人生の戦闘に戦ひ勝ちえたる強き大いなる精神の生理心理的呼吸力によるの外は、この音調をことばにうつす芸術創作力は望みえぬのである。これ実に、明治時代の時代区分の標準を決定する根拠でなくて何であらうか。

『明治天皇御集』下巻には、なほ外に五首の夕立の御製を掲載してをる。

雨ぎぬをかくるまもなくゆく人のくるまにかゝる夕立の雨（明治三十七年）

和田の原おひてをうけてゆく船の片帆にかゝる夕立の雨（同）

野道にてあはざりしこそうれしけれ旅のやどりにかゝる夕立(同)

旅人を野辺にのこして夕立は高嶺はるかにこえてけるかな(明治四十三年)

水上や夕立しけむ谷川のながれみなぎる音きこゆなり(明治四十四年)

これらは多く遠景をよませたまひたる御製である。第二首は水彩画のごとき淡彩と軽快味とを、また第四首は浮世絵に見るごとき旅情を、それ／＼に表現したまふ。いづれもさはやかなの光景にうたる。これらは三十七年以後の御製である。

日清戦争のときは、広島の本営にいまして『成飲の戦』及び『黄海々戦』の二御製軍歌を創作させたまひ、軍楽隊に作曲せしめられて御夕食ごと奏せしめたまひてはこれをきこしめし又、戦場の将卒をしてうたはしめたまうたと承る。この御製軍歌は神武天皇の御製軍歌とならべまつるべき戦鬨的抒情詩と申上ぐべく、凝滞なき開朗の御格調はいかばかり勇士の血を湧かしめたかを想像せしめらるゝのである。しかしながら日露戦争には御製軍歌の御発表はなく、御集にあつめられたる日清戦争当時の大御歌の数ふるばかりなるに比べて、おびた夥しき御創作を示したまうたのであつた。おそれ多きことなれども、かくのごとくに両役に於ける大御心の御相違を拝察せしめらるゝのである。僕らは、日清戦争は日露戦争に比較して小さくその意義も軽いけれども、実に間然するところなき全国民の一致団結の実現せられてをつたことを聞いてゐる。日露戦争は

国民生活にとつて更に深刻であつた為めか、既に非戦論が戦時中にもまでも残存唱導せられたのであつた。それは因より明治教学の誤謬に帰せらるべきであるけれども、われらはこの自己分裂的反省をも、世界文化史的使命荷担の日本国家生命の上より悲しく肯定せむとする。このごとき国民生活を帥^{ひき}ゐたまひし大御心の御苦痛こそ、いかばかりにましましたことであらう。しかしながらこの悲苦を体験したまひし 明治天皇は、大御身御みづからに日本文化史の理想を完成せしめたまうたのである。

戦鬪的抒情詩と称し奉りし御製軍歌に代る日露戦争の大み歌は何と申すべきであるか。数々のありがたき御製に感泣せしめらるゝ節々をこゝに記しつくすべくもない。

星

ゆふやけの雲うすらぎてたゞひとつあらはれそめし星の影かな（明治三十七年）

薄暮眺望

家なしと思ふかたにもとし火の影みえそめて日はくれにけり（明治三十七年）

このすが／＼しき大み調^{しらべ}は、人生の無常と国家興亡の人類史の鉄則に対する深酷無比の御感懐より出でたるものであつた。即ち

寄玉述懐

きずなきはすくなかりけり世の中にもてはやさるゝ玉といへども(明治三十七年)

玉

さまざまの玉をあつめてきずなきはえがたきものとさらにしりぬる(明治三十八年)

波

あるゝかと見ればなきゆく海原のなみこそ人の世に似たりけれ(同)

草

うとましと思ふ葎はひろごりて植えてし草の根はたえにけり(同)

折にふれて

いかにぞとおもひしことはさもあらで思はぬことをきく世なりけり(明治三十七年)

解決すべくもなき人生には、痛感と決意のみが生くべき力である。さればこゝに人生法則を

寄道述懐

白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞしきしまの道(同)

と示させたまうたのであつて

田家翁

こらは皆軍のにはにいではてゝ翁やひとり山田もるらむ(同)

暁

暁のねざめのところにおもふこと国と民とのうへのみにして（明治三十八年）

折にふれて

おのづから仇のこゝろも靡くまで誠の道をふめや国民（同）

等の絶唱と称しまつるべき大み歌も、この年によみいでたまひしものであった。

かくのごとくに、前述せし御集の御傾向の一変せし契機を見まつることを得る。それは大いなる過渡期であつた。

思往事

さまぐゝのことにあたりて思ふかな国ひらかし御代のみいつを（明治三十八年）

神祇

世の中のことあるときぞしられける神のまもりのおろかならぬは（同）

かくして、大御心はことに神代の昔をしのばせたまひ、神のまもりをうつしく感得せさせたまうたのであつた。これより後は御製完成の時である。それはシキシマノミチの完成である。この完成に向ふ過渡期に、明治維新の理想『神武復古』は、政治的原理より遂に国民宗教の根本教義として、それは現代史の意義確定の原理として永遠の生命を与へられたのである。シキシマノミチ

の完成は直接現代国民生活を、さらにそれによつて世界の将来を規定する。日露戦争は奥国カレ
ルギ伯が論ずるまでもなく世界的画期事件であつたのである。われらは、日露戦争を以て明治時
代を区分せむとする。明治四十五年は三井甲之先生の嘗て暗示せられしごとく、シキシマノミチ
の第二建国の画期である。現代史はそれより後を第三期として三分せらるゝであらう。第三期は
すなはち大正を経たる昭和と大御代でなくてはならぬ。

シキシマノミチの完成、御製の完成は大方の作家の円熟期といふごとき漠然たる個人的標準に
よるものでは無論ない。明治天皇の御製が短歌の特長たる抒情詩的内容より思想詩としての全然
新なる内容を実現したまひたることこそシキシマノミチの完成である。これは前号にも説き及ん
でおいた。而もまた、それが天皇の御製なるによつてはじめて成就された関係もまた屢々論じ
たところであつたのである。このシキシマノミチの完成によつてその第二建国を遂げさせたまひ
し天業を輔翼しまつる臣民の忠節は、おほみことのりの拝誦奉戴以外にはあるべくもない。即
ち、御製の大きき教を如何に臣民として実現しまつるべきであるか、これが、われらの忠を決すべ
き問題である。それは、叙事詩・長詩・劇詩の創作である。明治維新史の眞の形式は劇詩でなけ
ればならぬ。この歴史編纂によりて回顧はそのまゝ前進の動力となるであらう。又、それは建国

の叙事詩古事記の研究と実現の時代たらしむることである。専ら研究回顧せられた万葉の時代は過ぎたのである。国民の情意生活を支持する文字の不振は、国家の将来に悲観的予想を与へずにおくであらうか。無生命思ひつき短歌や個人的關係にとゞまる低調小説の流行は、現代文壇の情勢である。今、抒情詩と小説の創作に止むべき時代ではない。われらは、古事記の読誦の根拠を『明治天皇御集』の拝誦によりてあたへられ、古事記の読誦によりて、『昭和の古事記』を創作し、その内容のごとき国民生活を実現せむとする。これ、まことの復古である。『神武復古』は、シキシマノミチの完成とその輔翼によりてはじめて実現せらるゝのである。この故に、古事記と御集とを離すことは出来ぬ。それは文化史研究の基礎問題である。叙事詩と抒情詩の關係である。文化史研究は一人の痛感にまつ外はないが、それは、抒情詩より叙事詩への開展の契機に見出さるるものによりて実現せらるゝ。神武復古の現代こそ、文化史研究の時代である。

七百年前、親鸞は『よくよく五劫思惟の願を惟みればひとへに親鸞一人がためなりけり』と言つた。彼が最後の歸着点として見出した『形もなくまします無上仏』また、日本人道元によりてとなへられし不立文字は、実はまことの形として、まことの文字として、明治維新によりて、『明治天皇御集』にあたへられたのである。ともあれ、唯一の歸着点を決定しえた鎌倉仏教は明治維新の前駆であつた。外面的政治的形式は幕府の設立となつて相反したけれども、その相反は

昭和9年(24歳)

原理の確定によつて却て生命培基の材料となるにとどまつた。不可思議の明治維新、現代史の意義、現代史のそれと共に歴史の両極に立つ神代との密接の關係。いま、書くべきことは更に多くなつてゆくこゝちがする。されば、簡単に、われらの信、いや、信といはずとも日常の感情を告白してこの際限のつかない而も無体系の暗示にとどまつた小論の筆をとどむる。そのことは、即ち、『現代こそ最も神代に相似たる時代である』。(昭和九・五・二二)

詩歌 夜の参拝

〔伊部之男建〕
昭和九年一月号

友と二人

霜夜に凍る玉砂利ふみならし

み鳥居のまへにすゝみぬ

一つ二つ

まありぢにつらなるみ明火、

その中ゆ

巡邏の人一人、いまし出できぬ。

木霊する

拍手の音、

うけひのことばさゝげまつりて

闇おほひこもらす神の大み霊を

はろけくもをろがみまつる

太きみ柱

み鳥居を仰ぎて見れば、

み空には日雲うかびて

星三つ四つまたゝきのたり。

しばしたゝずみ、

砂利の音後にのこして

まかりきぬ

われら二人は。

詩歌

一月十一日

〔原理日本〕
昭和九年二月号

はらからのゆきし日かしこし風あるゝみ空はるかにみたましぬばむ

詩歌

鶴ヶ峯

〔伊都之男建〕
昭和九年四月号

一

南みなみのみ空に星はまたゝけど北空くらし雲ひくゝして

彼の方はいづくなるらむ都べをこふむねいたし空あふぐにも

北の方にのぼるこの岡しがかたゆ風吹き荒るゝ音聞ゆなり

硝子戸の大きはためきやむしばし遠ききこゆる風あれの音

かの風のこゝに吹きつくるときもひてこゝろおちをりさゝやかの堂よ

二

岡の上の松のなびかひ知る人の家のたゞずまひ去年^{こトモ}とかはらず

天地に一人とたのむ母をおきてわかれこし身のさびしくあるかな

さびしさのたへやらぬがに書よみて世のことすべて忘れむと思ふ

つみ上げし書のかずくそを凡てさ噛みに噛みて飲まむとぞ思ふ

朝より夕いぬるまで手はなさず書よむ日かずたぬしくあるか

三

東に枕して寝む母そばのいます都に近くおもへれば

友なしとおもふは友をひたこひにこひするかなしこゝろにしあるか

友のことをわれはおもはじなつかしきはしくうるはしき友にしあれば

四

森の上に荒れ吹く風におよぐ鳥のこゑは喘ぐがごとくきこえく

波のごとくつらなる丘の上をふく風のながれはいかにあるらむ

耕さぬ春の畠の土けむり風ふくごとにはしりゆく見ゆ

五

麦畑の丘の彼方の松林の根ざしは見えず梢のみ見ゆ

夕まけて春日かたぶき丘の上の畑に森にうすくきらへり

仕事をへかごをになひし人一人畠見まはる姿とほけし

けたゝましく土煙立てゝ街道をすぎゆくトラツクの音一しきり

村人のおきなほもだし子らのこゑ彼方こなたにぎはしきかも

牛ぐるまいづちへゆくかたえむとてつゞく軋きしみの音のかなしも

足もとの麦生の葉末に夕風のそよぎすゞしく日は入らむとす

岡のかげのいづくの家になくらむか牛ごゑしづけき景色どよもす

おきふしのしげき岡なみその一つめぐればかくらゆわがすむ家も

わがゆきし姿みとめて林ぬち枝わけとびし鳥のつがひ

きのふかも来りし我にくれてゆく野山の色のさびしかりけり

畠山重忠をおもふ

鎌倉に事おこりぬといつはりて君をいざなひむかへ撃ちしか

天の下誰一人とてか二つなき君の心をうたがひ得しや

みまかりしさきの將軍に一の子のすゑたのまれし君はますらを
弓矢とりてならびなかりし君はまたおのが功ほこらざりけり

君の名をきくらむほどは君のことたゞへぬ人はなかりしものを
己が家のさかえのみこふわる者のはかりにおちし君はもあはれ
暗愚なる若將軍をしりぞけて湯槽に殺せし北条時政

三柱の現人神を遠島に流しまつりし義時の父

主をおもふあつき心^{こころ}にいつはりときとりえざりきさかしき君も
菅谷なる館立ち^{やかた}いで武蔵野をいそぎてきたる都岡のわたり

先立てし子の重保は打たれぬと注進きたり気づきぬはじめ

陰謀はこゝになれりと思ひしもかへりみざりし君が心根

見渡せば旗さしものゝ打なびき寄せく一万千余騎はやも

物具^{ものぐさ}はうがつべからずかたときも叛きし名をな立て(そ)とふ君よ

はかりごとなかりしにあらず国おもひ潔き名を君のこしにき
故郷の城にこもらばばかりをやぶるに易きことならましを

ものゝふの清き心のます鏡くらむことの君堪へざりき

駒なめて寄る敵すべて友垣と親しみ交はしゝものゝふのむれ

烏帽子えぼしせる君の姿に知りたれど事は及ばずたゝかひひらく

鶴ヶ峯岡の上かけてよせなびきひきてまたよすはげしきいくさ

雲霞なしよせくる敵もたぐひなき君の武勇に追ひ立てられぬ

あなあたら君はよろはず強弓の遠矢かけられ胸にさゝりき

かくてしもはてにし君がまごゝろは右の大臣にたしかめられぬ

鎌倉の右の大臣にはふられし君幸なしといふべくあらず

悲しかる君のいやはて咽びてかたえせぬ流れ二俣川水

丘はつゞき畑はうるはしきこのあたり昔しぬべば心おそるゝ

詩歌

光のしぶき

人の世のつもるくるしみにたへずしてくゞもりゐたりこゝら年月
うつし身はことなきところにありしかどこゝろはみだれせむすべなかりき

〔伊都之男建〕
昭和九年五月号

なき父のまた老いし母のみめぐみに生きしわれなれどもだへきたよに
何となき心の不安ときえずてやむとき知らに追はれきたりし

苦しみを求めしわれをおろかとも言ふ人あらば言はしめむとおもふ

光明はあまりに多しわれはたゞ闇を求めて迷ひありきぬ

いまははやせむすべあらずみ光のしぶく雨ぬちゆくがごときに

まちたへし時きぬこゝに身ぬちみちひそみし力そゝぎくいまこそ

友はわれを久にまちにき友よゝゝわれは友らの中をかけらむ

友にわがむねぬちひとりたくはへし雄大の計画告げむいまこそ

よみかへり生きしよろこびいたづらにはふるべしやはわれらの中に

久しくもわがきゝしひぶき高まるに黙すべからずそをし伝へむ

全国の日本の青年のやむまなき声いやゝゝにまさりてくるを

われらそこに表現をあたへずは人の心いかにあれゆかむためらふべからず

あゝわれは再びもだすまじこのいのちまことのいのちとの客証あれば

大波は空うちあれにき黒雲は底まきこみきすぐる日われは

いまわれは暴風雨はれわたり天つ日に大波わきてゆるゝこゝちなり

大なだは荒れなばあれよ白雲のうかぶ大空日はかどやくに

朝

朝ときのきよきしづけさ光さす畑には小鳥むれ鳴きやまず

かのかたや甲斐の山々わがおもひひまなくかよふ夜ひるなしに

み空はれ朝日はさせど富士のねの姿は見えず霞とざして

わがこもるおもひにもにたるこの朝けすがしくあれどあまりしづかなり

うす藍の空には光かどよへど雲のなびかひあなほのくし

詩歌

述懐

〔原理日本〕
昭和九年九月号

ただ一人われをたのます母上をなぐさめ生きむねがひ切なり

父上のゆきまして十年われいまだ母につかふる道にまよへり

はらからのさだめはことくかなしきをおもへば我のみさきはひねがはず

ある日

わかれこしかなしきこゝろいつしかにふるひ立ちけり夕山下れば

谷にみつる夕霧の中をはしりゆく汽車足はやみ草木さやげり
逆鋒としみゝ立つ杉にきりふきつけ頂は見えず山近かれど(七・三〇)

詩歌 虫

音もなく更けし夜庭に二つ三つ鳴く虫の音のさびしきかなや
家をはなれ友をはなれて病院に臥す友のうへ思ひつゞけつ
をり／＼のおもひ歌ひて送りこしことばを胸にくりかへしみつ
果すべきつとめつもれどけふもまた夜は更けはてぬ疲れもいでぬ
床ぬちに身を横へばいやましに燃えくるおもひ床ももゆるか
きのふこそ友とはげしく語りしかわれらのつとめと友のおもひを
庭面の叢くまむらぬちにたちのぼる虫の細声やまむともせず
現し世に生くる悲しさ虫だにもかくは鳴くものを丈夫われは

神

現し世にかゝるつとめし把り持ちて心張りつゝ生きむわれはも

「伊都之男建」
昭和九年十月号

千早ぶる神と歌はせたまひにし大御歌くりかへしをろがみよみまつる
くりかへしよみまつりをれば千早ぶる神の御稜威みかさぞしるけかりける
天つ日の照りわたるごとあきらけく神の御稜威のかゝるかしこさ
目に見えぬ神にしませばうつし人は神を祭るに道しひらかる
現人神あらひとがみわが大君にまめやかにつかへまつるぞうつし世の道
大君は神にしませばひたすらに大みことのりかしこみまつらむ
朝な夕な神の御まへにをろがみてみ民のねがひ祈りまつらむ

詩歌

事務所にて

窓下にゆきゝの船の水わくる音のきこゆる部屋はなつかし
ゆる水はにこりてありともをやみなく立つ波見れば心やすらぐ
みち潮に堀水張りて早く暮るゝ秋雨寒く降りいでにけり
堀へだてし向ひの岸を次々に追ひゆく電車の汽笛にぎはし
せまき部屋にあまた打集ひいそがしく言葉かはすさま力強く感ず

〔原 理 日 本〕
昭和九年十一月号

明日の紙上にのる文は校正刷となりてはやくも届けられてあり

刻々の時局の動きを精密の思想的照察に批判してゆく

師の君の書きたまひし文は新鮮の反響のうちに伝はりゆかむ

はてしなきいまの日本にはかくのごとき内的戦ひのありと信ぜよ

にぎはしくまた騒しき東京の町の中になし一ところ

窓下にいつもゆる波わきやまぬ小さきこの部屋におもひつながら

乃木大将の和歌

〔伊部之男建
昭和十年二月号〕

こゝでは、学習院輔仁会編纂の『及木院長記念録』によつて、大将の歌を研究対象とするが、同録の他の部分にも論及することゝならう。また東郷元帥や故武藤元帥の歌などにも及び度いが装飾的になる嫌があるから、それらを凡て排して、単に及木大将の歌のみを掲げて他の研究と共に補足せしむることとする。いま僕のこゝろは叙述の形式を整へるに堪へぬのだ。

大将は無論歌人ではない。記念録中の歌といつても、上篇八十四首と、下篇百四首のみで下篇には長歌一首軍歌未完稿一首その他俳句が数首それと乃木夫人の一首とがあるにとゞまり、下篇中の短歌中には狂歌もふくまれてゐるので数から言つても大したものではない。短歌は明治二十四年から見らるゝが、晩年のが多く日露戦争ころから作歌の興味が、ことに触れて湧いたものと思つてよからう。これは忠君の念にあつい大将が、明治天皇の御創作に誘はしめられまゐらせたことも想像しうることである。三十五年四十一年の二回、かしこくも大将の歌に御勅批あらせたま

ふことがあつたことによつても、この想像は可能であつて、まことに盛事といはねばならぬ。こゝで一寸言及するが、漢詩は明治十年ごろより見えてゐるが、最後の辞世はしきまのみちであつたことより察して、漢詩よりも短歌へと次第に大将の心は傾いて行つたものとおもはるゝ。

大将の短歌創作には、心のびやかにやすらいだ時が多かつたやうだ。『明治四十五年五月十二日輔仁会遠足を多摩川に行ひし時人々に示されたものなり』といふ題書で

よき一日若殿原にさそはれて多摩の河原に遊びくらしぬ

むれあそぶ子らのしわざの面白くたまの河原にひと日暮しつ

遇成

あしかびのつのがむみれば池水のぬるめるほどぞ今知られける

ふるからに消えゆくあとのきよげなるなにとへむ春のあは雪

また、

よき友とかたりつくしてかへるさのそらにくまなき月を見しかな

思ふどちかたりつくしてかへる夜のそらには月もまどかなりけり

これら凡て晩年のものであるが、その平和の心境は決して沈滞した平静ではなかつた。降るたちまちに消えるあは雪を美しと見た大将の心は、その一生を貫いた人生観と別個のものではあり得

ぬ。しかし、大将の歌はかういふなごやかのものばかりではない。

ふる城にたてる鉾杉影たかみ弓張月の入りかねて見ゆ

これは四十四年十一月肥後大演習の折の三首連作中の一首である。別に

矢さけびのたえしゆふべにたゆみなき弓張月の影ぞうれしき

夕立にぬれつゝいそぐ旅人はゆくての小川がちわたるらむ

この三首は大将叙景歌中の傑作とすべきであらう。『ふる城に』の一首の音楽的效果は他の背景の混雑を払拭し、一切の音響を洗ひ流して夜気迫りくる幽邃の古城の雰囲気のみを現出せしめ、そこに入らむとして入りかねたる弓張月の凄蒼たる微細の動きに天地を吸尽せしめようとするのである。また『夕立に』の一首にみらるゝ作者の詩情には、何ものゝ思惟も入るゝ余地なき純一を見る。夕立は作者の心に於いて表現の以前に堆積淀留せられたる現象ではない。その新鮮の気象の中に急走する旅人はたちまちに作者の眼界から消え、作者の心は既にその記憶の中に入らむとし、そこに描かるゝ急箭の如き小川の景に、現実の眼界から消えた旅人は再び想像の姿を現して来る。この複雑の物心の錯綜を、滑らかな時間の直流に叙し去つてかへりみぬ詩想は、やまとごゝろのすなほにてをゝしき力と言はねばならぬ。しかしながらこの純一の詩想は大将にあつては作歌の鍛練より得來つたものではなくして、その根源は実に大将の忠誠心にあるといふべきである。

大將は明治四十四年、御名代東伏見宮殿下に東郷元帥と共に随伴して渡英したが、その船中で

御名代の宮のまします船の舳へきになみなたゝせそ和田つみの神

加茂丸の舳へさきになびく旭の御旗和田つみ神もまもりますらむ

朝な／＼をろがみまつる東の空にたふとき天つ日のかげ

東に豊榮とよあかのぼる天つ日のかげみち渡る大うみのはら

大ぞらの壁立つきはみたひらけく青海原にさゝなみもなし

さやかなる月のひかりに和田の原黄金しろかねなみの花さく

大ぞらのくまなき月を仰ぎつゝ青海原を渡るすゝしさ

波の上に月影きよきよもすがら友とかたりつ酒をくみつゝ

『御名代の宮』ましますによりて渡津見の神も波立すなといふ忠誠の心は、自然の現象と人生の

出来ごととを分たぬ神話の精神である。

空きよくくまなき望もちの月かげを大君いかにみそなはずらむ

賤しづが家やにかしぐ煙のかしこくも大御心にかゝりけるかな

花霞大内山にたなびきて朧おぼろなりけり有明の月

さしのぼる波間の月をそのまゝにこのかり宮のみあかしにせむ

冬ながら^{トキ}後の宮のましませば春心地なる静浦の里

一君万民の日本国体の美が、如何にこれらの歌に具体的に表現せられてをるかと言ふ迄もない。

『後の宮』と『静浦の里』とは如何にふさはしき調和であらう。しかしながらそれを知りえたものは、大将の『冬ながら春心地なる』と歌ひえた心ではなかつたであらうか。大将が月といひ日といふもの、それは常に『天に二日なし』といふわが大君の御ことに関連せしめられてゐたのである。驪の月も大内山にかゝる時に、大将の心は自らをのゝかざるを得なかつたのである。又波間にのぼる月の自然の風光は、ことそいだ行宮あぐらの御たゝずまひにふさはしきことを『みあかしにせむ』と詠じたのである。ことに、団々たる満月の一片の雲なき秋空をわたるを見ては、これぞわが大君の大御心と信知せしめられつゝ、そをみそなはず御ありさまを偲びまつらずにみられなかつた。君臣水魚の言葉は、こゝに至つてきはまれりと言ふべきである。それ故に大将がその漢詩で硝煙掩^ニ宇宙、砲声轟^ニ天地、血河千里漲、慘絶旅順口。

法庫門西山即目

劫餘風物不堪^レ酸、處々炊烟暮色澹、往事茫茫皆似^レ夢、百年誰記招魂壇。

○

溪水潺々樹色萋、夏山層翠白雲迷、長征踏破永陵路、馬上把^レ杯杜宇啼。

と歌つた心は、次の一詩に尽きよう。

芳野懷古

滿山紅葉錦旗色、秋氣凜然侵戰袍、不_レ忍陵前語_ニ往事、勤王諸將一時豪。

されば纏綿たる情抒も、寛舒たる襟懷も、悠然たる自適も、それらに乏しくはないけれども、すべて將軍にあつては忠誠の一心に帰結せしめられてをつたのである。

いまこゝに大將辭世の歌

神あがりあがりましぬる大君のみあととはるかにをろがみまつる

うつし世を神さりましゝ大君のみあとしたひてわれはゆくなり

を記さうとするに至つても早や筆を擱^かかねばならぬ。將軍の一生は劇である。その歌を評するにも、こゝに至つてはかゝる平板の叙述を以て尽さうとすることの不可能を言ふの外に、とるべきすべはない。しかし

盛名功業世皆欽、千古誰全道義心、榮辱死生機一髮、可_レ憐勇士就_ニ生擒_一。

と四十三年中耳炎にて赤十字病院にあるとき詠ぜられたことをおもへば、大將の死は実に機一髮を誤られざりしものと仰がるゝ。機一髮と知るは、実に平生の心にある。また

いたづらに立ち茂りなば楠の木もいかでかをりを世にとゞむべき

と詠まれた悲劇的精神はその身を以て証せられたのである。それ故に辞世の歌の絶唱が、その生命を客観化されたことをおもふ。『大君』の神にましますことは、この歌によつて信知せしめらるゝ。顕冥の世界もこの歌に於いてはいさゝかの疑惑も容るゝところが無い。永久の生命はとゞまることなき生命である。されば我らは信ずる。『みあとしたひてわれはゆくなり』と歌ひあげた大将の詩心は、ゆきてとゞまることなき日本生命の上に残し止めおかれたのであると。

亡き黒上先生の御遺著の末尾に載せた「後記」の一文

「聖徳太子の信仰思想と
日本文化創業」(活版本)
昭和十年七月 一高昭信会

一 黒上正一郎先生逝きましてより六星霜、歳月の経過の速かなるを歎かしめらるゝ。六年の昔昭和五年九月二十一日先生の訃に接したるとき、我等は現し世の無常を痛刻して照らす日も暗きかに思はれた。先生に遇いまつりてより親しく教を仰ぎしこと僅に二年に満たず、しかしながら、先生によつて初めて明治天皇・聖徳太子の大御教に目さめしめられ、日本青年としての行手に定かなる道を示されたのであつたが、われら年壮りならず稚き心に進むべき力さえも失ひし時、

われら同信生活の生命を一縷の糸に繋ぎしものは、諸先輩の指導は勿論乍ら、一に本書の中に遺された先生の不朽の生命であつた。われらは本書を共に読誦することによつて、一人居て喜ばゞ二人と思ひ、二人居て喜ばゞ三人と思ひ、先生に遇ひまつることを得ざりし多くの友らと共に、在りし日にかはらぬ集ひをなすことを得たのである。われらはいま本書の出版が同信生活の開展に乗する不可思議の機縁をおもひ、それ故に本書を公布することの意義の重要なるをおもふのである。

二 先生は在りし日我等を導かるゝ傍ら、東京帝国大学乃至東京文理科大学の教室に或は学術機関雑誌等に逐次研究を發表され、その苦闘の生活は遂に先生を病床に親しましめたのである。併し先生はこの病苦の生活に耐へ、自ら鞭撻せられつゝ尚研鑽をすゝめ、大御教おほみかじの世の青年の心に浸潤融化せらるべきを希求し、昭和四年三月の「国語と国文学」に「聖徳太子の人生宗教と国民精神」と題して論文を發表されし後、続いて同四月五日の両号に続篇を載せ、七月号に「聖徳太子の三経義疏の国文学的研究特に法華義疏の独創的内容を論ず」の題下に發表を続け、八・十一・十二月の三号に連続寄稿せられたのである。この論文の内容は多少の異違あるも概ね当時の昭信会例会に於ける先生の讚仰講義の内容と同じきものであり、先生は他日是等の研究を爾後のそれと併せて一書に完成すべきを期して居られたのであつたが、遂にその功成らずして永眠され

たのである。昭信会にて現在使用に供せる謄写刷本は、先生が病を得て徳島に帰られし翌年、昭和五年二月に先生の命を受け、暫定的に先生の病気の全癒するまでの間用ふべきものとして発行せられたものであり、従つて先生の帰京を待つて更に筆を加へらるべき稿本であつた。併し、先生の病は我等の最後の望をも絶ち、先生はこの未稿本を残されたまゝ逝かれたのである。しかしながら、こゝに未稿とは、先生の企画に於いていふのであつて、それは本書の内容と外形とにその価値を減ずるものでないことは言を俟たない。この謄写刷本は昭和八年に増刷し、併せてその文字の誤謬を訂正したが、その体裁は旧版を踏襲せるものであつた。

昨秋徳島市の御生家（黒上先生の御母堂、黒上住恵様）より御遺著出版の御好意を受け、出版の日一日も早からむことを念じつゝ、寸刻を惜しみてその準備に従事したのであるが、遅滞を重ねて今日に至つたのは我等不肖の致す所であり、先生のみ霊の前に謝しまつる次第である。

三 本書を生んだものは固より現代日本国民生活であるが、直接に先生の人生観を支持して先生に著作の動機を与へた主要の体験内容が、三井甲之先生を先達とする国民的同信同朋生活であり、先生が本書の研究方法に示唆を求め、本書をしてその後にその発出的成果たらしめむと自期せられたものは三井先生著「明治天皇御集研究」であることは、本書読者の忘るべからざることである。本書が出版に當つて三井先生の序を巻頭に掲げ、二つの長詩を巻末に載する所以であ

る。

四 本書の文章は先生がことのはのしらべを重んじて、その表現に大いに苦心せられた所であるから、引用文も段を別たず、緊密の語調の中に埋没せしめて書き綴られた個所が多い。従つて本書の上梓に際しても、概ね原文を変へず、先生の言葉の格調を害はざるやう努めたが、引用文の長き個所は煩を避け改めて別段とした。又用語等に於いて偶然の誤謬と思はるゝ節は之を正したが、我等の判断に尚精確を欠かむかを懼れる。

引用文の出典は、その重要個所は先生自ら記載せられてあるが、なほ文の障害とならざる程度に細部の出典をも記入して置いた。出典には全く誤謬なきを期し難いが、不備の所は我等の無力の致す所であつて、尚今後の完備に俟つ。

引用の三経義疏及び十七条憲法の原文は漢文である。日本書紀及びその他一二の引用書は謄写刷本には書下文かきくだしほんの所があるが概ね原文に復した。

尚、著者の「はしがき」として巻頭に掲載せるものは、昭和五年二月先生の命を受けて謄写刷本を作成するに当り、先生が口づから授けられたことを我等の拙き筆に写したものである。著者と署名するのは、その独断を懼れるのであるが、先生の言葉を伝へる意を含めて敢へて著者と記したのである。

五 此度の出版は唯本書のみに過ぎぬが、他日遺稿集としてその他の著作及び和歌書翰を上梓する予定である。

六 御遺著の上梓漸く成らむとし、嚮きまに共に謄写刷本の校正に従事せる故新井兼吉、故河野稔両兄のことが偲おもはれ、幽明境を異にして今日の喜びを現世に頒たち得ざるを歎くのであるが、その御霊は必ずや先生の御霊のみに我等と共にこの喜びの心を捧げまつるべしと信ずる。

こゝに会創立のために先生と協力劃策されながら、その日を見るに至らずして逝かれた故梅木紹男氏の名を協せ記すことは、本書出版に當つて忘るべからざる記念である。

七 黒上先生によりて同じき道に目さめしめられ、先生の教のもとに設立された東京高等師範学校信和会は先生御逝去の後も一高昭信会と力を協せ、助け合ひつゝ同信生活の絶えざる生命の脈動の中に共に活動を続けて来たが、この度の出版に際しても亦あつ与かる所多きをこゝに附記する。

八 終りに言ふ、本書に於いては読者即ち同信師友である。これは本書内容の威嚴であると共に、先生の尽きざる念願であつた。されば先生の遺志を憶ふとき、本書出版は更に單純なる業績の記念に終らしむべきではない。まことに「但たに當時に利を獲るのみにあらず、遠く末代に及びて皆同じく福あらしむ」の太子の御言葉のごとく、時を經年へを累かさぬるに従つて、本書の自らに広布せらるべきは疑はぬところであるが、しかしながらそれは、一方に於いて然かあらしむるとこ

昭和10年(25歳)

ろの本書読者の意志的弘通に俟つところ多きを思ふのである。即ち読者の心はやがて新なる読者の範囲を誘致拡大して、展転広作して無尽無間断、しきしまのやまとの国のあらむかぎり皇国の内外に流通せられむことを、さらにまた、本書をまさしき機縁としてひらかるゝ広大深甚の同信協力にわれらの生の依託せられむことを、祈願切念するのである。

久坂玄瑞の和歌

〔伊都之男建〕
昭和十年七月号

いま手許にあるのは近藤芳樹編の江月斎遺集、一卷五十三首の歌集である『通武常にからうたに力もちゐて、歌はをさ／＼嗜たしなまざりしかど、心の誠を述べんためには、中々にわが言の葉のかた、あはれのすゝむ物なればとて、猶すてやらで物したりとぞ』と近藤芳樹の序にある。

さきにはふ花をみてだにしのぶかな雲の風の今日はいかにと

ほとゝぎす血になくこゑはあり明の月より外にきく人ぞなき

けふもまた知られぬ露のいのちもて千とせを照らす月を見るかな

何事のしのばるゝかはしらねども月かげみても心いたまし

うぐひすの声せぬ谷の梅の花あはれ山中にひとりかをれる

寓意が個人的機智の蔵匿に終つてをらぬのである。作者の生涯と意志とが忠誠の臣道によつて客観化されてをるから嫌味がないのである。『何事のしのばるゝかはしらねども』の歌も、西行の『なにごとのおはしますかはしらねども』の模倣であるかも知れぬけれども非歌人志士としての久坂玄瑞の感情は四五句に於いて前半の危険を救つてをる。またもとより『しのばるゝかは』は『おはしますかは』とは異つてをる。(西行のこの歌については既に論じたことがある。) 作歌は新しい境地をひらくことを要するが、月を眺め花を見る人の心は昔よりさしてかはるべくもない。かはらぬ人の心を詠むことは、最も『人間的』のことであるといへよう。

明治天皇御製 對 月

あきごとにむかふ心ぞかはりける月はむかしのひかりなれども(明治四十二年)

この秋毎にかはるとおもはるゝものは己が心である。かしこかれども年ごとにかはるとおもふこそ、みなひとのかはらぬおもひであり、大御歌の大きしらべこそ、このかはらぬおもひの御表現なれ、といたゞきまつるのである。この世をへだてるところをかへつゝ皆ひとのかはらぬおもひを心に懐き人の心につたふる歌は、日の本のしきしまのみちである。真の人間としての生は、かくてこそめぐまるゝ。

かくまでに青人草をすべらぎのおぼす御心かしこきろかも

いくたびも繰返しつゝ我君の御言しよめば涙こぼるも

天地もともに久しくいひつがむあやに畏き君が御言を

吉田松陰もその書簡のうちに幾度か孝明天皇の御製

澄し得ぬ水にわが身は沈むともにごしはせじなよろづ国民

をかゝげまつりて、『御感泣可被成候』と言つてをる。当時の志士らの間に天皇の大御言が伝へられ、御行動が伝承せられて志士らが感涙に咽んだであらうことは、史上に記さるゝところであつて、まことに畏き極みと言はねばならぬ。

梅の花手折りかざしてはるけばや胸あきがたき賤が心を

うつせみの浮世のうきをはるけんと春の野に出でゝ花を見るかな
たつの馬をわれ得てしがも九重のみやこの春を行きて見むため

うき事をつぶら／＼におもほへば君のみあがり悲しきろかも

ふるさとの花をも見ずてはるかなる旅にさまよふこの旅人あはれ

あなたなる峯の白雲夕ぐれに見ればかなしも世の事思ふに

とり佩ける太刀の光はものゝふの常に見れどもいやめづらしき

山ざくら今盛なりいざや子等かざして遊べ今さかりなり

松陰の妹を婚つた玄瑞が、松陰の晩年松陰の身をおもふあまりその志に反したかに見られるが、温和俊秀の性格は事ある時に純忠を挺でしむるに充分であつた。『僕先日己来大発明アリ。有レ事則有レ為、無レ事則為レ医、亦可三神医一、不レ可レ為二名医一』(入江杉藏に送りし書簡)と言つてをるのを見る。元來医家の出身であることにもよらうが、世の平安を願うた心を知りうるのである。明治維新はブルジョワ革命であるとする愚かしきものらよ退れ！己が身と己れらの安易とのみをめざして行はるゝ革命と、大君のみことのりかしこみ、くにたみの平安を祈念する志士らの活動によりて成就せられし維新とを混同することなかれ。歌の道は、こゝに忠と不忠とを区画し、史上の事実と虚偽とを判定する。これはその一例である。

短歌作品と作者の生涯

〔伊都之男建〕
昭和十年八月号

明治天皇御製また歴代天皇の御製を拝誦しまつるときは、それが御製であるといふことが重大の意義を有してくるのである。御製は決して臣下の歌をよむときのごときこゝろにて拝誦しまつることは出来ぬのである。それは不可能のことである故に、ゆるされぬことである。それ故にま

た御製は一首二首拝誦しまつるべくもなく、御集をこそ拝誦習熟しまつるべきものである。全体として大御言葉をいたよきまつらねば御製を拝誦することの正しき意味は生じて来ぬのである。

短歌は諸芸術の中で、表現せられたものゝみに完成を求めることは不可能である、といふ性質を特に強く有するものである。短歌の価値は、作者の生涯が直接作品を内面に支持してをるか否かにかゝるのである。それ故に作者の生涯が劇的であるといふことが、一層その作品を生命化するるのであつて、忠臣の歌がよいといふのはこの意味である。

にくくしロシヤ夷を片なぎに薙ぎて尽さね斬りてつくさね

吾を謀るえみしロシヤを天地のとはのかたきと誰か知らざる

ちはやぶる神の剣を御代継の国のたからと伝へたらすや

焼太刀の鋭刃の明けき名に負へる日の本つ国民こぞり立つ

これらは伊藤左千夫が明治三十七年に詠じた『起て日本男児』『開戦之歌』の中の数首である。

『起て日本男児』の序には、『正に眼前に迫れる活劇を想へば吾等一介の文士と雖も猶神飛び肉躍る。即ち中宵寒硯を磨して』云々とある。『吾等一介の文士』といつて『吾等無名の微臣』といひ得なかつた。臣道の自覚は『活劇』を快しとおもふ以上におもふべき心をおこさしめた筈ではなかつたか。明治天皇が

暑しともいはれざりけりにえかへる水田にたてるしづを思へば（明治三十七年）

たへがたき暑さにつけていたでおふ人のうへこそ思ひやらるれ（同）

山田もるしづが心はやすからじ種おろすより刈りあぐるまで（同）

実に無数の大み歌をお詠み遊ばして国民生活の現在と将来とおもほしめし、明治天皇の大御心を、左千夫その人は拝察しまつりてをらぬ。『にくくし』といひ、『日の本の国民こそり立つ』といふ表現はそれと知らしむる。これが彼の晩年の歌を急変せしめた原因であつた。彼は国生活総合劇中の人物たることを、『一介の文士』となることによつて消極的に拒否してしまつた。これが彼の運命であつたのである。それ故明治三十六年に、

あきつ神わが大王おほきみこのあした海の大御歌遊ばすらしも

天地のみたまつゝしめわが国の国つつとめは海の上にあり

あめつちの神の教ぞ国心こそりかたまけ海にそゝがね

海潮波うしなみながるゝきはみ皇国すめくにとおもひて行かねますら雄おとこの伴

と歌つたことは惜しまるべきである。

いまは少しく書きすぎたやうである。告白と学術的批判とは、その限界を保障して補足せねばならぬ。告白を権威づけるために学術の力を借りてはならぬのである。

たゞ、われらは専門歌人といはれる人々は歌を減すものであることを、一般法則として適用の対象を指定するためではなく、われらの作歌上の戒めとしてこゝに告げ合はねばならぬのである。表現せられた作品それ自身に完成を求める歌人の努力は、歌の生命の否定である。自然観照といふことも、宇宙観の生成、または日常個我生活の自然による客観化といふことでなしに、自然を描写することのみ終るものであるならば、それは歌の存立を否定するものである。優秀の歌人長塚節が晩年病の床にゐたゞまれず、九州を旅して遂に逝つた悲惨事は、誤つた自然観照の末路として目を蔽はしむるものである。

われらは必ずしも際立ちしよき歌を求めぬ。しかし、われらは歌によりて真実の人生に触れ、まさしき信仰を得しめられ、臣道の忠節を尽さむとちはやぶる神かけて願ふものである。われらの歌の価値もそこに生じよう。また価値批判の体験的標準基底もそこに得らるゝであらう。われらの歌の前途は長遠である。大空のはてしなきにいたらむが如く。(昭和一〇・一〇・三一)

詩歌

黒上先生を偲びまつりて

〔伊都之男建〕
昭和十年七月号

師の君をいたも恋へども在りし日のいや年さかりゆく悲しきよ

み書くりかへし読みは来つれどしたはしきみ声きかずに五とせすぎし
なつかしく笑ませる君にいめのほか語りまつりしときはなかりき
朝な夕な机の上の師の君の写しゑをがみ来は来たれども

われら稚きころに堪へしこれの世の重き悲しみ消ゆるときあらじ
よろこびの去らば去りなむうつし世のつきぬ苦しみに貫き生きむ
み国いまたぐならざるになぐさまむことは求めず生きゆくあひだ

二日あはぬとたよりによびて語らしゝそのみたよりはいまもよめども
徳島のみ家にかくりたまひにしことあまりにもまことにしあれば
いく千とせこのようつるとも君にあひしありし日こゝにまたかへらめや

室戸崎をおもふ

空おちて風すさび潮あるゝとふ土佐の室戸の岩はらみ岬
大海のもなかに突きし岬への沖の岩かど浪うちやます

土佐の国ゆたけき里をたづねむはこの岬めぐりゆくべかりけり

夏日たかく射照らす光土も水も燃ゆがに荒きこの岬の色

磯近み繁木山すせせまりきて木ずゑのさやぎ波うちとともに

木ら根くみ岩角噛みてゆく人もなかりし昔さらにしぬばゆ
ゆく人もなきこのみ岬めぐりゆき道開きてし聖の足跡ひじりあとよ

浦かけの道べに姿彫り立てゝあるとふきけばかしこかりけり
わが父の生れておひましゝ土佐の国わが歌によみて心に描く
み祖おやらのみ墓まつれる山々のみどりのかげに立たましものを
いつの日はしき故郷いまだみぬみ祖のさとおとづれゆかむ
いでつものゆたけき国よ海にたゞむかへる国よ汝をはや訪はむ
北に立つ山脈あれど雪みずみに常夏国はいかにあらむか

黒上先生の御母堂より蜜柑をいたゞきて

南のくにゝ実らむときじくの香の木の实ぞ奇しかりける
くしき実のこれのかうじの瑞々にみ心みたし送らせたまふ
春さむみ火桶によりて母とゝもにいたゞきまつることのよろしさ

詩歌 昼

数しらぬいかれるものら空低く、覆ふ雨雲のうちにひそむか
鶯のなきのけだるさ流れゆく時も止るか昼の一とき

人の世の音きこゆれど一つだにわが胸にひどく力はあらず

めぐりつゝとびきし蜂は風もなき繁葉の奥にはいりゆきたり

横さまにならぶ瓦にうす日さしてうごかぬ見ればわれ堪へられず
窓かけのゆれのかなしさいまし世に生くるはなれかと心さゆらぐ

詩歌

江差追分をきく（ラチオにて）

北の海の汀によする浪音のやまずとどろく唄つとくなべに
月もなきさびし星夜の松原に坐してうたふかこの唄ごゑは
岩角に北風笛をふくごとき尺八の音のいたましきかな

生業なりをもとめ北の海辺にさすらひし人のおもひのこもるしらべよ
み国ひらけかゝやく御代に北の海をわたりゆきにし人もありしか
荒浪のはてしもなしにつとくごとゆるくなみうちたえぬ唄かな

〔伊都之男建〕
昭和十年十月号

大浪のいたゞきのぼりまた水をくゞるがごとき唄のおきふし
いさなとり波を枕にたゞかひのこの世すぎけむ人らおもほゆ
たくましき腕かひなによせて面ざしのくらき乙女ごまきけむ人らよ
渚鳥なきのかなしき浪音と唄にまじはりきこえてくるに

こゝだくの世のことわすれうたふらむ声のかしこさきくにえ塘へず
さびし町のをみな弾くらむ三味の音の高なりせずひくゝ音をなく
いさり火の一つだになき沖の方みつゝあはすかその音を唄に
唄ごゑのきこゆるかぎりうつ波の音はやまさり北の海辺の
この唄のかなししらべをわすれぬかぎり北の国人われはしぬばむ

詩 歌

九月二日の夜

雨にぬれし道のしづけさ門灯さしをぐらき町角ゆく人もなし
雨にぬるゝ庭をゆるがし鳴く虫の声きこゆるは雨やはれなむ

正述心緒

〔原 理 日 本〕
昭和十年十二月号

神ながら世をしろしめす大君のみ代にうつしく生くるかしこさ
たまきはる
魂極いのちのかぎりまつろはむみ民のみちは一すぢなるべし

また

天つ神ひらきましけむ神の世をうつしくしらす御代のかしこさ
天つ日のてらすすがごとく知ろしめすわが大君につかへまつらむ

臣道

天地とゞもにひさしくしろしめすすめらみことにつかへまつらむ
天地とゞもにひさしくみだれざる道ひらかしゝ神代をぞおもふ
とこしへにみ民の道をまもりつゝ今につたへしみ祖をぞおもふ

思

ゆたにわくいづみの水のつながりてしづかに生くるいのちをぞ思ふ
現身の息吹はみそらつたひつゝはてなきいのちにふれむとぞ思ふ
なぎさなる真砂まさごのうへによせかへしたゝふる海の心ともしも

秋の空たかく晴れたる遠山の上ゆく雲のゆたかなるかな

秋

秋たけて枝かたぶきさびしらに見ゆるさ庭のサルビヤの花

くもり日のはれまの日ざし羽にうけて小からは屋根にとびかひてをり

栗

わが庭のわか木の栗のこの秋はよき実をつけぬ枝もとを々に

秋雨の時じくふりしききつころぬるゝ青毬あきだま見つゝめでにき

ゑみおつるときをもまたず地におちし毬あきだまをひろひて縁に干したり

毬あきだまのいろのよろしきからに目かれせずめでむと机のうへにおきたり

松茸をもらひて

山背のやまのたをりの松むらにわきけむたけのかをりよろしも

秋空のかたぶく山の松むらのすがしきしぬぶこのたけをみて

いへつとをわかちたまひしみこゝろをしぬべばことにありがたきかな

詩歌

歌

日の本のことばのしらべ形なくくしびにひゞくのちさながら

「伊部之男建」
昭和十年十一月号

形しるく外がにきらめきて力なきとづくにことばといたくことなれり
とどこほることなくかよひひゞきあふことばの力はかられぬかな
しきしまの大和のくののみ祖おやらが伝へしことばにたゆたひはなし
しらべたかきやまとことのは地にありて語らば天にひゞきかよはむ
天にひゞくことのはのみちを民草のこゑも雲井に通へとぞ思ふ

道

ひろごりてはてなしとのみ見ゆれどもこの天地に道はかよへり
ちよろづのみ祖の血すぢながれきてわれは生れぬ大和の民と
天つちに道ひらかしゝ上つ代の神ををろがむ神のみすゑは

詩歌

献上

まめやかにみ民のみちにいそしみて身うせ給ひぬ黒上正一郎先生
のこしましゝ書のよそほひ成りしかば世にひろめなむ時となりけり
かしこかれどこの書をしも大君の乙夜いっやの覽みにそなへまつらむ

〔伊都之男建〕
昭和十年十二月号

昭和10年(25歳)

九重の雲井はるかにたてまつる書をさゝぐる手もふるひけり
九重の雲井にさゝげまつらむと明治神宮にて祓へうけまつりぬ
呉竹の代々木の宮の広前に祓へうけてぞさゝげたてまつる

昭和十一年 — 二十六歳 —

明治天皇御製と作歌心理学研究の一階梯

——例会の兼題『待春』に関連して——

〔伊部之男建〕
昭和十一年二月号

一月の例会には、筆者は故障があつて出席できなかつたのであるが、当日の『待春』といふ兼題について感想を記したいとおもふ。四季のうつりかはりは人力を以て如何ともすることのできぬものであるから、単に春をまつと言ふことは、意味をなさぬのである。われらはこの人力を以て左右できぬ春をまつて何ごとかを為さむとするのである。それ故、春を待つといふ意志は春といふ自然現象の到来に向けらるゝのではなくしてかゝる人間の行動能作に向けらるゝのである。しかし、その行動は春をまつて遂行せらるべきものであつて、遂行せられたときはわれらの感情は満足せらるゝのであるが、冬の間はそれが満足せられぬからして春をまつのであつて、この満足せられぬ鬱々たる心持が満足せられた時を予想するとき、こゝに一つの憧憬希望感情となる

のである。この希望が『待春』の主内容たるべきものである。

御製集には、『待春』の御題の下に、左の一首のみをよみまつるのである。

待春

戦のにはの寒さをおもふにもまづ待たるゝは春にぞあける(明治三十八年)

このごとく『春』は、『待たるゝ』のであつて、『待つ』のではないのである。それが現在あるがまゝの気持の直接の表現である。しかしながら御製にあつては、憧憬が漠然たる感情ではあらせられずして、『戦のにはの寒さをおもふ』と具体的事実よりせさせたまひ、兵士の困苦をみそなはずあきらけき大み心に立脚せさせたまふことは、かしこき極みと仰ぎまつるのである。それは希望憧憬が曖昧の摸索を超出して、人生の将来に確実の意志と実行とその実現の御確信とを有したまふ故であつて、これはまた天壤無窮の国家の将来を明示したまふ大御心であり、同時にそれは国家の運命である。美しい春の季節といへども、それは具体的にはさまざまの感覺的快適によつて知らるゝ天地自然の現象の総合であつて、この現象は感覺によつて知られ、感覺は人間の行動によつて統一をあたへらるゝのであるから、漠然たる快感の期待は、卑俗の内容を暗示するのであるからして、われらはこの大御歌に示したまひし大御心の実人生的内容を仰ぎまつらねばならぬのである。

あはき日のさす檐^{のき}さきに雪どけの音をきゝつゝ春をまつかな

これは例会での一作例である。これは相当問題が多いとおもつて引例したのであるが、作者のいふところは『春をまつ』いまの心を直接に歌ひいづるのではない。直接に歌ふのであれば、『春ぞ待たるゝ』とすべきであつて、さうすれば『音をきゝつゝ』ではなく、『音きゝをるに』『音をきくにも』といふような用語となるであらう。具体的光景は、それに対する直観的表現を要求するのであつて、『あはき日のさす檐^{のき}さきに雪どけの音をきく』といふ現実の光景に対して、『春ぞまたるゝ』といふ随順的直観的用語をとるべき理由が存するのである。しかし、もし作者が意に反して、そのようにすればあはき日のさす檐^{のき}さきに雪どけの榎をつたふ音をきくといふ光景は、『春ぞまたるゝ』の心持をして照応せしむるには弱くなつてくるのである。作者は春をまつ心よりも、『春を待つ』といふ生活を外面よりよまむとするものであつて、それは一つの行動の概括的叙述である。しかし、かゝる叙述によつて、間接に春をまつ心をよみいできることは可能である。俳句などではさうするのである。歌でもそれは或程度できるので、それが作者の体験より出發してをるならば許さるゝ技巧である。しかし、さうするならば、この歌ははじめの方に於いて抽象化が足りぬのであつて、少くとも『あはき日のさす檐^{のき}さきに雪どけの音をきゝつゝ』では實際の光景が目に入り耳にきこえてくるので、この間接的表現の意図を実現すべき思想化の用意が

満足せられぬのである。そこで、もし『春をまつかな』とするならば、それは相当に連続した生活の反覆でなくてはならぬ。その一日のみの、又は一時のみの感興ではなく幾日も同じやうの形式を以てくりかへさるゝことが必要である。もしこの反覆事実の概括表現が満足せらるゝならば、それは個々の『事実』といふよりも、一定の『法則』と化し、こゝに、抽象化が実現せらるるので、その思想的構成が『春をまつかな』といふ外面的間接的表現を支持するのである。それ故これをかりに

うす日さすのきば檐端にけふも雪どけの音をきゝつゝ春をまつかな

とするならば、『けふも』といふことは、この法則性を暗示して或る程度まで成功したといひうるのである。

また試作であるが、次の場合も『春をまつかな』といふ間接表現がゆるさるゝであらう。

寒き日のうちつゞけるに弱き身は外の面あたゝかき春をまつかな(又は、まつなり)

これはかういふものもありうることを示すだけの試作であるからまづいものであるけれども、かゝる場合は、もはや『春をまつ』憧憬の心は奥にひきこめられて、春をまつことの理由を説明してゐるので、むしろ直接ではないからよいのである。また、これも試作であるが

野も山もみどりになりて旅ゆくにすがしき春をたゞにまつかな

といふやうの一定の目的を暗示したものは、これもありうる歌である。この場合『野も山もみどりになりて』といふのは無論直観ではないのである。次のやうにいへばこれもまたある目的を暗示するのである。

うぐひすも裏の畑の梅が枝にきなきあそばむ春をまつかな

以上のごとくに、一定意志の目的理由の叙述、又は動作の外面的叙述といふものは、部分的説明になつてしまふので、それは全体的表現の力につねに圧倒せしめらるゝのである。これによつても全体意志の表現といふことは、随順的でなくてはならぬことが暗示せらるゝのであつて、さきの『待春』の御製

戦のにはの寒さをおもふにもまづ待たるゝは春にぞありける（明治三十八年）

がいかに自然に対して随順したまふやはらかき、しかしつよき大御心をよませたまへるものであるかを拝察せしめらるゝのである。これはまた御製の

光陰矢如

思ふことつらぬかむ世はいつならむ射る矢のごとくすぐる月日に（明治三十七年）

をりにふれて

思ふこと貫かむ世をまつほどの月日は長きものにぞありける（同）

と対照しまつりて大御心を拝察せしめらるゝのである。『いつならむ』とのたまはせられ、また『月日は長きものにぞありける』とのたまはせたまふ。この随順的御精神は、日露戦争の御製として『仇をうて』といふ御製を一つも拝せられぬことに仰ぎまつるべきである。

劍

あらはさむときはきにけりますらがときし劍の清き光を(明治三十七年)

といふ如き御製にあつても、かしこきことば乍ら、それは個人的征略意志の表白とは解しまつりえないのであつて、国民の生活の上を、兵士の苦闘のさまを、みなひとのもつべき心のいましめを、神のまもりを、歌のおもひを、すべてのごときものをかぎりなくよませたまひつゝ、つひに意志の対象は、全人生であり神であらせたまうたことを、仰ぎまつることのかしこさよ。そこに意志活動は自然随順、神ながらに、人間生活の事実の上に永遠の法則と秩序とを確立するのである。

そこで、更に御製を引用しまつらむとおもふのである。

思ふことつらぬきはてゝ国民の心やすめむときぞまたるゝ(明治三十七年)

虫の声きかむ秋こそまたれれすゝしき月の影にむかひて(明治三十年)

また

仇浪のしづまりはてゝ四方のうみのどかにならむ世をいのるかな（明治三十七年）

これらはみな、永遠の世をいのらせたまふ大御心のさまざまの御願望を、すべて自然に随順せさせたまへる御表現と仰ぎまつるのである。

またそれ故にこそ、永遠の大御心であらせたまふことを仰がしめられ、この大御心のもとにすべらるゝ日本の生命は、永遠無窮なるを信ぜしめらるゝのである。『のどかにならむ世をいのるかな』と仰せられしことのかしこさよ。

このごとくして、われらの創作衝動の基底は祈念であり、芸術は宗教と密着せしめらるゝのである。

消 息（辻堂にて）

註、三ヶ月を経た転地療養先から、過去五年間の体験の告白と、さまざまの心境を一高階信會の諸友に書き送ったもの

「伊都之男建」
昭和十一年六月号

本欄に消息の筆をとつてをつたのは随分古いことであります。そのみでなく、この『伊都之男建』に書かなくなつてからも、数ヶ月は経つと思ふのであります。いまこゝに締切に少し遅れるであらうこの原稿を認めつゝ、無量のおもひがいたされるのであります。

以越緊迫の調子の移転通知状を印刷して発送したのは、丁度丸三ヶ月まへのことになります。

長い病がどうしても癒えきれず、苦悶と憂憤とに焦瘁して、東京にをるにたへられなくなつてここへ来た僕の目にうつゝたものは、酔はされるやうの新緑でありました。辻堂へきて最初によんだ歌は

青麦の穂波がうへのかぎろひに浮ぶかに見ゆ遠松林

といふ疲労からさそはれた夢幻的のものでありました。『心蹟百変』といふ松陰先生の『留魂録』の言葉をそのままに味つてをつた在京当時の心に、反動的に僕はこゝの自然に吸はれるやうの放心状態をつゞけたのであります。庭前の広い麦畑は刈りとられ、夏草が生ひ茂るやうになり、御製拝誦の外には殆ど何ごとをすることもない日が重つて、いつか三ヶ月といふ時間が経つてしまつたのであります。いま、僕はこゝ五年間嘗て味ひえなかつた健康感を経験しつゝあります。このことは僕にとつて考へるだけでも茫然としてしまふ程の歓喜なのであります。この数日來海に入つて波を潜りまた泳ぎ、家へ帰つては作物に水をやり、親戚のものと力比べまでもやつて、運動と労働に日を送つてゐます。かういふことは全く予想だにしなかつたことであります。親戚の青年と幅跳をしたり、角力をとつて見ても負けぬのであります。微風の吹くところで午睡をしても風邪をひかぬのであります。かういふ健康が蘇つてきたことは、何と感謝すべきか僕はたゞ迷つてしまふのみであります。

僕にとつて健康といふことは決して意味の軽いものではありません。僕はそれに僕の運命を感じ、僕はそれと五年間の戦闘をつゞけたのであります。僕の健康は、単に僕の思想生活に影響を及ぼしたのみではありません。健康は思想生活そのものと平行的現象であつたと思ふのであります。かういふことを申しますと狂気のやうに人は言ふかも知れませんが、昭和六年十一月二十日に発病した僕の病氣と満洲事変とは、かういふ闘病生活をつゞけてきたやうの僕には、無関係のものではなかつたのであります。十月二十四日であつたとおもひますが、慶応の大講堂で行はれた原理日本社主催の満洲事変講演会の午後とその夜のことゝは、永久に忘れられぬのであります。高等学校時代にやうやく日本の精神と文化の世界に導入せしめられ、思想生活の重要性に気づかしめられてから、入学した大学はすべて批判の対象であつたのであります。同信生活の潤るることなき力を背に負うて、これと戦闘を開始せむと氣負ひつゝ、読書と文通に準備をつゞけてつたときに起つたのが、満洲事変でありました。満洲事変に直面して全身的沸騰を体験し、ことに燃ゆる胸中のはてしない憶想の情に表現を与へることをえなかつたのであります。さうしてをる間に目まぐるしい時局の進展に休息の余暇もなく、十月二十四日の講演会を聴きにまゐりました。同じ構内で行はれてをつた満洲での張学良下の排日ポスターの鬼畜の残虐性を表はした絵も、心に止つてゐるのであります。右の講演会の熱した空気に全身を投じてゐた僕は、その日

やうやく膚冷くなつてきたのに薄着をしてをることを忘れてゐました。ことに十一時近くなつて散会した万来舎での晚餐会后、帰宅するとき急に寒気をおぼえ、三田台から夜の市中を蹴下してはじめてひどい疲労を感じたのでありましたが、それから風邪で寝ついたのであります。それから二週間位してよくなつたとき、また無理をし、それがよくなつてまた無理をしてたうとう多量の咯血をしてしまつたのであります。かふいふ満洲事変は、決して僕の病気に無関係ではないので、もとより満洲事変に血湧き肉躍るのみで病気になる筈はありませんが、重大事局の切迫と——その当時は事変を義和団事件に比して日露戦争のやがて来るべきを予期してゐました——国内の政治、学術界の弛緩墮落とを対比して、全く亡羊の嘆におはれてゐたのであります。

もとより当時は長い間絶対安静を続けてをつても、少しも病気であるなど考へたことはなく回復も意外に早かつたのであります。翌年一月十日十一日に引続いて寢床の中で新井、河野両兄の計を聞きました時には、何となく地下にひかるゝ如き心地がし、会創立以来、ことに梅木氏が逝去され黒上先生がなくなつてから、会の為に最後の力としてをつた両兄の死は、僕に責務と緊張とを過度に要求したのであります。過度の緊張は必ずそこに弛緩の危険を伴ふものであります。僕はいふ迄もなくその陥穽に落ちたのであります。それらの細目については書くべきことでもありませんから書きませんが、今日となつてふり返つてみますと、同志諸兄中村・藤田・

安武・高木兄らが次々に病に倒れたこと、会の経営の困難であつたこと、それらに自分自身の實力を養ふべき時間がなかつたこと等のが思はれるのであります。ことに、三井先生や蓑田先生——黒上先生のゐられなくなつた後、何人にも新しい師を求めず、先生の師事してゐられた三井先生の総合的統率の下に会をゆだねたのであります——の教をうけつゝ、僕らが所謂公式適用の弊から脱却できぬ苦しさは、以上の困難を倍加せしめたのであります。『あたらしきふし』を求めようとするのではありませんが、僕ら自身の自然の生成を実現しようとするれば、僕らはもう一度實際の広汎の視野に目を放ち、事實を分析しその全体を直観すべく新しい努力をせねばならぬのであります。しかし、それは容易のことではありません。先生達には先覚者として時代の開展と自分の体験とに密着した關係を見出しうるのであります。真正直のことに愚鈍の僕などには、先生方の思想を正面から信ずることは生活を不自然にし、それは肉体的改造とまでもおもへる改革を要求するのであります。これは病氣に弱つてをるからだには殆ど不可能のことです。小学・中学・高等学校と概念按配の無意志詰込教育をうけてきた僕らには、僕らが正直であるだけ三井先生の思想のごときは身体的の危険を誘致するのでありませう。そこで、批判をするのも、もとより戦闘であります。一層激しい戦は、かゝる内心の直接の戦であります。僕からだが毎年初秋少しくよくなつたとおもはれると、晩秋から初夏にかけてわるくなり、殆ど外出

の力もなく籠居しつゝ不自然の思想生活をつゞけてをるのでは、以上の欲求はすべてみたされぬのであります。もとより怠惰もありましたが、僕はこゝ五年間のことをおもふと、運命とより考へえぬものがあるのであります。

こゝへくるまへ数ヶ月はかういふ苦悶と憂憤とが極まつた時で、僕は終日二階に閉ちこもりつゝイブセンのジョン・ガブリエル・ポルクマンのやうに絶大の空想をひろげながら、求めれば求める程それが凡て正反対の結果となつてゆく生活を白眼視しつゝ経験しつゞけたのであります。親鸞何者ぞ、ゲーテ何者ぞ、キリスト何者ぞと思ひつゞけたのであります。一日に百首に余る歌をよみつゞけて悲嘆痛哭したこともいくたびかあつたのであります。『心蹟百変』このことばはそのまゝ当時の生活の表現でありました。それは、しかし今かへりみても虚偽の生活であつたとはどうしても思へぬのであります。我ながら唾棄すべき思想を抱いたこともあり、弛緩の極度に陥つたと思ふ時もありますが、全体として虚偽であつたとはどうしても思へません。僕はその善悪をいへるやうの余裕はいま持つてをらぬのであります。僕はこの五年の、それは僕の今日迄の当然の結果であります。この最悪をよるべき唯一の根拠として最善へ出発しようとおもひます。しかし、既に選択の力を及ぼしえぬ過去は、いまの血であり肉であると信じて疑はぬのであります。

しかし、僕はこの三ヶ月まへ否、二ヶ月まへ否二十日まへに対しても、遠い渡渉感を覚えるの
であります。僕は変化を体験しました。それは自己の意志を感じぬ程の自然のしかし急速の変化
であります。これからもすべて変つてゆくことゝおもひます。僕は過去をすべて忘却してしまつ
たのであります。空を仰ぐこゝろも、海を見る気持もすべて過去のものではありません。僕は一
切を忘却し去つてしまひました。さう友にも語つたのであります。しかし、それは無論單純の忘
却ではありません。記憶はありますし、それは力ともなつてゐるのでありますが、一切の記憶は
集つて全く新たな印象と力とを与ふるのであります。悲しみもつくしえぬ気持ですが、悲喜よた兩つ
ながら忘却しました。僕は微風の庭草をゆる朝、遠くの鶏舎の喧しい昼、また波音のしづかにき
こえる夕、いろ／＼の時に空を仰ぎました。さうして空を仰いでゐると只管ひたすみ国のことがおもは
れるのを経験し、そこにのみ精神生活の充実を感じたのであります。御製の拝誦と暫時の合掌冥
目祈念の外には、この三ヶ月した程のことでもありませんでしたが、明治天皇御集に空・天つみ空
をよませたまへる御製が多く、鳥とか松とか山、海、川等を多く空との關係に於いてよみたまへ
ることを気づかしめられ、その意義を何となくさとらしめられたのであります。僕は海岸に立つ
て殆ど日毎空を眺めたのであります。僕は二十日程まへ次の歌をよみました。

大海はつねあが近くたゆたへり風吹き雨ふりわかちもなしに

『つねあが近くたゆたへり』の『つね』は新しい発見であつたのであります。僕はこの歌をつくつた頃から、こゝへ移り住んだことの意義ありしを自覚しはじめたのであります。川出麻須美先生はこゝへくる一週間程まへ東京でお目にかゝつた時

一切の作為をつゝしみおのづから吹く神風に起つべきものを

外四首の歌をよみきかせて下さいました。『おのづから吹く神風に起つ』日の近づきつゝあることを思うて身慄ひを催すのであります。『一切の作為をつゝしみ』えたかどうかわかりませんが、どうすることもできなかつた無為の生活が、僕を自然の力の中に導いたことはたしかであります。ことにこゝ数日の身体の元氣は我と我が身をうたがはざるをえません。それ故はじめに無量のおもひがすると申しましたのは、単なる過去の回顧の為ではないのであります。『心蹟百変』の生活から急激に没入した田園無為の生活には、一時茫乎とせざるをえませんでした。こゝへ来て、自分以外の大きい自然の力によつて生きかへらうと思つた念願は、無駄ではなかつたのであります。

以上、みだりがはしく自分のことのみ述べ連ねてしまひましたが、これは現代教育の下に己が力に余る務を背負うた為に、極まれる失敗を経験し、やうやくその経験を土台としつゝも、それを固執せず、自然の力によつて再び起ち上らむとしつゝある青年の告白であることに或る意味を

みとめられ、ば幸とおもふのであります。さうして、以上に於いて僕が全く主観的に書いたことを認められたのであります。僕の病気はもとより複雑であり、それ故に長びいたのであります。多くの学生の疾患は客観的に言へば決して非衛生的な生活とか、単なる伝染とか、都会の濁った空気とか、さういふものが原因ではないのであります。最大の原因は実に現代の無生命・生命否定の殊に中学以上の教育であります。現代の教育は現代青年の呪の対象であります。しかし、多くはかゝる根本的病弊すらさとらずに、不死身の健康を以てそれを通してつゝあるのであります。さういふ者らの『死せる魂』をおもふと、僕は再び憂憤に眼もくらむおもひがいたされるのであります。ことにそれらに、僕を対比して言挙げるものには、猛然たる打撃を加へずんばやまぬ憤りを覚えるのであります。しかし、僕には僕の運命があり、僕はそれに随順しつゝ、かういふ呪咀もわすれて戦ひいづる日を、あかきゆたけき心に只管まつてをるのであります。僕は海近き辻堂にをることを感謝するのであります。

二・二六事件については新聞法による定期刊行物にもあまり書けぬらしく、もとより時局批判にわたれば本誌の許されたる範囲を逸脱するのでありますが、僕は僕一個の個人的経験の範囲内で記さうとおもふのであります。と言ふのは、前内閣の首班は僕の父の最も近い姻戚の一人であり、思想的関係は別として又反乱軍将校の中に僕の又従兄に当るNといふものがをり、かういふ

ことから事件を身近かに感じたのであります。尤も、僕一個の体験といつても、こゝに記しえぬことの方が多いのであります。僕は姻戚の一人としての責任を感じてをること言ふ迄もありません。しかし、それについてもこゝで記すことを差控へしめられるのであります。たゞ、最近親類のものから伝へきいた右のNのことを、こゝに記して記念としたいとおもひます。Nも死刑に処せられたのであります。そのまへは一日に一度づゝ家族のものに面会を許されてゐた由であります。その母も、またまだ結婚して一年位しかたゝぬ妻もあります。それも会ひに行つてゐた由であります。Nはその妻に『寂しいときは軍刀の柄を握りしめよ』と言つたといふのであります。かういふ言葉は、われ／＼には忘れようとしても一生忘れることは出来ぬのであります。さうしてその妻はNの死後、日毎軍服をとり出しては泣きながらそれを撫でゝをると聞きました。反乱軍にはかういふ劇的光景が多いのであります。僕らはそのことの意義を忘れてはならぬと思ふのであります。太平記が建武中興の事業を国民の心の中に永久化したことを顧みるのであります。さうすれば国民の心に永くとゞめしめらるゝかゝる印象といふものには、そこに無量の意義があることをおもふのであります。またNは、その母に、『戦死したとおもつてくれ』と言つてをつたさうであります。この言葉も忘れてはならぬと思ふのであります。死といふことは、単純に法律によつて定められたる事項の一として考ふべくもなきものがあると思ふのであり

ます。こゝにはこれ以上のことを記すことは出来ませんが、全国民——それは凡てを余すなく含めて——の精神生活は、果してかゝる神秘的の目に見えぬ力を感じる程度に緊張してをるといへるでありませうか。太平記は足利の最盛期に既に多く読まれてをつたといはれてをります。又、大森彦七の家に正成・正季一党の亡霊が戦鼓を鳴らしつゝ空中から襲うたといふ太平記中の説話も、恐らく当時の人々の心に電気のやうにひびいたことゝおもはれるのであります。もとより二・二六事件は建武中興とはちがひますし、またちがはねばなりません、比較せらるべきところは比較すべきで、比較しつゝ深思したのであります。

正しいことの言へぬ時代には、文学的表現力の暗示によつて默契感応しつゝ、同志の士を直接の口よりいづる言葉によつて、また眼より放たるゝ音声なき言葉によつて、連絡結合獲得してゆかねばならぬのであります。僕にはイスラヘルの愛国者キリストの生がおもはるゝのであります。僕らの団結は総合的に言つて政治的方面に開展すべきであります。明治天皇の御晩年の

国

まつりごとよこしまならぬ国にこそさかしき人も多くいでけれ（明治四十五年）

の御製に仰がるゝ『まつりごとよこしまならぬ国』にすることが、僕らの団結の目ざすところでありますが、かゝる意図を達成せしむる為には、僕らは先づ宗教的になつてゆかねばならぬとお

もふのであります。それは右の黙契とか感応とかいふことのみではなく、巻頭言に暗示したやうの理由もあるのであります。無用の研究などに時間を費してをるべき時ではないのであります。日本は元来臣民にして政治することの許されぬ国であります。臣民は、日本の国体に随順するのみで、それが 天皇の大御政おほみまつりごとを翼賛し奉る唯一の道であります。この日本の国体に随順すること、即ち万世一系の 天皇に仕へまつる事は実は宗教的行為でありますから、われ／＼が政治的に向ふ基礎的用意として宗教的にならねばならぬといふのは当然のことであります。国民生活の極度の分化複雑化は言ふ迄もなくその内容を豊富にするのでありますが、同時に危険に近づきつゝあるので、今日の『非常時』といふ漠然たる呼称も、この一面の危険が現はれむとしてをることでもあり、またその危険を国民が感得したことを示すものであるとも言へませう。それ故、これを統一する精神は、いよ／＼緊切に要求されてをるのであります。この統一力こそ人類の理想でなくてはなりません。さうしてそれが精神の力であることに昔と今の變りはなく、僕らが亡国の志士キリストに学ぼうとするのは、『日本は滅びず』、『大日本は神国なり』の信の実現せられむが為に外ならぬのであります。僕はこの精神の力を、僕の健康問題と直接的に体験する機会をえたのであります。それはいづれ記す機会のあることをおもひます。

僕らはいまより同志獲得の方法を言論機関にのみよつてゐてはならぬのであります。僕らは現

代の『布教形式』を（もとよりそれは普通の布教様式ではありません）究極の方法として選択することによつて勇敢に突進せねばならぬのであります。言論によつてその反響をまつといふのではなく、直接人の心に突入しゆく道を学ばねばなりません。さうして、僕らは党派の力に依頼せず、全国民協力、億兆一心の事実を二十世紀の神話として形成してゆかねばならぬのであります。今日如何に党派の支配意志が盛であるかは恐らく想像の及びえぬところであります。時局は、われ／＼の予想をはるかにこえて悪化しつゝあると信ぜらるゝのであります。某公爵が『新興勢力にたよる外はない』と言つたときは、実にマルキシズムと同程度に危険の言論でありまして、すべて億兆一心の念願に欠くる国民思潮の代表的表出に外ならぬのであります。億兆一心の念なきところに日本国民は生くる意義はないのであります。一切を破壊に導くものは、かゝる刻薄の思想であります。われわれが宗教的にならねばならぬといふのは、かういふ現前の事実に対する実際の要求からでありまして、個人的超越能力を僭取しようといふ弛緩せる欲望からではありません。キリストの言つた『隣人の愛』は、われ／＼にとつて『億兆一心』であります。

外国との戦に於いても、それは精神を以て精神を討つより外に最終の道はありません。日本人は何故に赤露を恐れるのでありますか。スターリンの顔貌に現はれてをる傲然たる媚態を見れば、本質的に少しも恐怖すべきものゝないことをさとらしめらるゝので、すべて精神なき者の妄

動こそ恐れねばなりません。日本はいま外をおそれるよりも、内をおそれねばならぬと信ずるの
であります。

かういふ消息を書くいまの僕には、まとまつた研究は外的努力を要するので後にゆづることに
いたします。やうやく恢復した健康に心躍らしめても、それに安易に乗托することは五年間の体
験がゆるさぬのであります。生死を分つの心は、こゝへきた当時と同じく持つてをります。健康
の恢復によつて僕の生活は非常の要求に迫られるのでありまして、決して單純の喜びではありま
せん。僕らのなすべきことは既に余りに明らかであり、またその範圍は非常に広汎であります。
僕はこゝに同信諸兄に戦の用意を示し、次第に勇猛に起ち上るさまを報道し伝達し度いのであり
ます。僕の年齢も漸く而立^{じりつ}に近づきつゝあり、年齢に相応した思想感情もあつて、そこに起ちあ
がるべき一つの条件をえてをるのであります。長くかくあるべくもありません。変化にまかせつ
つ、僕らの行手は無限であります。

(以上)

八月十三日夜 攔筆

消 息（辻堂にて）（註、療養六ヶ月を経た折の消息）

友
に

『とき』は

いまにあらず

後にあり、

きむかはむ

その時にあり、

なすべきは小事にあらず

来らむは

神秘の時

あらはるゝ時をまたむに

かくれなむ天地ぬちに

天地の

かたぶかむ時——

しが

天地の時

そを

待たむは

神ながらなり、

神ながら

神世のごとく

かくれなむ

いまにぞありける。

〔伊都之男建〕
昭和十一年九月号

この詩を、この原稿を発送しようとする日に、友に認めたのであります。したた

去る十一月一日、当地辻堂へきましてから半年ぶりで上京し二泊、十一月三日の会の早朝の明治神宮参拝に同列し、その午前を友らと神宮外苑に行つて語りあひ、夜おそく帰つてきました。

六ヶ月の間徹底的に、田舎にをって身体を養ふことに専心しました。め、三日間寸暇なくかけまはりましたけれども疲労を感じぬ程でありました。美しく華かの都大路をゆき、住みなれゆきなれた町々を通つてなつかしくたのしきおもひのみでありましたが、この上京によつて真に知りえたことは、いよ／＼たゞならぬみ国のありさまでありました。外国より侮をうけつゝ内に党争をつゞけてをる現状は、日本の国家的地位を殆んど最悪のところを導いてをるとおもはずにゐられません。この対外的関係は、やがて内部的に日本の国家生活そのものにどう響いてくるのでありませうか。三日の夜、僕は憂憤禁ぜぬおもひで品川の駅を立ちました。

大海のたゆたふ里にかへらむと夜ふけの駅をいでたゝむとす

母がまつ海辺の里はかなたにてまつほどもなくやがてつくべし

六月ごしみざりし都かけまはりてむなしくかへるわれにはあらず

この三首は、荷物をもつて品川まで見送つてくれた従兄に渡した即詠であります。実は十一月三日の夕、泊つてゐた親戚にかへると、母からもう二晩位とまつて来てはどうか、といふはがきか

届いてをりましたが、予定を変更するのが嫌であるのと、何となく帰去來の心にさそはれて叔父の一家を辞したのでありました。品川の駅に汽車を待つてをると、さまざまのおもひにうたれ、何とない気持も形をとつてあらはれてきました。海辺の里は黒い闇の中に南の方に指さされるかのやうに近ぢかと感じました。近いことも近いのでありますが、僕はやはりいつかしい海を欲してゐたのであります。人のあまり乗つてをらぬ汽車の中でゆられつゝ、かすかの疲労を感じて窓外のとほしい燈火を求めてゐると、思ひ出されるのは東京の町をゆきかふ人々のなつかしい姿、面ざしであります。楽しげに、また同じ時代に生くる人の共感を表に示しつゝ行き來する人々と、かゝる表面と相関せぬやうの陰慘暗黒の私闘競争の裏面と、一つは目に見ゆる姿、一つは目に見えぬかげと、この両者が如何なる関係にあるものかを思考するよりも、かゝる現実の経験を味ふ不思議の気持にとらへられ、光彩ある現代生活を身うちに感じたのであります。

翌日、秋もくれかゝるさびしい田舎の朝、目をさましてまづ垣根らしい垣根もない庭からつゞく野を見、晴れわたる光の中に寂然たるものを感じましたが、やがて机に向ひ、また咲きのこる百日草の花のひなびたよそほひを見ました時、このさびしい秋の自然こそ、国家の現状をおもふこゝろのうちむかふにふさはしきものであると思つたのであります。自然もまた国家生活の重要な要素であります。大海は近くたゞへてゐます。畏敬する詩人杜甫は、『国破山河在、城春

草木深』と歌つたのでありますが、僕はこの大海の底かたぶけてみ国をおもひ、大海の力をたゞへつくしてみ国の為にはたらく時のくるのを待つてゐるのであります。

しばらくは海にかくれむ都べにいづべき時はいまだきたらず

この歌は、一度上京してなほいよ／＼いまの自分の心を表はしたものであるとおもうたのであります。しかし、いままでの出京の要求を感じなかつた気持ではありません。都は僕の心を日毎去来してをります。心ひかれつゝ、いまは心をさびしくとつて行かねばならぬ時であるとおもふのであります。さきの詩に書きましたように

『とき』はいまにあらず

後にあり

と思ふのであります。

明治天皇御製

折にふれて

思ふこと貫かむ世をまつほどの月日は長きものにぞありける(明治三十七年)

『月日は長きものにぞありける』と意力をこめて歌ひたまひし大御言葉をおもひます。いまは一

身をかへりみてをるべき時ではないのであります。しかし、比ぶべきものもないたへがたい過去をおもひ、思想と運命をおもひ（思想生活とは実に運命以上の運命であります！先月号にこのことについて消息を認めかけてゐたのですが、自己省察的になりすぎるのでやめたのであります）更にゆくてのはてなき戦をおもふと、僕はまだ悠久の、しかしさびしい自然にはなれることはできぬのであります。僕の東京に出るとき（形の上でなく生活的に）は、自然を僕の中に包摂したときでなくてはなりません。

「伊都之男建」の歌欄には、やうやく自信をもちうるやうになりました。既に揺るべからざる根底がうち立てられてゐることを確信します。最近、李白詩集・唐詩選等を岩波文庫で再読してゐますが、僕らの歌は、既に彼ら以上のものであることを明言して憚りはばかません。杜甫の詩はさすがに敬服します。又李白の長詩には心をひかれるものもあります。しかし、七言絶句などは、粗大の感情を放散的によんでゐるものとして価値をみとめる気になれぬのであります。時代はちがひますが荊軻の易水歌

風蕭々兮易水寒

壯士一去又不還

といふやうの詩も、重大使命を果さむが為めに出で立つ時の詩としては誇張が多いので、遠く出

征しつゝも、『大君のへにこそ死なぬ』と歌ひうるわれら日本人の感情にはふさはぬものがあります。感情を過大に使用することは、正義邪曲を判断する論理の冷静を失はしむることになるので、危険だと言はねばなりません。最近の数年間に次々におこつた諸事件も、感情の過多といふよりも、感情使用の過多によつて、正確の判断を失はしめたことの多かつたことをおもはざるをえません。それは、そのことばによつて知らるゝとおもひます。原理がなく思想法則を知らず、憂国の感情を正しき経験上に私用しようとすれば、それは忠義ではなく、党争に向ふ外はないのであります。それ故、われらの『しきしまのみち』『ことのはのみち』は、忠義を踐み行はむ為めの最小限度の用意であり修養であります。かくして純忠億兆同胞の心を揺り動かさずにはゐぬ考たらむことをねがふのであります。

われら青年は時局を知るべきであります。現代の時局にわれらの信念を試むべきであります。時のうつりゆきをうつしく見つゝ、純忠の志にゆるみなからしむべきであります。確信を以て立つべき時は必ず来ることを信じて疑ひません。しかしながら、至誠天地を感ぜしむる底のものとならねば、われらの志は志といふべくもなく、またその志を達せしむべくもありません。いまは第二段の進路階程をふむべく用意しつゝあるの時でもあります。この無力、この迷誤！ しかしながら、時をまつのであります。神ながら来るべき時を、神にいのりて。

以上。

詩歌 父

〔伊都之男建〕
昭和十一年一月号

わが家をつねにやすくぞすべましゝ父のみことのいたもこひしき
やすき心もたせしがまゝに大きき力もなごみたまひき天のごとくに
広き海のみ名さながらに悲し世を胸に湛へて身うせたまひぬ
ありし日の十まり二とせさかりつゝあが悲しみのいや増すこのごろ
せばき心もてるがゆゑにかくありて苦しみするわが姿いかに
すぎし大光こほしみかへりみて仰ぎつゝ行かむはろにゆくてを

詩歌 夕

〔伊都之男建〕
昭和十一年四月号

一しきりふるとおもひし粉雪も窓あけてみればすでにやみたり
水かめに水そゝぎいる桶の音のきこゆる外には物音もなし

冬夜

屋根の上の雪しきりおちてものすぎ音たつる今宵せまるあが胸
屋根の上にもりし雪のその宵におつるに似たる人の命かな

あはれあはれまたけしとおもふこの命絶ゆべきときのあらむとするを
うつし世に生れてやがて死ぬといふことはつひにいかなることか

年月の病はいえずたゞかはむ力ほとくうしなひにける

のこるべき歌さへもなくてこのいのちたえてをばらばわれいかにせむ
高きいのちねがふが故にさまよへるわが姿いたましくして見るにしのびず
せまる胸にたへぬわがおもひあらはさむことば一つにてよしいまあらしめよ

歌

歌をよむことたゞならず生死いきしにはそこにたゞちにさだめられむとす

人生の全一的表現これなくして忠義の臣と生きうべけむや

われらいま歌をもてりやわれらの中より生れしとこしへの歌をもてりや
はらからよふるひたちいまぞとこしへの歌よむときといよおもはずや
生死いきしにをたゞちにさだめむとする歌ぞこれみ国をまもる道にぞありける

雪

このごろはみ空の白雪いくたびか国土のへをおほひつくしぬ
まがことはつぎておこりぬこの雪に神のみ心あふぎまつらむ
ふる雪に大み心をきよめますとわがすべろぎはのたまひしかな
国のわざ行はれむ日つきくくにきよめの雪はふりしきりけり

詩歌

九月二十一日

秋風の野をふく夕べなき人の書ひらきよむこゝろしづかに
膚さむき風もよほせる秋空ははるゝことなくかたぶくごとし
師の君のゆきましゝよりの年月をわれ生けりとはおもほえなくに
底の力かたぶけつくすいくさをばわれえせざりき恥死ぬまでに

豪雨の報をラヂオにきゝて

戸をゆりて雨しづく夜ものすごき海鳴きゝつゝ君をおもへり
嘗てなき大雨甲斐の山々にふりしとのしらせいまきゝしなり
去年の出水のつくろひいまだなからむにこよひ君いかにすぐしたまふらむ

〔伊都之男建〕
昭和十二年十月号

ながれくる材木のいきほひ岸をやぶる音きくごとき君の歌なりき
君のうたおもひつゝ神のまもりあれとしばしこゝろこめ神にいのりぬ

祈願

来向はむうつしき時をこひねがふわが心根にいつはりはなし
み国のみだれまさ目にみれど力おひてたつべき時はまだきたらぬを
まつほどの年ながゝりし若きよはひ月日つくして過ぎさらむとす
まつほどのくるしき月日胸淵にたゝへしおもひむなしからむや
天地の夜ひらくごとくあきらけきみ代にみたみをあはしめたまへ
神々もみそなはしまして時まてるあが身にかしこき力そへたまへ

国家生活に於ける短歌創作の意義

〔伊都之男建〕
昭和十二年一月号

こゝに歌論を書かむとするに当つて、それは筆者の貧しき作歌体験と、その作歌体験と不可分なる国民的同信生活体験とに基き、この同信生活の現状に対する実際的要求より出発せるものであることを記しておく必要を感じる。筆者は本誌の『しきしまのみち欄』に於いて久しく選歌をつゞけて来てをるのであるが、所謂歌人なることを断じて潔しとせぬものである。しかしながら、それは固より筆者が歌人を蔑視し、まして歌を軽んずるが為ではなく、筆者の歌に対する信念は、作歌体験の実際よりして筆者をして専門歌人たることを不可能ならしむるのである。のみならず、短歌そのものゝ本質がかゝるものゝ存在を拒否するものであることをこゝに敢て言はむとするものであつて、いま記さむとする歌論も、浮動せる信念の上に羅列する抽象的文学論ではなく、まづ同信生活の現状を対象としつゝ、それに対する改革的意図の下に吐露せむとする筆者の学術的形式による信念告白であるからして、一々の言葉は不定の読者を相手に筆者の学問的業

蹟を止めむが為に流出せられたるものではなく、その言葉の一つ一つが確実に同信生活内容または同志の精神を対象とし、また筆者をもふくめたる同信生活の方向を指示せむとし、同時に現状の欠陥を指摘せむとしてをるものであることを、注目せられたくおもふのである。筆者が真に歌に志すの心よりして記さむとする歌論は、その執筆衝動に於いてかゝる現実的基礎を有してをる。故に、まづ古今の詩論詩学、歌論歌学、また一般文芸評論、美学等の整理と批判とを行ふことなく、端的に短歌の本質を明らかにし、その地位と現代に於ける任務とを宣説せむとするのである。今後時を追うて発表するであらう諸種の歌論は、筆者の短歌論の序説的断片として精確の系統的研究に集成せられるべきものである。

短歌創作上最大の問題は作者の原理感の問題である。まづ短歌の性質上それが総合直観的内容を有し、全一的表現を要求するものであることを説くべきであるが、かゝる心理学的研究は、三井甲之先生の先覚的研究によって尽されてをるからして、われらは三井先生の著『短歌概論』——そのうち殊に『俳句と短歌』『総合芸術として連作短歌』の節——また、『明治天皇御集研究』——そのうち特に『明治天皇御集と国民教化』の章——『しきしまのみち原論』等を熟読するべきである。それ故こゝには再説を差控へるのである。

この短歌の特別の性質は、その創作鑑賞に当って、人の心の対象と方向とを、総合的全一的内

容に導かむとするのである。こゝに短歌詠唱の対象は、宇宙または国家生活となり、作者の態度は、それに向つて合一帰依随順的位置をとらしめらるゝのである。われらはかゝる例を最も顯著に、明治天皇の御製に仰がしめらるゝ。御製に如何に『天』『あまつみそら』をよませたまひ、また『天』『あまつみそら』に連るものらを、その連る位置に於いてよませたまひたることの多きよ。かゝる御製と天皇の国家御統治の不可分關係を、著者は既に度々暗示したのである。かゝる『天』『あまつみそら』は自然科学的宇宙でもなく、儒教の『天』でもなく、仏教基督教等の『天』でもなく、感官的内容を伴ひつゝ思想生活の中にひろがるところの、全一的人生としての、究極の意志的觀念の対象である。万葉集防人の歌さかひに示されたとき純抒情詩としての短歌の、全身全一的表現が開展の極、明治天皇の御製の宇宙的命法を直叙せさせたまひし思想に到達せしめられたことは、当然のことであつた。これを實際に於いて、臣子の赤心が 天皇の大御心に通はしめられ撰取不尽ならしめらるゝ明らけき客証であるが、かくして、短歌創作が国家生活と不可分の關係におかるゝ諸文学中、特殊の地位が生まるゝのである。短歌創作上最大の問題たる原理感といふその原理とは、それ故に国体原理なることを知るべきである。

われらの多くは未だ学業の過程にあり、または国家的機能の極小部局にたゞさはり、もとより未だ国民生活を動かす力もなく、経綸を天下に問はむの地位も得てをるものではない。しかしなが

ら、われらは短歌創作によつて、国体原理に密着随順する国民生活の直接的表現を以て、国民生活なる体験を得しめらるゝことをよろこぶものである。かゝる体験は外的地位によつて、または一般的功業によつて、或は国政奉行の機密に参ずることによつて、すべてかゝる部局的任務によつて得しめらるゝべくもない。国家生活といふものが、真に各人の内生活に体験せしめられてはじめて実質的意義を生ずることをおもふならば、かゝる意味に於ける国家生活とは、実にわれらが精進する短歌創作の生活の如きをこそ言ふべきである。われらは、われらに真の作歌力あるかぎり、国家生活を既に体験しつゝありと信知し、また時來つては動揺せぬ根底の上に立ちつゝ、み国の為につべき力あり、と自信し得とおもふのである。

それ故、短歌創作上またその価値批判上、最大の問題は、作者の国体觀念の如何である。われらは、古来忠臣の歌がすぐれたる内容をもつてをることの意義を、実例について反省せねばならぬのである。実際に於いてかゝる忠臣義士のはげしき活動の苦痛が、その作歌によつて慰められ励まされたのみでなく、その精神生活を客観化する力となつてをつたことは、明治維新の志士の歌によつて知らるゝのである。かくのごとく正しき作歌生活とその創作とは、時代に先行し、時代の開展動力となるのであつて、それは芸術の、また人間活動の究極の理想である。これらの実例については、こゝに発表する時間がないのである。

最近新聞の報ずるところによると、ドイツ文学運動は、ナチスの国家的精神運動と結びつけられ、青年作家の運動は注目せらるべきものがあり、それらは時代の使命について論じ、詩人の政治的役割について論じてをるといふのである。その詳しい内容を知らぬのであるが、ドイツの民族的復興と、かゝる詩人の活動との関連は注目に値することと言ふ迄もない。短歌は詩であり、ことにその中心としての抒情詩であつて、それが政治的国家的使命を有することは、国家が本来精神の世界であり、真の人間生活の統一的世界であるが故である。こゝに最近のドイツの文学運動が詩人を中心とし、詩、劇の創作と評論とを中心としてゐることが重視せらるべきであるが、『興国の歌』と古来いはるゝのであるが、俳句、小説等によつて国が興つたことはないことをおもふべきである。詩と詩人の全一的表現の威厳が国家の統一と直接つらなり、その根源的力をなすのであるが、反省的分析的文学としての俳句、小説等は、文学の外廓的要素であつて、それが民族精神を直接震撼し、その思想と行動とを支配することは不可能である。

山鹿素行は思ふところあつて短歌をやめたと言つてをるが、素行の学問的理想は治国・平天下であつた。しかしながら、しきしまのみちは実際に於いて、既に治国・平天下を実現してきてをるのである。こゝに筆者は、われらの現状に対して反省せねばならぬのである。こゝには既に記したごとく、詳しい叙述をする時間がないのであるが、最近注目すべき評論家である小林秀雄氏

は、民族精神が文化を破壊するものではない、といふことを何某が言つてをるが、それは近ごろ自分の心中を往来してをる考へである、と書いてをられる。今ごろかやうのことが言はれ問題とされてをるのが、日本の文壇であつて、しかも、これだけいへるだけ小林氏が指導的であるといふことである。この日本の文壇も、詩がなく小説が横行してをる。小説の価値は既に言つたのであるが、その弊は自分の生活そのものに対して、小説化して反省をしようとするのであつて、山鹿素行が、罪なくして配処の月をながめむと欲するもの出づるに至つて学問がおとろへた、と言つたことは、さながら、かゝる反省に当てはめらるゝのである。現代日本の文壇に感心するやうでは、われらの努力は空無に帰せらるゝのである。

詩歌

意欲

希望の夕野たそがれのに

ともる炎

意志より、

ゆらめくは

運命の妖光だ。

孤然こぜんと

形をみする

はなれぬ光は

〔伊都之男建〕
昭和十二年四月号

宙にうごかぬ。

思想の

象徴か、

人間の 墮落か。

大地に磨銷する

生命の浪費

よろめく轍わだちに

ひたつゞく

吐血あどの痕。

乾燥せる

口腔に

言語は滅し、

身内しんないの

悲泣に

こたふる

底なき大虚。

苦しきこゝろは

一切を求むるに、

仰ぐ目に

とらへうる

もの一つなし、

あゝ 眩めくります

虚空の陽光のみ。

収縮を忘れた

緊張の生体が、

プロヂエクトする

白昼の幻想は

身心の疲労、

夜の安息にも、

いきづく 胸に

おつる星の光は

たゞよふに。

現実と思想と、

昼と夜と、

廻転する白板の

表裏をみつめる

閉さぬ瞳孔は！

われもまた死せざる機械か？

われはそも何を求むる？

永遠の大審判者か？

一切の創造主体か？

否、しかしながら

はかなき

生身いづみを忘れはてた

思想の直進欲求が、

悲滲にも

老大なる迷像を写象したが、

そも／＼また、

思想とは

執拗なる死の予告か？

あゝ、しかし

運命は

苦痛の現実としては

あまりに滑稽である。

誠実の要求より、

人間は自他の境を失ふ。

迷路はこゝにあらはるゝ——

耳にひびく声をきけ、

千たびの読誦は

くしくもよみがへる。

「夫れ妙法蓮華經は蓋し是れ万善を取り合して一因となすの豊田ぶでん、七百の近寿転じて長遠となるの神薬なり」

美しき声、

微妙なるかな

微妙なるかな

われはわれを忘れむとす。

「但衆生宿植の善徴にして神闍根鈍五濁大機を障さへ、六弊その慧眼を覆ふを以て、

卒にほかに一乘因果の大理を開くべからず」

あゝ、

「是に於いて衆生年を歴月へを累かさね、教を蒙りて修行し、漸々に解を益し、王城に於いて始めて一大乗の機を發するに至りて如来出世の大意に称会せり。是を以て如来即ち万徳の巖驅を動かし、真金の妙口を開きて広く万善同帰の理を明し、莫な二の大果を得しめぬ。」

いまこそ、

力、

われは

われをおもひ

他をおもふ。

薄暮の残明に

とけいる

夕べの緑野、

その希望の思出は

さ蠅なす

悪鬼の闇夜に

五月

指さきにのこつた 柑橘のにほひに

よみがへつた心も、

めくらむみどりの 夢にとけいる。

こゝへ来たとき

もえひろがるみどりの海に

消えむとすとも、

朝は来るのだ。

夜をつくす

苦杯の歌も、

朝は門出だ、

再びの決意こそ一切だ。

ゆらくと酔ひしれた

そのおもひで。それも五月であつた。

知る人を遠くへだて、

かへりみぬごとく、

北空をそびらにおうて
南の波の音をきいた。

麦畑につらなる松林には
去年のやうにくたかけ鶏の聲が

やかましいが 記憶はうすれ

おもくおほふ 真昼の鈍光の下で

一切の思想は 幻想と化してゆく。

人間は運命か？

第二行進曲

野にふしぬ、われら

わが青年時代よ、

否、われよ！

現実とは本来無か？

この世を求めて 生くる道を失ふな。

かすかふきいる すぐしき微風よ、

そこともしらぬ 蟬の聲よ、

台所に物洗ふ 母の手の音よ、

心にふるゝものは

まこと すくなきかな。

山ゆきぬ、きぞ、もろともに、

あゝ、人生の戦！

同情は苦しみ、

共感は悲哀、

全人類の思想と感情の嵐の中、

身をさらしてぞ進みしを――

見よ、われらが

歓喜の振舞

苦痛のさ中にあふるゝを、

かくてわれらはわれらの性格を形成す。

吹くよ、朝風

きらめくよ日は押し立つ旗に、

吹きならせ、いま、第二行進曲を！

独白か主張か

〔伊都之男建〕
昭和十二年五月号

『詩人は詩人であることを忘れねばならぬのである。』かう言つて見ても僕は救はれてをらん。それならば、『詩人は詩を余り作つてはならぬ』と言つて見よう。どうもおかしい。理に一つんでつて、とてもいまの苦しさを救ひうる言葉ではない。実に苦しい。ともかく、詩人が一切を詩化しようとする時は、死を選ばねばならんといふことが事実なのだ。いまになつてやつとそれだけ発見したのだ。笑ふ奴は笑へ、僕にとつては、この言葉この事実を発見した苦しみが現実なんだ。ちよつとまで、もう少し説明せねばならん。

『死を選ぶ』といったが、それは恍惚状態から死に誘はれるといふやうのことではないのだ。実際は『選ぶ』とも言へんかも知れぬ。全くすべてを歌はうと考へることが死なのだ。かう言つてみると、少しは楽になるやうな気がする。

詩を作ることが、どれ程苦しいことかは、作つたものは知つてをらう。自分の中にあるものすべてを出しつくして、疲労しきるのだ。さうして、詩人は、つねにかゝる用意をせねばならん。この用意は詩を作ることと同じ位疲労せしめる。さうすると、からだの中に何もかも無くなつてガランドウになつてしまふ。勇気さへ喪失せねばならぬのである。

そこで、詩を作ることをやめろと言はう。だがそれは、人間に生きることをやめろと言ふと同じ程度に出来ぬ相談だ。それをかれこれ説明するのはやめよう。それなら、結局中庸を選べといふことなのか。さうとも言へよう。しかし、そんな古くさい言葉で、果して詩人の苦痛が和げられるかどうか疑問だ。

ともかく、人間は常に創造主体となることは出来ぬ。(この言葉も、僕にとつては金礦をほりあてたやうな大発見だ。しかしかういふわかりきつたことがわからんとは、何たる愚鈍であらうか)許されてをらぬ。実に情ないことだ。だから、詩人はこの情ないことを忘れろといふのだ。忘れろといふことは、便利なことである。それは否定するとか、抹殺するとかいふ、融通のきかぬも

のではない。思出してもよいからだ。

詩人は、その折々慰められて勇気を与へられ、ばそれで満足する。最も人間の人間である。だが、自分が生きようと切望する故に、生を失ふおもひに直面し、さういふ運命に陥らうとするといふことは、実に苦しい。だから、いろ／＼言つてみて、勇気を与へられ、創造的地位に立つたり、被造物の地位になつたりして、遊戯三昧に入る外はない。迷と知りつゝ心を動じないことは、一層ふかい迷かも知れぬ。知つて而して犯すといふ奴だ。しかし、人生はいろ／＼あらう。どうも致方ない。僕はかう書いてやゝ心を休らげた。読者諸君は何と思はれるか。同感もあらう。不賛成もあらう。もうこれ位で筆を擱く。但し、これは詩だけについて言つたのではないことは無論だ。

願ふべからざることを願ふのが人間である

〔伊都之男建〕
昭和十二年五月号

紙を一枚めくればものがある。そこには一枚の紙しかないのである。それを取去ることは容易である。しかし、諸君待ちたまへ、僕は身を粉にして、当て身でその紙を破らうと思ふのだ、否、身構へてをるのだ。これが僕の現世の行動である。

ところで、かうも言ふことが出来る。たつた一個の小さな鍵があればよいのだ。闇の岩^{いはそ}扉も難なく開く。それは難なく開かなくてはいかん。さうして開けばよいのだ。だが、僕はこの鍵が新しくなくてはならぬことを知つてをる。恐らく僕以上にそれを知つてをるものはあるまい。そこで、

僕は全身の力をかたぶけて創造しようと思つた。その方法は、たゞ無によびかけることだけである。虚空から要素を呼び集めるのだ。無形の創造である。しかし、一瞬何かの拍子に、カチと形が出来るかも知れぬ。いや、出来る筈だ。出来さないでやむものか、諸君、鍵とはこれなのである。

学問も、仕事も、生活もいやになつてしまふ。すべての既成のものにあき／＼してしまふ。かういふことが許されようか？許されると答へるものには剣を食はさう。それだから創作などはやめた方がよいのである。これもつまりらん独白である。だから、これを印刷せぬ人、印刷されてをつても読まぬ人、読んでも忘れてしまふ人は偉い！

詩歌 進軍

〔伊都之男建〕
昭和十二年七月号

晴れし朝のしづけき庭、

微笑しりし緑子を

抱きてあやすかなしき母よ、

こゝにぞ平和と

希望の泉と、

そは博大の秩序の下に

未来の世界を暗示する

いのちながらの人世の姿か――

かすか伝はる歓呼のどよめき

出征兵士はいまいでたつに、

きゝ入る母に

多みかく緑子。

大陸覆ふ国家の意力は

天地統ぶる暴風雨のおとなひ、

海岸線を封鎖しつゝ、

無限の平野と重畳する山脈と

氾濫せる泥濘とそゝり立つ関塞とを、

打ち砕き押し進み

展開する戦線の涯しもあらぬ

国家の意力！

傷きたふれし兵士を背負ひて

指揮する隊長の『進め』の号令！

打つ弾丸も失ひつ

水なき岩山罅をまもり

雨なす弾流そかもと潜み

四日は過ぎつ、ふたゝび『前進』！

山嶽戦の突撃に

斃れし隊長の屍求めて

飯も食まずさまよふ幾日に

見出しゝものは鉄兜、そがかたへにぞ
破れしゲートルに附着せし一片の肉塊！

墜ちゆく機上にふるハンケチの

笑顔ぞ戦友の眼底消えぬ、

砲弾摧かぬトーチカも

肉弾なげうちて摧くなる、

あゝ暁闇の死黙の江上

砲火はげしき一点に——敵前上陸！

天日蔽ひて襲へ敵地を

重爆撃機、そが黒雲のましたにぞ

爆弾の雨しき降らせ、

戦車、機関銃、野砲の進撃

後へにつゞけよ豊富の糧秣、

天際平沙の境まで、天よりかゝれ

日本文化のはたゝがみ。

矢よりも速き時代の急流、

希望は若子の清き微笑、

抱ける母のこゝろの平和、

わが大君の

天つ日ながらしきます故に、

常程の国の名に負ひて

生命の源あふるまゝに、

わが皇軍のゆくところ

時代は新たに！

光はあらむ

地のへくまなく。

消息（註、短歌創作の心構へについて）

〔伊都之男建〕
昭和十二年九月号

選後評も兼ねて問題の対象も雑然と選択しつゝ記します。松本高校の清水猛郎君から意気にもえた手紙をけふいたゞきまして、来春を期しておこるべき同校の会の準備の充分にとゞのはむことを祈ります。同君の歌（本号シキシマノミチ欄所載）について、私信をもつて拙き御注意をいたしました。それはわれら共同の問題であるので、それに困ちなんでこゝに少しく論ずることを同君に許していたゞきたいと存じます。同君の歌稿はもう手許になく、正確の引用をすることは困難であります。敵密の選後評ではありませんから、許されるでせう。尤も非常に問題とするにいい例でしたので、あとから急いで編輯委員に送つたことを残念に思つたことでした。同君のうたははじめ、「たじろぐ心」といふ風にはつてをりましたのを、筆者は「心たじろぎぬ」といふ風に直したのであります。問題の中心もこの点にありますので、その点のみをこゝに問題としませう。「たじろぐ心」その前を忘れてしまひましたが、出征兵士を送つてその目射しにあつて答へることが出来なかつたといふのであります。さういふ事はありうることで、僕自身、上京の帰途おなじ列車に出征兵士がのつてをつたので、辻堂の駅で下りて送つた時、二三尺のところか

らなつかしげの潤んだ目が大きく見つめているのに会つて、万歳の声も喉につかへた事があり、その目射しは今も忘れることが出来ませんので、清水君のお歌も大変興味ふかくありがたく拝誦した次第でありました。その時の気もちを清水君は「たじろぐ心」といふ風に感ぜられたのでせうが、又、僕のあの時の気もちと清水君のそれとは異つているところもむろんある事とおもひますが、ふとゆるんでいた心のために、何と答へていゝかわからぬ気もちになることはありうることと存じます。又それに気づいて勇気を出される清水君の精神生活は正しいとおもふのであります。しかし、「たじろぐ心」では、その清水君の心持は表現されてはをらぬと思ふのであります。まづ、その事實は如何であつたかといふことを考へて見ませう。(どうも書き方が啓蒙的になつて諸君に申訳ありませんが、初心の方によんでいただくこととしませう)その時は清水君は自分の気もちのゆるびに気づかれてびくつとされたのでせう。しかし、その時は出征兵士を送る気もちで一杯でそれをさうと気づかれる余裕はなかつたので、あとから心のゆるびであつたと気づかれたのだと思ひます。この驚かれたといふことが、「事実」それは「心の事実」であつたのであります。その事實を後から反省分析してみても、「たじろぐ心」を発見されたのであります。それならば、この事實をそのまま表はされる方が、全体としての表現であり、正しい表現であるといはねばならぬのであります。つまり「心たじろぎぬ」といふ風にいふのが正しいのであります。

元來「心」は作歌の対象となりうるのでありまして、それは御製の「しきしまの大和心のを」しきしまことある時ぞあらはれにける」とか、「ひろき世にまじはりながらともすれば狭くなりゆく人ごころかな」とかいふのにも拝誦せらるゝ如く、人の心の性質をとりだして論じ、歌を詠ずることが出来ます。この人の心を問題にすることによつて、心のもち方を反省し、さうして修養に資することはよい事で、明治天皇もこれを教へさせたまうた事と拝察するのであります。もう少し御製を拝誦しまつりませう。

心

ちかひたるおのが心をしをりにて誠の道をわけつくしてむ(明治三十七年)

しきしまの大和心のをしきしまことある時ぞあらはれにける(同)

山をぬく人のちからも敷島の大和心ぞもとみなるべき(同)

かざらむと思はざりせばなか／＼にうるはしからむ人のこころは(同)

折にふれて

くのために心も身をもくだきつる人のいさををたづねもらすな(明治三十七年)

思ふことつらぬきはてゝ国民の心やすめむときぞまたるゝ(同)

ちはやぶる神の心にならむわが国民のつくすまことは(同)

なりはひはよしかはるとも国民の同じこゝろに世を守らなむ（明治三十七年）

心

すなほなるをさな心をいつとなく忘れはつるが惜しくもあるかな（明治三十八年）
しのびてもあるべき時にともすればあやまつものは心なりけり（同）

心

つくるはむことまだしらぬうなる子のもとの心のうせずもあらなむ（明治三十九年）
世の人にまさる力はあらずとも心にはづることなからなむ（同）

心

村雲にあらぬものから世の中の風にうきたつひと心かな（明治四十一年）

神 祇

目に見えぬ神にむかひてはぢざるは人の心のまことなりけり（明治四十年）
めに見えぬかみの心に通ふこそひとの心のまことなりけれ（同）

心

ことなしとゆるぶ心はなか／＼に仇あるよりもあやふかりけり（明治四十二年）
ともすれば思はぬ方にうつるかなこゝろすべきは心なりけり（同）

筆写人心

鏡にはうつらぬひとのまごころもさやかに見ゆる水茎くきのあと(明治四十四年)

折にふれて

むらぎもの心のかぎりつくしてむわが思ふことなりもならずも(同)

心

いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむ(明治四十五年)

折にふれて

敷島のやまと心をうるはしくうたひあぐべきことのはもがな(同)

これらの御製は、すべて「心」の動き性質等を一般概念として詠ぜさせ給うたのであります。

この一般概念としての「心」をよませ給ひつゝ、その概念を規定するのではなく、体験的情意的に「心の法則」をよませられ、そこにはつねに警戒と希望とを伴はせたまふのであります。これが正しい精神科学研究方法であると拝察するのであります。

源実朝の歌としては

心の心をよめる

神といひ仏といふも世のなかの人のこころのほかのものかは

人心不常といふことを

とにかくにあな定めの世の中や喜ぶ者あればわぶるものあり

等があります。はじめの方は相当概念的になっておりますが、これは詞書ことばがきが足らぬのでありませう。後の方は、人生の事実をよんで人の心の法則から出発した人生の無常をあらはしてをりませう。

道元禪師の「傘松道詠」の中には「心」をよんだものは多く見出されます。

涅槃妙心

いつもたゞ我ふる里の花なれば色もかはらず過ぎし春かな

牛過窓楯れい

世の中はまどより出づる牛の尾の引かぬにとまる心ばかりぞ

盡十方界真人人体

世の中にまことの人やなかるらむかぎりも見えぬ大空の色

などはあまり説明に墮して歌としては感心しませんが、「草菴雜詠」の中に、
おろかなる心ひとつの行末を六の道とや人のふむらん

草の庵にねてもさめてもまをすこと南無釈迦牟尼仏あはれみたまへ

山深み峯にも尾にも声たてゝけふもくれぬと日ぐらしのなく

心とて人に見すべき色ぞなきたゞ露霜のむすぶのみにて

心なき草木も秋は凋しぼむなり目に見たる人愁なげひざらめや

等は哲学的思索、宗教的修行等を力づよく表現した作とおもはれます。

大部目的が分化しましたが、元にかへりまして、これらの御製や歌は、みな正しい「心」についての歌であります。そこで、さきの「たじろぐ心」となると、それはかゝる一般概念としての「心」でもなく、又批評の対象としての「心」でもなく、あきらかに自分の心であります。右の御製やその他の歌の如く、「心」は歌の内容として作歌の対象となりうるのでありますが、本来は作歌の主体でありまして、それは、この場合「たじろぐ心」と言はれてをる自分の心であります。それにかゝはらず、「たじろぐ心」といひきるのであつては、前述のごとくその時の心的現象としての事実を分析して発見したものであつて、それは自分の心であり乍ら作歌の主体ではなく、従つてこの歌にはその主体の行方がわからなくなつてをるのであります。ところが「たじろぎぬ」といへば、「心」は作歌主体と一致するのでありますから、それは「事実」実際に於いて「心」を、そのまゝに詠んでをることゝなります。語感から言つても「たじろぐ心」では、それがいゝのかわるいのかわからず、それだからどうしようとするのか、わかりかねませう。又、この表現では、

出征兵士に対する気もちは殆ど感ぜられず、たゞ自分の心の動揺した事のみ執してゐるやうに感ぜられませう。「心たじろぎぬ」となつてはじめて、兵士の目射しにこめられた心も感ぜられ、これに対して「これではいかん」といふ心の力もわくその気持が、歌はれていることが感ぜられませう。事実、「心」は実在しても、「たじろぐ心」といふものは存在しないので、「心」そのものは、作用し活動する精神生活の全一的名称であることを思ふべきであります。清水兄の真のお心も、かうしてはじめて表はされると思ふのであります。

そこで、こん度は一応清水兄の気もちと離れて、厳密に言つて「たじろぐ心」といふ風の表現が、単に作歌上の技術的問題としてではなく、思想問題として如何に重大の問題となるかについて少しく論じておきたいとおもひます。それは、前述のごとく「心たじろぎぬ」といふ心的事実を分析して、その瞬間の感情を抽出し固定化する思想法でありますが、この考へ方は、人間の思想生活が全生活の進行と共に直進しようとする時に、それを阻止し、その威力を分散せしめることとなりませう。こゝに一切の信仰思想の根本的危機が潜在するので、単なる思想問題などでは人生は解決されぬとか、生活感情がもつと重大の問題であるとか、さかしげにいふ人達は、思想問題発源の微妙の意識について考察を加へぬ、又加へることの出来ぬ人々であります。それは、ふとした心のゆるびでもありまして、かういふところから論理的誤謬が、人生事実と照会せしめられ訂正せ

られる機会を失つて勝手の発展をし、その誤謬論理に人生を測量し規定し変革しようとしつゝ、遂に無信没落人生敗残といふ結果を導くのでありますが、それをその根源に於いて検討するものは、実にシキシマノミチの修行であります。歌は下らぬといふのは、勿論かゝる人生と思想との根本問題の重大性に気づかぬ呑気思想であります。無信没落となれば、生活感情とかいつてゐても、そんなものは一切空無に帰してしまふであります。そこで歌は、本来日本人たるもの全てが修めねばならぬ道でありまして、彼には詩人としての才があるとか、賦性があるとかないとかいふのは、やはり人生を局分する考へ方であります。その歌は、生活感情といふべくばそれを分析抽象するまへに全一的に表現し、そこに生活意志を実現してゆくので、その実現されたあとを實際的に検討するのでありますから、それは真の反省といはれませう。

極めて非学術的の言ひ方ですが、「たじろぐ心」といふ風に、それだけを取り出して反省すると、どうしてもそれに依頼することゝなります。元来全体的に動くべき心が、かういふ部分的心理にひつかゝることが危険なので、しかし、この依頼する気もちは、何か安楽感を伴ふものですか。人の心を誘ひやすいのであります。たとへばヘーゲルなどの一大哲学系譜の如きも、それは人生の依拠を求める要求から生れたもので、たゞ、かやうの大系があるからといつて尊重に値するものでは決してありません。さういふ要求がわるいといふのではなく、依頼する心のゆるびがい

けないのであります。「敗北」とか「自己否定」とか「不安」とかいふのは、一応既成の体系や感情によれなくなつた伴^{いっしょ}らぬ気もちを表はしてゐますが、やはりそのやうの言葉にひつかゝつてゐるので、人生が如何に危いものであるかを示して余りあります。これらはみな進取の気象に乏しい事大思想で、これは時代が「進歩」したとて、なかなか減じるものではないのであります。日本主義には体系がないとか、あまり単純で複雑のニュアンスに乏しいとかいふ批評は、自分のつくつたひつかゝりにいつまでも執してをるお目出度い思想で、それでやつて行けたら、人生は至極泰平で戦争などもない筈です。戦争の記事を見て、壮烈の美談などに心をうたれるのみならず、それを通して戦争の文化的意義を深思し、人間の運命をおもひ、戦争の原因をきはめ、人生の深意に徹させねばならぬといふのは、かゝる思想法に対する警告であります。

どうもだら／＼となりましたが、埋草のつもりで書きましたから、必要のない方はご覧にならずとも結構です。道元は「田地一下」といひ、一度大悟すれば二度三度の悟はあるべきでない、と申してをり、親鸞も同様のことをどこでしたか一寸忘れましたが言つてをり、「他力のなかの他力」のあるまじきことを説いてをるのも、人生は、ふとした心のゆるびのために際限なく迷路をかさねるものであつて、その道理を「生きる意志」によつて決定せねばならぬ、と教へたものとおもふのであります。複雑極りなき人生に処すべき道は、本来至極簡単な道理であるべきであります。

しかし、「わがはからはざるを自然じねんとはまうすなり、これすなはち他力にてまします、しかるを自然じといふことの別にあるやうに、われものしりがほにいふひとのさふらふよしうけたまはる、あさましくさふらふなり」と親鸞はいひ、更にこゝに単なる道理の理解のみでは再び迷ふことあるべきを戒めてをることは、道元もまた、「大悟底人却迷時の時節を参取すべきなり」といふごとく、至極簡單なるべき人生の決定は、意志の問題であり、「まこと」の問題であるからで、それ故人生はまた不断改革であるといふことを言つたものと信じます。「田地一下」は一つの体験であると共に、それは人心法則の心理的表現であります。これがいまわれ／＼に反省の機を与へてをる「信」の問題であります。(以下略)

詩 歌 歳 末

「伊都之男建」
昭和十二年十月号

明くる世の大扉おほと

しづかにもいま閉されぬ。

ものみなを罅裂ひびするとき

重き音いつしかに遠くへなれば

うなだるゝ物かげ

わかつことなく、

はてしなき

ふかき憂ひ

おほひつくしぬ。

常闇ぞ

こは、

たへがたき悲しみのしるし、

生あるものも生なきものも

嗚咽なげつをたふるさびしき姿。

木はもろ葉なえつゝ道に立てるよ、

犬はうつむき木の下にをるよ、

石垣のうへにまたしたに

頭おさへ足あしぐみして

動かぬ人ら

とこしへに考ふるその面ざしよ。

行く足え進まず

町かどに立ちつくす人、

妻をよせつゝ

語らぬ男の子、

常夜とこよきぬ

常夜きぬ

葬送の楽もひよかぬ

根の堅洲かたすくじ國、

宿業しゆごうのさだむる時か、

神のみ旨むねか

時は来ぬ

時は来ぬ。

分析やむなき悪寒せふしん震動

暴風あらし雨と狂ひ

限局せる意欲の醜みにくしき混乱より

さかしき理智の構成に

心驕おごりし男の子の心は、

休みなき乱戦の極度の疲労を

いま、黒闇の死寂の中に味ふ。

地底ちていに引き入る寂靜は

一切の力を奪ひ

思考の光明は失はれつゝ

たゞ悔恨の沈靜のみ。

人間の運命はま黒き鉄則か、

奢ぜいれるもの滅び

華やげるもの色あせつ

稚ちきはおそれ

年とし壮りしは考ふる、

あゝ、閉す底つ国

神のみ旨か、

時は来ぬ

時は来ぬ。

友よ、聞かずや

ゆきにし人の呼び声を！

うつしくひぶくよ、そは

われらの耳に、いま！

人世ひよしの戦に失せにし人らの

かなしき雄叫び！

「あらはるゝ現し世は

かくれたる冥衆めいじゆおもはず、」と。

あゝ、われら心し凍る。

たちまちゆけば

見よ、友よ、大扉の裏に

彫りいでしおそろしき文字、

「永遠の法則」と記されぬ。

浮ぶ文字つゞけば

「大扉はやがて開かれむ」と。

見よ、書かれし文字を見る人ら

驚けるもの、

あやしむもの、

おもひあたれるさまにうなづくもの、

あざわらふもの、そしるもの、

あゝ、見むともせず^に考ふるもの、

悲し悲し、

いましわが心なえつゝ、

知らぬ夢

行きかふ人らの一瞥の印象に

さやけき部分を発見しつゝ、

かぎりなき生の愛着は

またきいのちの存在を予感せしむ。

人生を測定せぬ

底ひく力にいざなはるゝよ。

覆ふ寂滅 悔恨の苦黙、

信あるものはさとらむと

胸ぬち かすかに

くりかへしぬ、

そのことば——

「大扉はやがて開かれむ」。

一寸ちのおもひに

やすきを願はず

たへ来りしが、

ゆくりなくも

胸あに生れこしおもかげの

未だ知らぬゆるびなき生命を
胸扉むねどにかきてやまず抱けり。

うつし世にまだ相見ねど

み国おもふわが心の

清きまなごの

そが微笑ほそえみは、

わを慰むる。

しかすがに

われは独り身!

荒魂ぞ

創りなす世の!

わが室むろは岩原

悲 歎 独 白

さ蠅なす群るまが神

火噴く山々

たちまふ怒槌、

ま清水のたをやめの

来む国ならず——

いざ払へ、頭槌腰ゆ

ゆけ、あが足

遠つ荒山わを招けるぞ、

「はかなかる

夢ぞ見し」と、

ゆきて 告げむか

波の山のおほちに。

全身の疲労が幾日目かに必ずあらはれ
休息をあたへられぬ倦怠と睡魔に終日空
を仰いでくらす、

このやうのことが数年つゞいた。

青年時代の失敗感が累積して

弱り細つた神経を刺戟し、

憤怒と絶望は唯一の救ひとして

生命の断絶をくりかへし予想する、

これはことにこの一二年のことであつた

このごろはかういふ傾向は次第に遠去つ

たが

対抗できないさびしさが迫つてきて

離京の駅頭で汽車をまつ時など

泣きさげびたい気もちに襲はれる。

楽しい人生は遠くさかり

さびしい心は一すぢにみ国のいのちにつ
ながれる。

そのみ国のいのちは無限の歓喜だとおも
つてはみるが、

よろこびは現し身にわき出ようとせぬ
友！ そのことばも以前のやうの賑はし
い響きをもたなくなつた。

国家のことをおもふ心にまぎれて

忘れていた古い感情が

ま向きに向いて帰つて来た、

面をそむけしめるさびしさは――

冬がれの気候のためか、

一時の病的心理の徴候か、

乏しい性格と貧しい能力との限度をしら

すシグナルか、

国家の事を憂へてはならぬといふことか、

知らぬ、知らぬ、

いまは、たゞ

「神のみ国」

これが決定的のことばとなつて来た。

あゝ、

いかに異なるひびきを伝へるよ

以前にまして、

いかに

新たなる威力をいぶきするよ、

刻々に

見えざる空間を占めてゆくよ、

電撃にあつた身ぬちには、

かぎりない力が湧くの覚えて

またも

さびしさを忘れ

一切を忘れようとする。

明治天皇御集に『たね』とのたまはせたまひたる

大御言葉のうちに仰ぎさとらしめらるゝふしぶし

〔伊都之男建
昭和十二年十月号〕

生死流転の人間生活のうちに永久にとどめられ伝へられつゝ、不断にその活動の根源となるも

のは何であるかといふのが、この一文に論ぜむとする問題である。もとより説き尽すべくもないが、御製を拝誦しつゝさとらしめらるゝふしぐを記さうと思ふ。

忘草

たねなくて茂りもゆくか世の中の人のこゝろのものわすれぐさ(明治三十九年)……(1)
この「たね」といふ大みことばは、他の御製にも多く拝せられる。

折にふれて

敷島のやまとしまねのをしへぐさ神代のたねの残るなりけり(明治四十四年)……(2)

教育

よきたねをえらびぐて教草うゑひろめなむのにもやまにも(明治四十五年)……(3)
等で、この三首を拝誦しまつれば、おのづから「たね」と宣はせたまひし御意味も仰がしめられる。

老人

ものわすれするを常なる老人も昔がたりはたがへざりけり(明治四十二年)……(4)
といふ御製を拝するのであるが、第一の御製の『ものわすれぐさ』は、『ものわすれするを常なる』と老人について仰せらるゝ単なる記憶力、記憶表象の意味ではない。それは『人のこゝろの

ものわすれぐさ』である。この一首は、人生を滅却せむとする忘恩の心理的原因をよませたまうた御製と仰がしめられる。即ちそれは『たねなくて茂りもゆく』と仰せらるゝのである。それは無原因に瀰漫するといふ意味ではない。しかし、これを指摘しうる原因が予見推定しがたし、とのたまひしものと拝察せしめられる。

元來人間の生活は、その精神の活動によつて保障せしめられるのであるが、人間精神の活動は、決してそれ自身単独に本來的に存在しうるものではない。人間精神もまた宇宙としての自然現象の一つであるが、人間の意識は内部的統一を保持せむとし、その統覚作用の活動性が外部的自然を統御することによつて、宇宙的統一と対照すべき内部的統一を実現しつゝ、人としての生活を保障するのである。従つてこの統覚作用が活潑にして持続的である時、思想精神は正しき状態におかれて生成せられる。即ちそれは、宇宙人生の正しき関連が概念的意志的に確定強調せられてゆく人生である。

かゝる人生に相反するものが忘恩の生である。それは、精神の活動が減退せしめられ頽欠せしめられることで、その原因は一概に規定確言しがたいのである。平和の永続のために、生活の調和が精神の刺戟を失はしめる場合もあらうが、全く反対に、極度の動乱が人心を逃避的ならしめ、孤立人生観を誘ふ場合もないではない。かくのごとく人間の心は、外部的条件にのみ従ふこ

との出来ぬものであるのは、それが測定しがたい広範囲の自然的精神的關係に於いて成立してをることの証左であつて、それ故に、精神は外部的關係を統御する威力をもつと予想せられるのである。従つて人心の法則を外部に求めることは許されない。忘恩が一般的傾向であるとしても、その社会的原因などいふことは、空虚の穿鑿せんさくにをはるべきである。

この捕捉とくしがたい精神の活動を、真に生々無息ならしめることは如何にすべきであらうか。それには故らこゝろに捕捉しようと思ふことが先づ大切である。それが第一の批判的条件である。それ故にあやまたむこともこそあれ世の中はあまりにものを思ひすぐさば（明治四十五年）……(5)

と宣ふのである。この批判について要求せられるものは、かゝる戒心の上に立つところの第二の条件である。即ちそれは人間のこの心理法則に従ふことこれである。統覚作用の旺盛なる状態は明確なる記憶表象としてとゞめられる。

「ものわすれするを常なる老人も昔がたりはたがへざりけり」との御製にも仰がれるごとく、老人の記憶は『昔がたり』で、往年の直接経験の印象は、老後までも明瞭にとゞめてある、といふことであつて、かゝる直接経験を重んずることが第二段の条件である。

この直接経験は

世の中の事ある時にあひてこそひとの力はあらはれにけれ(明治三十七年)……(6)

とよませたまうた『事』にあつての体験であつて、『事』は、人間の意識に直接経験として体験せられた人生事実といふべきである。この体験は実に消えざる記憶として一生の力となる。

かゝる記憶は、個人の単一なる経験によつて生ずるものゝみに限らるべくもない。すぐれたる芸術にあつた時の感激、偉大なる人物の印象等は、単なる事物に対する経験ではない。それは幾多の累積的经验の経験である。不滅の印象はかくして歴史的に伝へられるのであつて、それは実に一生の力であると共に、民族的生命である。かゝる印象こそ、『たね』と仰せられしところのものであると仰がれる。

『たね』は蒔かねば生ふるものではない。一人々々の経験なくしては民族的生命もあり得ない。而もその『たね』は、花を咲かしめ実を結ばしめつゝ交代永続、つひに消ゆるときなかるべきである。永遠の生命といへば概括的であるが、『たね』としいへば、かくのごとき豊富なる意味内容を予想せしめる。而もその『たね』は、『よきたね』を『えらびえらび』てゆくべきであり、又真の『たね』は、『神代のたね』であると仰せられる。即ち、人間生活の史的源泉の分ちがたき民族的記憶こそ、真に永遠に『人の力によりて』伝へらるべきものである、と教へたまひしを仰がしめられるのである。

それ故に、われらは

心

しきしまの大和心のをゝしきはことある時ぞあらはれにける（明治三十七年）……（7）
の御製をいたゞきつゝ、直接経験に随順し、不滅の記憶をえ、またそれをこの世にとゞむべきために、『をゝしく』生くるのが、正しい生活であると信知せしめられる。それが日本に生れ日本の歴史を信知し、皇恩の無窮に感激し祖先師友の深恩に感謝して生くる道、『ものわすれぐさ』をなきはらひつゝ行く道であると信知せしめられる。

心

ことなしとゆるぶ心はなか／＼に仇あるよりもあやふかりけり（明治四十二年）……（8）
断滅すべき草の根は、『ことなしとゆるぶ心』である。されば

草

うとましと思ふ^{せむら}草はひろごりて植多てし草の根はたえにけり（明治三十八年）……（9）
のいつかしき大みしらべをかしこみまつる。こゝに思合されるのは、ヨハネ伝福音書にのこされ
たキリストの言葉、

「まことにまことに爾曹^{なんじら}に告ぐ、一粒の麦地に落ちて死なず

ば、たゞ一つにてあらむ、もし死なば多くの実を結ぶべし」

が、いみじくもこの消息を伝へてゐることである。をしく生きることは、個人生活の見地よりしては、大君の御為めに死を決して勇奮邁進する悲劇的生涯であるが、国家生活の総合的見地よりすれば、それは動揺波瀾の個人生活を確固不動の生命に結合する過程である。国家生活はかくのごとく『多くの実を結ぶ』べき世界である。それは将来に予想せらるゝ文化であり、理想の国であるけれども、キリストも言ふがごとく、『地に墜ちて死』ぬ『一粒の麦』によつてはじめて予想せられるのであつて、この捨身の活動は、歴史的精神の実行に外ならぬ。『をしく』生きるといふことは、言葉をかふるならば、歴史的精神に生きる、といふことである。一切の実現は、こゝにその根柢を求め得られる。

されば、古事記に

「即ち其の御頸珠の玉の緒むくびたまもゆらに取りゆらかして、天照大御神に賜ひて詔りたまはく、『汝命は高天原たかあまのを知らせ』と事依ことよさし賜ひき。故、其の御頸珠の名を御倉板拳みくらたなの神と謂ふ。」

といふ『ミクラタナノカミ』について、寛博士が、皇統のこととして『ミクラタナ』の『タナ』は、『タネ』の意と説かれることを注意したい。万世一系の皇統こそ、一切の『たね』の中の『たね』と仰ぎをろがみいたゞかしめらるゝのである。それは、歴史的精神の純粹所産であると説明

するもかしこき極みである。

たねなくて茂りもゆくか世の中の人のこゝろのものわすれぐさ（明治三十九年）

われらは、かしこかれども、この『たね』が、現実に相続不断なる国家生活中に生くると覺らしめらるゝ。われらには他事はない。万世一系の天皇にまつろひまつることのみが一切である。

意志の実現

—— 作歌体験に於ける小論 ——

〔伊部之男 建〕
昭和十二年十月号

こゝに思ひ至らぬまゝに拙い小論を記すのは、短歌創作の体験に学術的省察を加へて、抒情詩としての短歌は感情をよむものであるといひ、叙景の歌は自然の写生であるといふごとき謬論から、短歌創作の思想的重大意義を軽視する考へ方を正し、一方文学論としての思想的無反省無心理学思想に警告を与へ、それによつて、短歌創作の意義を幾分なりとも闡明せむの念願に外ならぬ。

元來、詩の中心は抒情詩にあるといはれてをり、短歌の本質は抒情詩である、といはるゝのであ

る。しかし、抒情詩・叙事詩また叙景詩といふのは、詩の本質上の分類たるべきものではない。詩は全一の詩であつて、作歌内容の対象の差によつて詩そのものゝ分類が可能であると考へるのは、大いなる誤である。創作の主体は人間であり、この創作主観に対立すべきものとして、短歌・詩の内容を形成する創作対象は、宇宙人生のすべてである、といふのが正しいのである。それ故、詩を論ずるには、対象としての全一的宇宙人生は問題ではなくして、創作の主体としての人間が唯一の問題であり、ことにその主体の認識如何が根本問題でなければならぬ。何となれば対象は変改の不能なる与へられたる宇宙人生であるから、問題とせらるべくもない。問題は、のこされた人間にある。人間が如何に宇宙人生を認識するか、しつゝあるか、といふことのみがわれらの力及ぶかぎりである。論すべき問題は、人間能力の限度内にのみ存在することを知るべきである。

さて、抒情詩・叙事詩・叙景詩の一種としての叙景詩といふやうの分類をかりに立てるとして、それらによつて作歌対象に対する人間の認識主観そのものにも、また何ら変化はないのであるから、かゝる分類が本来非常に不正確のものであることが知られる。この中でも叙事詩といふ言葉はまづ諒解できないこともない。何となれば、それは詩の題材(題材は、創作対象がその要素たるべき詩の内容とは全く異なる概念であることは注意する必要がある。この問題も後にふれるであらう)が、歴史的事件に選ばれてゐることを示してゐるからである。叙景詩も同様であらう。し

かるに抒情詩といふに至つては、何のことであるか理解ができない。ヴントのいふごとく、感情は意識表象の内容が統覚に及ぼす影響に名づけられた名称である、とするならば、感情をよみ、又は歌ふといふことそのことが意味をなさない。況んや感情に題材をとると言ふがごときことは全くあり得ないことである。尤も人間の感情を分析して、その性質法則を概念的に言ひ表はすことは詩でも出来るが、これは直接表現ではなく、一般に抒情詩と称せられてをるものとは異なるものである。それ故、かゝる概念的叙述は、また題材の問題であるといはねばならぬ。さうすると抒情詩といふのは、歴史的事件や風景等を題材とした詩ではないところの残りの部分に許される名称といはれるかも知れないが、残りの部分とは、また茫漠極まる言ひ方であつて、これまたその意味を確定することが出来ない。それ故、筆者はかゝる区別分類を一切用ふることなく、詩そのものゝ本質について論ぜねばならぬのである。

いま一つ思想詩といふことばがある。これは、『明治天皇御集』を研究せられた三井甲之先生が、御製について言はるゝ言葉であるが、これは詩の、ことに短歌の本質を論ぜらるゝについての便宜上の用語であつて、それは抒情詩・叙景詩等の誤れる用語に対して、その誤謬を顕著ならしめむために使用されるのであると筆者は解してをる。それ故、これらの誤謬を明らかにした以上、特に用ふる必要がないものと確信する。

なほこの外に象徴詩といふ言葉があつて、抒情詩・写生歌等に相對してをる。しかしこの言葉には、抒情詩以上に一語の中に含まるゝ矛盾は多いのであつて、その誤謬は後に述べてゆく中に指摘せられねばならぬ。何となれば、抒情詩といふ言葉の誤謬は、言葉そのものゝ矛盾であるが、『象徴詩』の誤謬は、『象徴』が詩の理想であるといふ思想に内在する欠陥から出發してをるのであるから、かゝる思想の誤謬は、詩そのものゝ本質を論ずることによつて明らかにする外はないからである。又それが本論の目的の一面でもある。

更にこゝでつけ加へておかねばならぬのは、この小論は専ら詩、ことに短歌を問題としてをるが、一般的見地からして、文学論であり芸術論であり、更に広く學術論・宗教論であることである。といふのは、研究が意識の事實に立脚してをるからであつて、人間主観の宇宙人生に対する認識の方法は、これら各別にさまざまに異つても、意識全体に於いては差異はない筈であるからである。

まづ歌をよむ衝動とはどういふものであらうか。はじめに何か言ひ表はし難い感情がある。この感情は、作歌の以前に存在してをる分析せられざる意識の全体表象から生れるものであるから、全体感情と名づけられてよい。多く漠然とした、何らかの方向をもつた衝動である。その衝動は沈静せしめらるゝと共に方向が次第に顕著となり、感情の種類が認識せられつゝ意識内容が分析

せられて、言葉となつて表はれてくる。かゝる全体感情が、作歌のみならず一切の文学的表現（それは文学に限つたことではないが）の以前に存してゐるといふことが、芸術創作の体験的法則を示してゐる。すなわち、全体感情は、分析せられざる意識の表象内容が統覚に作用するとき生れるものであるからして、その全体感情があるといふことによつて、全意識内容に作用する統覚の存在が創作衝動の源泉である証拠と言ひえられる。そして、衝動の沈静すると共に、感情の方向が顕著に現はれてくるといふのは、意志の統覚作用によつて、全意識の各部分が追及されると同時に、そこに反応として生ずる感情の性質がはつきり浮んで来るといふことである。この意志力の集中のためには、ある程度の時間を要し、意志の統覚作用は、その動揺の法則のために律動的に遂行せしめられつゝ、能動的意識結合過程として全生活意識に統一連絡を与へてゆくのである。これが、明治天皇御製に

歌

戦のいとまある日はものゝふも言葉の花をつむとこそきけ（明治三十八年）

詞

ことのはの道のおくまでふみわけむ政まつりごときくいとまいとまくくに（明治三十六年）

をりにふれて

ことしげき世にふる人もわがこのむ道にわけいるひまはありけり (明治三十六年)

波

あるゝかとみればなぎゆく海原のなみこそ人の世に似たりけれ (明治三十八年)

道

ひろくなり狭くなりつゝ神代よりたえせぬものは敷島の道 (明治三十九年)

道

いとまなき身も朝夕にいそしみぬ思ひいらる道の為には (明治四十三年)

歌

まごゝろを限りなき世にとどむるもやまと詞のいさをなりけり (明治三十九年)

とよませたまひし諸問題である。

さてこの衝動にまかせつゝ、全体意識表象の各部分が、『統覚の焦点』に順次に入ってくるやうにすれば、その最後に至つて実現された全体感情は、未だ分析せられざりし創作の原始的衝動にあらはれた全体感情に照応するのであつて、それはまた分析しがたき満足感である。

歌

むらぎもの心のうちに思ふこといひおほせたる時ぞうれしき (明治三十八年)

の御製に仰がるゝ創作のよろこびは、言ひつくしがたき無量のおもひを再び誘ふものであつて、これなくしては創作は完了したとは言ひ得ない。この無量のおもひ、ウントの言葉によれば、全体感情といふのは、繰返し言ふが如く分ち難き全一的感情であり、本質的には、分析せられた意識内容が総合された客観的証左であつて、それがはじめの全体感情よりも、意識内容の明晰感を伴ひつゝ、而も分析しがたき状態をもつてそれと照応せしめられる、といふことが実に重要な問題である。即ち全体意識が、こゝに一貫生成統一せしめられたのである。それは言葉をかへて言ふならば、『意志の実現』である。

かくのごとくして、『詩とは何ぞや』の答へは自ら確定せられる。即ち『意志実現の方途』である。もとよりそれは、短歌や詩にかぎつたことでもなく、文学また芸術にかぎつたことでもない。しかしながら、詩に対してこれ以上分析的の定義を附することは、詩の本質を誤らしめることゝなる。しからば、他の芸術に対する立場に於いての詩の定義は如何、と問はるゝであらう。しかし、筆者は之に答へむとするものではない。かゝる末節の問題は他に語る人もあるべく、又厳密にいへばそのやうのものは本来ない。更に實際的にいふならば、そのやうのものに拘つてをれば、詩は出来ないのである。とはいふものゝ、筆者はもとより問題をこゝに止めてしまふのではない。論題はなほ今後が重要である。また、それはもとより以上の問題を更に明瞭ならしめむが為に外な

らぬ。

以上述べ来たことよりして、再び問題をもとにかへして、実際の作歌体験、または創作の経過を分析してみねばならぬ。即ち全体意識は統覚の作用によつてその内容が分析せしめられると言つた。といふのは、そこには、人間の意識内容以外の個々の自然現象・人生法則等あるべくもなく、たゞ全体意識の内容のみが詩の要素であるといふことである。それ故先にもいつたやうに詩の創作対象は全一的宇宙人生であつて、この外なる宇宙人生は、内なる全体意識と照応してをるのである。体験的にいふならば、何を言ひ何を述べむ、と思ひわづらつてはならぬのである。思ひ煩ふといふのは、与へられてをる作歌の対象を更に選択せむとするので、その結果、宇宙人生の総合的直観が失はれることとなる。これが芸術の否定としての、芸術至上主義となることは、なほ追々ふれてゆかねばならぬ問題である。

創作は、かくの如くにして全体意識内容の統覚による分析追及によつて遂行せられる。それは自然の描写でもなく、人生の象徴でもない。いふべくば生の表現であるが、詩の本質を論ずるためこゝでは猶心理学的分析が必要である。即ち、意識内容を問題とすることに於いて、詩の創作は哲学・科学と異なる心理的作用に基くものではない。上來詳述したやうに、全体意識より出発して

それを分析総合しつゝ生成統一せしめること、即ち『意志の実現』が詩の本質である。ことにこの分析の過程に於いては、一般學術と心理的活動に相違があるのではない。たゞ、兩者の差異は叙述の方法の差異にのみ存する。こゝで、詩は感情をよむものであつて、人生の事實、または思想内容の複雑性を表現することが不可能であるかに考ふる人々は、反省せねばならぬのである。抒情詩に対して思想詩といふ言葉が用ひられるのも、かゝる心的事實の反省によるものである。

しかしながら、詩と哲学との相異は明らかに存在する。哲学と雖も眞に価値ある労作には、必ず文學的表現が伴ひ、感情の脈動を直接伝へる律動が現はれるのであるが、それは、意識内容の追及統一作用が行はれれば行はるゝ程、それを遂行せむとする力に対して、反対にそれを分化せしうとする勢力が起つてくるといふ心理的現象の中に、統覚は一層その活動性を旺盛ならしめ、その活潑な活動は、更に統覚の動揺性を顕著ならしめるからで、この動揺が、表現の律動として現出して来るのである。詩は本質的に、最も旺盛なる統覚活動の要求をみたす言語による表現方法であつて、所謂想像の所産であるが、單なる想像によつて生れるのではなく、詩と哲学とは、この意味で根本的差異があるのではない。詩が心理活動の律動に應ずること急で、意識内容の精密なる分析整理を欠く時、それを徹底的に行つて詩の使命を補足するものは、學術の任務であり、ことに哲学の根本的使命であるといはねばならぬ。

全体意識といふものは、かくの如くにして分析総合せられつゝ生成実存するものである。詩の本質はその直接表現にある。さて、分析総合生成実存とは如何なることであるか。さきにも述べた如く、創作衝動の内在于する原始的全体意識といふものは、表現の後に獲得到達せしめられた全体意識とは明らかに異つたものである。それは分析を経過して来たがために外ならぬ。しかし、分析的作用に伴つて全体意識は決して消失するのではない。それは変化しつゝ行くのであるが、分析の努力のために、全体感は一時没せられ、表現の最後に至つて再び感得せらるゝといふに過ぎない。それは要するに分析過程にあつては、全意識内容が順次に個別的に統覚の範囲に入つて来るからである。統覚はかくの如くして全体意識を追及する。それ故、統覚には消長があり、その及ぶ範囲に広狭はあつても、全意識内容を一時に照し出しうるものではない。たゞし、統覚はつねに能動性をもつてをる。それは統一支配の力である。この能動性によつてのみ、分析が可能であることを知るべきである。それは総合を予想してのみ分析が可能である、といふ意味に外ならない。かくの如き統覚の性質は心理学的に、従つて創作上に実に重大の問題である。それ故、分析の過程即ち表現の過程にあつては、統覚の『活動』が予想される。分析は統覚の動作である。それ故一定の事物の法則がそのもの自身に備つた性質によつて系統立てられて認識せしめられると考へるのは誤謬であつて、統覚の活動なくば、かゝる法則の存在すら認識せられないのである。従

つて事物の法則といふものも、人生にあつては、かくして認識せられた範圍に於いて存在するものであるからして、統覚活動の直接律動的表現としての詩は、人生の法則を意味するといへる。

されば、詩の根本価値の問題は、その表現の律動性にあるといふべきである。それは統覚の活動が活潑であるかどうかを示してをるからである。それ故『歌のしらべ』が詩の根本問題である。歌の題材は問題ではない。歌の内容といふべくば、統覚によつて統御生成せしめられた意識内容である。内容のない空虚の詩といふのは、宇宙人生の中にあつて、宇宙人生を認識する意識内容が窮尽せられてをらぬものをいふのであるから、そのリズムは従つて低淡を免れない。

詞

きゝしるはいつの世ならむ敷島のやまと詞の高きしらべを（明治四十三年）

の御製は最高の詩を『高きしらべ』に予想せさせ給ふと拝察せられる。この『高きしらべ』は、統覚の動搖に随伴するのであるから、一定の定型をとることは出来ない。詩形はあきらかに一種の制限であつて、意識活動に対する制御である。短歌の内容が限定されてゐるといふのは、この意味である。五七調の長歌、七五調詩形としての新体詩、今様、俳句等すべて特定の表現を予定するために意識活動は一定の範圍にとゞめられるのは如何ともし難い。たゞし、その狭い範圍にもなほ自由の天地があるべく、それはかへつて、ことばの性質を研究する上に役立つことが多い。ま

た、一切の制限を撤去した自由といふものはあるべくもなく、日本語そのものが法則と限界をもつてをる一つの束縛であることも、言ふ迄もないことである。

こゝで短歌の特長を述べねばならぬが、まづ無限の自由といふのではなくとも、日本語内での全くの無定形といふことは、われらの思想といふものが一定の標準に従つてをることによつてもありえないものであり、又あるべからざるものである、といふことをおもはねばならぬ。それは統覚の範囲が限定されてをるといふこと、注意力の領域が大体の限度以上に出ない、といふ心理学的基礎事実に立脚してをる。又、相当広い範囲にそれを拡大しようとすれば、多大の苦痛と困難とを伴つて、却て疲労を誘発して統覚の作用が失はれるのが法則である。それ故、詩形も無限の自由といふことは正しくない。日本語の発達の歴史に順応した形を保ちつゝ、その限度内で自由に表現するといふのが正しいのである。短歌は三十一字で字数からいつても極く限定されてをるが、その適當の長さは、絶大の意志力を求められぬ平常の場合の意識活動をも表現するに便利であつて、又それが連作の形をとると、相当の自由を得られることから、日本文学の根本形式として発達して来たことに疑ひはない。この平常の心理にかなふといふことが非常に重要な問題であつて、それがかへつて心理学的にいへば、統覚に過大の要求をせず、不斷に全体意識を連結せしむることが出来、国文学的にいへば、歌を日本語の全体的関連の中に主導的地位をとらしむる契機を

包蔵し、全国民的共感の形式となつて、それは二千数百年の伝統をつくつたのである。この短歌の特長についての研究は、いま紙数からいつてもこゝにつくしうるものではない。

之に反し俳句はあまりにも短い詩形である。短歌は、分析した意識を統一するに足る字数をもつてを、それは、よみ下すときの時間にも或る程度の余裕を生ぜしめ、その時間の経過が読者にも、律動的に統一感情を味はしめるのであるが、俳句には、かゝる時間的要素が殆ど欠けてゐる。分析せられた意識は、律動的に統一せらるゝ余裕がないのであるから、分析せられたまゝの形によつて、読者に、読者の心理の中の統一を要求するのである。これが、俳句が二文一首の特性をもたざるをえぬ理由で、詩の本質としてのリズムが問題とせられること極く少い詩形であるといはねばならぬ。この分析のまゝで残つてをることが、俳句は思想詩であるといはるゝ所以であるが、実は詩そのものが思想詩であることをおもへば、かゝる定義は意味をなさない。それ故、思想的分析作業の露出した詩形といはるべきなのである。それ故、統一が読者に要求せられるのであるから、俳句の評価は、人によつてまち／＼で客観性はまことに少い。俳句に多くの宗匠が出てそれぞれ己が流儀を絶対として分派列立これより盛なるはないのは、こゝに原因がある。かういふことから、筆者はことに最近俳句に多くの価値を見出せなくなつてをることを一言しておきたい。この俳句が象徴の文学である、といはれてゐる。象徴といふのは、これでも知られるやうに意

識内容の追及が思想的分析作業にとどまつて、最後の総合統一に至らぬものをいふ。言葉をかへていへば、統覚作用の弱力の詩的露出を意味してゐる。俳句が徳川時代の詩人、芭蕉によつて詩としての価値を与へられたといはるゝのも、考ふべきことであらう。統覚作用の支配的動作を伴はぬ表現は、能動的精神を失つて技巧に走り説明にをりがちである。

象徴詩として引用される蘇東坡の『盧山烟雨浙江潮、未到千般恨不銷、到得還來無別事、盧山烟雨浙江潮』が、全く弛緩した語調によつて説明に墮してをることは言ふ迄もないが、大燈国師の遺偈と道元禪師のそれとを比較するもよい。

截_二断_一仏祖_一、吹毛常磨_一、

機輪_二轉_一処_一、虚空_二嚙_一牙_一。(大燈国師)

は、裁_二断_一仏祖_一、吹毛常磨_一、といふあたり、端的に思想するところを表現してをるので、蘇東坡のものよりははるかに価値があり、到底比較しうるものではない。しかし、虚空_二嚙_一牙_一は明確な概念をもつて規定してをらず、象徴に終つてゐるところに、その語勢は簡潔高調であるけれども、臨濟雲門派通有の思想的弱点が閃見せしめられる。之に反し、

五十四年 照_二第一天_一

打_二箇_一蹄_二跳_一、触_二破_一大千_一

嘆

渾身無_レ著_ル 生_ハ 陷_ニ 黄水_一 (道元禪師)

の遺偈は、禪家として象徴的手法の残存は否定できぬとしても、五十四年、照第一天といひ、渾身無著、生陷黄水と終つてゐるところ、そのゆるびなき思想と表現とは、親鸞の『地獄一定すみかぞかし』をおもはしめる決意の直接表現思想詩として、決して単なる禪家の偈の通性たる象徴詩にははつたものではない。抽象的概念が緊切にして抑揚にとめる表現によつて、読者に直接的生命を感じしめる。かくのごとくして詩は、思想そのものゝ内容を表はすものである。

象徴詩は、表現の技巧の残存するが故に、価値に乏しいともいはれるけれども、以上の叙述によつて明らかなるが如く、統覚作用の不充分のために、意力の欠乏が意識内容を窮尽せぬ未完成の詩であるゆゑに価値に乏しい、といふのが本質的の解明である。未完成といふのは、詩として完成してをらぬことで、真の詩ではないといふことである。俳句で季題をやかましく言つて、故大須賀乙字氏も、そこに思想的解脱の拠点があるやうに説いてをられるが、筆者はその論拠には疑問をさしはさむものである。これについては他の機会に論じたい。又『回覧消息』号外で加納祐五兄が穩かに論じてをらるゝ横光利一氏の象徴論は、もとより乙字氏などに及ぶべくもなく、引例する要もないが、氏の文学の欠陥の基く思想を示して余りある。氏は『一たびその快感を知つたら再

びぬけいづることが出来ない」といふやうの淫靡のことばで象徴を讃歎してゐる。このことばのみで氏の文学の価値を論ずることは危険かも知れぬけれども、大した誤はなさそうである。文学の神様といはれるのは、かういふ氏の『無神論』からで、神様といはれることに愧ぢねばならぬ筈である。氏の文学は、つひに今日迄すべてが試みの範囲を出なかつたのは、生の窮尽に努力をかいてをるからといへよう。

以上象徴詩の誤りを論じてきたが、人間の思想生活が複雑になると、短歌の如きものでも、表現に困難を感じることがあるので、それを、ことさらに短歌によみこまうとすると、一種の象徴詩となることがある。この思想的分析の複雑性をあますなく統一せしめたまうたものが、かしこくも『明治天皇御集』の大み歌である。かゝる見地からの研究も、少しづつ筆者は発表して来てをるが、他の機会に詳述することとする。万葉集時代より反省思索にかたむいて行つた詩人の傾向は当然の結果であるが、古今集に至つて全く統一の力を失つてしまつた。それが、源実朝の歌や明治維新の志士の歌によつて次第に統一を与へられ、つひに 明治天皇の大み歌に至つて完成せしめられたのである。御集の大みことばが、古事記のことばと対照せらるべきであるといふのは、その意味である。この意味で万葉は相当徹底せる批判を要するのであるが、その標準は『御集』に求

めまつる外はない。御製が決して万葉調でないといふことも、単なる御作風の問題としてのみ論ずべくもないことも注意せねばならぬ問題であるが、これについてもいま、到底尽されぬのを遺憾におもふ。而して、この短歌発展の歴史は、実に日本精神史そのものである。三井先生が、明治四十五年を第二建国時代といふ名称をもつて呼ばれたのも、古事記に直接対照せしめらるゝ精神が、現世に実現せられたことをいはれたものと解せしめられる。今日はこの第二建国創業の時代であること、こゝに説く迄もない。

本論、中ほどに於いて、全体意識について論じたのであるが、日本語でいへば、それは『無量のおもひ』である。それはまへにあるが故に後に実現せられ、かく連続不断なるが故に実存し、成就せられたことによつて原始的存在を推定せしめられるのである。もとより心理学的にいへば、全体意識は個人の意識である。しかし、それは個々の場合の意識作用を論ずるとき、といふ心理学の学術的任務によつて、その作用の法則を決定する為に仮りに設定された範囲に過ぎぬので、意識内容そのものは、全体生活の所産でなければならぬ。個人の意識中に包蔵流入して『無量のおもひ』として体験せしめられるものは、意識内容自身からいへば、それは民族の意識である。而して前述の如く、全体感情の前後照応といふことが重大問題であることをおもふならば、『明治天皇御集』によつて、古事記のことばと対照せしめらるゝ表現をえた日本文学の盛事を、われらは如何な

る言葉によつて讚歎したらよいであらうか。意志は実現せらるべきである。実現せらるゝがためにある。また現に実現せられたが故に、その実存を確認せしめられるのである。キリストが復活といつたのも、単なる神話の奇蹟の謂ではなかつた筈である。精神の復活、それは現実的に『意志の実現』である。何故に日本のみがかく意志を実現しつゝあるであらうか。人間心理の法則のまに／＼生成実存しつゝあるのであらうか。それは神の心であらう。それを分析し論じ推定すると、その論そのものがつひに表現の統一に至らねば、神意の冒瀆である。如何やうにも日本の国家威力を論ずるがよい。しかし、表現の法則統覚作用の存在は、神の心の命法である。統覚作用の発生原因は、心理学の問題を超出してをる生そのものゝ問題である。われらがかくして表現すべき対象として、宇宙人生と仮称したものは、実に『日本』そのものであつた。

筆者はこゝに短歌のみを、詩のみを論じてをるのではなかつた。詩とは何ぞや、と論じた事は、小説・劇・俳句・紀行等と比肩せらるゝ文学の一形式としての詩についての論ではない。いふべくば詩的精神、詩の精神、詩の本質であつた。それはまた文学、芸術の本質であり、人間心理の法則であり、歴史の法則であつたのである。詩的精神、詩の表現といふことが如何に重大の問題であるか、筆者の筆は、なほ到底つくしがたいことを痛感する。いまや、こゝに学術的論式はその限界に達し、詩が来つゝある。それは、われら現代国民の宗教であり、その經典は、『明治

天皇御集』である。

こゝにせまりくるものは、まことに無量のおもひである。この小論のつくしうるところではない。さらば、小論の完成よりも、分析せられざるが故に動作を誘発する全体意識無量のおもひのまゝに、再び思想し生活せむかな。第二建国時代の大業に参ぜむかな、である。小論の不備はゆるさるべき。諸兄、われらは、詩を興さうではないか、日本に生くる道として。

「明治天皇御集」研究

——「御集」共同研究の開始に当りて——

「伊都之男建」
昭和十三年一月号

日露戦争以上の重大難局といひ、文字通り前古未曾有の事変といはるゝ支那事変に際会して、われらは百たび千たび明治三十七・八年の明治天皇の御製またその他の御製を拜誦せしめられたのである。当時曠古の難局と称せられた日露戦争を大御身に遂行せしめたまひつゝ、おびた夥しき御製を遊ばし、その間の御製が『明治天皇御集』中に最も多数採録せられたる御事をおもひ、また、それらの御製が戦争のことに限定せられず、全人生のあらゆる事件に及びたまへる宇宙的豊

富を示させたまふことを拝して、言葉も心も及ばぬことを痛感するのである。

歌

世の中にことあるときはみな人もまことの歌をよみいでにけり (明治三十七年)

の御製は、実に明治三十七年によませたまへるものであつて、この御製さながらにあふれいでてつきざりし大み歌の数々が、畏かれども御創作の御体験に、見逃しがたき変化を示させたまふ契機となつたことは、実に意義あることと言はねばならぬ。近時国家総動員体制・広義国防といふことばが用ひられ、一切の国力を挙げて戦争目的に備へしめる必要に迫られつゝあるのであるが、明治天皇が三十七・八年の御製に、たづきなき山村の農夫のうへに大み心をそゝがせたまふにとどまらず、物言はぬけだもの、空の星、秋の虫、春の花、野の原までも、たぐひなき大み調によみたまへることは、その精神的意義に於いてこれをいへば、余すところなき一切の宇宙生命を抱納せしめたまひつゝ、戦争を指揮指導せさせたまうた御事を示すものである。こゝに、わが皇軍征戦の文化的積極的使命の明証がある。皇軍は実に、陛下の軍隊であり、大御心実現の機制であるからである。

雨中鶯

春雨にぬれたる花を見る人もなしとやひとり鶯のなく (明治三十七年)

梅花

おりたちて見るいとまなき春としもしらでや梅のさき匂ふらむ (明治三十七年)

雉思子

子を思ふきよすの声をあはれとは狩をたのしむ人もきくらむ (同)

樹間花

こずゑのみ人に知られて桜花こがくれながら散りやはつらむ (同)

花慰老

老人も多みさかえつゝ咲きにはふ花の木陰に遊ぶ春かな (同)

新樹露

この朝けひとむらさめや降りつらむ椈もみのわかばに露のたまれる (同)

雨中水鳥

ふる雨は霏みぞれになりて暮渡る入江に寒き水鳥の声 (同)

岩

天地のなしのまゝなるいはがねの姿はことにおもしろきかな (同)

古井

くむ人もたえし野中のふるるにはかへりて清き水やわくらむ (同)

野外旅宿

しづのをが声をまぢかくきゝてけり畑つゞきなる野べにやどりて (同)

竹

むらぎもの心むなしき呉竹はしらずくや千年へぬらむ (同)

籠中鳥

籠のうちにさへづる鳥の声きけば放たまほしく思ひなりぬる (同)

馬

足なみのかはるをみればのる人のこゝろを早くこまはしるらむ (同)

これらは明治三十七年の御製の僅か一半に過ぎない。早朝に出御あらせられ、夜は夜半を過ぎて御床につかせたまふといふ、言ことばにつくしがたい御繁忙と御辛勞のなかに、かゝる御製を幾千となく遊ばしたことを拝するにつけても、日本においては日露戦争がクラウゼヴィツツのいふがごとき政策遂行の手段としてのみ戦はれたものでないことを知らしめらるゝ。宇宙的憶念の実現が日本の戦争の特質であることは、幾千世にかはらぬ原則であるが、それは明らかに御集によつて世界に示されたのである。これこそ皇軍無敵の最後のよりどころでなければならぬ。

われらはこの『明治天皇御製』を、歌の見地から研究しまつらうとするものである。もとより御製は『聖の君のみこゑ』として、聖徳太子のたまふ『承詔必謹』の対象であつて、作歌技術上の見地からのみ研究しまつるべきではないこと言ふ迄もない。しかし一般に御製は教訓として拜誦せられる傾向があり、一方歌人の間には、却てあまり研究されてをらぬ有様であるといふことは、決して御製をいたゞきまつる正しい道とはいひ得ないのである。御製は元來 天皇の大御歌であつて、それは詔勅・憲法とも異なるのである。それは大御歌である。現人神天皇としての具體的御体験をよみいでたまひし大御歌である。それは超越的命法でもなく、具體的法規でもない。それは、『ときにつけ折りふれつゝ思ふこと』をのべさせたまうた大御歌であり、『ひとりつむ言の葉草』としてよませたまひ、これなくば『なにゝ心をなくさめてまし』とのたまうた詩歌の道である。それ故、御製の拜誦はつゝしみをろがみ帰依しまつりつゝも、大御心を具體的に大御歌の大御調に仰ぎまつるのが正しいのであつて、御製を歌として研究しまつることは、臣道の実践に外ならぬ。『天皇』と申しまつるとき、天皇の大御身には、分析概念としての『万世一系ノ天皇』と『自然人トシテノ天皇』との仮設的・二重性は備へさせたまふべくもないごとく、いま大御歌を仰ぎまつるにも、信順の対象としての大御歌と、研究の対象としての大御歌とは、分析離接すべくもない。われらの研究は信順の一念に基き、その信順を徹底せしめむがための詳密研究である。

もとより拙き心の及ぶべくもないが、拙き心にも、大御心をいたゞかしめられむことを念ずるま
まに研究を進めようとするのである。

歌

ことのはのまことのみちを月花のもてあそびとは思はざらなむ (明治四十年)

かく教へさせたまふ大御歌を仰ぎつゝ、われらは、『ことのはのまことのみち』に精進せむとする
のである。またその創作と鑑賞とを、『明治天皇御集』を中心に進めむとするのである。また詩歌
の研究が、つねに創作と鑑賞とを伴はしむることによつて達成せらるゝといふ法則の下に、『明
治天皇御集』の研究もまた、われらの一般的創作鑑賞と平行せしめられねばならぬこと言ふ迄も
ない。かく

ことのはのまことのみちを月花のもてあそびとは思はざらなむ (明治四十年)

の御製を拝誦しまつることによつて、われらの研究は導かれ、それはともすれば、『月花のもて
あそび』とならうとする現代短歌の欠陥を救ふべき、最も有力なる方法となるべきを信じて疑は
ない。

いま、かゝる研究に着手するに当つて、重要な問題となるものゝ一つに、『明治天皇御集』の年
代的区画がある。『明治天皇御集』は、一貫せられたる 明治天皇の御体験の集積であつて、その

一首々々をとり出して仰ぎまつるべきではなく、御集全体を拝誦しまつるべきで、一首々々の御製もかゝる心に拝誦しまつるべきであること勿論である。この御集全体とは、一貫的に開展せられたる御体験の表現であるから、平面的に全体として拝誦するといふことは出来ない。いま全体を通観しまつるに、大御調は幾度か徐々に又は急速に変化したまへるを拝せしめらるゝ中に、明治三十七・八の兩年の大御歌を境に示されたる変化こそ、最大のものである。

歌

天地もうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな (明治三十七年)

思ふことありのまに／＼つらぬるがいとまなき世のなぐさめにし (同)

ときにつけ折にふれつゝ思ふことのぶればやがて歌とこそなれ (同)

世の中にことあるときはみな人もまことの歌をよみいでにけり (同)

歌

戦のいとまある日はものゝふも言葉の花をつむとこそきけ (明治三十八年)

ひとりつむ言の葉草のなかりせばなにゝ心をなぐさめてまし (同)

新しきふしはなくとも呉竹のすなほならなむ大和ことの葉 (同)

むらぎもの心のうちに思ふこといひおほせたる時ぞうれしき (同)

この八首の御製が三十七・八両年の御製の中に拝せらるゝといふことは、かりそめのことではない。いまそれについてさかしげに謹解の説を弄することは慎しむべきであるが、

折にふれて

天てらす神のみいつを仰ぐかなひらけゆく世にあふにつけても (明治三十六年)

の御製を明治三十六年に拝しまつれば、日露の關係いよ／＼切迫し、東亜の天地にみなぎる暗雲たゞならぬ時、『ひらけゆく世』とのたまひしことの意義を、こゝに仰ぎまつらねばならぬ。ヒツトラーが、その自伝『わが闘争』の中に「戦備をとゝのへ、外交の手段をつくすといふことは第二の問題である、世界觀の確立こそ唯一無二の決定的大問題である」といひ、「それなくしては如何なる用意ものゝ役に立たぬに反し、これある以上一切はこれよりあふるゝ泉のごとく自然に目的に向つて統合せられる」と断じているのは、氏の苦しき世界大戦の經驗から出た言葉であるが、かしくも明治天皇が、明治三十六年に御製遊ばして『ひらけゆく世』とよませたまうたことを拝しまつれば、わが戦勝は、既にこの時に確立せられてをつたといふべきである。

而も

水

器うつはにはしたがひながらいはがねもとほすは水のちからなりけり (明治三十六年)

述懐

千早ぶる神のかためしわが国を民と共に守らざらめや (明治三十六年)

ひとり身をかへりみるかなまつりごととたすくる人はあまたあれども (同)

寄風述懐

ひさかたの空吹く風よひとみなの心のちりを払ひすてなむ (同)

等の御製を拝誦しまつれば、『世界観の確立』とは如何なるものであるかを、知らしめらるゝ。

かくのごとくにして、柔軟強靱の大御歌は、『いはがねもとほす』水のごとく、三十七・八年をへて極めて自然に大御調（じちまう）を変化せさせたまふのである。屢々引例せらるゝ日清戦争と日露戦争との両時代の軍歌の比較によつても、両時代の相違は知らるゝのであるが、『黄海々戦』のごとき御製軍歌の勇武壮快の大御調と対比しまつるとき、

夏草

事繁き世にも似たるか夏草は払ふあとよりおひ茂りつゝ (明治三十七年)

折にふれて

暑しともいはれざりけりにえかへる水田にたてるしづを思へば (同)

たへがたき暑さにつけていたでおふ人のうへこそ思ひやらるれ (同)

述懐

民草のうへやすかれといのる世に思はぬことのおこりけるかな (明治三十七年)

折りにふれて

石だゝみかたきとりでも軍人^{いくさびと}みをすてゝこそうち砕きけれ (同)

折りにふれて

さまざまにも思ひこしふたとせはあまたの年を経しこゝちする (明治三十八年)

原

山よりもさびしきものは限なき荒野の原をゆく日なりけり (同)

述懐

思ふことおほかる中にをりくはなぐさむこともあるよなりけり (同)

たゝかひのうへに心をつくしつゝ年のふたとせすごしけるかな (同)

末つひにならざらめやは国のため民のためにとわがおもふこと (同)

寢覚述懐

ゆくすゑはいかになるかと暁のねざめく世をおもふかな (同)

等の御製は、実に沈痛無比の大御調べを伝へしめたまふのであつて、国民生活の複雑とそれに伴

ふ生命分裂の危険にたちむかはせたまひつゝ、終に総合的統一的に、それを指導せさせたまひたる精神的御辛勞を拝察せしめられ、恐懼の極みであるが、かしこかれども、かくのごときことにこそ、われらは日本精神の文化的人道的実力を客証せしめらるゝのである。

この大御調は、明治三十九・四十年を経て、大御心もやゝ寛くわんがせたまひたるか、限りなき力をこめたまひつゝも、かろやかによみいでたまふかに拝察せしめられる。

後

ひとりして早瀬をくだすいかだ後にはかへりて波もかゝらざりけり（明治四十一年）

蝸牛

世のさまはいかゞあらむとかたつぶりをり／＼家をいでゝ見るらむ（同）

折にふれて

ものごとにくつればかはる世の中を心せばくはおもはざらなむ（同）

等とよませたまうたのである。しかも、明治四十四・五年に至つて、一層大御心は簡單化せられつゝ、つひに完成と申しまつるも及ばぬ宇宙さながらの大御調をたゝへたまふを拝誦せしめらるるのである。

夜木枯

大空の星のはやしも動くかと思ふばかりにこがらしの吹く (明治四十四年)

社頭冬月

さしわたる霜夜の月に冬がれぬ榊ごかきもしろし神のひろまへ (同)

河

岩がねをきりとほしても川水は思ふところに流れゆくらむ (同)

披書知昔

よむふみのうへに涙をおとしけり昔の御代のあとをしのみて (同)

折にふれて

むらぎもの心のかぎりつくしてむわが思ふことなりもならずも (同)

神社

いにしへの姿のまゝにあらためぬ神のやしろぞたふとかりける (明治四十五年)

折にふれて

しる人の世にあるほどに定めてむふるきにならふ宮のおきてを (同)

おもふこと思ふがまゝにいひてみむ歌のしらべになりもならずも (同)

なすことのなくて終らば世に長きよはひをたもつかひやなからむ (同)

こゝに年代の区分は、その分析作業の限度に到達する。これより先は、全く比較研究のなしうる
ところではない。われらは無窮につながる大御調を、たゞ宇宙に向つて求める外はないのである。
明治天皇の崩御は、乃木大将の詠じたるごとく、『神あがりあがりまし』た宇宙の儀式であつて、
その客証は御集である。こゝにふたゞび全御製をよみいたゞきまつれば、大御言葉のふしぐは
一層あきらかにいたゞかるゝであらう。

以上の叙述は、つたなき心のまゝに記したるところであるから誤多きことゝおもふのであるが、
これと言葉にのべまつらずとも、御製の年代的区分感・開展感を感得せしめらるゝことなれば、
御集の正しい研究とはいひ難いのである。この御集の年代的研究といふことは、明治時代の研究
と対照せしめらるべきであつて、今日迄、明治時代史の研究に、『明治天皇御集』を中心とする
ものゝなかつたことをかへりみつゝ、この点に關しても、いま御集の年代区分の研究を進めよう
とするわれらの努力の負ふべき使命をおもふのである。

『明治天皇御集』拝誦が、現代国民の必須の義務であること今更説く迄もない。またそれにつ
いては、なお詳細に論ずる機会があらう。いまはその共同研究について論ずべきである。

われらがこゝに年来の宿願たりし『明治天皇御集』共同研究を開始するに至つたことには、宿

縁の遠きをおもはねばならぬ。今回の支那事変がわれら青年に与へたる影響は大きいものがあるが、われらはわれらの協力の根本的意義について反省せしめられ、反省分析より出でつゝ、共同的精神生活の積極的行動を要求せしめられたことは、年来の宿願に着手せしむる動機となつた。いまは力足らずとのみいふべき時にあらずと、こゝに協力の実を現はさむとするのである。御集の研究は、元来共同研究が正しい道であつて、個人的のそれといへども、協力同信生活の体験によつてはじめてなさるべきである。何はありとも、われらが、こゝに御集の共同研究をはじめべき時に際会した機縁をよろこばねばならぬ。それはわれら同信生活の確信の表徴である。

われらは、こゝに一定の連続発表の後、全歌壇に対して御集共同研究の勸奨をなさむと目論もくろむである。それは諸教化団体による運動以上の効果を生むべきことを信じて疑はぬ。といふよりもその以前に、この運動が詩歌壇の内在的価値批判となるであらう。これは重大の文化運動である。猛烈にやるつもりである。ねがはくは、神のまもりによつて、この事業が正しく誤りなく遂行せられ、豊かに結実せむことを。さらに諸先生・先輩の御懇導を請ふ次第である。

詩歌

〔伊都之男建〕
昭和十二年三月

汽笛

ものゝ音消ゆる夜ごとに走りゆく汽車の汽笛のきこゆる悲しさ
寒空にするとき一こゑ生けるものなきてとびゆく如くおもほゆ
雄心をきよの病む胸床にふせあればつかれしむくろ生けりともなし
都さかりしわれにひゞくよ人乗せて走る列車のさびしき声は

鳥

くろどりの鳥とならむ夕ぐれの砂山につどふ鳥とならむ
つどひてはまたやすからずとびたちて夕空かける鳥とならむ
つちのへに餌あさるとすれどうちむつぶさまはみられず鳥のむれは
西日やまにうすづき野かぜふきはらふなかにさびしも鳥なく声
夕空にゑひしれし鳥そがはねをやすむるひまなくめぐりとぶなり
夜のとばりおりむ一ときなきさげびとびかふ鳥われはなつかし
星らいで空にまたゝけば鳥らは森のたかえにひそむか姿を
朝ときの風にこゝろをうごかさず夕べのみなく鳥こほしも
とこしへにさやけき声を青ぞらになかぬ鳥かも鳥なつかし

江の島ゆき

松のみどりわけつゝゆけばおつる日の春のごとくにあふるゝともしき
うみ近き松原みちははろかにて人にはあはずわれのみぞゆく
うらゝけき日てる青空あふぎみれば白雲もありわがゆくうへに
みどりはそのそふとなけれど春ちかみ松の葉色ははやわかやぎぬ
さねさしさがむの野べのさみどりに匂はむときをおもふたぬしさ
松ばらのうらゝ遠みち波の音もひゞききたらずふく風もなし
わき道をまかりいできしすなどりのおきな^{はだへ}のやけし膚なつかし
たくましき身はおいはてゝなにとなく竿かきゆくは神代おもほゆ
松なみのはてし砂原海にいづるみちのぼりゆけば国路ひらける

詩歌

江の島にて

よる波の岩にまつはりゆるやかにうづまくほどを見るがたのしさ
江の島の磯のへに立てば夕日さす相模の海のかぎりひゆくかな

〔原〕理日本
昭和十二年五月号

岩の壁きりたつ下にあたゝかき夕日あみをれば海はどよみぬ

詩歌 夜

〔伊都之男建〕
昭和十二年五月号

家のまはりは蛙の声の海だ

戸を練ると雨あがりの冷い夜気が入つて

くる、

月は雲の中か、

軒下にほの見える野づらに夜霧がたなび

いてをる

胸つまり

息がとまるやうだ。

初 夏

吹きとふく

初夏風に

さと、一とき

葉うらをかへす

庭木のむれ、

白き葉うらの

かへる一とき

すくとおぼゆる

さやけき胸、

またの一とき

まつほどに
みだるゝみどりの
風のゆくへ

蝶

わが庭の花ともしらに
いとほし蝶一つ、
風にさやく桃のむら葉
くよりてゆくも
ま白き姿、
おのれとまがふ

感謝

内心の複雑に堪へかねて
断続やむまなき感情の奔出、

こゝろもはろに
五月空。

豆の白花
いこひつ、しばし、——
やすむまもなく
とびゆきぬ、
風ぬち
みどりのうへを。

人類意志方向の加重するもとに
個体わが生の呪ひか、

内臓をうらがへす苦悶吐瀉は

生命を鎖尽せむとするを、

やうやく沈静し

かすかに意識を回復しつゝ、

現智の構成、実行の足跡に

意志発現の対象を見出さむとするとき、

友情にあふるゝ友のことばは

ふたゝびも心をゆるよ底ひより、

たゞよふ人生に、

同情は苦悶。

あゝ、友のたよりには

『君が歌誦して心のどよめきをいたく感

友のたより

ぜりそを押へむとぞ思ふ』

と記されたりき。

生の極点に

共発する矛盾、

なくさむることばなしと、思へど

信ず、

わがこゝろ

友に通ふと、されば

けふのおもひに

このこゝろよりたしかなるものなしと

友に告げむ、

この一ことを。

胸のいたみこゝだくたへてすぎしいま君のたよりをまたむとおもへり

砂原をたどるがごときわがために君はよするか一本さ百合

こまやかに記せるたよりいづくにもいつはりあらずたゞ一ことの
友をはなれひとりになれて友をよぶことばもわれは忘れむとせり
君のたよりうけてわきくるよろこびは夜ふけ泉をくみあぐるごと
くりかへしよみもあかなくとこしへの友にあへりと心に信じぬ
さびしきにこのよろこびにあひしから天さかりつゝ友をよぶかも
はろかにも君おもひつゝとづる目に近しむきたつ君のすがたは
なつかしきわが友遠くへなれどもくるしき心告げやらましを

詩歌

夕みち

夕ぐれの道をとほれば垣内より子供の泣く声もれきこゆなり
さき程もきゝこの声ながためにつふはいかなる悲しき日なるか
郵便を出すと我ゆく胸ぬちは晴るゝともなくとゞこほれるに
櫛の木の枝さしおほふ農家の裏の垣ぞひゆきつゝせむすべもなし
わがためにもけふは苦しくみだれたる心すべなむみちぞなかりし

〔伊都之男〕建
昭和十二年五月号

空たかき松枝ぞつねにあふげどもけふは道べの若木のみ見き
人の世のせばきいまさらおもほえて道ゆく足もすゝまぬ思ひ
まひろけきさやけき愛のこゝろよりあはまほしきよなによりもいま
けふもまたくるゝといふに泣きつゞるこゑをきゝつゝ家にかへりぬ
天てらすみ光よ人の生くる世のくま／＼までもさしてりたまへ

詩 歌

無題

そこばくのおもひしことの夢のごと消ぬべき時のいま来るらし
世をうれへ力をこひしときよりぞふかきまよひは起りしならむ
神をはかりとこよをおもひめぐらしてわが行く道はふたがりはてき
みづからの心のまゝにさだめたる道にまよはぬものなかるべし
うつし世にまよひにしから世をひとを呪ひしことばかたちとなれり
いまし／＼神のまに／＼ひたぶるにゆきなむときし世を忘れめや
やすきこゝろわれはいまえつ身をわすれ神ながらにも生きむとちかふに

〔原 理 日 本〕
昭和十二年八月号

ゆくべき道われに知らえずたゞひとつ身をわすれてぞ進まむとおもひぬ
わが力つきはつるときあらはれむ神のみ力いもうたがはず

もろくのけがれをさかりかしこまる神のみ旨のさながらならむ

小さき身のたえはつるまで祈るわが祈りに神もあはれませたまへ

すぎしことおもふいとまなし魂の緒もきれなむいのりさゝぐるいまは

もろくのわたくしのおもひすてしから神はみ力たぶと信ぜり(六・十二)

詩歌

月夜

〔原 理 日 本〕
昭和十二年十一月号

家も木もとほき林もしづまりて目にあきらけしまひるのごとく
門さすと外にたちでしが去りがてに照らせる月をうち仰ぎみぬ
大君の大みこゝろのしのばれて月の光のありがたきかな

けふ

み国おもへば忘れてあれどわが胸にみちくるさびしさはてしもあらぬ
一すぢのますぐの道のいやとほくいまは通へりそは目にも見ゆ

ありし日をふりかへりつゝけふのごとすべなきことはいまだあらざり
愉し日の一日なかりし年ごろをかへりみるいとますらいまなきに

のりと——み霊のみ前に（故黒上正一郎先生慰霊祭）

〔伊都之男建
昭和十一年八月号〕

故黒上正一郎先生の

ありし日のごとくほゝ多みたまふ御写し

糸の御前に

七周年のみ霊のみ祭りつかうまつらむと

友らと共に同じき席むしろに列りつゝ、

しきりにおもはしめらるゝひとことは、

われら先生のみ教うけしもの

またみ教仰ぎて友の誓ひを立てしもの、

この皇国すめくにの未曾有の非常時局に際会して

大空の疾風はやしのごとくに動揺せしもろく

のおもひを

動かざる巖のごとくとりすべて、

疑ひ迷ひなき確信のあかき心に

ゆるぎなき一体となりて

いま皇国が遭遇しつゝある運命を

おのおの心こゝろの底そこひに体験し、

もろともに一つ力と

み国のゆくてに果さむつとめを

明らけくせむことにこそあれ。

黒上先生逝きましてより

はや七年はたちたるが、

そは先生がわれらを集へて教へを述べた

まひし年月の

四倍に余る時間にぞある。

われ先生の逝きましゝ日の七日まへ

信和会の広瀬兄とともに

秋の色さびしき中山道をとほりて

徳島の先生の御家を訪れ、

御大母君の御憂より

先生の御床のべによるすべもなく、

わづかに襖ふすまをおしひらき

その隙間すきまよりくらき部屋ぬちに衰へたま

ひし先生の御顔を

それとなくをろがみて

せきあぐる号泣をおさえつゝ涙ながしゝ

悲しき思出を嚴肅に人生事実として

けふのみ霊のみ祭りに列りて

胸せまりいよゝおもひいづるを

おさふるすべもなし。

いま、北支那に南支那に

皇軍はいや進みゆくとき

日每われらの耳目をおほひて

伝りきたる将士の悲しき雄々しき

戦ひの有様をあまりにあきらかに見聞き

し

またはかり知れぬ国家生活の威力を体験

しつゝ

この敵いひかしき現実に直面して

わが心の中におしはかり来りしことのお
まりにも小さく、

わが心の力の及ぶべくもなきを覺り、
おごそかにこの事実に従順せむとする時、
わが心にいよゝ痛切に迫りくるは

このなき先生の御現身に

心の別れを告げまつりし時の消ゆべくも
なき思出なり。

人生の現実は全生命の感激を以てして
なほうけがたきかしこき神のみ心なりと
いまいよゝふかく知らしめられぬ。

そは分析の対象としての冷たきリアルに
はあらず

いのちをふる迄も忘れぬ記憶にして、
また

永遠につたへらるべき生命の問題とこそ
いふべけれ。

あゝ、いまこの席せきにつらなる友らよ

友らは現し身黒上正一郎先生の思出はな
くとも

黒上先生の全生涯の精神を体験すること
を得るなり。

そは、われら黒上先生のみ教に集ひし男
の子らの

この国家非常の時にあたりて
あきらけく思出づべきは

先生の国家の為に斃れたまひし御生涯な
ればなり。

それを確認しつゝ、
もろともに全生命をかけて

かしこき現実に、

国家的生命に、

随順せむと誓はむこそ

まことのみ魂祭りの心なるべけれとおも

ふなり。

先生ゆきましてよりわれら努めき、

力足らずわれもまた病みき、

病みし後はおこたりのみぞつとけたる、

いま思出は新たに

みな一つ心に力あはずべき時にあひたる

をいよゝ覚えて、

なき先生のみ魂のみ前に

まごゝろこめてけふのおもひを告げまつ

らむとす。

いままなほかしこきみ魂のわれらのうへ

に

いよゝみ力添へさせたまへと

こひのみまつる。

安らげくわれらの告げまつることごとを

きこしめせと

かしこみかしこみもまをす。

歌壇論評——子規の歌、茂吉の歌——

〔伊都之男 述〕
昭和十三年四月号

今更めくが開欄第一に左の一首から始める。有名な正岡子規の『藤の花』の初首である。

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたゞみの上にとどかさりけり

詞書ことばかきにあるやうに、『……あやしくも歌心なん催されける。斯道には日頃うとくなりまさりたればおほつかなくも筆とりて』の作で、俳句的ウイットの残存する技巧歌で、その技巧は改革者の不安を表徴している。一連の後に後書あとがきがあつて、『……病のひまの筆のすさみは日頃稀なる心やりなりけり、をかしき春の一夜や』とあるのも、かゝる不安を覆はうとする営みに過ぎない。このやうの満足が、諸作の『志気』に如何なる影響を及ぼすかは、先覚者子規の熟知していたところとおもふ。

しかるに、同じ明治三十四年『しひて筆を取りて』十首一連は、子規の一生を通じての絶唱といふを憚おそらない。五首を録せば、

佐保神の別れかなしも来ん春にふたゝび逢はんわれならなくに

いちはずの花咲きいでゝ我目には今年ばかりの春行かんとす

別れゆく春のかたみと藤波の花の長ふさ絵にかけるかも

くれなるの薇薔ふゝみぬ我病いやまさるべき時のしるしに

いたつきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ

而して、その後にもまた簡単な後書がある。「心弱くところ人の見るらめ」。この一句こそ、この連作の価値を決定するものである。「しひて筆を取りて」記した歌は、やむにやまれぬ気持であったのであらう。これあるがために、われらは子規を尊敬する。

これからまづアララギ派の批評をしようとするのも、その社会的勢力に敬意を表してゝあるが、そのまへに子規に対するわれらの態度を、こゝに表示して置く必要があつたのである。

アララギ総帥の斎藤茂吉氏の歌を今更評するのをかしいのであるが、本年正月号の歌に

普門院に行かむとおもひ行かざりしゆふまぐれにて歌乱作す

といふので、まことにその通りである。

脳病院火事としいへば背筋よりわれ自らの燃ゆらむとせり

これが氏の趣味である。「背筋より」と思ふので、首をすくめた作者の夢が惚ばれて面白い。「われ自らの燃ゆらむとせり」は、もとよりオドケである。「わが身」といはずに、「われみづから」といひ、故らに『の』といふ。「もゆるおもひす」といはずに、「もゆらむとせり」といふ凡て間違である。実感の去つたあとからその上に楽書きをして行くのである。

戎克ひとつ通りてゆけど誰も誰もかかはりのある面持もせず

『かかはりのある面持もせず』といふのが剽軽の傍觀者の創作でそれは結構であるが、かういふ場合『面持もせず』といふ否定に対応して『誰一人』という風に消極的に言ふべきなので、故らに『誰も誰も』といふのはすばやく一つ／＼の顔を見渡したといふ光景で効果的である。

冬園に入りわが来れば延びきりししろがね薄の穂立見つるも

でも、『入りわが来れば』としたところが一つのねらひ処である。「入り」も他人ならぬ『われ』であるべきに、『入り』と言つて、『来れば』のみに『わが』と冠するのが茂吉流といふべきであらう。「入りて来れば」だけでよろしい。しかし、『入りわが来れば……穂立見つるも』では間違である。薄の穂を見た過去の自分の動作などを感歎的に詠むべきではない。この歌はナゾ歌である。それは他人に同情を求める為、故らに余情を見せようとするので、反対に『冬園』とか『延

びぎりし』とかは言ひ過ぎであるが、作者の目的は同じである。かういふ媚態にはわれ／＼はひつかゝらぬのである。

園のうちに入りて来ればしろがねの薄の穂立ち我は見にけり(又は、日にきらめけり)等とでもしたら歌にはなる。

しかし

おしなべて冬さびにけり瑠璃色の玉を求むと体かゞめつ

アネモネは春さく花といひしかど冬の光に咲くもかなしも

などは、氏の先師伊藤左千夫の嚴重にしりぞけた晶子調である。前の歌は、宝石でも買ふところであらうが、どこで何をしているのやらわかりかねる歌で、冬さびたことゝ何の関係も客観的には求められない。かういふのは、主観的の気分を歌として客観化しないで、強ひて他人の同感を得たいといふ下手なやり方である。哥沢とか小唄は皆こんな趣味であるが、同情するものは意気地なしばかりだ。

しかし一方に

戦線より便あるとき映画にて補充をしつゝ今も偲びつ

ひろ葉みな落ちつくしたる太木よりくれなゐの実の房垂りに垂る

などはよんでいて愉快になる。『補充をしつゝ』とある。戦線からのたよりを受けとつてニュースを見たい衝動を感じたのであろうが、この感情の『開展』が茂吉氏には反対に『補充』と感ぜられたのである。引切りなしに愉快であつてたまらぬのであろうが、世の中はさうはゆかぬ。『くれなゐの実の房垂りに垂る』それ迄の話だ。

氏の源実朝評も、氏一流の感心癖を縦横にふるつていて面白いところもあるが、肝腎の感動すべきところに感動してゐない。

ほのほのみ虚空にみてる阿鼻地獄ゆくへもなしといふもはかなしを『ほのぼのと』訓んでをり、(尤も氏の校による岩波文庫ではさうでないが)また強い歌ではないといつてゐるなど、見当が外はずれてゐる。

里みこが御湯たて笹のそよ／＼になびきおきふしよしや世の中

なども感心せぬらしい。こんどはこれ位でとゞめる。追々全歌壇を批評してゆく。『童馬山房夜話』三十五の『歌の批評』の一文はよんだが、さうであらうとおもつた。僕らは違ふ。批評も、つながりをつくる生の道である。

「維摩經義疏」研究

「伊都之男」建
昭和十三年四月号

——人生の共感より出発せる精神生活の行くべき

方向とそこに越ゆべく現はるゝ段階とは如何——

人生は悲劇であるといふ。しかしそれは畢竟悲劇を解し得る人、といふべからずんば、悲劇的精神を体験せる人でなければ理解し難きことである。それは、人生の属性を定義したものでなくして、事実であるからして、悲劇、劇であるといふのである。

聖徳太子が維摩經義疏の初めに、聖人が法を説き衆生を救度するに必ず正常的説述の前に序を設ける意味を説かれて、その『理既に深微なり』と仰せられ、『第一に先づ殊常の相を現じて物をして樂ひを生ぜしむ。此序事を現はすは必ず、正宗の為なり。物の樂ひ既に成じぬれば理また須あること無し、云々』と仰せられてあることを読みまつり、今更気づかざりし深意を仰ぎまつて心の戦きを禁ずることが出来ない。

『先づ殊常の相を現じて物をして樂ひを生ぜしむ』と仰せられるゝ。殊常の相、それは人の心を捕へるのである。太子はまづ殊常の相を仏の説法に見出されたのである。太子が仏の教説を人

生の解説と見給うたのではなく、その心理的表現に注目共鳴されたのであると拝察せしめらるる。

『殊常』は、いふまでもなく人生の常態に非ざる特殊の事態である。それはまたいふべくば人生の異常なる断面であらう。しかし、かゝるものゝ連続こそ人生である。『常』とは、『思惟しえらるゝかぎり』といふことゝいつてもよろしからうか。しからば『殊常』は、思惟を超出しようとする人生の事実である。我らは如何に心を打たるゝ事件のこの世に多きかをおもふ。ゆきかふ人の一瞥をかはずに過ぎぬ眼底にも、悲喜の運命の言ふべからざる表示を見る。『思惟し得られぬ殊常の相』こそ、人生の真実である。心をこめて見よ、而して人生の『殊常』を知りえぬ者ではない。

事実直面することが、『殊常の相』を知ることである。経文は、一般形式に従つて不可思議の現相をもつて始まるのであるが、実は人生そのものが、殊常のものであるからこそ、かゝる経文の暗示する内容の価値が高いと知るべきである。シェクスピアの四大悲劇の心を戦かしむる表現が、如何に人間性の永久的根源的表徴であるかを思ふべきである。殊常の現実に直面することによつて、人生の意義を発見する契機が与へられる。『物をして楽たがひを生ませしむ』とは、正しくこの消息に外ならぬ。『物の楽たがひ』とは、人間の人生に対する無限の憧憬愛着願望であらう。而して『物

の楽ひ既に成じぬれば理また須^もふること無し」と太子は仰せらるゝのである。それは人生の唯一つの解脱^{げつ}の道である、とわれらは信知して居る。

悲劇的精神は、勇氣にとめる精神である。『殊常』といふ、『常』は、心理的にいへば過去の惰性であらう。まづ、その睡れる心をめさますことが、心理的に人生の出発点でなければならぬ。現状は打破すべきである。こゝに人間の悲しき運命が生れてくるのである。しかし、犠牲なしには何の生命も得られぬのが法則である。

勇氣は思惟の限界に立つことによつて生れよう。思惟すべからざる事実^{じじつ}に直面するが故であるが、それは思惟の自己廻転・自家分裂をゆるす隙も与へず、その真の機能を發揮せしめるであらう。勇氣を以て確信を宣説するは、正しき論理である。またそれが人生の正しき道である。

太子は、『解脱^{げつ}はこれ八地以上の権実^{こんじつ}二智なり』と仰せらるゝ。この『権』といふ一字を、ふかく味ひ奉るべきである。『八地以上の権実二智』と仰せらるゝのは、所謂、『実智』のみでは解脱ではないといはれたので、真面目の求道も、人生の事実をかへりみずに遂行せられようとすれば、必然的に人生の特殊の部分に執着することゝなつて、畢竟^{ひつぎやう}誤を犯さずにはすまぬ人間性を的確に示されたものである。『心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神やまもらむ』といふのは、人生の事実、ことに人間心理の真実を洞察せぬ余りにも單純の思想である。單純の思想は、人生の変

化に遇つて無秩序の感情を無涯限に波うたせ、意志の確實なる貫徹を不能ならしめる。又そこに複雑なる意志が作用することによつて、愈々初志と隔絶せる方向に流蕩してゆくのである。

人生の眞実は殊常の相であると気づくことによつて、はじめてわれらは生きむとする意志を貫くことが出来る。同じく仏国品に、『十力に因りて以て機を見、大悲に籍りて以て苦を抜く』とも仰せられてある。これは全く、『解脱はこれ八地以上の権実二智なり』のお言葉と照応するものであつて、機即ち人生の転変の相、またそこに揺曳浮動する個人の心理生活を正確に認識し得る大精神によつて、はじめて開展的人生の閉塞滯溜としての苦難を打開しえらるゝとの御示し、と仰がしめらるゝ。

名もなき民としての共鳴共感は、人生の戦闘に開展し、青年の性格は鍛鍊せられて、人生の實際にたへうる力を得しめらるべきであり、そこに、『八地以上の権実二智』が実現されねば、臣道の実感もそれを満足する内容を失ふことによつて、機械的解釈の末路を見出さざるを得ない。日本国体に随順する宗教的感激を、政治的生活の中に見出さうとするやむべからざる要求、また国体原理の信仰が凡ゆる生活の中に発現せしめられ、それが世界的日本の政治生活に実現せしめられねばならぬ、といふ、又そこに、最後の唯一の行くべき道を見出してゐるわれらの心の底よりの念願、これらのもので、これらのみ言葉の暗示せさせたまふところ深大なるを、いまさらに思ふの

である。上のみ言葉につゞけて、『理是かぜの如き深益じんやくあるが故に是の化変けへんを現ずるなり』と仰せらるる。『化変』が経文の何を指してゐるかはこゝに暫らく措き、化変の深益といふ、それはまことに稀有けうの御示しと仰がしめらるゝ。現状は打開せらるべく、細分せられたる国家的活動は、総合單純化せしめられ直接明快ならしめられて、そこに日本精神の宗教的・運命的、しかしながら、意志的・劇的表現が与へられねばらぬ。『化変を現す』と仰せらるゝ、それは『深益あるが故に』と仰せらるゝ。その解説はこゝになすまでもない。しかし、現在の日本に一つでもかゝる菩薩行があるであらうか、とおもふと、立ちどよむ心を抑ふるすべはないのである。

詩歌

嵐

〔伊都之男建
昭和十三年 月号〕

来れるぞ

風、

見よ

海原、

黒雲かしこに

嵐のしるしぞ。

帆を捲け

ゆけ

かためよ

部署を、

靴をぬげ

足ぶみ

たしかに、

すばやく

動け、

舵を

船むけよ

黒雲さして。

波立つ

波立つ

船ゆれ来、

風まし来、

たゞならぬ

気配

海面うみづらおほふ、

嵐、

嵐、

もち場はよきか

いざも漕げ

いや漕げや、

つゝのる風

たほせ帆柱

船のへのもの

捨てよ

投げよ

海ぬちに、

転まぶな！

波来ぞ!

足さらはるな

音!

風の音、

なをを叫ぶぞ

われに聞えぬ

こよ、

耳に口つけ

叫べ、われに、

船底?

重荷か

捨てよ

いま

直ちに下りて

おそるゝな

舵とるぞ、

心一つに

部署をはなるな、

船かろくせよ

いましぼしぞ

おそるゝことなし

船は一つぞ

心くぢくな

部署かためよ

漕げ力のかぎり

あと一ときぞ!

船足つきぬ

漕げや漕げ

船はかろきぞ

波せまる

波せまる

波来、

いざ越ゆるぞ

水底おつとも

おそるな、

いく波

すぎたり、

波の力、

こえずば沈まむ、

船きしむとも

水入るとも

おそるな、

くらし

くらし、

姿見失ふな

去りゆく

嵐、

見よ

船じり、

黒雲さかる

さかりゆく、

いましばしぞ

漕げや漕げ！

「明治天皇御集」を「古事記」と照応せしめつゝ
 拝誦すべき理由について

「伊都之男」建
 昭和十三年五月号

『永遠の生命』といへば、哲学的思索に拘泥しやうい危険がある。むづかしく考へず作らずに生くることである。そこに生活々動に伴つて自ら体軀からあふれくるものが、歌である。ウタはウツ、ウツタフと同一語源よりいづるとされてゐるが、神代の国民生活には、知的分析は発達してゐなかつたから、歌が生れ又記憶されることは、数量的に今日程容易ではなかつたと推定せざるを得ない。ウタがウツといふ動作的意識を伴つてゐることから考へても、又古事記の歌謡から見ても、後世の詩歌にみられる単なる感情表白歌といふものは、神代にはなかつたと見てよいであらう。所謂已むに已まれぬ実行を用意する全身的动作意識が、歌の基底であつたのである。かやうの時代には、動作と歌とは不可分の現象であつたので、従つてそれらの歌は、故らに記憶されることはなかつたとおもはれる。たゞ、何人も遺忘すべくもない歴史的国家的事件を記念する歌のみが記憶伝誦されたのであるが、その歌は、当然事件の中樞にあらせらるべき天皇の御製、または皇族のお歌であつたと推測される。その御製や御歌は、特に個性的であるからといふ知的原因からではなく、国民生活そのものゝ表現として、国民は、その御製やお歌に生命を托さうとする全生活意識的根

源から記憶伝誦しまつりしとおもはれる。神代に勅語が一切の国家生活の源泉であつたといふことは、かういふことから確定せらるゝことである。古事記序文に、『帝紀及び本辞』を記しとゞむべきを安麻呂に詔したまへることが記されてあるのも、以上の理由から当然のことで、その帝紀や本辞が専門家の恣意によつて創作伝誦されたとは考へられない。かういふところに、『明治天皇御集』を古事記と照応せしめつゝ拜誦すべきことの意義が暗示せらるゝのである。

『古事記から現代までには、万葉・古今から新古今と経過しているが、万葉の歌は、その形式の整美といひ、回顧の歌の多きことに見らるゝその内容といひ、已に古事記を遠かること久しいものである。殊に平安朝以降の反省思想化過程を経験している現代、それは中世などゝ比較すべくもない複雑の人間生活であるから、單純に古事記にかへることを望むべくもないが、たとへば『明治天皇御集』の

月前卯花

卯花うのはなにくらべて見れば夕月の光はくらし木がくれのには (明治四十三年)

雪中遊興

わらはべがつくりあげたる雪の山高き功いさをを誰と定めむ (明治四十二年)

教育

いかならむときにあふとも人はみな誠の道をふめとをしへよ (明治三十九年)

柱

檀原かしはらのとほつみおやの宮柱たてそめしより国はうごかず (明治四十二年)

等を拝誦すれば、御製を拝誦することの古事記と応照せらるべき意義は、明らかにせらるゝのである。これらは、天皇の直接の賞罰・勅命・御宣言であつて、決して單純の個人的諷詠・告白等と同一視さるべきものではない。

要するに西洋の文芸復興からの個人主義が東洋に波及し、日本の国民生活に迄も重大の影響を与ふるに及んで、人類生活の開展を閉塞固定せしめたに對して、それを打開すべく苦悶してをるのが現代、世界史である。個性、個人主義等は、人間生活の歩みを止めたといふ意味に於いて既に過去のものである。之に對しヒットラー、ムッソリーニ等の活動が日本國体を憧憬しつゝ着々勝利をえてゐるのが、世界の最々近状勢であり、そのヒットラーは、国民生活に於いては命令するものは唯一人にて足り、服従の道德養成こそ主要なる問題たるべきことを、『我が闘争』の中に説いてをる。個性の發揮といふことは、畢竟は生命の濫費にをはる外はない。經濟は生命の蓄積であるといへようが、その範圍では、統制が緊急の要務となつて來た今日、明治維新のための大政奉還・藩籙奉還のごとく、極端の絶対私有権は奉還さるべきを唱へられてゐる。しかし、本来的には、こ

とばの奉還でなければならぬと言ひ得よう。「朕わが聞く、諸家の賈もとる、帝紀及び本辞、既に正実に違たがひ、多く虚偽を加ふと。今の時に当りて、其の失あやまりを改めずば、未だ幾年をも経ずして、其の旨むね滅びなむとす』の詔みことりは、そのまゝ今日も仰がしめられ、いま詔をかしこみて日本語を正すべき時であることをおもひ、それが経済的にも改革の原理となることをおもふのである。この国家的事業は、御集と共に古事記を拝誦するといふことに、中心が置かれねばならぬと信するのである。

四月末日を以て凱旋の大川内前上海特別陸戦隊司令官が、平生おとなしい兵が一番勇敢であることを発見したといひ、強い責任感こそ、近代戦の英雄を生んだものであることを痛感したと語つたことは味はゝるべき言葉である。戦争の文化的意義をおもふならば、この一言は、やがて現代ことに来りつゝある時代の文化的特徴を予言し、その時代の開展枢軸はいづこにありや、を暗示してゐると言はねばならぬ。さて、われらの国民的文化的任務は如何、その具体的遂行方法・教育方針は如何、これが小論の言ひかつ言はむとするところである。

詩作漫言

「伊都之男建」
昭和十三年六月号

人間の生は、決して巨大な哲学大系に支配されるものではない。却てはかない一時の感情々緒によつて支配される。例へば親に対する孝といふことも、わが為にはかつてくれる親の一心をふとその後姿に見とめた、といふやうなことに、体験の基礎がある。君の為に忠をつくさうと念ずる、又神のまもりをこひいのる消え入るやうのおもひが、真の忠誠信仰である。詩はこのはかない感情を永久にとどめようとするものである。そのはかないといふことは、詩の新鮮さの決定的根拠である。

対象について分析し、それを克明に表はして行くのは写実である。思考感情の因習を打破するのに利用される。しかし詩の本質はさういふところにはない。はかないおもひに一生をかけて、それを自主的に完全にうたひはらさうとするのが詩作の根本的動機でなければ、その詩には価値を附しがたいのである。「一筋の矢にも、年のいのちをかくる武士の意地」と琵琶歌にある。那須の与一の日本史をかざる劇的功業は、この一すぢの矢にも、年のいのちをかけた点にある。

詩作はたゞ自己のすべてを神にさゝげること以外にない。さうして、この目に見えぬはかないおもひを対象として分析するのではなく、主観の全一的表現として歌ひはらすべく、緊張と忘我の瞬間を求め祈り、さうしてその持続を努力する。あらゆる不用の言葉をはらひすてゝたゞ一つのことばを選び出してゆく、これが決死の努力によつてのみ得られることは、詩作が内心の戦で

あることの証拠である。

かくして成つた詩には、主観それ自身の力がこもつてゐる。それは生命そのまゝの流露である。そこに音楽的抑揚が自然にそなはり、それをよむものに全身的力の躍動を覚えしめる。これではなくては詩ではない。心はたゞ一つしかないのである。その心の進む道もまた一つより外にない。その道が詩であるから、詩はたゞ一つのものである。一つであるからこそ、人を否応なしに引ばつてゆく力があるのである。世には詩が欠乏している、人はよく餓え死なぬものだ。

詩歌 雨

〔伊都之男建〕
昭和十三年六月号

あゝ

なつかしき雨、

木の葉にかゝり

砂にしみゆく

やわらかきその音、

いらだちし心

なごめむとか

すきまなく

ふりしきる

今よひの雨、

言もなく

ひたかゝる――

耳をすませば

夜空をこめて

おち来る

はてもなき雨、

と、

心うつ

雨垂の廂ひましをたゞく

いそがしき音

あゝ

なつかしき雨

いきもつかせず

ふりしきる

今よひの雨、

ひとり家ぬちに

ぎゝ入るわれに

またなきいこひ、

あふれゆくかも

よろこび

はてなく。

さびしき胸に

ゆくりなく

せまりしおもひ

あゝ、

この雨のごと

なつかしき

をとめあらばと。

詩歌

歩む人（オーギユスト・ロダン作）

幅ひろの胸ぞおしくるふたあしの力こもれる足踏あしづみもかろく
おきふしの土ふみきたるこのあしのいや進む力とよむかこゝに
いやすゝむ足はも土ゆぬきたてる大木とよりて身をさゝへたり
二あしのつがひのうへにたくまשיき胴かたぶかず天にそゝりたつ
頸もなくかひなもあらぬこの人の歩みはつひに国さかまでも
確信の身ぬちの力としめす光のよりあひあたりをすべつ

詩歌

隣人

朝はやく母におくられなりはひのつとめにいづるをとめごあはれ

「伊都之男建」
昭和十三年二月号

「とが」
昭和十三年一月号

夜ごとおそく帰りきたりて戸をたゞき母をよぶこゑきこゆるかなしさ
ひきいるゝ母のことばのやさしくもする一とき何にたとへむ
ひそやかに語らふらしきこゑすれどやがてたちまちそれも聞えず
母と子のふたりのみして世をおくるおもひはわれもかはらぬものを
外にづると装ひこらしむたれどもさびしき面ざし車ぬち見し
よき人にはやく嫁ぎて樂し世をおくれとわれはこゝろに祈りぬ

詩歌

列車

ほのぐらき玻璃窓うちてとびさりし光の玉に心奪はれつ
走りゆきし列車かなしも思ふまもわれにあらせず過ぎゆく時し
くもりたる窓をぬぐへば雨雲の低き野面は暮れゆかむとす
山際のかすかに白き西空にいまだ残れか夕べの光
ながれゆくいくらのともし雨空にうるみてつゞく見る胸いたし

〔伊都之男建〕
昭和十三年三月号

集れる線路てらすと蓋かきしたにこもりてかゞやくあかりのともしき
窓の外に賑しき光近づくとおもへば大船の駅に入りたり
外の闇ゆ戸をおしひらき明らけき車に入りきし人ら懐し
ゆれ出づるわが汽車駅をふるはせて後しごへにうつるあかりの群はも
よろづよに生くともはななくに夕汽車のこの一時をわれは味ふ

詩歌

無題

世すぎのわざあたへられてよりかゝなべてはや一月は走りすぎしか
確信を世に問ふときの近づくと勇みしいく日わすらえなくに
わが心かたぶけむ人いませども日ごとつのりくさびしきおもひは
現状に満足しをるもの共のほとくわれをとりまくごとし
うちもだえされど心に生き死にの戦ひつゞけし時のなつかし
現状満足は死敵なるぞともゝたびのやそたび日ごとおもひつゞけぬ

〔伊都之男建〕
昭和十三年八月号

とこしへに生きむねがひをもたぬちふしこやつこらは見るもいとほし
いはむすべせむすべしらずせまりくるこのさびしきに生き貫かむ

詩歌 夕

夕ぐれの野に立つ煙もよすぢのことくなくその煙はも
あか雲の遠山のへにのこりつゝ日は地そこに沈みはつらし
波たてる多摩川の水あをぐろくけはしき色にみちあふれたり
川べりをゆく人の子のかけみえずさびしきかなや冬の夕ごろ
さびし心かそかなぐさむわが汽車の母ます家路ゆくとおもへば

「学生生活」
昭和十三年十一月号

所謂「日本学」の建設と「帝国大学」改革

〔学生生活〕
昭和十四年五月寫

—— 大学教授の適格性についての正しき規定を大学令に挿入せよ
而して胎動する全国的学生運動の将来に刮目せよ ——

第七十四議會に衆議院に於いて、山道襄一氏外十七名によつて、「帝国大学爾正ニ関スル建議案」が提出可決されたことは、注目すべき事件である。それは建議といふよりも、決議といふべき性質のものであつた、と新聞紙も報道したのである。今や大学改革の要は世の定評となつた。それは動かすべからざる日本国民意志の断定である。姑息の手段を以て一時を糊塗しようとする程、根本的改革を要求せらるゝ結果となるところの決定的趨勢となつたのである。

しかしながら、如何にしてこの根本的改革を成就しうべきか。建議案は、「大学令第一条ニ改正ヲ加フルト同時ニ、各大学ニ日本学ヲ体系化スベキ講座ヲ増設シ、且ツ学生ノ忠良ナル国民性ヲ陶冶スルニ必要ナル施設ヲ為」すことを以て之を期せむとしてゐる。この中、大学令第一条の

改正は問題を衝いたものと言ふべきであるが、「日本学ヲ体系化スベキ講座ヲ増設」するといふのは寧ろポイントを逸失した嫌なしといへない。

再考せよ、本来「日本学」とは、如何なるものであるかを。

「学」といへば、いふ迄もなくそこに必ず研究の主体と客体とが分たれる。各種の条件によつて規定せらるゝ研究主体が、その一定の見地から、客体たる研究対象を分析抽象し、その概念を系列配置するとき、こゝに一定の学が成立せしめられる。この研究主体が依頼するところの研究見地は、もし研究主体が、真に宇宙的客観性をその学問内容に求むるならば、真に正直博大のものでなければならぬこと勿論であるが、研究にその基くところの見地なくしては、学問といふもの存在せざるべきことは議論の余地がない。況んや真の体系は、この見地なくしてありえない。この研究主体が、一切の対象に向つて、自己の研究を一貫徹せしむるための基本的見地こそ、正しく「原理」でなければならぬ。原理とは、まづ研究主体に関する根本的要件である。而してこの原理が、凡ゆる問題に於いて貫かるゝこそ真の学問である。

「日本学」とは、研究主体たるわれら「日本人」にとつて、原理「日本」によつて貫かるゝ学的体系でなければならぬ。それは断じて、「日本に関する問題を研究する学問」ではない。「日本の問題を研究する」ことは、ホットテントツトでもジョンブルでも可能である。しかしかくのごと

きは、決して「日本学」とは言へないのである。

日本学は、研究主体の「見地」の問題から出発する。それは大学についていふならば、大学教授の思想内容に関する問題から出発するのである。この意味からして、反国体思想を抱ける大学教授を処置することなくして、「日本学の体系化」を説くことの、如何に誤りなるかを知ることが出来よう。況んや「講座増設」のごとき、それは全く、枝葉末節を以て全体を誤るものである。

もし漫然と、「日本学ヲ体系化スベキ講座ヲ増設」するがごときことがあるならば、その「日本学」は、「日本を研究対象とせる西洋の学」と化し去るであらう。何となれば、今日大学を支配する哲学は、十九世紀西洋哲学以外の何ものでもないから。かくのごとくにして、日本学は、かへつてその權威を失墜するのみである。われらは、かくのごとき姑息の手段をとることを欲しない。

全學術をして、日本の学たらしめよ。かくしてこそ、はじめて日本学は完成する。凡ゆる学者が、真の意味に於いて日本の見地からその研究を遂げるならば、そこに、或程度の不備未完成があらうとも、日本学は正しく成立したものと云つて差^{つか}間へない。それならば、凡ゆる学者をして、日本の見地に立たしむるものをこそ求めねばならぬ。これこそは第一要件である。

今日大学の最大の欠陥は、各学科に全く連絡を欠いてをるといふ点である。これが既に、真の日本学を興起せしむる土台を壊滅せしめてをるのである。実に法文経済学部に於て、国史国文哲

学憲法法理学等が全く一単位として、商品学羅馬法等と並列的に配置教授せられてゐる、といふ以上に馬鹿氣たことがあらうか。そこには、何ら主従輕重の關係がないのだ。而も東大に於いて、哲学は桑木啟翼博士、憲法は宮沢俊義氏、法理学は牧野英一博士、田中耕太郎博士らによつて教授せられてゐるといふ、かくのごとき根本的欠陥を正すことなくして、如何に日本学の創設をとくとも、それは全く空念仏にをはること、当然の帰結である。然り、學術は精神的交流によつて興る。法文経済学部一切の講座が、唯一原理によつて貫かれぬかぎり、帝国大学による日本学の建設は、断じて望みえない。而してその前提として、帝大の教授が真に帝国の危機を痛感して、日本の學術を振興すべく必死の努力を傾けて唯一信念の下に協心戮力せぬかぎり、それは断じて断じて望みえない。大学改革の要は正しく世の定論となつた。しかし、それは「學術的に」行はねばならぬ。河合・土方両成敗といふがごとき、政治的策略による形式的解決からは、何もも得られないばかりでなく、かへつて文部省の權威失墜を結果したことをおもふべきで、これは「帝国大学肅正ニ関スル建議案」に対する岡野龍一代議士の賛成演説にも正確に指摘してゐる通りである。「學術的に改革せよ」といふことは、岡野氏の「根本ニ触レズ、徒ニ表面的、形式的デアリ、動モスレバ政治的、法律的ニノミ」処置することをやめ、「學問、思想、世界觀、宇宙觀等ノ實質的、根本的問題」を論ずることからはじめらるべきである。われらはこゝに「帝

「国大学肅正ニ関スル建議案」に關連して、世の識者に向つて二つのことを提言したい。一つは大學令第一条改正と共に、大學教授の適格性に關する条目を加へること、いま一つは、胎動する全國的学生運動の将来に刮目せよ、といふことである。

大學令第一条を改正せねばならぬことは言ふ迄もないが、大學令には、教授その他奉職教官の資格について何等記してをらぬのは當を得たものではない。最近大學教授採用方法として國家試験を行ふべきことを論ずるものがあるが、それよりまへに、大學令に正確な適格性規定を設くべきである。その内容はもとより明確なる國體觀念、學問全体に關する正しき識見、國家現狀に対する総合的認識の三者で足りる。而して實際上の採用方法は、寧ろ自由に任せねばならない。何となれば大學は、學士の工業的生産のみを目的とするものではなく、國家最高の教育機關であるからして、大學教授の思想内容は、限定された國家試験といふやうの方法でなく、眞の意味の社會的批判に任せられねばならぬからである。

次に、日本學が、日本を研究主体とせることを眞に明徴にする學であり、それは全學術の広袤こうまうに於いて成立せしめらるべきものであるとするならば、各専門學術は、凡て一つの原理によつて統一せらるゝのみならず、相互に密接なる連絡を有するものとせねば、日本學の實際的成立は不能であり、日本學教育の效果は期せらるべくもない。しかしながら、各専門學術分野の密接なる

相互連絡は各教授の協力を俟つてするより外に断じて期待することを得ない。学問は、常に学派があつて起つた。真の日本学と雖も、また然りである。われらの見、また聞く事実が日本の事実である故に、この事実を正しく認識することをうるものは、真の日本臣民である。而もこの事実を正確に認識することは、日本の現在及将来のために、日本国体の原理と歴史の事実とに導かれつゝ、協力奉公の至誠心を激揚するものでなくては得て望めない。来るべき大学の全教授は、一つの同信団体たるべきものである。

しかしながら、かゝる協力と団結とが、今日の大学教授によつて実現せらるゝであらうか。その思想の依拠は全く異り、学問研究の経歴は各種別様であるところの、而して学者の当然の任務たる学術的論争を回避して、党同伐異を事とするところの大学教授群に、そも／＼かゝる大事が期待出来ようか。答は、言はずして明らかである。即ち否と。大学改革は、これら教授の苟合烏集を廃せぬかぎり結局出来ない相談である。されば大学改革は、一挙の問題である。

読者諸氏は、いま胎動しをる全国的学生運動を如何なる眼をもつて見てをらるゝであらうか。それは、諸氏の視界には遠き雲烟のごとく漂うてをるかも知れない。しかし純真の学生が、明確なる国民的信念と堂々たる学術の見識と明敏なる多数の頭脳と燃え上る意気とを以て、而も唯一の原理下に行はる意志を潜めて団結協力しつゝある。この未曾有の運動に注目せずして、諸氏

は、そも／＼大学改革を語る資格がありと自信せらるゝや。世界歴史に於いてなく、今日現下の日本にのみ興りをるところの、この未曾有の青年運動こそ、興亜の名を冠せらるべき実体である。大学改革も遠くあるまい。根源的改革は用意せられつゝあるのだ。

教育の意義は一変せり

——学生運動の必然性とその方向——

前号巻頭言に学生運動に関して本号発表を予約したが、今やその全貌を表示して世に問ふべきの時が来た。われらの確信は今や動かず、われらの決意は既に鉄石よりも堅く、われらの誠心のおほけなくも、心ある人々ことに青年の心情をその底ひより揺り動かさむとしつゝあるとき、時は正に来た。われらは今こそ思ふことの凡てを語り、ゆくべき道を明らかにし、確信のまゝに、しかしながら、客観的道程に依拠して一向直進すべきである。われらは凡ての人々と胸襟をひらいて、われら青年ことに、知識層青年学徒のゆくべき道について語り合ふであらう。われらは、こゝに十年の体験の上に、われらの今日選べる道こそ、日本青年のゆくべき唯一の道なることを確信する。われらは既に、全国数千の同志の心を結合してゐるのである。この精神的結合にまさ

〔学生生活〕
昭和十四年七月号

る青年の協力は、今日の日本に客観的に実在しない。それは否定すべからざる事実である。といふことは、拙きわれらの背私向公、承詔必謹の念願が、やうやくに青年の心に相通うた事実を意味するものと信じてゐる。それは神のまもりであると信受してゐる。それは現実に神意であつて、区々たるわれらの力ではない。それ故にこそ、それは時代の要求であるのである。それ故に、この事実を確信するであらう正しき人々に、要請せむとするのである、われらの道に共に来り会せられよ。われらの赤心の協力に力を藉したまへかし。われらの為すわざに、些いさかなりとも誤れるふしありと見らるゝ時は、衷情よりの戒告を發せられ、而してわれらの道を助けられよと。

さて、こゝに先づわれらの学生運動について語らねばならぬ。しかし、その歴史は既に十年を超え、その間の變遷には幾多の重要事実がある。こゝに先づ述べむとすることは、それらの個々の事実よりも、一貫徹透する精神である。それは何であつたか。

われらは運動の頭初より、人の心と心とを繋ぐことを目標として来た。如何なる學術も研究も如何なる施設も実行も、それが人の心と心とを結合することなくば、畢竟無に等しいことを信じて来た。これこそはわれらの絶対の信条である。満洲事変以後、教学刷新、国体明徴が唱へられてきた。しかし、それが終に如何なる効果を国民生活の上に及ぼしたであらうか。要するにそれが失敗に終つた根本的原因是、人の心と心とを繋ぐといふ最も重要な一点を鮮かにも忘れ去つ

てゐたことであつたではないか。

見よ、ヒットラーの行動があれだけの力をつひに成就した所以は、何であつたかを。彼は卒伍の中より奮起し、如何なる地位も、如何なる財力と権力とをも用ひずして、単身その戦を開始し、一片の赤心至誠を以て、同じき憂ひに潜める人々の心と心とを現実に結びつけて行つたのであつた。われらはこの殊勝誠実なる行動の中に、揺ぎなき国民的結合を成し遂げた根因を認めざるを得ない。われらの行動も、その方法と原理とに於いて異るところありとも、この一点に關してのみは全く同一である。

われらは常に、われらの行動を公明正大にしてきた。如何なる権謀も、智略も、ポリティックも、それらは遂に人の心と心との結合を左右するの力なきことを信ずる故に、われらは信ずるままを行ふことに、些かの躊躇も感じなかつたのである。この心の結合は、如何なる力を以てしても、之を破壊浸蝕すること能はざる故に、それこそ金剛不壞なる故に、われらはこの結合を隠匿するの要はなく、党派を組む必要は毫も認めなかつた。われらは、たゞ人の真心と真心とを結び合はせばよかつたのである。われらは、むしろこの赤心の結合を明示することによつて、いよ／＼その結合を大きく深きものたらしむることが出来た。それだけの簡單至極の、しかしながら至難のことを、実行することが、われらの一貫せる行動であつたのである。さればこそわれらは、

些かの不安もなく遅くともゆるぎなき確信の足どりを以て、この一途を進むことが出来た。而してこの比類なき融和と協力とを成就することが出来たのである。それは小さく起り、やがて大きく拡がり、また拡がりつゝある。しかし、スケールの大小は敢へて問ふところではない。何となれば、その方向さへ正しくあるならば、大きくなることは全く単なる時の問題であるから。

さればわれらは、他の如何なる集りであらうとも、それが誠心の集結である限り、それを見ることに無上の喜びを禁じえない。それは実際には同志である。われらは自他を分たず確信のあるところに協力する迄のことであつた。学生運動の将来はつねに身を以て当る、如何なる批判にもつねに身を曝して当る、まことの実行の外にとるべき道は一つだにないのだ。

それはさて措き前置が甚だ長くなつたやうである。こゝで本論に入らねばならない。そのまへに、例によつて質問を提起することにしよう。学生諸君、また学生たりし青壮年諸君、諸君は今日の学校が青年に喜びを与ふるものなりとおもはるゝや、又はそれよりも喜びを奪ふものなりとおもはるゝや。前号巻頭言は既にこの問を示してゐるのだ。諸君はいまや答へねばならぬ。諸君は既にこの問に対する応答を用意してをらるゝであらう。果して然らば答へられよ。伴りおもふ心なく、この何れなりやを！ 言葉にいでずとも、心の中に己れ自身に確然と答へられよ。

諸君は学校生活に眞の喜びのないことを認められる。私は諸君がこの事実を認めらるゝとき覺

えらるゝであらう慄然の感を想像せざるを得ない。学生は青年である。青年とは本質的に、未来に希望をもち現在に生の躍動を感じねばならぬものである。果して然らば、感激と歓喜とを「奪」ふことなしに、青年より歓びを失はしめる途はない。おもうても見られよ。全国に高等程度以上の学校の学生が二十万人ある。中等程度の学校に男女あはせて百数十万人の生徒が学んでゐる。この百五十万に近き選ばれたる日本の青年男女からして、数年乃至十数年の間の生命の桎梏を以て殆ど全く感激を掠奪し去るといふこと以上に、大規模な国家的罪惡が、今日の世界に日本の歴史の上に、未だ曾てあつたであらうか。われらはまづ何よりも、この事実から出發せねばならぬ。この事実を考ふることなくして、如何に教育改革を口にしても、如何に教学刷新を論じても、それは畢竟空論に過ぎぬのである。人間の生命を奪ふことは深重の罪とせられてゐる。しかし、百数十万人の青年からして、真に内面的生命を掠めるといふことは、罰せられようともせぬのである。それは、百数十万人の個々の生命ではない。実に国家的生命の劫掠である！

何故に学校教育は、生命の掠奪者であるか。言ふ迄もなく、その根本は、講義内容そのものにある。幾つかの分科の内容には何ら統一がない。相互の関係すらも考へさせようとしてゐない。国史と哲学との間には、かけわたす橋一つだもなく、法制と物理学との間には、張られた一本の綱さへない有様である。かくのごとき講義を、各々一つづゝ暗記せねばならぬ。それは学問としての全

体的系統を与へられぬから暗記する外はないのである。暗記することに大部分の時間を用ひることによつて、判断の能力は失はれてしまふのである。判断せぬ学問といふ奇怪な訓練によつて、自己自身の創意を窒殺し、学問の対象に選択を加へる能力を奪はれ、人間は、かくて機械となる外はない。世の秀才諸君は、正直に勤勉に学ぶことによつて、着実に過つことなき正確さを以て、自己自身を虐殺する道を辿りつゝあるのだ。私は、反国体学説を強制する美濃部博士の憲法を、堪へがたき憤りを以て聴講した経験をもつてゐるが、当時の九九%の学生は、これに何らの怒りをも感じえなかつたのである。彼らは既に奪はれたる生命であつたからである。

しかし、学校が生命の掠奪者であるといふことは、単に講義内容そのものにとゞまらない。それは、学校の制度についてもまた言ひうる。多くの学生は、みなその交友範囲を僅々数名のクラスメートにもつてゐるに過ぎない。彼らの語るべき問題は限られ、彼らの思索し体験する境域は、一人ゐてなすことゝ殆ど大差ないのである。かくして彼らの眼界はせばめられ、彼らの知識は、変化に処しえぬ学校教程を一步も出ない有様である。しかも学校当局は、かゝる傾向を喜び之を助長する。無責任極まる事無かれ主義から、学生をなるべくその学校の校庭に密閉しようとするのである。学校では、「君らは秀才である。君らは更に選ばれたるものとなるために、上の学校に入らねばならぬ。その他のことをする必要はない」と只管教へるのだ。この狭隘な生活から生れた偏狭

な精神こそ、実に救ふべからざる抜くべからざる個人主義である。もし、当局者が、憂国の士が、青年に到来しつゝある時代を担当せしめようと望むならば、まづこの根柢深き個人主義を抜き去らねばならぬ。そのためには、実に学校の高き校塀を撤すること以上に賢明の策はない。もし、所謂官僚独善の弊を矯むとするならば、学生に広き眼界を与へることこそ、なさねばならぬ第一義務である。

インテリはいけない、と言ふ。然り、インテリは、「時局に協力（この言葉自身インテリの用語である！）さへもしない」のである。しかし、私は単にインテリはいけないと言ふことの無意義なることを知つてゐる。それについて論ぜねばならない。

もし、インテリに共通した感情といふものがあるとしたならば、それは、積極性を失つた精神の発する音色に過ぎないのだ。同じ形をした箱が、どれもこれも同じやうな音を出すことゝ選ぶところは無いのだ。叩かれることによつて音を発する器物の音色に過ぎないのである。それは、本来「共通の感情」といふべきものではない。何となれば、共通することによつて動き出す精神的力の特色は、そこにはないのであるから。

かく器物化した原因はどこにあるか。凡て、学校教育にある！ それは暗記を強制して、柔かき若草のごとき青年の心情を、その二葉の時代に枯草としてしまつたゝめに外ならない。責任を

感ずる強い積極的精神は、既に根柢から無に帰してをるのだ。しかし、インテリ、教養ある指導層が、かくのごとき存在となつたといふ問題の重大性については、一般の被指導層と同一に考へることは出来ない。インテリはいけない、と言つて放置する。これが、実にインテリ式の消極的態度である。指導層を没落せしむることの重大結果については、なほ後に論ずることとする。

実際に於いて、今日の学生は何ら責任を有せぬのである。彼らは如何なることを考へようとも、如何なることを論じようとも、罰せらるゝこともなく、又自ら苦しむ原因ともならない。しかし、学問とは本来、人として生きむがための学問であるのだ。生くべくば、生の依拠がなければならぬ。それは実に責任である。その生の意義の重大なる人のためには、重き責任が課せられ、その生の価値高き人は、深き責任を感じつゝ生きる。さればこそ、責任感なくしては生くることが出来ず、生くるための学をなす能はざるこそ、道理であるのである。責任のない学校生活は、そのことのみで、真の学問を行はしめざる原因となる。

山鹿素行は聖教要録の巻頭に、「上古は君長皆之を教へ之を導く。後世は然らずして別に師を立つ。既に衰世の政なり」と喝破したが、今日の学校が、連絡なき学科内容により限定せられたる狭隘なる学生生活の上に、無責任なる方法を以て、学生の生活とは別の世界に止住する教師の隔絶せる思想より行はるゝ講義によつて完成せられたとき、如何なる結果が生ずるかは、今や言語を

以て表はしうる範囲を超えてゐる。

学校の「先生」は、何ら社会に立つて実際の指導をするものではない。先生方は、たゞ学生生徒を教へればよろしい。否たゞ学生生徒のノートに、何年乃至何十年以前に、生徒と同じやうに詰込まれたものをまぢ／＼のきたない筆跡で印刷すればよいのである。先生とは、実に講義案の「紙型」であれば足りるのだ。既に先生がかく責任の地位にない。従つて先生にとつては、生徒の人氣が生活の最大関心事となつてくる。これが、小学校はともかく、少くとも中学校以上の先生の形態である。またそれが学校の性質でもあるのである。

されば自ら国家に負へる任務をおもふでもなく、生の意義を痛感するでもなく、永遠に精神の醜き妥協を以てつゞけてゐる私事こそ、今日の学校である。それは眞の男子のなすべきことではない。一つの屈辱であり、怪事である。私の言ひ方は極端であつたが、もし、この事実を確認されるならば、諸君は憤慨を覚えらるであらう。堪へがたき恥辱を覚えらるゝであらう。しかし、私はそれこそが、時代の力であると信ずるものである。

学生諸君、諸君のこの已むにやまれぬ憤りこそ、力であると私は確く信じてゐる。否それは以下のべることくに、実に明らかな事実である。

嘗てある人が言つた。貴下は今日の学生を信じてゐるか。私は言下に言つた。私は信じてゐる。

る、私は人といふ人はすべて信じてゐると。いまこの質問を思ひおこすにつけ、多大の不満を禁じえない。かゝる不信こそ、学生の生命に対する敵ではないだらうか。私は学生諸君を最も深く信じてゐる。私はこのやうの害悪に対して青年の心情をまもらうと切願するのである。

上來現代インテリの無力さを痛罵したが、それは現代学校教育によつて救ふべからざる程に無力化された存在である、といふことに外ならない。私はかゝる状態に対して言ひがたき悲痛の感を覚える。われらの同胞がかくその生命を奪はれてゐる現状に対して、憤怒の情を覚えこそすれ、それに対して不信の目を向けることは断じて出来ないのである。だからこそ、われらはかゝる消極的存在たらざるべく、相共に努力せねばならぬといふのである。われらはわれらの生命をみづから守らねばならぬのである。それがわれらの学生運動の動機であり目的であつたのである。

今日まで学生の生活は、全く一つの特権階級であつた。如何なることを考へ、如何なることを表白しても、それは責任の原因とならなかつた、といふこと以上の特権はない。しかし、それはまた言葉をかへていへば、学生は無視されてきた、といふことであつたのである。つまり学生は、人の気づかざる世の偶にあつて、何時のまにか、その生命を掠奪されてをたつたのである。かくのごときことが、将来国家の枢軸に立つ者の魂の生成期に強行されるといふやうのことが、果してゆるされることであるのか。

この憤りに立つて、この現状を改革せむとしたものは相当にあつた。しかし、惜しいかな、その殆ど凡ては、外部からの努力であつたのである。外部からの努力といふことが、種々の障害を超えて内部に浸透するには、時間がかゝるのである。時間がかゝるといふよりも、その多くは内部に透過する力をもつてをらなかつた。教学刷新の努力が幾度くりかへされようとも、畢竟それが實質的に何の効果も学生の生活の上にもたらさなかつたといふことは、かゝる外部の努力が、真の内在的批判とならなかつた為めに外ならない。否、内部にも相当に多くの改革意図が表はれた。しかもそれらが、外部の条件や勢力関係の影響下に立つたからして、結局広大な連結となる力がなく、貴重な試みは凡て失敗に帰したのであつた。

いま真に学校教育の改革を目ざしむとするものは、真に学校生活の内部より起らねばならぬことを、われらは強調せねばならぬ。否本来、真の改革は、真の弊害体験者にしてはじめてなされることは、歴史の鉄則である。学校教育のみが、それから免れるといふことは出来ない。

前号筆者は日本思想史の特点を論じて、日本国民がその精神を他民族のために苦しめた歴史であり、それこそは、日本が世界文化の主体たる本質を表はすものであつて、この菩薩行に世界文化は融合統一せらるべき必然性を論じたのであつたが、それはまた言葉をかへていふならば、全世界人類の生活を、日本民族が身を以て体験した歴史の重大意義を論じようとしたのである。身を以

て体験するといふことは、実に容易なことではない。それはそれだけで、苦痛である。しかし、それが真の主動的精神の特長である。聖徳太子は、「大士はその身の苦を忘れて苦を同じうして化^けすることを明^{あか}す」(維摩経義疏)と教へ示させられた。それに従ふのが、日本思想史の使命であつたのである。——(「大士」は菩薩の意)

現代学校教育の弊を身を以て嘗^なめ、その苦杯を仰いだものは、あまりにも多かつたにかゝはず、その中から真の改革者が現はれなかつたのは、殆ど凡てのものがかゝる弊に対して精神を屈してしまつたからに外ならない。学生の殆ど凡ては、学校がつまらないと言つた。けれども、彼らは苦しいとは思はなかつた。この真の苦しみを感じなかつたことが、精神的主動力をもつてをらなかつた証拠であり、その故にその生命を奪はれたのである。それは、学問をする上の致命的自家障害である。

身を以て体験するといふことは、実に人生の意義の最重要点ヴァイタルポイントでなければならぬ。古来悟道といふことを言ひ、救ひといふことを説いても、自ら得ることなき悟道、他人の實行によつて代行せらるゝ救ひといふごときものは、未だ曾てありえなかつた。宗教がさうであるばかりでなく、芸術においてもまた代作といふことが許さるべくもないのである。模写もまた、その価値に於いて全く問題とされえない。実に自ら人生を体験することなくして生きむとすると

いふことばは、それ自身死しつゝ生くるといふと同じき根本的背理でなければならぬ。身を以て体験することには、しかし勇氣と共に愛念が必要である。抒情詩は、みづから味ひし精神的動搖を、偽ることなくその凡ての範圍に於いて表白することであつて、こゝに人生の秘奥は傾尽せられようとするのである。

もし身を以て体験せぬことであつたならば、その行ひは凡て虚偽となるであらう。それは、心底よりの叫びでもなく、生命の欲求でもない。かゝるものを以てしては、人の心は断じて動かすことは出来ないのだ。そこには、共感を導く何らの道程も見出されぬからである。人は單純に、「よいこと」といふだけの事実に動くものではない。人の心は、誠心によつてはじめて動かされる。これは磨滅しえない古今の鉄則である。

現代教育の改革といふことも、その弊を身を以て体験したものにしてはじめてなしうる。その弊を身を以て体験したといふことは、その弊害に対して堪へがたき苦痛を味ひえて、而もこれに反撥する勇氣をつひに失はなかつたといふことに外ならない。真に苦痛を味ふには誠実にして敏感の魂でなければならぬ。而も、之に反撥するのは、真の勇者でなければ出来ないのである。而して真に苦痛を味つたものは、真に反撥の勇氣を得る。また真に勇氣のあるものにして、はじめて真の苦しみを味ひうるのである。かくのごとき人の心は、やさしくしてまた強い。それは真

に優しく、それ故に真に強いといふことである。

かく体験しえたものは、その誠心と勇氣と哀念との故に、かふべからざる使命を有してをる。彼は正しく改革者として神の選びし人格である故に。彼は自ら選びしにあらず、人の選びしに非ず、神の選びし道に立てる人格である故に、その使命の重大性を最もふかく痛感せねばならぬ。

今や、全国の学校に学べる青年の中に、勃然たる共感の声がおこりつゝある。それは自らの身を以て、学校教育の弊を体験しえた学生の胸奥のおもひが、結合されつゝあるとよめきである。それは、つひに何人の力によつてともなく、連結するところに生れる誠の力によつて、自然に必然に、後退することなき力として、何人の力によつても之を滅殺しえぬ金剛不壊鉄石心として、生成し来つたのである。全国の学生の期せずして明確に自覚したことは、学校教育はわれらの手によつて、われらの誠心によつて、改革し遂げられねばならぬ、といふ極めて明白にして重大な一事実である。それは、学校をストレインヂヤーと考ふことの出来ない者が、自らを改革せむとする悲壯の念願を以て、生死を賭して実行せむとする意志である。人々は再思せねばならぬ、かゝる意志が結合し生長しゆきつゝあることを。凡ての人は注目せねばならぬのである、かゝる誠心の団結が拡がりゆくことの史的重大意義を！ この自覚と団結とが、真の意味の根本的改革の潜力、時代の動転の契機であるといふ今日最も重大なる事実、人々は目を覆ふことが出

来るであらうか。私は信ずる、それは今しばらくは出来よう、しかし、間もなく断じて出来なくなる。

もしも、万一、かゝる誠心の結合を圧殺しようとしてもするならば、如何なる事態が生ずるか予定することは出来ない。何となれば、この結合は、日本思想史の必然性である故に。それに神の心である故に。またもし、かゝる誠心の団結に、真にふさはしき形を与ふることを拒否するでもあらうならば、同様にその進展する不可測の変化は、いまこゝに予言することは出来ない。人を殺すことが重罪とせらるゝならば、人の誠心の結合を殺すことは、言語に絶した重大罪悪であること言ふ迄もないのである。

この誠心の結合は、その発展性をその成立期に予約されてゐる。誠と誠とが結合するといふことは、極めて自然の阻止しがたい傾向である。この如何なる私意をも絶した必至の方向こそ、今日と将来との時代の力ではないか。これをこそ、われらは神聖なる用語として、実力の名を以て呼ぶべきではないのか。身を以て体験するといふことは、東洋の道徳でもあつた。孔子は、「身ヲ殺シテ仁ヲ成ス」と言つてゐる。仁といふことばを文化的生成力とでも翻訳されるとするならば、われらの決死努力は必ずや世界的文化の基底たるべきを疑ひえない。

今日は長期戦といひ、又百年戦争とも言はれる。それはとりも直さず、日本民族がその負へる尊

貴なる使命の故に、東亞諸民族と共に百年の鍊獄に投ぜられ、世界史未曾有の試練に堪へて、全東亞全世界の人類のために、新しき光輝を示現せねばならぬ時代が来た、といふことである。かゝる場合に於いて、全国学生のこの覚醒と悲願と団結実行とを、われらは日本歴史の転機に於いて、その世界人類史に対する内在的批判の根源的形式として、認めざるを得ないのである。それには次の三つの意味が含まれてゐる。

まづ、今日の学校教育を通じて一般知識階級の思考形式が、欧米の対日本侵寇過程に対して、そのままに内応してゐることを忘れてはならない。分裂せる学課内容と継ぎ合はされた知識の断片、暗記強制・秀才教育と非能動的・消極的知識階級の性格、実験演習を用ひぬ講義偏依教育と思想的無批判、宗教・芸術ことに詩的教育の欠如と人間の機械化、これらが西洋文明を摂取しなければならなかつた時代の痼疾的文化遺物であつて、支那事変前の旧時代のかゞやかしい象徴でもある。その内面からして、之に徹底的批判を加へ、実現の意志を以て改革を實行せむとするものが出現したことは、かゝる旧時代に最後の終止符を打つべき時の愈々来たことの証拠であり、言葉をかへていふならば、欧米の対日侵寇に対する最後の、しかし本質的徹底的反撃が開始せられたことを意味するものである。それは更にいふならば、世界史に於いて西洋文化が日本によつて、日本の指導層によつて、換言すれば日本の精神的精英能力によつて、今や完全なる批判が遂行せ

られ、その退却が決定されようとしてゐることを意味するものである。

次に、右の意義を一層確定するために、次のことを考へなくてはならない。それは長期戦、百年戦争の意味である。長期戦とは言葉をかへていふならば思想戦である。更に説明を加へるならば、長期戦を余儀なくされるために、日本国民には今や凡ゆる高級の知的能力を用ひ、而もそれを一貫して国家的全体戦に効果あらしめねばならぬ、容易ならぬ精神的負担が課せられてゐる。即ちその戦ひには、完全なる統一的思想力が用意されねばならぬのである。その用意を備ふべきものは、最高の知識階級の真剣なる努力以外にありえないのである。而も、それが百年の持続力をもつて貫徹せらるゝためには、内面的体験の苦闘によつて、打ち破りえぬ迄に鍛え上げられた真の勇者によつて実行せられねばならぬこと、言ふ迄もないことなのだ。果して然らば、現代教育の根源的欠陥に身を曝してよく之を凌いだ真の改革者に、この重大責務が課せられてゐると言つて、誰人が之に反対しうるであらうか。

更になほ附加せらるべき第三の点が見逃されてはならない。それは百年戦争は、それ自身一体として解決せらるべきであるといふ一事だ。その間のどの期間が大切で、どの期間は大切でないと言ふことが出来ないのが、長期戦の長期戦たる所以である。つまりこの事實は、いま眼前の効果にとらはれることなく、真に百年の効を望むべきである、といふ事に外ならぬのである。この百年の効

をめざすならば、青年の鍛錬以上に重大な要務は他に存しない。而して青年の鍛錬は、青年自身の手によつて遂行せしめらるゝ外なきが今日の事態であるのみならず、又さうすることによつて、時代の将来に真の内発的動力を期待すべきである。さればこそ、この青年といふ一体的階層の力によつて、その生命力によつて、はじめて日本が、真の歴史的転機の意義を充実に世界史に対する内在的批判を徹底することが出来るのである。青年とは、国家の一つの機具ではなく、部局ではなく、国家を構成する本質的生命の階次であるからして、国家は、その真の自発的發展を促がすことが自己自身の真の發展であることを認めねばならない。

私は、ほど不十分ではあるが、学生運動の歴史的必然性を概説したとおもつてゐる。しかしなほ、言ひおとしたことのあることをおもひ、現代教育の批判に再びかへらねばならぬ。

今日までの学校教育の形式は、準備と実行との截別せられた形式である。殆ど全くお役に立たない学校教育が、何らか存在の意義あるものゝ如くに神聖視されてきたことが奇妙なことであるが、ともかく、在学中は社会的活動の準備、社会に出てからは、教つたことの応用の期間と、二分されて、何ら怪まれなかつたのである。しかるに、長期戦と関連して国家全体戦の必要にせまられてから、愈かゝる準備と実行との両期間の区分が不可能となつてきた。先づ今日迄の所謂準備が、如何に役に立たぬものであるかを、国民は日々の生活に直視せねばならなくなつたのである。実行を

用意しない準備といふものが、永久に準備に終つて、遂に実行にうつりえない実情こそ、最もよい教訓といはねばならぬ。いまや、準備しつゝ実行し、実行しつゝ準備を整へねばならなくなつてきた。凡て分れたるものが相合するところに、眞の価値と意義とが生れてくるのが、長期戦の恩寵であると共に、新しき時代の力の発源である。かくて学校と社会とは、相分れたる存在たるを許されなくなつてきたことを確認せねばならない。

この準備と実行とが相分れざるに至つたことは、とりもなほさず、導くものと導かるゝものとが相分たれなくなつて来たことである。今や日本国民は、この分析せられたる二つのものを、一身の中に、即ち身を以て体験実現せねばならなくなつた。これこそは、本来一体たるところの青年によつてはじめて望みうる事業である。然り青年は一体である。いまこの意義を説かう。

青年は一体である。青年の心情は、区々たる部分的経験によつて区画されてをらぬ。それだけその将来にもつ憧憬は大きく、友との共感の度は深い。青年が一つの層をなし、一体として国家生活の中に特殊の存在をなしてゐる所以は、こゝに存する。例へばそれは、決して商業、工業、農業等と分つやうの職業的区分によつて分けられない。またそれは、知識の高下、まして貧富の差によつて本質的に分けられてをらないのである。かく青年は、正しく一体である故に、そこに教育者と被教育者との区画しえぬ融合体である故に、眞の教育が行はれるのである。ことに、その指導的中

心たるべき学校の学生生徒が、青年は一体たるの感覚から、被指導層との間に密接の連絡を保ちうるといふところに、最も重大の指導者としての性格と任務とが課せられてをる。而もこの青年は層をなしてゐる、といふ事實は、その帯びた性格が、一つの時代の風潮として長く国民生活各生活部門を支配する一つの根本的国民的性格を形成することを忘れてはならない。

それ故に、この一体である青年を真に秩序正しく組織し教育せぬことは、重大の国家的損失となることあるべきを、われらは再思三考せねばならぬ。否それは、実に致命的傷痕となるべきこと疑ひの余地がない。

筆者の一つの具体的憂慮は、工業労働者の問題である。彼らの生活の多くは、今日既に知識階級の大部分より物質的に高いのである。無気力のインテリは彼らに完全に抑へられつゝある。もしこの状態が、このまゝに地位の変動を及ぼす迄も長く存続したならば、そこに予想される社会的変革は、決して軽視すべからざるものがある。歴史上鎌倉時代は、一つの社会的変動の時代であつたが、武士が当時のインテリたる公卿にとつて代つたことが、重大の社会的変動として、やはりそれは国家生活の秩序体制にまで影響して行つた。承久の乱の原因は、之を社会的に見ればやはりこの変動にあることは否定することが出来ぬ。明治天皇が「中世以降の失体」と仰せられたことが、社会的推移として停止すべからざる傾向となつて行はれた歴史の過程をおもふべきで

ある。もし、今日指導的知識層が遂に工業労働者に抑へられてしまふとしたならば、そのとき予想される社会的変動は、一層大なるべきであると共に、武士の如く單純素朴であると必ずしも言はず、つねにマルキシズムの影響余効下にある彼らの将来は、相当の警戒をはらねばならぬ筈である。而して真に彼らを指導することが、実力あるインテリにしてはじめて可能であることをおもふならば、学生の眞の鍛錬の重要性は、こゝにも判然と提示せらるゝのである。

今こそ日本は、歴史的転機に立つてゐる。この転機を眞に転機たらしめうるか否かに、日本の将来はかゝつてをるのだ。それは外面的文化的に之をいふならば、西欧文化の徹底的批判によつて、内面的國民精神的にいふならば、青年層の眞の團結によつて、はじめて遂行しえらるゝ。われらは、世界史未曾有の大事業を遂行せむがために、われら日本青年の精神生活を未曾有の高度に交流し確保しなければならぬ。この努力によつて来るべき時代は意義を帯びてくるのだ。

今日まで幾度も西洋文化の批判が口にせられた。しかし、西洋文化を、その根柢から世界人類の運命のために徹底的に批判しようといふ努力はなされなかつた。これが神国日本のかふべからざる使命であることも、深く考へられて来なかつた。西洋文化それ自身の救ひのためにも、日本はその生命の底ひから戦はねばならぬ時である。全世界に亡国なからしめむために、滅びつゝあるものを再生せしむるの道は、一にかゝつて日本民族の生命的体験威力にかゝつてゐる。

全国青年の心を、白熱の火をもつて熔融せしめねばならぬ。稚い純真そのものゝ青年の心に、高い音调をさわたらしめねばならぬ。真に苦しみしものゝ負へる替ふべからざる使命を果さしめよ。西洋文化の最後の侵寇居域たる現代学校教育の中で、時代の苦痛を一身に負へる青年学徒が、その苦しみを自覚し、その苦しみに反撥していま起たむとしてゐる。これこそは、西洋文化の最後の決定的批判である。これなくして、断じて真の批判はありえない。真の批判なくして断じて新しき時代は来ないのだ。

時代を負へる青年がこゝに団結し、教育するものと教育せらるゝものとの分たれぬ交流の中に、大きな新しき雰囲気を醸成し、内発的時代精神の火を炎上せしむるときに、——いまや、「教育の意義は一変」せることを、世の人々は凡て正視せねばならぬのである。

全国的学生運動はかくして時代の、日本歴史の必然性の中に生れた、日本精神史の嫡子であることを、青年諸君、学生諸君、われらはいよ／＼明らかに確認し、この重大使命をいよ／＼のこりなく果すべきことを誓はねばならぬ。かくして、時代ははじめて開かれる。時代は青年によつて開かれる、といふことの意義が、かくも明瞭に示されたことはなかつたのだ。行手は広くしてまた遠い。かくて諸君は、凡ゆる偉大にして美しき夢を描き、凡ゆる崇高にして深広なる精神を打建てる事が出来る。而してわれらは、凡ゆる史上の時代にはるかに立まさつた光輝にとめる時代を

現出することが出来るのである。われらには既に詩があつた。それはシキシマノミチ、歴代天皇ことに明治天皇が大御身を以て踏ませたまうたシキシマノミチである。われらには既に宗教があつた。それは忠義臣道の宗教であつた。かくして、われらは、やうやく日本文化の根源的開展の契機に参ずることが出来たのである。

われらは、これを神意、日本歴史の全開展を貫きて統治したまふ すめらみみま 皇大御祖の神慮なることを信じて疑はない。

われらは力を得た。力とは誠である。誠の集合である。その結合力である。われらは、たとごとならぬ心地して、いまこの道を直進するのみである。いまや生も死もなく、この道を一向直進するのみである。

學術的迷信から正信へ（新潟高校生有志に）

新潟高校「信和会」誌
「説仰」創刊号
昭和十四年十一月号

弁証法の迷信は、近代人の思想的能力を極度に鈍化せしめた、と言ふことが出来る。矛盾関係しか持合せてをらぬ推理方法は、プラトンの古からの西洋哲学の方法的誤謬の末裔まごでもあり、開花でもある。これが今まさに盛りである。

矛盾関係を唯一の頼りとして、正反合と止揚されるといふ、この転変に作用するものは、神秘的な魔術以外の何ものでもない。ジンテーゼには、どんなものでも生れて来よう。而もそれは、正しく『総合』の結果だ、と強弁される。何となれば、弁証法に関するかぎり、正しい論理的依拠は見出されぬからである。まづ凡ては、反対であり矛盾であり、突如として調和総合せられる。何たる奇蹟。現代人はかくして、宗教的体験としてではなく、理論の上で、奇蹟を又は『奇蹟的理論』を求めてゐるのである。一切の混乱は、斯して何らの実質的調和なしに説明がつき、『理論的に解決』されるのである。実質的調和には、努力が必要である。現代人は、この所謂『非合理主義』の弁証法の最安価の合理主義によつて、何の努力もせずに、禁断の実を^{たろふ}鰹腹食つて満ち足りることが出来るのである。

この弁証法をとり入れることによつて、外国文化の輸入は極めて簡単になつた。凡てを入れよばよろしい。全宇宙は実に弁証法的なのだ！ 批判も何も無い！ 先づベンシヤウハフを退治せよ。弁証法は思想世界の共産党である。

論理学は、言葉を全く遺忘してしまつた。言葉の用ひられる世界と言葉との関係といふ重大問題を、遺忘してしまつた。日本において、詔勅がコトノハノミチの中核であるといふことは、かかる事実に基づいてゐる。ありのまゝに発せられる言葉といふものが、真の、または新しき時代の

論理的叙述であつて、そのありのまゝといふのは、その社会の事実に依拠する、といふことより外に何もものもないのである。

構成の論理を廃して、自然の叙述に帰せしめよ。これがわれらの同信生活によつて、その間の語らひと通信と宣言と創作と、それらを含む真の意味の行動によつて、はじめて可能であることをおもふ。われらは、いまわれらの全国学生同志の呼応連絡の中に、新時代のための、真に世界未曾有の學術が用意せられてゐることを確認せねばならぬ。

友らよ、思ふさまに歌ひ、思ふさまに表現せられよ。「背私向公」とは、この意義の努力の中に客観的原理を現出することである。

「マタイ伝」私講

(一)

「河村幹雄博士遺稿」またはその抜抄たる「名も無き民のこゝろ」を読むものは、キリストの祖国イサラエルへの忠が、その信仰の一切であつたことを正しくまた深刻に、信知するのである。いまは全国同信諸兄と共に、マタイ伝によりてキリストの信をうかゞひつゝ、共同研究の総合的成果を

「学生生活」
昭和十四年十一月
号から連載四回

実現したいとおもふ。御研究の方々は本稿に關し、又マタイ伝全体に關し、御意見を筆者迄お送りいただきたい。次号にそれに關説しよう。

「疑は何故におこるか」の問題は、宗教上の根本問題であり、いふまでもなく、人生の重大問題であるが、一般にあまりに簡単にこれを「解決」し去つてゐる。「充分の説明が得られぬために疑がおこる」といふ、この馬鹿げた——「解決」即ち——迷信は、ことに、知識的生活をしてゐる者の中に多い。数学の式を解き、試験問題に答案を書く習慣が、人生の根本的問題迄も、このやり方で解けると考へしめる。かくのごとく、学校は国民の信を奪つたのである。

我らは学生諸君にあふとき、多くの質問を受けて、言ひ表はせぬ寂寞を味ふのが常である。何故にかくも多くのことを聞かねばならぬのか。生命を賭けての疑は一度も提起せずして、徒らに次々に心におこる疑問の解決を求める。而して彼らの答へは、殆ど凡て、たゞ自分の内心にその理論の辻褄を合すべく言ひきかせるための道具に使用せらるゝに過ぎない。我らの言葉は、その生命とならずして、たゞ道具となるに終つてしまふ。我らはそれをおもふ毎に、言ひやうのないさびしさを感ずるのである。人生の疑とはかくのごとく無根拠のものであらうか。その心の上に擦過傷程の痕跡ものこさぬ位に無意味なものが、そも／＼疑問とせらるゝ程、大問題なのであらうか。我らはかくのごとき疑問をうけるといふことに、むしろ屈辱を感ぜざるを得ない。学校教育式に

知識によつて人生の表面のみを撫でゝある人間が、生きることの深刻重大な意義を忘れはてた証拠が、こゝに見られる。この点からでも学校教育は根柢から改革されねばならぬのである。

信は、まことの生を貫かむために如何なる苦しみにも堪へて行かうとすることである。『邪曲にして不義なる代は徴を求む』（第十六章）とキリストは言つてゐるが、それは、安易の解決によつてこの苦闘からのがれようとするのが、邪曲であり不義であり、不信であることを言つたのである。

キリストの信をうかゞはむとする人は、マタイ伝にイエス・キリスト出現に至るまでの深刻微妙の序曲を見ねばうそである。

『声ラマにありて聞ゆ、慟哭なり、いとどしき悲哀なり。』

ラケル己が子らを歎き、子等のなき故に慰めらるゝを厭ふ』

この一節にまつはる伝説内容の如何にかゝはらず、キリストの出現は、祖国の民の絶望的悲哀と同時にあつた。否、イエスの信こそは、祖国の慟哭と相伴つてゐるの事実を見逃してはならぬのである。

『その頃バプテスマのヨハネ来り、ユダヤの荒野にて教を宣べて言ふ、「なんぢら悔改めよ、天国は近づきたり」。これ予言者イザヤによりて、斯く言はれし人なり。曰く、「荒野に呼はる者の

声す「主の道を備へ、その路すぢを直くせよ」』

『声ラマにありて聞ゆ』といひ、いまゝた『荒野に呼はる者の声す』と言ふ。キリストの出現がかくさびしき序曲によつて来ることの深き意義をおもはぬものは、又この意義をその内心に味はひ得ぬものは、キリストの信を語るたふこと勿れ。

さればこそ第四章の威嚴にみちた表現がキリストの信の告白と主張とを伝へてゐるのである。

『四十日、四十夜、断食して、後に飢ゑたまふ。試むる者きたりて言ふ「なんぢ若し神の子ならば、命じて此等の石をパンと為らしめよ」。答へて言ひ給ふ、「人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言ことばに由る」と録しるされたり』。

と言ひ、又

『なんぢ若し神の子ならば己が身を下に投げよ。それは「なんぢの為に御使みつかいたちに命じ給はむ。彼ら手にて汝を支へ、その足を石にうち当つること勿らしめん」と録しるされたるなり』。イエス言ひたまふ、『「主なる汝の神を試むべからず」と、また録しるされたり』

と言へるが如き、これらは皆、人生を試みむとする思想に対する、イエスの的確なる批判であつた。徒いたずらに質問を提起するは、いふ迄もなく解答をえて事足れりとするが如きも、みなひとしく人生を試みるものに外ならない。それは意志的貫徹力なき戯技である。入学・進級・各種試験に対

応せむとする青少年の心は、知らぬ間に人生を試験なりと誤認するに至る。

分析せられた思想は疑問となるが、それは常に人生の根本事実・総合的精神によつて解決せられねばならぬ。それは、永遠の生命、神に随順すること以外の何ごとでもない。祖国日本永遠の生命に随順することのみが、われらの生であり、また信であつて、この同じき信に眞の協力の生活が実現せられる。「何故に天皇に忠をつくさねばならぬか」といふことが、「何故に生きねばならぬか」といふことと同じであるといふことは、傍証的説明のみによつて知ることの出来ぬ重大問題である。

生きることの意義を痛感せぬものは、呪はれたるかな。苦しきたゝかひの中にあつて、はじめて生の意義をほのかに信知するといふのが、実際は人生の事実である、といふこの事実が、キリストの一生であつたのである。否、われらの思想戦である。あゝ、友らよ！

(二)

人間の精神的訓練は、精到周密に行はれねばならぬのである。「毫釐モ差アレバ天地懸絶」といはるゝ、それは人間の精神それ自身に備はる全体的作用を示した言葉である。些小の過誤によつて全体を否定するやうになるのが、精神生活の性質であると言ふのである。しかしながら、それ

故にその危険をおもふことによつて、不斷に緊張を持続することが可能となるのであつて、それが人間の貴い所以であり、それ故に、能動的主体性を持續することも可能となるのである。「随所ニ主トナレバ立処皆真」といふのは、その間の消息を言つたものである。精神科学に於いて真偽の判定は、主体的意志の有無に帰せらるべきは既に説いたが、「随所ニ主トナル」といふやうに、それはつねに批判せらるゝ必要があるのである。

国体は三千年來確立してをる、今更それについて明徴も不明徴もない、と言ふがごときは、人間心理作用の根本性格を否定し、それ故、ひいて国体を否定する思想である。国体が真に全体的のものであることを知れば知る程、その防護は不斷に行はねばならぬことを知るのであつて、大日本帝国は滅びず、神洲ハ不滅也と信じつゝ、しかしながら、自然科学的事実ではなく我らの不斷の国体信順意志によつてのみ、保障せらるゝことを覚さとるのである。全体といふものは、つねに統一せられてゐることを要するのである。その統一が失はれるとき、即ち全体性の喪失である。全人生は、物理的・生理的事実ではなく、それより高度の統一に表はれる心理的事実であり、また単に一般個人心理的事実のみではなく、最も高度の民族心理的・統一的事実であつて、個人的には総合的に凡ゆる国民生活事実、道徳習俗法律芸術宗教、一切の生活部面の規律に支持せられてをる觀念的事実であるからして、「目に見えぬ」と称せらるゝのであり、抽象的觀念であるが同時に、具

体的事実である、といふことになるのである。それは、感覺的であると共に超感覺的である。

高度の統一は容易に生成するものではないからして、稀有けうであり、最勝であり、喪失と墮落との危険につねに曝さらされるのであつて、それが、人生は不断の戦であるといはるゝ所以である。

心理学の法則は、法則否定の法則といはるゝ。それはたゞ無法則混乱といふことではない。法則否定といふのは、部分的規範としての法則が、全体的規範としての原理の君臨に対して、僭濫けんらん恣為せむとするのを警告する、といふことで、法則否定の法則は、警告を以て法則とす、といふことである。人間精神の主体性を如何にして客観的に実現するか、といふ重大問題を研究し闡明することが、精神科学の課題である、といつて差つかへない。学問は太古にはなかつた、とおもひ、ことに古事記時代には存在しなかつた、とおもひ、所謂西欧や支那の文明の所産であるかに考へるのは、この点から言つても誤りである。学問は人間と共にはじまつたのである。

ヘカストタイスムス自己神化教も、人間精神の主体性の要求に関する通俗局限的理解に基いてゐるから、その危険が多分に、また不斷に存し、警戒を要するのであつて、決して單純の問題ではない。かやうに心理法則を極めることは、そのまゝ国体の尊嚴を保ち、国家を防護する所以であるから、それは国家学のみに限定せらるべくもなく、直接国防の問題となるのである。

亡国の志士キリストの言葉を学ぶのも、「日本は滅びず」の信をかためむがためであることは、

以上の叙述から結論せらるべきである。

『イエスこれらの言を語りことばをへ給へるとき、群衆その教に驚きたり。それは学者らの如くならず、權威ある者のごとく教へ給へる故なり』(第七章末尾)

キリストの言葉のうちにあふるゝ統一的生命感は、分析的批判の余裕もなく、人の心の全体を揺り動かしたのである。「驚き」といふその間に見られる感情の動揺は、分析すべくもない全体的生命に対する反撥か同化かの分岐に決定すべき心の緊張を示すのである。この心の緊張を味はしめ、それによつて精神の全一的交流を促がすといふことは、天才の能力であつて、人生の極意である。それによつて人間の意志を構成するのではなく、触発生成せしむる、そこに真の共感が生れ来るのである。明治天皇御製に

歌

天地もうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな (明治三十七年)

「言の葉のまことの道をきはめ」といふことは、分析的判断を総合しつゝも、それを常に全一的思想として合成し、そこに、心理的生成序列のまゝに正しく叙述する方法を学ぶことであつて、それは単に、個人の修養といふ目的でなく、真実の共感共鳴世界を実現するために学ばねばならぬのである。

全一的思想を生成実現することが、神の國を顕現することである。四福音書は、「西紀一世紀の神話」であり、それはローゼンベルグの「二十世紀の神話」のごとくに、神話復活の努力であり、神話生成の努力であつた。理想国家、神の世は、統一的人生の異名であり、それは、心理的生成序列のまゝに思想し表現する精神的統一融合世界である。理想は将来に描かれるが、それに具体的内容を賦与せむとするとき、古代神々の時代にその実存せる形態を見出さむとするのであつて、兩者を結合するものは、背私向公・原理随順の現実的意志である。

『爾曹悔改めよ、天国は近づきたり』(第四章十七節)

といふのは、分析的判断に限界凝固定着し、ひいて、党争派闘・分裂抗争にみちびかむとする思想的原因としての個我感情を捨てれば、そこに統一思想世界としての理想的人生・完成国家が、現実にこの地上に思量計度をこえて、事実として表はれてくることを言つたのである。

『斯て、ガリラヤの海辺をあゆみて、二人の兄弟ペテロといふシモンとその兄弟アンデレとが、海に網打ちをるを見給ふ、かれらは漁人なり。これに言ひたまふ「我に従ひきたれ、然らば汝ら人を漁る者となさん」。かれら直ちに網をすて、従ふ……』(第四章十七節以下)

これは古事記の中で、大國主神が根堅洲國に赴き給ふ大ユーマアには遙かに及ばぬが、「人を漁る者となさむ」の一言に網をすて、従つた故事は、まことにユーマラスであつて、そのはじめ

より定まりしことのごとくに、行動したキリストと弟子たちの心の交流は、一瞬の逢会にも、全精神的合一が実現した稀有の勝躑である。それは言ふ迄もなく解脱境である。道元は、「随問記」中に、「仏とは露柱灯籠なりときかば露柱灯籠なりと信じ、蚯蚓なりときかば蚯蚓なりと信ずるが、真信である」と言つてゐるが、それは少しく反省的であり教訓的であつて、コトノハノミチにはかなはない。しかし「大君ノミコトカシコミ、大君ノマケノマニマニ生くる」といふことは、そこに反省顧慮をゆるさざる捷速・直進的でなければならぬのである。

「天照大御神の命以て、豊葦原之千秋長五百秋之水穂国は我が御子正勝吾勝勝速日天忍穂耳命の知らさむ国と言因（こと）さし賜ひて、天降したまひき」（古事記上巻）

何故に皇孫の統治せさせ給ふべきかの論証は、そこにはない。支那では天子といふ、「天」概念の仮想は、天が有徳の人に命を下す、といふとき、先験的觀念たる「天」と、経験的觀念たる「徳」とを結合せねばならなかつた表現上の誤謬に、思想上の誤謬が実存したからである。天は何故に某甲に命を下すか、その故は有徳なれば、と論証せらるゝ、そこに、思想的構成要素が統一融合を経ずに残存してゐるからして、それは意志的に実現せられてをらず、従つて誤謬となるのである。論証は「権威ある者」の言葉ではない。

四福音書は、実に古事記が神典であることの傍証であり、キリストの生涯とその言葉とは、日

本が神国であることの脚註である。

『視よ、わが使をなんぢの顔の前につかはす。

彼は、なんぢの前に、なんぢの道を備へむ』(第十一章十節)

イエスといへども、この民族的信仰を如何ともすることが出来なかつた。それは心理的に逆行である。日本に於いては、凡ての生命の根源は、人間記憶の始源にあり、一切はそこより不断に流れつゝある。「主の道を備へ、その路すぢを直くせよ」といふ必要はなかつたのであつた。さればこそ、「荒野に呼はる者の声す」といふべくもなく、日本は本来、「豊葦原之千秋長五百秋之水穂国」であつたのである。「目ある者は瞎よ」。

(三)

『また古の人に「佯り誓ふ勿れ、汝の誓は主に果すべし」と言へる事あるを汝ら聞けり。されど我は汝らに告ぐ、一切誓ふな、天を指して誓ふな、神の御座なればなり。地を指して誓ふな、神の足台なればなり。エルサレムを指して誓ふな、大君の都なればなり。己が頭を指して誓ふな、汝の頭髮一筋だに白くし、また黒くし能はねばなり。たゞ然り然り、否否と言へ、之に過ぐるは悪より出づるなり』(第五章第三十三節以下)

古事記なかりせば、我らは如何にして悲痛極まりなきマタイ伝を読み得ようか。人類の運命を象徴するこの大悲劇は、十字架上の叫びに極まつてゐる。

『昼の十二時より地の上あまねく暗くなりて、三時に及ぶ。三時ごろイエス大声に叫びて、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と言ひ給ふ。わが神、わが神、何ぞ我を見棄て給ひしとの意なり。其処に立つ者のうち或る人々これを聞きて「彼はエリヤを呼ぶなり」と言ふ。直ちにその中の一人はしりゆきて海綿をとり、酸き葡萄酒を含ませ、葦につけてイエスに飲ましむ。其他の者ども言ふ「待て、エリヤ来りて彼を救ふや否や、我ら之を見ん」イエス再び大声に呼はりて息絶えたまふ。視よ、聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなり、また地震ひ、磐さけ、墓ひらけて眠りたる聖徒の屍体おほく活きかへり、イエスの復活ののち墓をいで、聖なる都に入りて、多くの人に現はれたり。百卒長および之と共にイエスを守りゐたる者ども、地震とその有りし事とを見て甚く懼れ、「実に彼は神の子なりき」と言へり。……』(第二十七章、第四十五節以下)

神に誓ふことすらも悪より出づると極言したイエスが、その最後の瞬間に、「わが神、わが神、何ぞ我を見捨て給ふか」と叫ばざるを得なかつた心中の苦悶は、想察するにおもひも絶える心地がする。併し何故に、マタイ伝一卷は、かくも我らの心を拍つのであらうか。我らは皇国に生れ、滅びざる国体の威力に、大御稜威に浴せしめられ、日本の世界史的使命についてさかしき論ひもす

るが、キリストの言葉を読むときの心のをのゝきは、全生命を揺るかと思はせしめられる。国体の威神力かもしこしとも、かもしこし。しかしながらそれは、神意の中にこもらしめらるゝ。我らは、心をつくしおもひをつくして、国体随順・祖国防護の道に出で立たずば、かしくもかしくきき神意を如何にせむとする。外に乱れつゝゆく世のさまと、内に乱るゝわれらのおもひとを、亡国の聖者キリストの言葉マタイ伝一卷を鞭に、われらの全心うたるゝ事実にて結合せよ！ 国家興亡の不変の人類生活法則の上に、神洲不滅の事実と原理とは、打建てられてをるのだ！ それはまた、現実にならにせまる直接の要請として、われらは、かく戒心の痛切なる反省をなさねばならぬ。「われらはわれらのつとめを果しつゝあるか！」。総理大臣の国体明徴演説が、蝮まむしの齋すまババリサイの徒の信仰として示現するときを、万一に予想せぬものは、日本臣民ではない。

人間意志の作用を究明する心理学が、人生現象、ことに国家の意義を闡明するとき、国家の生成が、その前史と明らかに区画する一線を確定するのである。統一威力は原理であつて、それは階層的進化的次数を超越して、一切を秩序あらしむるのである。

『また古の人に「伴いっしょり誓ちかふ勿れ、汝の誓は主に果すべし」と言へる事あるを汝ら聞けり。』

これは建国前史、原理確立以前の限局せられたる人間的努力の形態である。さればイエスが、次の如く言つたのは正しい。

「されど我は汝らに告ぐ、一切誓ふな、天を指して誓ふな、神の御座なればなり。地を指して誓ふな、神の足台なればなり。……たとゝ然り然り、否否と言へ、之に過ぐるは悪より出づるなり。」

批判的精神、現実直接的経験に随順する態度、それは実に、學術研究の正しき方法である。この學術維新が、日本国体原理の下に於いてのみ可能であることの幸慶と、その重大意義とを顧みねばならぬ。「之に過ぐるは悪より出づるなり」と言ふ「悪」、それは、部分主体的努力の後作用を言つたものに外ならない。歴史が悲劇であるのは、その故である。

この「悪」こそ、イエスの予想したものであつた。

『イエス答へて言ひ給ふ「汝ら人に惑はされぬやうに心せよ。多くの者わが名を冒し来り「我はキリストなり」と言ひて多くの人を惑はさん。又汝ら戦争と戦争の噂とを聞かん、慎しみて懼るな。斯る事はあるべきなり、然れど未だ終にはあらず。即ち「民は民に、国は国に逆ひて起たん」また処々に饑饉と地震とあらん、此等はみな産の苦難の始なり。そのとき人々汝らを患難に付し、また殺さん。汝等わが名の為に、諸の国人に憎まれん。その時多くの人つまづき、且たがひに付し、互に憎まん。多くの偽予言者おこりて多くの人を惑はさん。また不法の増すによりて多くの人の愛、冷かにならん。然れど終まで耐へ忍ぶ者は救はるべし……』(第二

十四章第四節以下)

さうして、終にペテロは、「我その人を知らず」(第二十六章第七十四節)と鶏鳴く前に三度キリストを否み、こゝにキリストの願ひは絶え、その教へのみが残つた。それは亡国の精神史であるが、国家興亡人類史の事実であり、人類の運命であつて、それは日本国体原理が顯示せらるべき依拠である。キリストの言葉に、われらの心が鞭たるゝとき、われらは古事記をおもひ、国体の本義をいよ／＼心に明らめつゝ、拙き身も只管祖国防護の戦に進ましめらるゝ。これをこそ外国文化の撰取と言はう、これこそ日本文化の意義といはう。世界人類史実、かく日本国体の明証であり、皇国の壯敵である。予言は、マタイ伝中にある。

『凡て有てる人は、与へられて愈々豊ならん。然れど有たぬ者は、その有てる物をも取らるべし』。(第二十五章、第二十九節)

(四)

『さらば施濟をなすとき、偽善者が人に崇められんとて会堂や街にて為すごとく、己が前にラッパを鳴らすな。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。汝は施濟をなすとき、右の手のなすことを左の手に知らすな。是はその施濟の隠れん為なり。然らば隠れたるに見たまふ汝の父は報い給はん』(第六章第二節以下)

古來亡國の因は、つねに民族の歴史的・意志的持続力の喪失にあつた。眼前の効果を求めるに至れば、全体協力の生の依拠は次第に失はれざるを得なくなる。こゝに「隠れたるに見たまふ汝の父」を、民族的歴史的的生命であると翻譯するならば、イエスは、道徳的行為或はその倫理的価値をも、この見えざる生命の意義に総撰することによつて、人生諸価値の全一的實現を志したものと云つてよいであらう。倫理的価値實現のみでは、断じて人生の究極目的とならない。さればこそ、芸術宗教を論ずるに當つて、道徳論を濫用することの誤なるごとくに、政治經濟を論ずるに際しての道徳論的解決は、眞の解決を望むものゝ取らざるところである。「赤心もとどまらず片々として往来す」と道元は言つたが、個人的意欲が余すなく総撰せらるゝ全体的世界といふ意味に於いては、宗教的世界も政治經濟的世界も、本来民族國家の具体的事實に於いて一つである、と言はねばならぬ。それ故例へば、笠信太郎氏の「日本經濟の再編成」が「新經濟倫理の確立」に、現代日本經濟問題の解決点を見出さうとしたときは、この民族國家無窮生命の事實に對する無信の告白であり、その流行は、現代知識層の精神的無力の象徴である。人間世界に行はるゝ經濟的法則の嚴酷精確なる究明を行ふ心の余裕もない、と言ふことは、超非常時といはるゝ現代日本の國民としては、危険状態の赤信号といふべきである。

元來、支那事變がさうであつた。國際正義の實現といふやうの、こゝにも安直な法律論が原理

的位置を占拠してゐたのである。「是はその施濟ほどこしの隠れん為なり」といふ意志的把持があつたらば、低俗の眼前的解決は許されざるべきであつたのである。倫理と武力とは、共に相知らしむべからざる左右の手に外ならぬ。意志は、つねに見えざる力を求むるのである。

『汝ら断食するとき、偽善者のごとく、悲しき面容おもてをすな。彼らは断食することを人に顕さんとて、その顔色せきなを書ふなり。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。なんぢは断食するとき、頭に油をぬり、顔を洗へ。これ断食することの人に顕れずして、隠れたるに在す汝の父にあらはれん為なり。さらば隠れたるに見たまふ汝の父は報い給はん』(第六章第十六節以下)

支那事変も、何故に「人(個人道徳的価値判断)に顕はれずして隠れたるに在す汝の父(民族生命の全一的統一力を通して全人類の運命に通ふ)にあらはれん為」に遂行せらるゝものなることを、提示せぬのであらうか。筆者は、くりかへし聖戦とは、天皇の大御軍おほみくさが進めらるゝ故に言はるべきであつて、無賠償・無併合・無要求のために言はるべきには断じてあらざることを説いたが、反響はむしろ無に等しかつた。

統一的思想能力とは、元来全人生価値の実現を意志する思想能力であつて、民族生命の将来は、この有無強弱によつて、推定判断せらるゝのである。明治以来の教育は、この思想能力を磨滅したる故に、それは亡国の教育であつた。もし、亡国の苦杯を喫して十字架に死を遂げたキリ

ストとユダヤ民族の運命をおもふならば、知的計量に巧みにして、それ故に、道徳的判断を濫用して、それを全一的な人生目的に結合する能力なき現代知識層の思想的欠陥は、これこそ、日本国家意志の阻害、民族生命の死敵なることを認識せねばならぬのである。「太平記」には

『正成ハ打破ツテ落ツヘかりしか共、都を出しより世間ノ事今ハ是迄ト思ヒ定メたりければ、一ト足もひかず戦ヒて機已ニつかかれけれハ、みなと河ノ北ニ在家ノ一村アル中へ走り入ツて、腹ヲきらんとて、舎弟正季ニ向ヒテ抑^{そま}最後ノ一念ニ依ツて善悪ノ生ヲ得トいへり、九界ノ中ニハ何レノ処か御辺ノ願ヒなるや、と問ヒけれハ、正季からからト笑ヒて、七生までも只同し人間ニ生レて朝敵ヲ亡ホサハや、とコソ存候ヲへ、と云ヒけれハ、正成よにも快ケなる気色ニて、罪業フかキ妄念なれ共、我レもかやうニ思フ也、いささらハ同ク生ヲかへて此本懐ヲ達セン、ト盟^{まじ}りて、兄弟さしちかへて同しまくらニ臥ニけり』(太平記補正成自書ノ事)(句点は編者挿入)

太平記の記述には、理論的考量を容るべき終止符もなく、一呼吸に連れられた言葉の威力があふるのである。歴史的精神とは、本来かくのごときものである。それは、個人イエスの口よりいでし教訓にもまして、厳^{いひ}かきし民族的生命の示現である。イエスは、「わが父よ、もし得べくはこの酒杯を我より過ぎ去らせ給へ、されど我が意の假にとはあらず、御意のままに為し給

へ」と、三度神に祈らざるを得なかつたが、楠公兄弟は、「からからと笑ひ」、「よにも快ケなる気色にて」、その生を祖国にさゝげたのであつた。兩つながら嚴肅なるその死に賦興せらるゝ威力の差等は、民族的・歴史的生命の有無である。あゝ信なき世なるかな。「邪曲にして不義なる代は徴を求む」(第十二章第三十九節)と言ふ。生の依拠を、目に見ゆる現象の部分的形態に求めむとする精神の耗弱が、邪曲と不義の原因でなければならぬ。今日程、事変遂行の前提要件として国内革新が唱へられ、軍事行動の必要と閑説せられて、經濟問題の解決を要求する声が巷にみちみちてゐる時代はなかつた。それ自身、この「邪曲」を暗示するものである。国内革新は、不斷に永久に史的精神の常時的把持力によつて遂行せらるべきであり、対外事変は急速連戦による非常時的動作を以て解決せらるべきであつて、両者に根本的の相異なることを忘れて、或は事変を「東洋の内乱」といひ、或は「対外戦争・国内革新同時遂行」を説くごとき、すべて史的精神を喪失したる低級俗劣の戯論に過ぎぬ。しかし、この低級・未開・非文化的知識層の考へ方が、国家生命を危機に導くのである。現代インテリは、自ら文化人を以て任じてゐても、彼らが輕蔑する徳川時代の武士にもはるかに劣る非文化人であることを悟るべきである。

我等の思想戦の目標は、日本国民の精神的水準の高揚にある。思はざる故にその生を失ふのが、人間である。深くおもひ遠く慮り、全宇宙の意志を自らの意志の中に実現せむとすること

が、一切の文化的生活の、即ち国家的生活の基礎でなければならぬ。

『収穫かりいれはおほく労働人はたらきびとはすくなし。この故に収穫の主しゅに労働人はたらきびとをその収穫場かりいればに遣し給はんことを求めよ』(第九章第三十八節)

とキリストは嘆いたが、われらもまた、この嘆息を、今の時代に繰返さざるをえぬのである、われらは日本の史的生命を深く信ずるものであるけれども。

詩歌 潮汐

〔学生生活〕
昭和十四年二月号

ひく潮のさしくるごとくうつそ身に日ごとみちくる力を感じず
休むまもあらぬ日くれし夕ごちのわれともあらず湧く力はも
戦ひはげしき時代の底を流れゆくしぞかぬ意志の動くかこゝに
はたはまたうつゝ世にうけしわが生なまのいきづきはげしくおこるかこゝに
生れて三十年たらずおしすゝみとどめえぬ人生われにそなはりつ
ひたすゝみいやすゝみゆかむかへりみず身ぬちみちくる力のまゝに

「道元」研究の基礎的注意

「學生生活」
昭和十五年一月号

上堂、山僧歴叢林、不_レ多、只是等閑見_二天童先師_一、當下認得眼橫鼻直、不_レ被人瞞、便乃空手還_レ郷、所以一毫無_二仏法_一、任運且延_レ時、朝朝日東出、夜夜月沈_レ西、雲收山骨露、雨過四山低、畢竟如何、良久曰、三年逢_二一閏_一、鷄向_二五更_一啼、久立下座。

これは永平廣録卷頭の一章であるが、道元の志気は、こゝに看取することが出来る。道元帰朝後数年、その批判的精神は、思想的生活開發の地たる支那に向けられて来つゝある。「朝朝日東より出づ」それはたゞそれだけのことも知れないが、われらには、「日出づるところの天子、書を日没するところの天子に致す」の、聖徳太子の御言葉がおもひ合はされ、「叢林を歴ること多からず」（禅の修行道場をあまり歴訪したことはないとの意）と言つて、暗に支那に修行に行つたことを自嘲していることゝおもひ合はされる。道元は「天童先師に見_み」えたので、その先師は、

道元にとつて嫡々相承の仏法の師であつて、支那文化の代表的偉人ではなかつた。こゝにその仏法が印度に生れた民族的文化であることについての反省は見られない。しかし道元が見た仏法は、人類の普遍的生命原理であつて、印度に発生しつゝ支那に流伝され、超民族的文化として生成せられた事実としての客観的精神を求めたのである。さうして、「人に瞞せられず、便たすち空手郷に還る」といつて、客観的精神の依拠を見究むべきであるといふ自覚にかへつた所に、日本精神文化の伝統と契合する一点があつた。日本精神は、言ふ迄もなく超民族的人類理想の現実的威力である。

道元を日本文化史上の偉人と見ることが、最も正しい道元研究の基礎的見解である。それによつて足らざるも補ひ、従つてまた、その価値もみとめられる。親鸞もその主著には用ひなかつた仮名の法語を、「正法眼蔵しやうほうがんざう」と特記して心血を注いで著した功績は、日本文化史上に高く評価されねばならぬ。それは道元が、その悟達の境を表現する言葉として、漢文よりも仮名文を適當のものとして選択した、といふことが重要であつて、言葉をかへて言へば、その悟達が、通俗的に言へば、支那文的悟道でなくして日本語的悟道であつた、といふことである。事実、工夫精細を極めた道元の哲学を表現する道は、日本語による方法以外になかつたのである。かういふところに、道元研究の基礎的用意がなされねばならぬのである。日本語によらねば表現出来ぬところの根本

思想は、日本精神でなければならぬ。

例へば「正法眼藏谿聲山色」それは修飾を用ひざる美しき文脈の中に、自然と契合する人間精神を説いてゐる。「うらむべし山水にかくれたる声色あること、またよろこぶべし山水にあらはるゝ時節因縁あること」といひ、「うたがふらくは照覚の無情説法の語、ひゞきいまだやまず、ひそかに谿流のよるの声にみだれ入る」といふごとき、起伏流転生成やまざる日本語と日本思想の生命を發揮した句であつて、「谿流のよるの声」といふやうな句は、ニイチエの「夜の歌」を思ひ合はせつゝ、それよりもはるかに現実的・躍動的であつて、而も観念的表現である。かゝることばによつてこそ、「正法眼藏有時」のごとき、精緻の哲学的思索も生れるのである。その「有時」は、他の諸章とおなじく、論理的構成よりも心に浮ぶまゝを、意志的に把持する強い言葉で表現したと見らるゝ叙述であつて、この日本語の根本的法則に従つて、心に浮ぶまゝを記す学術的表現には、構成せられた理論大系とは異つた、対実人生的思想威力が躍動してをることをおもはねばならぬ。それ故、道元の哲学的思索は、常に日本語と密着しつゝ、それと不可分に生成せられ、日本語を生成せしめつゝ展開して行つた跡が見られる。道元の語がことに、柔軟の中に生氣を帯びているのは、諸行事に関する諸章である。「重雲堂式」「袈裟功德」「洗鉢」等は、殊に代表的である。小説家横光利一氏が、「魚行如魚、鳥飛似鳥」の坐禪箴の語を愛用してゐるのを見るが、

それよりも、「谿聲山色」のごとき自然の表現や、「行持」のごとき人生の叙述を学んだ方がよいのである。今日の流行文学者には、日本語の力はわからぬであらう。

道元について私は不満がある。しかし、われらは、道元を日本思想史上の偉人と見て、その欠点のまゝにその志したものを学ぶのである、われらもまた、日本思想史上に連るべき故に。

知的「革新」理論を襖被して 全人生的改革の意志行動へ

「学生生活」
昭和十五年三月号

現代日本の非常時局の凡ゆる困難は、国民思想の誤れる傾向、それを導く學術の誤謬に起因してゐる。この事実が一般に認識せらるゝときは、時代の混乱に、起死回生の曙光がさし初める時と見てよい。我らは、事変解決の歩を進め、東亜新秩序建設の大業を翼賛し奉るためにも、この根本事実の闡明に努力せねばならぬと信じてをる。我らが本誌を通して、東亜協同体論の批判を続けて来たのは、かゝる見地からであつたが、流行する統制経済の理論が全く東亜協同体論と同じく、真の改革意志を欠如した表面糊塗の流行思想であることを、こゝに明らかにしようとする

のは、兩者の關係を結合して觀察することによつて、事變の將來に警戒すべき事態が予想されるからである。正しく東亜協同體論と統制經濟理論とは、偽装せられたる國家革新論であり、それは思想的に見て、大正末期より昭和の初期にかけて猖獗を極めたマルキシズムの遺孽である。日本國民は、マルキシズムの根本的処置を講じなかつたために、その恐るべき余効を、今日の國家非常時局に体験せねばならなかつた、と言ふ事實こそ、重大である。

昨年十二月二十日に発行して本年一月二十一日に第十三刷を印刷したと奥附に記してある笠信太郎氏の「日本經濟の再編成」は、二月末ごろは店頭に払底の売行きを見せてをつた。と言ふことは、この書の内容が如何に現代インテリ思想と嗜好とに投じたものであるかを示してゐる。その笠氏はこの書の中でどう言つてゐるか。

『……積極的な意味でこれを従来とは違つた全く新しい方式で進めるといふことなしには國民經濟全体が前進を阻まれるといふ問題に突當つてゐるのである。言ひかへると單なる生産量の増大といふことばかりでなく産業の生産性を高めるといふことに新しい道の展開を見出さねばならぬ、といふことであつて、それは單なる軍需工業ばかりの問題でなく、産業全体としてその生産力を再検討しなければならぬといふ問題である』(三三頁)—— 圈点筆者

と言ひ、やがて

「しかも、その場合にはいま取上げられてゐるような、何となく浮いた調子ではなく、遙かに真剣な、本格的な調子で、国民的な問題として取上げられるであらうし、政治的に極めて重大な意義を込めて取上げられざるを得まいと思ふ。……が、ともかく今後の我が政治の根本的な動因が、この広いそして深い意味の生産充実の問題に発するであらうといふことは、予言めいた云ひ方であるが、むしろ当然の経緯であらうと見られるのである」(三三三頁)——圈点筆者

と言つてゐる。それはまことに重大の「予言」である。しかしそれは、予言と結果との合否によつてその価値を判定せらるべく期待されたものではなく、むしろ来るべき時代の形態を意志するところの特定思想の表示であると認められるからして、「重大」といはるべきであつて、なほ以下に分析批判せねばならぬ。

笠氏の言はむとするところは、極めて簡単である。氏は次のごとく言ふ。現代日本経済の大問題は、畢竟三つに帰せられるべきである。曰く、物価問題、生産拡充の問題、財政整理の問題。

「そこで、これら三つの問題が、いまや日本の国民経済の上に互にからみ合ひ、もつれ合ひ、揉み合つて渦巻いてゐる形であるが、若し強ひてこれらの問題に時間的な順序を附して考へるならばおそろく当面第一の問題は物価問題であるといつてよからう」(三二頁)

こゝが氏の理論の魔術である。何故に「強ひて時間的な順序」を考へねばならなかつたか。

言ふ迄もなく今日の物価問題は、戦争行為遂行のために惹起された自然の現象であつて、それは結果であると共に、現在の経済状勢の一つの客観的表示でもある。かゝるものを、生産力拡充といふやうな経済世界に於ける意志的部面、計画的部面と併列に置いて論ずることが、そも／＼の誤りであると言はねばならぬが、それこそ「強ひて」前後を論ずるならば、原因としての意志行動を前に、結果としての現象を後にするのが自然である。戦争目的貫遂のための生産力拡充であつて、それが直接の軍需と共に物価統制の必要の原因になつてゐることは、笠氏と雖も認めねばならぬところであらう。戦争目的貫徹のためには如何なる努力をもせねばならぬ。今日の日本の経済問題を論ずるに當つては、つねにこの根本問題から出発せねばならぬのであつて、笠氏が結果としての物価問題を第一に取上げたところに、戦争貫徹の国民意志の欠如が看得されねばならぬ。それは段々と論ずることにしよう。

三つの問題の時間的順序を説く氏の論述も、物価対策に移行するとともに、客観的觀察の方法をすてゝそこに氏の意志するところが表はれはじめた。仮りに百歩を譲つて、時間的順序が氏の説くところの如くであるとしても、それは問題の継起せる順序であつて、飽まで客観的觀察に於いてのみ言はれることである。こゝで、もし具体的対策を論ずるならば、物価対策と限定摘出せず、何故に全体的対策を論ぜぬのであるか。こゝに主観的意志と客観的現象との區別を知らぬ笠氏の

學術的研究方法の無知を指摘せねばならない。しかし、外面的結果が人々に注目せられた順序などに執はれて、その順序に従つてのみ対策は樹立せられるべしとする程、氏は學術的に幼稚なのであらうか。筆者はさうは思はない。とすると、氏自身の故意か、又は或る既成概念にとらはれて故らにこの間の誤謬を犯してをるものと断定せざるを得ないのである。氏は何と言つてゐるか。

『……この原価計算といふことが公定価格の基礎に入り込んで来たといふことは、それだけで既にこゝに価格統制における一飛躍であるとしてよいのである。……こゝで重要なことは、従来の価格統制の領域は全く商品の売買される部面、言葉をかへるといはゆる「流通」の部面に過ぎられてゐたといふことであり、そして物価統制が原価計算に漸く着目しこれを統制の方式の基礎に持ち込んで来たといふことは、いまや兎も角も価格統制が単なる「流通」の領域内に踰越することが出来なくなつて「生産」の領域に足を一歩踏み入れたといふことゝ、否、商品が生産される過程にまで踏み込まねば物価統制もやつて行けなくなつて来たといふことである。これは、大綱や要綱の立案者たる物価委員会自身がそれを意識してゐるか否かを問はず、極めて重要な一步を意味するのである。』(四八頁)

この表現を注意せねばならぬ。

問題の順序と「強ひて」言つたのも、この原価計算の必要論も、それから展開される理論を導き

出すべき伏線であつたことを人々は悟るであらう。しかも原価計算そのものは、氏にとつて大して重要事ではない。それよりも、原価計算による適正価格の算出を完全に行ふためには、生産部の内部機構の公開、また利潤の抑制が必要であつて、その為には生産機構の直接的統制の必要不可欠であることを、何よりも氏は言はむとするのである。しかし、原価計算による凡ゆる物資の価格決定が果して可能であるか、といふ問題こそ、まづ検討されねばならない。

氏が一物資の原価を追求するときに繰返される原々価の算定の必要から、凡べての価格概念に共通した内包として、賃銀、利潤、地代の三要素を抽象するとき、そこに氏の理論は、現状に対して必然的に利潤追及の恣意性また実質賃銀の低下といふ社会主義的公式論の誰憚らぬ主張に移行せねばならなくなるが、それにはこれら抽象要素の平均値を算出すべく均一せる人間能力と人間の物的固化とを前提要件とせねばならなくなる。かうして、人間を機械として考へることによつてのみ、生産機構の直接統制が可能となる。しかし、氏がそれを意志してゐることは、物価問題の觀察より物価対策の樹立へと移行するところに、既にあらはれてゐることは前述せるとほりであつて、それは物価といふ経済生活の發展變動の結果であるところの数字、——それは数字であることに注意せよ——を固定した実体と仮定することによつて、次第にさう信じ込むことによつてのみ展開せらるゝ虚妄の理論を以て国民を欺くことなしには実現性を持たない。それは意志を

持たぬ人間を想定するばかりでなく、国民より意志を奪はむとするものであることに注意せられねばならぬ。国民から意志を奪ひ、国民の意志能力を否定することによつてのみ可能なる統制といふごときは、言葉の表面から見ても成立せぬものである。それは混乱の経済でなければならぬ。

かくのごとくにして、氏の所謂問題の時間的順序論から、原価計算による適正価格算定論と、その前提としての生産機構直接統制論と展開せしめた論述序次の非論理性を分析してゆくことによつて、氏の意図するところは、いよ／＼明らかになつて来た。それは、物価といふものを固定的実体と観て、そこから凡べての論を發展せしめるものである。それは、経済生活の意志的計画、部面の自然發展性をその結果——而も全く数字に過ぎない——である物価を以て規定し、阻塞し、逆に之を数字的に構成せむとする。しかしながら元来、非常時局の経済統制は、戦争目的貫徹の意志に基く計画によつて導かるべきものであるから、この意志的計画部面の逆規定は、言葉をかへて言へば、戦争貫徹意志の阻塞に外ならない。然り、笠氏の著書の一巻のうち、何処に蔽ふるか、聖戦意識を見うるであらうか。全体として見るときに、低調なるインテリの自己反省的トーンが力なくたゆたつてをることは、敏感なる読者の気づくところである。それは火野葦平の著作が、どれもこれも平和な喫茶店から戦争といふ非常の場面に引張り出されて戸惑ひしたインテリの神経が、驚きの眼を睜りつゝも、なほ依然たる反省をくりかへしてゐるのに酷似してゐる。人

間精神の自主的創造力を殺し、人間性の複雑さに目を覆うて、生産機構の直接統制の可能を夢想するときは、インテリの如何ともする能はざる無力を遺憾なく示してゐるものである。かくのごとき精神を以て戦争が遂行されると思つたら、お目出度いかぎりである。

笠氏が、物価委員会が原価計算の必要を認めたことを、鬼の首でもとつたやうに騒ぎ立てゝゐるその物価委員会も、元来インテリの現状維持精神を示してゐるものであるが、物価の統制を強行しようとするとき、その物質主義が、生産部面よりの統制に至るのは、理の当然である。それは、物価よりする人間の統制であつて、生産を阻害し経済生活の均衡を破るに至る。しかしながら全国民所得そのものは、さう急激の増加を示すことが出来ぬことが明らかであるならば、その軍需にふり向ける割合が多ければ多い程、戦争遂行意志がそこに盛られることは言ふ迄もない。それは勿論消費の統制である。それは強制貯蓄の問題であり、また財政整理の問題である。しかるに笠氏は、強制貯蓄の問題を取上げなかつたし、財政問題は第三番目に至つてやつと論じてゐる。一体消費統制は、技術の巧妙を要するばかりでなく、それ以上に精神的方向の明示なくして行はれるものではない。それは、精神より物質への方向をとるところの統制である。それは、国民を尊貴なる人間と認め、その自主的精神を信じてこそ可能である。それは、全国民の聖戦遂行意志を激成してのみ可能である。しかるに生産部面よりの統制は、物質より精神を統制するものであつ

て、そこに如何に大いなる相違があるか容易に看破されねばならぬ。何れが日本精神にかなへるものであらうか。何れが、日本国民の忠義心に訴へる道であらうか。

しかるに、世の殆ど凡べての革新論者は、「生命奉還論」といふ如き非学術的用語の下に、マルキストの術中に陥つて顧みぬのである。統制革新、皇道の名に眩惑されて、実は、統制でも何でもない生命阻塞の理論に、引廻はされてゐる。笠氏のごときは前述せるごとくに、聖戦貫徹の積極的意志は持ち合はせてをらぬのである。しかし、笠氏もまた人間であつて、氏に意志がないとは言はれない。それは隠秘の中にかゝはれる社会革命の意志である。安部磯雄代議士が社会主義の徹底より外に時局匡救の途なし、と言つた言葉と結合せよ。日本主義者は、形而上学の迷夢に沈淪する学術的怠慢から、これら社会主義者の黄吻に使喚さるゝ愚を、一日も早く反省せねばならぬ。

イエス・キリストは、『凡べて分れて争ふ国は亡ぶ』と言つたが、資本家の横暴を二言目には口にする日本主義的書生論は、経済学の領域に倫理学の問題を侵入せしめる学術的無知で、経済的価値と倫理的価値とを明弁しつゝ、なほ政治的、芸術的、宗教的諸価値の明確なる認識の下に、全人生的価値を歴史的生成のうちに実現すべく用意するところの、真の歴史哲学、精神科学の準備なくして、今日の複雑深刻にして重大なる時局を乗切ることとは出来ない。全国民に戦争貫徹の意志を与へよ。そのためには、消極的道義論を以て国民を束縛する今日の国民精神総動員運動のごとき

によらずして、聖戦の意義を明確にすること以外にない。国民の精神を鼓舞せよ。凡べて偉大なる精神は、偉大なる精神によつてのみ生みなされることをおもへ。

最近外務事務官米内山庸夫氏が、「外交時報」二月一日号に執筆した「事変処理の基調」の一文によつて、その職を免ぜられた事件が、斎藤隆夫氏の議会演説、同氏の除名処分事件と時を同じうして起つたことは、注目せられたのである。斎藤氏の演説は問題にするまでもないが、その処分が月余を要したことに問題があることについて、筆者は他の雑誌で論じたからこゝに論を重ねない。しかし、米内山事務官の論文には用語の不用意はあるが、全体の思想はかへつて東亜協同体論者より遙かに正しい。「東洋平和のためならば何の命が惜しからう」といふ軍歌が何のことやらわからぬ、と言ふ如きは、正しい思想である。斎藤演説にも、国民の気もちは或る点もられてるのであつて、かゝる国民的感情を庄殺するのが、今日の流行思想である。しかし東亜協同体論は、政府官僚の中に支配的勢力をえてゐることを忘れてはならぬ。

凡べて真の改革意志は封ぜられ、擬似思想が流行する今日、日本主義者は如何なる決意をもつてゐるか。忠誠心をもつ青年は、如何なる努力をなすべきであるか。われらはそれについて繰返し論じて来た。われらは、かゝる内敵と戦つて之を討滅せねばならぬと信じ、それを神に祈るものである。

長詩・北白川宮永久王殿下

〔註、田所さんは、学習院初等科時代、北白川宮永久王殿下の御学友であり、その後も御親交を賜っておられた。〕

〔学生生活昭和十五年七月号〕

み空は雨雲おほひ

灯火管制の光とぼしき都大路

両側に堵列するみ民ら

御遺骸は五時四十五分立川飛行場に

つかせたまひ

八時ころこゝを過ぎさせたまふと

うけたまはりて

殿下の御帰京をまぢまつるに

警備の人のたゞずまひとゝのふ中を

はるか原宿の方より

あか／＼と光放ちて

せまりくるみ車の列

あゝ み車のヘッドライトの

み民わが胸を射ぬく と

宮殿下慕ひまつりてひたなげく

み民わが悲しきこゝろに

いつかしく教令せさせたまふ と

をろがむ中を

しづ／＼と過ぎさせたまひぬ

○

北白川宮永久王殿下

殿下には貴き御身を以て北支に出征

あらせたまひ

将兵と戦陣の辛苦を分たせたまひしが

九月四日蒙疆の地に神あがりましぬ

あゝ かなしいかな

○

宮殿下薨去遊ばさるとうけたまはりて

われらおもひぬ

昭和の大御代に 国民の間に臣道感覚

うすらぎて

おごりたかぶり

外面的機制の整備を追ふ物質主義

国民の心をおほひ

ひたすらに 大君のみため

たゝかひて死ぬべき臣道の

をゝしきかなしき精神の

やうやくに^{すた}廃れゆくとき

殿下には

貴き御身をもちて

戦場に神あがりましまして

忠義臣節を

御身みづから示させたまひしを

あゝ 殿下ゆかせたまひて

われら臣民 何を以て生くべき道理あら

むやと

くりかへしくりかへし 心に思ひ

友と語りぬ

○

日本臣民の生の儀礼は戦死あるのみと

語りしは きのふとおもほゆ

われら たゞ

殿下のみあと慕ひまつりて

戦死のみありと

たゞならぬいまの日本に

決意かためぬ

○

去年こぞの夏 相州たいま当麻村の合宿に

台臨仰せいでさせたまひし殿下

御激励の御言葉垂れさせたまひし殿下

殿下のみあと慕ひまつりて

われら生きむと誓ひまつらむ

○

その夜われらは

殿下のみ柩ひつぎを送りまつりて

隊伍とゞのへ

闇ぬち

明治神宮にまうでまつりて

明治天皇の大御歌誦しまつりぬ

折にふれて

なすことのなくて終らば世に長きよは

ひをたもつかひやなからむ

折にふれて

石だゞみかたきとりでも軍人いんぎんみをすて

てこそうち砕きけれ

あゝ 北白川宮永久王殿下

殿下は貴き御身をもちて臣道の忠節を

つくして

神あがりましぬ

いまこそみ民ら

おどろき めさめ

一向直進 臣道をひたゆくべしと

われらはおもふ

悲しき涙のごひつゝ。

三井甲之先生の論文集の「はしがき」の一文

〔学生生活叢書〕第四輯三
井甲之先生著「日本の文
化の勝利」の「はしがき」
昭和十五年八月十五日記

精神的世界の出来事は抽象的・非具体的である、といふ迷妄から、国民精神生活を解放せねばならぬ。国家革新は、国民精神生活の水準を高めることによつてのみ可能である、といふことを、新時代の合言葉とすべきである。経済的現象と機構組織のみが具体的先決問題である、とされてゐる現代は、精神的に見て低い時代である。人間精神が、人間生活の諸現象の原因に溯り得ない、といふことは、自然現象に比して比較にならぬ程、因果関係の錯綜する人生に対する危険信号である。精神的諸現象の法則を研究闡明するといふことのみが、精神生活の水準を引上ぐる方途であり、そのみが、人生の安全を保証するのである。精神は人々の心のうちの出来事であり、心と心とが相通ふときに、その交流によりて生れたるものが、人々の心に直接影響するものであり、全体的精神は空間に宙に浮いて存在はせぬが、元來、人の心と心とは常に相通ふものであつて、その上に生成的に実存するものであることを体験したならば、この非常時に依然たる機構制度の改革といふごとき間接悠長のことは、許されざることを悟るべきである。

今日の日本は、国民が直接その精神の偉力を發揮すべき時である。戦線にのみ戦争があるのではない。総力戦であるといふことは、人生そのものが戦であることの意義を明確にせねばならなくなつた時、といふ意味である。それは、見えざる捕捉しがたく見ゆる国民精神生活の上に、戦が遂行せられつゝある、といふ意味である。それはまた、今日迄国民は、戦争の指令の下にのみ動く被動的地位にあつたものが、少くとも、国民精神生活の上に遂行せらるゝといふ意味に於いて、各自は、命令を受くる地位と共に、全体を常に洞察し全体を動かしてゆく主動的地位を与へられたことを意味するものである。国民は、高き任務の遂行を要求せらるゝのである。国民の精神的水準が高められねば、かゝる全力戦に應ずることは出来ぬのである。

精神の法則は、意志によつてのみ把握せらるゝのである。概念の整理には堪へぬ複雑の心理法則・人生法則は、意志の統綜作用によつてはじめて実現せらるゝのである。人生の法則は、認識理解せらるべき自然法則と異り、それは、生成実現せらるべき生の基準であり目標である。それを究極すれば、日本国体である。

日本国民は、いま高き偉大なる精神生活を実現せねばならぬ。人間が人間の心を、自らの心も、他の心をも知る時代を開かねばならぬ。国民各自が他の心を知る時代を開くのである。苦しみ悲しみ喜びまた願ひを知り、それを、心にをさめ、また歌ひあぐることに努力すべきである。ま

た外国人の心をも知りをさむべきである。古今の世界の偉大なる精神を知り、それを、現代に実現すべき精神的大交流世界を展開すべきである。何よりもまたそれは、神代の創造的精神を直接継承しつゝ将来の人類の魂の故郷となるべく、最も豊富にして簡單化されたる崇高の素朴さを実現すべきである。我等の学生運動は、かゝる目標の下に邁進するものであり、従つてそれは、眼前の改革に眩惑されぬ三世一貫的重大性を有するのである。如何なる時代が来ようとも、我等の運動の重要性は不変である。さうして常に如何なる時局にあつても、他と比較すべからざるこの際然たる重要性が強調されねばならぬのである。もしかゝる重大問題が曖昧になつたときは、国家生命の希望は薄らぐもの、と覚悟すべきである。

我等の運動は、日本思想史ことに、明治・大正・昭和思想史の必然性に立脚してをる。その詳細は本叢書別巻にゆづるとして、明治より大正・昭和にかけて、弛緩せる国民思想が故らに埋没せむとしたる折に出られた、思想的偉人三井甲之先生の思想運動に、我等の運動はその源を汲むものである。先生の純思想運動が、我等によつて政治的性格を帯びて現実国家生活の上に実現せらるる方向に動いて来たことは、先生の国民思想改革意志が、時代の急転と照応したことを意味するものである。我等は孤奮奮闘の先生の思想生活を永遠に忘れざるべきである。いま「日本文化の勝利」と題して、本書を「学生生活」叢書第四輯として出すことになつたが、本書にをさむる先生

の数種の旧論文にも、時代の推移と著者の思想生活の開展過程が察せらるゝのである。我等に、また将来加はるであらう無数の同志に要求せらるゝ任務は、先生の独創的見地の暗示する無量の問題を、全世界的広袤に於いて解決・構成・実現することである。そこには、先生に劣らぬ天才が要求せらるゝのである。我等の運動は、未曾有の天才的事業の合成によつて展開せらるべきを思ひ、我等は来るべき偉人の群に、広き大いなる道を開かむとするものである。しかしながら、我等の運動は無数の偉人を生むであらう。高き精神的時代はそれを要求してをるのである。

教育者の苦悶

——これは某県下教育者の指導者講習会の指導に行つた経験の記録である——

〔学生生活〕
昭和十六年一月号

一月十四日午後十一時東京発、山積せる仕事、筆者の発程を最終の予定時刻まで引きとめた。駅頭には寒風が吹きはらふ。見送りの友二人。列車は動き出す。窓外に手を振る友らの遠ざかりゆく顔。疲労せる身を腰掛に託してやがて夢路に入る。国家の大困難に回天の業を成さむとする志望、無限の戦を暗示するものゝことき単調の轢音を、うつゝともなく聞いては寝醒の二途にさ迷つた。

明くれば山壁に光る朝暉、快晴、窓下にも水が流れる。午後四時某温泉に泊。

十六日、講習会第一日、午前九時より午後四時迄、講演及び質疑応答、問題は英国の植民地政策と現代日本教育史、講師伏見猛彌氏。抗日軍政大学の話が殊に興味深い。日本に事変に処する如

何なる教育的用意があつたか。二百余名の聴講生は、客観的諸状勢に憤激の眼をかどやかす。しかしそこに見られたものは、外部的事実に関する激情であつて、深刻の内省を伴つてはをらぬ。文化といふ内面的問題は、これから更に論ぜられなければならないのである。午後七時より三十五名の合宿生の研究座談が行なわれる。問題はこゝに發生する。

元來筆者は、二泊三日にわたる講習会の合宿指導と、第三日目の講演といふのが、与へられた任務であつた。合宿生は、県下の中学校・女学校長及小学校長が大部分を占めてをるが、数名の青年教育者も之に交る。第一夜の研究座談に、簡単な自己紹介及び感想発表から始められる。

しかし、筆者は刻々に容易ならぬ教育者の苦悶を見出して行つた。抑制せる表情、自己を責むる激語、解決点なき問題の無限追及、かくのごときものが、次々に呈示された。こゝで、これらの痛切の告白を整理してみると次のごとくである。彼等はいふ――

「従来我々は、大体に於いて町なり部落なりの指導者であつた。そういふことは、やがて事実となつて現はれて、我々は民衆の尊敬をかち得てをつた。しかし、現在はあまりにも世の移り変りが激しいため、我々は寧ろ若いものに教へを請はねばならなくなりつゝある。我々は、青少年を導く力を失はむとしてをる。抑々今日何を教ふればよいであらうか。我々の勉強が足らぬのであるとおもふ。しかし、さうおもつても何となく割切れぬものがあるのだ。」

「今日我々の最大の苦悶は、学校で先生が教へることゝ、子供が家庭の父兄なり家の職業の親方なりに言はれることゝの間に、全く相反せる対立状態が出来たことだ。自分らは「公益優先」・「臣道実践」といふことを子供等に教へる。しかしそれは、家庭で次から次へと根本から覆へされつゝあるのだ。このやうなことでは、教育といふことが不可能な状況に立至つてゐるやうにおもわれる。一体我々に何をせよと言ふのだらうか。」

「自分は子供達を親の手から奪つて教育をしたいとおもふ。それは出来ないことかも知れない。しかし子供らは此頃とくに事毎に『わりや損ぢや』と言ふやうになつた。一寸の不公平にも働かなくなつて来た。一層の事、親の手から離れたらよくなるのではあるまいか。自分にはそれが唯一の途のやうにおもはれる。」

またかうも言つた。

「今まで米が二合五勺の配給だつたが、それでも相当に苦しかつた。しかし最近、それを二合にせねばならなくなりかけてゐる。二合五勺になつたときも苦しかつたが、今度二合になるとき、自分らはたゞ上からの命令のやうに、『戦争中だから我慢せよ』と言ふ言葉を鸚鵡返しにしただけで、果してそれですむものであらうか。それで子供に対する教育の良心が許せるものであらうか。自分達は、教育者として今日何も言ふべきでなく、たゞ如何なる苦しみにもたへてゆくこ

とを垂範するのみが、残された道であると信じている。」

しかし、そこには解決の端緒すらも見出し得ない。

十七日、午前六時半起床、校庭で 皇太神宮及皇居遙拜、御製拜誦、八時より九時迄、研究座談、昨夜の残りがつゞく。九時より講演、明日の筆者の講演の前提として、「職域奉公といふことばが諸君に与へられているが、果してそれだけで忠義をつくせると諸君はおもつてゐるだらうか」といふ設問を与へることにした。九時半より、北野教授の「新体制の経済」といふ講演、十二時にをはり、一時から再開、三時迄続く。だが、何といふ統制経済の公式論であらう。質問の時間、筆者が質問する。「社会主義的統制経済の公式論だとおもつたが、それはさておいて、主観価値による客観的経済価値判定の方法は如何」、北野氏は「社会主義」の言葉に機嫌を損じた。しかし、筆者はいふ、「所有権を否定せずとも、その使用収益権を否定することは、事実上所有権の否定ではないか」。これだけで充分であつた。聴衆は「社会主義」の言葉に迷つた。それは、「新体制」や「臣道実践」「公益優先」にひつかゝると同じである。民衆が今日のテレビカルの統制経済論に疑をもちはじめれば、そこにやがて道がひらかれよう。

同日夜の研究座談に於いて、疑義が提出された。一論者は言ふ。

「講師先生からいろ／＼のお話を承つた。自分は県当局にむしろうかゞひたい。この講習会は、

政府の政策に協力する挺身隊の訓練だと思つてこゝに集つた。しかるに今きくところによると、国家の困難が強調されてゐる。これでは意気を沮喪せしめるものだ。一体県当局は如何なる趣旨を以てこの講習会をひらかれたのであらうか。

予期されたものが来た。筆者は待つてゐたのである。

その夜、また翌朝、筆者の態度は極めて嚴肅であつた。合宿生は膝を正して聞いてをつた。如何なることがあらうとも曖昧の中に事を終らしめざることが筆者のモットーである。一人の反駁するものもなかつた。もしこれで動搖を与へたとするならば、——たしかにそこには動搖があつた——それはよき結果を生むことを信じてゐる。筆者の言つたことは次のごとくであつた。

「現代国家生活の困難が眼を覆うて破局に直進しつゝあるがごときものであるならば、諸君はこれを如何にするであらうか。諸君は、『職域奉公』の語を与へられている。諸君は、日々の不安にも不拘、その言葉にわづかに生活の依拠を見出してをるのであらう。しかし、それがもし砂浜に築く砦のごとく、大波来つて忽ちに流さるゝものであつたならば如何。それでも諸君はなほ砂上の遊戯を続けむとするか。週報叢書新支那読本を見よ。それは支那事変が新しき国家体制の樹立を目的とするものなるを説いて、一言事變の大義名文を説くところがない。そこには、聖戦の意義が失はれ去つてをるので。諸君は大政翼賛会実践綱領を見る。しかし、その中に記されてゐる『総

合的計画経済』の語は、社会主義者筈信太郎氏の経済計画そのまゝの実現を内容とするものだ。いまや、国民思想は、滔々として日本国体・国民生活の破局へと進みつゝあるこのとき、諸君はその職域を守るのみで奉公の誠が竭つされるとおもふのであらうか。もし現実の問題を知れるために意気沮喪すると言ふものあらば、いま直ちに教育の任を抛棄ほうきせよ。諸君は真正の指導者でなければならぬ。指導者は、全国家生活を思想し意志してはじめて、その任を全うしうる。それはたしかに苦痛にちがひない。しかし、諸君は敢へてその苦しみを背負はねばならぬ。国家の最大困難時である。諸君がもしこの苦しみを負はぬとならば、諸君は臣民の分を果し得ぬと信ずる。」

満場は声をのんだ。九時十分前。講演の時間である。一同は会場へと向ふ。

こゝに、筆者は松陰先生の教育精神を説く、「非常時局下教育の精神」と題して。そこに如何なる疑問が起きようとも、その疑問は、自らに解決に向つて直進するものだ。筆者は、無限の沙漠に放つがごとき疑惑を以て、人の心を破壊するものではない。

筆者の言葉のひびきこそ、彼等の心を動かした力であつたことを確信する。午後、質問応答、詩集「祖国礼拝」を誦して、三日間の任務を終つた筆者は、送らるゝまゝに後をかへりみず、船に乗つた。船は白波を蹴つて温泉地に向ふ。遠くさかりゆく白砂青松の合宿地を一度は望み見た。温泉膚に滑か。筆者の進みつゝある行路は、国家の危局に処せむの道。一講習会は、筆者の心

にいまさらに言ひ知れぬ愛憐の情を点じたことを知った。明治天皇御製を心に浮べた。

仁

しづがうへに心をとめて縣もりたづなき身をいつくしまなむ（明治三十八年）

激烈無涯の戦ひの中に生起する波動か、国民生活を確保せよ、かくわれらの上に敵命は下る。

十九日、汽車は海岸を沿うて帰途の身を運ぶ。小さき浦、山間の家、それらは新しき決意に印する不可思議の象徴である。東京には戦が待つてをる。何よりも東京は思想戦々場である。すべてはそこにかゝつてをる、この戦場に、興亡も、生死もまた。

現代に於ける精神科学の使命

〔精神科学研究所要綱〕
昭和十六年二月

——（註、故人主宰の）「精神科学研究所」の「要綱」の「序文」——

現代日本が、国運を賭してその中に指導的地位を占めむと戦ひつゝある世界の情勢は、俗流思想が之を「舊秩序に対する新秩序の闘争」と呼んでゐるが、これはあまりに安易な概念的皮相論である。正確且つ具体的に言ふならば、フランス革命以来、全欧を支配した合理主義的精神の惨

禍を前大戦の敗北によつて満喫した独逸民族が、地獄の苦患の末、ナチスの政治的文化的総合的努力によつて、既に失はれたる民族の原始的生命を再確保し、それはまた、東亜に於ける日本の国家的威力に触発されつゝ既に全欧にその力を及ぼし、更に歐洲の文化的分派たる米洲をも争乱に投じて、今や全世界を疾風怒濤の渦中に巻き込まむとしつゝあるのである。この独逸民族の原始的生命威力を喚び覚したナチスの思想革命こそ、現代世界史の中に特筆すべき事実であつて、我等は今、全人類の耳目を聳動する出来事の殆ど凡べてが、こゝから起源してゐる事を否定する事は出来ない。されば、現代世界の趨勢は、之を概括して言へば精神の革命過程であつて、精神思想學術に於ける勝利こそ、一切の勝利の根源的出自たることが現代史の最重要枢機である。

しかしながら、翻つて祖国日本の現状は如何。その国体の威神力によつて真の意味に於いて世界文化の最高優位を占むるに不拘、日本の指導者は、身に余る国家の恩寵になれて、祖国の尊威と世界の状勢とを知らず、政治経済的に何ら日本国体・日本精神の威力を内外に發揮すべき積極的努力をなすことなく、これらを表示すべき言葉は、その響きが徒らに抽象概念のみ伝へる音標文字と化し、支那事変そのものが世界皇化の真意義を失つて忌はしき東亞連盟・東亞協同体思想の昏迷の中に埋没せしめられむとし、国内政治的には、人間を物質化してこれを駆使せむとする組織的強圧の方途によつて国民精神の萎微沈滞を誘導し、経済的には、人間性を無視し精神生活

を破壊する機械的統制の強化によつて、国民生活の窮迫と国防力の低下とを招来せむとしつゝある。これらは凡べて、元來現代日本學術の衰頹に原因するのであつて、日本精神は衰へずと言つても、旺盛なる精神も老雜錯綜せる現代國家生活にそれを貫くためには、そこに正確なる學術の武器を必要とし、これなくしては精神そのものが弱化する事實を、悲しかけれども祖國の現状に見しめらるゝのである。この精神的學術的努力なくして、日本國民の血の純粹性を説き、それを防護する努力なくして、軽々に國体の不易を言ふごときに至つては、許されざる危險なる樂天思想であつて、今日この非常の時局にその流行は最も寒心にたえない。

兵器の發達が世界列強に優位せりと信ぜられるところに最も顯著に表はれてをる現代日本自然科學の進歩程度が、所謂「科學振興」によつて救はるゝであらうとは思はれぬのである。それは近來「國民体位向上」の叫びが高いが、それが直ちに日本國民の身体の健全化に役立つと思はれぬと同じであつて、兩者とも、それを根拠づける理論は舊態依然たるものである。殊に精神科學部門に支配的勢力を有するものが、今なほ概念の配合を弄ぶ弁証法哲學である事實、諸精神科學の基本的研究分野たる國史・國文學が、未だに實証的研究の書誌學的傾向に墮落してをる現状、個人主義倫理學、徹底民主主義の法律學・政治學、經濟學に於けるマルキシズムの決定的影響等の現實の事態は、國家の威力を發揚するには、それはあまりに否定的であると言はざるを得ない。

嘗て国体明徴問題が論ぜられしころ、学者の勝手な議論が国家の進路を左右するものではないからして之を放置しておいてもよい、と言つた人々の言葉が、明らかに誤謬であつたことは、今日最早万人の認識するところとなつた。

之を通じて、現代日本學術の誤謬は総合的精神に欠け、それはたゞちに、精神科学の貧困を意味し、精神科学研究方法の根本的要請としての、宗教的信仰・芸術的表現との重大補足關係を無視するものであつて、それは、前大戦当時の独逸、現在の敗戦仏蘭西、また、この世ながらの生地獄赤露の学問との、あまりに著しき相似的傾向を表はすもの、と言ふべきであつて、この現代日本の学問の涸渇困乏・低迷没落の現状を打破せぬかぎり、たゞに国家の衰運を招来するのみならず、やがて万邦無比の国体の危機を導かぬと誰が保証し得よう。

フランス革命の歴史無視の合理的精神が、亡国ギリシヤの哲学に端を発し、民族生活の生々純一性を失つた世界国家ローマとその運命を共にした舊教精神の支配下に、長く歐洲諸民族をとらへた誤謬思想の結果であつたことが、独逸が遠く原始ゲルマン神話の回顧によつて蘇生した所以であつて、独逸・伊太利・西班牙等、その文化的反省の程度に深淺の差こそあれ、ひとしく民族的・思想的苦悶の末に、人間精神の威厳と威力とを喚起せしめたものであつた。まことに殷鑑遠からず、今日、精神科学の興隆なくしては日本の現状は打開せられず、刻々に迫る危険を排除す

ることは出来ない。

しかしながら、数千年の東洋文化を総合統一し、それを現実に把持しつゝ、今や西洋文化をも含めて全世界文化を博綜せむとする日本文化開展の高き階次が、元来そこに一切の人間性また人類理想を確保する万邦無比の我国体によつて導かれたものであることは、日本国体こそは精神科学の根本原理である証左であつて、人間精神の将来は、日本国体の宣揚によつて希望あらしめらるゝこと言ふ迄もなく、人類運命の開拓のために、いまこゝに我等が志す精神科学の興隆は、替ふべからざる使命を負ふものなることを痛感せしめらるゝ。されば、精神科学のための決死戦闘こそは、戦場に突撃するにもまして重大任務に従ふものであり、その研究と批判とは、国体に随順し、大君のまけのまに／＼戦死を究極目標とする苦闘精神である。

さればこそ、この人間精神を死守せむとする精神科学研究の為には、その研究協力活動は戦友としての結合によつてのみ実行せらるべきであつて、研究者の団結が、自然生長的結合体であることを必要とする。それ故に、在来の研究所のごとく、社会に対して一定限度の任務を負ひ、その遂行のために一定の技能を有する者が集められ、その組成者が職業として研究に従事し、人員の交替が随時に行はれ、従つて研究所の機構は相当長期存続せらるゝとしても、時代精神に対して決定的影響を与ふることなく、時代の急転と共に其の存在意義次第に稀薄となつて、徒らに浪費

を増すものではない。それは精神科学研究所としての任務を果すものではない。それは本来、精神科学研究所と呼ぶべきものではない。ゲーテがヘルデル、シラー等と共に協力したとき、渾一の精神の創造力に富める結合によつて、はじめて精神科学の興隆は期待し得られる。しかしながら、ゲーテの生きた時代と国家と以上に、今日の日本にあつて精神科学を興すためには、決死の闘ひが必要である。そこには、戦士の覚悟が要求されねばならぬ。誤謬思想が、やがて国民生活を破壊し国家を衰頽せしめ、遂に国体に累を及ぼすべきをおもつて、それとの死闘をなさむとするものこそ、研究所を構成すべく、而してこの激戦にたふべき緊密の結合は、現代の精神的危機の中に自然必然的に生れた青年学徒の生命的団結以外にはなかるべきである。かゝる結合体はそれ自身、国家の防護に無涯底の時代的使命を負ふものであつて、研究所の機構は、その時代的使命を果す為の手段であり、研究所は無限に存続するよりも、使命果遂の為に自身焼尽することくであつて、むしろはじめて効果を發揮するものといへる。かゝる研究所は、その構成結合体の生長によつて不可測に生長するのであるが、かゝるものゝ存在こそは、真に国家の将来に希望を約束するものといへよう。本研究所は、昭和三年以来知識青年学生層の中に、一貫生命的に展開せられた純一の思想學術運動の協力によつて構成せらるゝものであり、かゝる協力が、現代日本に比類なきものであることは、本研究所の重大存在意義を決定するものである。

この生命体は、詔勅・御製・記紀等を拝誦・読誦、かんながら惟神の国民宗教に生くると共に、自ら詩歌の創作に従事して、人間精神の微妙至極の弾機にふれ、その生成発展の大道に随順し、學術研究の體験的方法的基礎を得つゝ、更に、現実的國家生活にその學問の成果を實現せむと努力する。既に研究は、研究所開設の以前に用意せられ、殊にその根柢的基点は準備せられてをる。もし部分的・一時的努力でなく、人間生活國家生活の総合的留意が来るべき時代のために必須のものであり、またその用意こそ、来るべき時代を予告するものであるならば、本研究所こそ、新しき時代の為に待たれたるものでなければならぬ。

「精神科学研究所」構成生命体の生成史実

「精神科学研究所要綱」
昭和十六年二月

——（註、故人主宰の）「精神科学研究所」の「要綱」の第一章の全文——

構成員が青年学徒の生命的協力体をなしておることについては、「序」末段（註、前の文）に於いて触れたところであるが、こゝにこの協力体の沿革を概記して、本研究所の性格を知らうとする人々の希望に応へたい。

昭和三年といへば例の三・一五赤化大檢舉事件の年であるが、その四月、第一高等学校に入学した数名の学生の間に、一つの純粹の同志的結合が生れた。読者の方々はどうか当時の深刻なる思想的不安を想起せられたいのである。思想問題については一部識者が之を考ふるのみであつたとき、三・一五事件こそは、世人を今更のごとく愕然たらしめたのである。農村、工場、鉱山、大学、高等学校から官庁に至るまで、全国総赤化の事実が眼前に展示されるのを見て、国体変革、私有財産制否認のマルキシズムが徹底浸潤せる有様に、社会は悚然たるものがあつた。しかしいま最も重要なことは、当時よりも遙に重大なる客観情勢下にある今日、当時以上にマルキシズムの浸潤せる現実事態をおもふことである。我らは腕の力をつくる迄警鐘を乱打する。息の根のとまる迄、絶叫せむとする。しかしそれはさておき、その当時、黒上正一郎といふ純信にして篤学な一青年学徒が、聖徳太子の研究に精進し、徳島商業学校卒業だけの学歴なるにも不拘、東京帝国大学その他で研究発表を行ひ、聖徳太子研究家として既に学界の認むるところとなつてゐたが、同氏が一高内に於いて、太子に関する熱烈な講義を行つてをうた。その下に集つたのが、前記数名の学生である。彼等は三・一五事件直後の赤化学生猖獗暴慢を極める学校内になつて、学校当局が何ら之に対する根本的対策を実行する能力なきを憤りつゝ、深く日本青年学徒総赤化の現状に対する根本策に思を潜め、真に日本精神文化の根軸を体得するに非れば、国民思想改革

の策立たざることを信じ、先づ己等自身の研究こそ重大なることを悟り、黒上氏指導の下に「第一高等学校昭信会」を起し、年々純粹の同志を募り、アカデミズムの機械的研究に影響されざる眞の生命的研究結合体の成立を企図したのである。

これらの学生は、黒上氏の人格の影響をその若き魂の上の不滅のものとして印した。といふより、彼等の思想的生涯の基礎は、黒上氏の魂の導きによつて成立したと言つて過言でない。事実「昭信会」の設立も、黒上氏の首唱になつたものであつて、いま全国に拡がる「日本学生協会」の運動メンバー、またその中にあつて、今なお有力の会として存続してをる「昭信会」の出身會員が、黒上氏を生ける人のごとく仰いでをることは、氏の靈魂が、今日全国数千の学生青年の中に現実に生ける証拠である、といはねばならぬ。氏は、昭和五年九月二十一日、齡三十一歳にして長き病の中に逝いた。それは何と言ふ悲劇であつたらうか。現代日本青年の生活に特筆して記憶せらるべき最も重要な短生涯！ 氏こそは、世界的動乱の中に、建国さながらの苦闘を続けつつある現代日本の創造神話の中に記さるゝ英雄及び神々の一人である。

黒上氏は各方面に執筆したが、その主著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」は、不滅の価値を評価されている。既に昭和五年「昭信会」より出版してゐる。それは、文字通り生命を賭しての執筆であつた。本郷の下宿にあつて教を乞ふべく訪問する学生を導きつゝ、太子尊像のまへ

に祈禱しては、筆を運んだものであつた。同信の友であり、幼少よりの無二の親友であつた梅木紹男氏が、昭和四年三月逝いてから、死期近きことを神秘的感覺を以て予知した黒上氏が、太子讚仰の一念を以て、日本文化の威嚴を説かうとしてその靈魂をとどめたものが、前記の書である。それは、学界に伝つて令名を謳はれたが、それよりも更に重大なことは、この一書が、青年の魂に生けるさながらの精神的感化を与へたことである。昭和十年再発行に當つて附せられた「後記」の中に、次のごとく記されてゐる。

「黒上先生逝きましてより六星霜、歳月の経過の速かなるを歎かしめらるゝ。六年の昔昭和五年九月二十一日先生の訃に接したるとき、我等は現し世の無常を痛刻して、照らす日も暗きかに思はれた。先生に遇ひまつりてより親しく教を仰ぎしこと僅に二年に滿たず、しかしながら先生によつて初めて 明治天皇 聖徳太子の大御教に目ざめしめられ、日本青年としての行手に定かなる道を示されたのであつたが、われら年壮りならず、稚き心に進むべき力さへも失ひし時、われら同信生活の生命を一縷の糸に繋ぎしものは、諸先輩の指導は勿論乍ら、一に本書の中に遺されたる先生の不朽の生命であつた。われらは本書を共に読誦することによつて、一人居て喜ばゞ二人と思ひ、二人居て喜ばゞ三人と思ひ、先生に遇ひまつることを得ざりし多くの友らと共に、在りし日にかはらぬ集ひをなすことを得たのである。(下略)」

黒上氏は本書の発行を待たずに、昭和四年暮、郷里にかへり、不起の病床にいたのである。

「昭信会」員が実際に氏によつて指導されたのは、僅かに一年半に過ぎない。しかるに十余年の間、生ける人のごとく青年を導いた氏の感化は、古の聖者を偲ばしむるものがある。吉田松陰の松下村塾が二年、キリストの伝道が三年であつた。黒上氏の教育は、実質上一年半に過ぎなかつた。かくして、「昭信会」員は、明治天皇・聖徳太子を、日本文化史の二つの重大時機の指導的人格として仰ぎまつり、日本国体の尊厳とその人類史上に於ける使命とを、日本文化の世界的開展の中に究尽せむとし、朝々夜々、天照皇太神の大前に、明治天皇御集を拝誦し、日本国民宗教儀礼を厳修して、こゝに純一の国民的同信同朋生活を展開して来た。彼等は、日本精神文化史上の偉人の研究を続けると共に、自ら作歌・作詩の精進を以て、その研究に生命を賦与せむとした。昭和七年一月、第一期会員四名中の二名を病患に喪ひ、その頃より会員は続々病床に臥した。それは黒上氏のあとを慕ひ、日本国民生活の精神的世界の将来に決定的使命を負へるものとしての自覚の下に苦闘した彼等の戦死戦傷を意味するものである。あゝ、現代学校教育、それは何たる死相の下にあるものであらう。彼、処には偉大の精神を伝へる何一つもないのだ。凡そ建国の古にあり、またあらゆる苦難の時代に表はれた日本の大精神は、大学、高等学校、専門学校のその他殆ど凡べての教育機関から閉ぢられて久しい。索漠たる生活、暗記のみによつて能力程度

を測定する試験のための全身的競争、無連絡無統一の学課目、それは日本青年の魂の墓場以外の何ものでもない。もし、真に偉大なる日本精神に生きむとするものであるならば、彼等は、この学校生活に死の苦痛を味はねばならぬのだ。「それならば学校をやめればよいではないか」と人は言ふ。何といふ無痛感の言葉であらう。学校教育に真の苦痛を味はぬやうの人々は、また現代日本の危機を感じぬ人々である。彼等のいふやうな安易な道を選ぶことは、国家の現状が許さない。もし学校教育の弊を痛感すること深ければ深きほど、離れがたい愛着と改革意志とを覚える。それ故に、我等の同志は病床に倒れ、やがて病床に多くの戦死者を出した。事毎にわが同志が営み来りしものは、思想戦戦死者の慰霊祭である。

思うても見られよ、昭和初年以後、全国数十万の青年が赤化運動に従事した。その過半数は学生である。事変以来外面的には一時終熄したかに見えた。しかしそれは、たゞ発表されぬために国民の耳目にふれなくなつただけのことである。運動は依然として継続せられたのみではない。昭和十年モスクワに於ける第七次共産党大会での決議による所謂「人民戦線運動」から、日本に於ける運動も合法化し、巧妙を極めたものになつて来た。実行的に際立たなくなつた代りに、思想的浸潤はおそるべきものがある。最近も東大内で大量の赤化学生検挙が行なはれた許りではない、計画経済の中枢部に於ける検挙は、世の耳目を聳動するに足るものがある。今こゝに赤化運

動史を記す余裕はないが、往年の「新人会」メンバーが、その思想内容に於いて未転向のままに今日新体制運動、統制計画経済に如何に多く参画し、これらのものが、実際に於いて社会主義的計画経済の合法的実行によつて、国民生活を危険に陥れむとしつゝある現状を見ればよい。これが、大正・昭和を一貫して今日もなほ些かも改められることなき学校教育の状態であることを、少しでも国民生活に関心をもつ人々は記憶して忘れざるべきである。そしてもう一つの事を記憶せねばならぬ。それは、かゝる国民思想の改革、もつと具体的には、教育の改革が単なる国家武力の発動、政治機構・社会機制的変革を以てして断じて庶幾すべからざること、是である。もしこれが可能ならば、今日何ら憂ふことはない筈である。まことに思想改革の問題は、たゞ一つ、死を以て之に当らむとする者の学術的協力によつてのみ得られる。思想を討つには、本来思想の力のみである。「昭信会」員を枢軸とする全国的青年学徒の思想運動は、実に現代日本に於ける唯一の力ある国民思想改革運動である。彼等は、日本の精神思想を死を以て守るべく研究し協力したのである。死は、彼等にとつてその歴史が示すごとくつねに身近にあつた。

黒上氏がその研究生生活の最後に師事したのは三井甲之氏であつたが、若き同志は黒上氏の死後三井氏に師事し、雑誌「伊都之男建」を出版し、昭和十三年に及んだ。この年である、東京帝国大学内に「東大精神科学研究会」が興つたのは。

同年三月同志学生小田村寅二郎君が、法学部試験を通じて当時助教たりし矢部貞治氏の学説を批判して氏の改説を促し、又四月河合榮治郎教授が、「我々は(自由主義の意)今こそマルキストと手を握り、共に人民戦線として右翼に砲弾を打ちこまねばならぬ」と、その「社会政策」開講の辞に述べた事実を、同君が雑誌「いのち」九月号に執筆したことから、同年十一月、無期停学処分をうけた(同君は二ヶ年放置された後、昭和十五年十一月二十九日何等の理由なく、退学処分に附せられた)頃をきっかけとして、東大内の同志に呼応して学術思想改革を叫んで蹶起する学生が全国に輩出するに至つて、今や学生運動は必至の勢となつた。昭和十五年五月十三日、学士会館に於いて近衛公爵、末次大将等を顧問に仰いで「日本学生協会」が設立されたが、東大に会が出来てから現在に至るまで約三ヶ年間に、その間に生じた事件また行つた事業、それは実に一卷の史書をなすに充分であり、その一つ一つの事件は、悉く現代教育学術上解決を要する重大問題を含んでゐるのであるが、こゝに記述することは紙数が許さない。昭和十四年、相州当麻村に於ける「全国合同合宿」、十五年信州菅平に於ける同じく「合宿」、この二つは、運動展開の重大契機であつたが、その神話的創造力に富める一大青年劇の華々しく又深刻なる内容についても、こゝに記述する余裕がない。

現在「日本学生協会」は東京に本部をおき、全国七十余の高等程度の学校に、各々十名より三

十名をこゆる同志を有し、思想改革を志す学生が、真剣な學術研究と同志獲得に精進してをる。その数凡そ三千。文部省及各学校は最初之を放任し、次第に、理由なき圧迫を加へ來り、昭和十五年全国大学・高専に教育新体制を施くに及んで、「学生協会」全面的弾圧の挙に出て、それは、赤化共産主義猖獗を極めた当時以上の狼狽ぶりを示し、教育新体制といふその意味目的の不明なる戯事によつて、「学生協会」滅亡の意図を明示した。それは文部省某局長の言明でもある。しかし、元來かゝることは全く謂れなきことであつて、今や全国の趨勢は、「学生協会」支持にかたむきつゝあり、殊に文部省が大学・高専校の現状を放置して、「学生協会」会員の激烈なる思想を沈静せしむること不可能なることは、次第に識者の深慮するところとなつた。学生運動を奇激なりとする人々よ。諸君は、現代学校教育の事実について、自己の怠慢なる無関心を露呈するものであり、生命防護の感覚を失へる者なることを反省すべきである。

實際に、高専・大学でどのような教育がなされているか、各高等専門学校に於いても世間に知られない教室内の反国家的教説は、枚挙に遑^{いとま}がない。最近の例によれば、「忠義は滅びた道徳である」「天皇陛下万歳では死ぬぬ」「国家は過渡的なもので将来の理想としては主権が消滅し人類の道德的結合による世界国家となることである」「生徒主事の命令は陛下の命令であり、之に従はぬのは即ちに不忠である」等といふ、これらは数百例中の一二に過ぎない。その他は言ふに忍び

ぬものがある。のみならず、之等の言辭を批評した廉かどによつて、各種の処分をうけてをる学生事件が最近頻発していることは、まことに悲むべきことと言はねばならぬ。

この「学生協会」幹部が、学校卒業後各方面の公職を擲つて昭和十五年立籠つたものが「精神科学研究所」である。国内思想改革は、も早、学生運動による方途のみで到底得らるべくもないことは最初からわかつてゐたことであつた。真の改革には、徹底せる総合的學術研究が必要であること言ふ迄もないと同時に、真の國民運動が展開せられねばならぬこと、また論ずる余地がない。殊に、各方面に於いてその職域を通じて改革に當るといふことは、真に思想學術改革の実力を有するものにとつて選ばれるべき進路ではない。またそれは、憂心悶々の青年にとつてたへがたき方途である。何よりも彼等は、現下の國家的問題の學術的研究に専心せねばならぬ。如何なる困難があらうとも、彼等はこの任務に邁進せねばならぬ。これが、一切の公職を擲つて「精神科学研究所」を設立するに至つた動機である。その研究と事業の内容について、また、殊にかゝる研究が、こゝに略述せし如き生命的結合体によつて始めて可能なることについては、後章之を論ずるところに詳述してある。

さて、沿革は極めて粗略乍らこゝに概述を終らうとする。おもへば青年にとつて十四年の苦闘は、決して生やさしいものではない。彼等は幾度か己自身の苦悶の中に沈んだ。しかし、現代日

本の無涯底の思想的沈滞の中に起上つた。彼等は、凡べての世の誇りを捨て、社会的榮譽を求むる念をたつて、ひたすらに祖国日本の生命に生きむと念願し、現人神わが大君につかへまつらむ道に一向直進せむとし、最大の時務たる国民思想改革に、その若き魂をさげ来り、又ゆかむとする。その間、祖国防護思想戦に実に幹部中五名の戦死者、全国同志中十数名の戦死者を出し、又数十名の戦傷者を出し、病の中より起上りつゝこの最後の一线を死守し前進の幾過程かを經た。彼等は、現代教育また現代思想の禍乱の最中に十余年を生き、彼等は満身の創痍の中から奮ひ起つたのである。あゝ、かくして若き青年の感じ易く傷き易き魂の上に、激烈無比の祖国日本の生命防護戦は戦はれたのだ。こゝに集る青年は、その靈魂の中に於いて、現代日本の思想問題を解決する方途を見出した。それはその上に於いてゝも、その外に於いてゝもない。正しくその中に於いてゝある。

彼等の数は、全国青年の数に比べて未だまことに、寡少である。しかしながら、彼等が祖国日本の悠久の歴史をおもひ、悲しき国民生活の上をおもひ、ことに同じ志に戦ふ友らをおもうて、こゝに展開せしむる憶念と友情の世界は、目には見えねど、まことに広くはてしなきものがある。その世界は、彼等の若き胸の中にある。しかし、その内面的広さは、全日本国民生活の現在と将来とをその中に包摂するに足るものがある。もし日本の将来を決定すべき日本国民生活の改革

が、国民精神生活の改革によつて決定されるとするならば、またもし、国民精神生活の改革の事たる、その中に於いて真に国民全体の精神的苦悩を自らの苦悩として経験し、且つ之を解決する能力ある者に課せられたる任務である、とするならば、この青年の団結こそは、この任に堪ふる日本将来の力であると言はねばならぬ。彼等は、現代日本国民思想の善き意味に於いても悪しき意味に於いても、中核たりし帝国大学の中から生れ、その没落過程のたゞ中から、それ自らの再生の姿として起ち上つた。それは、日本国民生活再生の拠点である。何といふ豊富なる未来を暗示するものであらうか。彼等はもとより謙虚であるし、またあらねばならぬ。しかし彼等は、自らの思想生活の由つて来る道すぢをおもふ度に、自分ならぬ生の威厳と生命の躍動をその身うちにおぼえる。それは彼等の主観的恣意であらうか。歴史が一切を決定し証明するであらうが、しかし歴史の指し示す方向をおもふならば、その中に凡ゆる未来の萌芽を含んでゐる彼等の潜在力を認識し、その将来を祝福すべきではないか。

今日所謂統制経済論が横行し、それが殆ど政府の政策をも決定せむとしてをる。これ正しく、昭和初年赤化運動を処置し得なかつた余禍残殃である。国民思想の誤謬が国民生活の直接破壊を結果しつゝあるのだ。もし思想問題を処置せぬならば、国民生活の諸問題のみならず、東亜新秩序の問題、一切を含めての支那事変解決そのものが期し得られない。その唯一の方途について、

こゝに青年結合体の歴史を示さうとしたのである。青年は非常の希望を前途にかけてをる。如何なる困難があらうとも、それは決意の試金石以外の意味をもたない。

別離

——註、黒上先生の御臨終近きころの思ひ出——

〔新指導者〕
昭和十六年五月号

その夏は、東京にをる同志の学生は、黒上正一郎先生の病気の平癒を祈つて、朝毎に明治神宮に参拝した。前年の暮、療養のため郷里に帰つて行かれた先生の疲労した儂ばかりが眼にうかぶ。それきり八ヶ月、先生は病床を離れぬのである。三月頃、看護かたぐ、徳島に二週間行つてゐた友の言葉によると、その頃は蒲団の上に坐つて、たゆい眼を庭さきや、向ふの眉山の新緑に放たれる日がつゞいたとの事であつた。友はそこで法華経を読み、それについて先生の教を乞うた、と帰京して報告してゐた。それからは、数通のはがきが来たゞけであつた。それには、皆同志の学生の上をおもふ同じやうな哀切な歌が記されてあつた。六月の中頃から、そのはがきも来なくなつてしまつた。お祖母さんの一途な愛情は、先生をたゞ手許から離さずにあつたのである。サナトリウムに入るなり転地するなりして、厳格適切な療養をすれば、先生のやうな重症

も必ず治つたとあとから幾度か僕等はおもつたが、家庭的な不幸のつゞいた後に、先生と先生のお母さんだけを一家の人として、生き残られたお祖母さんの先生に対する悲痛な愛情は、先生の疲労しきつた身体を、自分の眼の中にある一室に閉ぢ込めて外へやらぬことのみを思慮せしめたのである。先生は安静といふより、密閉の中に死への途を急いだのだとおもふ。先生も外のことばは考へられなかつたのであらう。先生はあまりにも疲れてゐた、といふのが何よりも適切なことばである。

危篤の電報をうけとつて、友と二人東京をたつた。甲府の三井先生を途中訪ねて行かうとしたのは、どうした原因からであつたか今は思ひ出せない。何か非常な不安からともかくさうせざるを得なかつたものゝ様である。夜十二時頃新宿をたつて、朝はやく甲府に着いた。急いでゐる旅程の二三時間、洗面させていたゞいたり、朝食をいたゞいたり、それから書齋でお話をうかゞつたりした。丁度その頃三井先生は、てのひら療治のタナスエノミチを始めてをられて、東京の同志と三井先生と時間を合はせて、徳島に遠隔療法をするとて、掌を徳島の方にかざして祈念したことが二三度あつたが、西下の途中お寄りしたときには、日頃手に握つておる石を黒上先生の病床にもたらすやうにと手渡された。甲府をたつてからの旅程は、たゞ寂しかった。中央線沿線はもう秋色が濃くて、線路の両側の尾花がさわ／＼と窓をかすめて美しかった。夕暮の諏訪湖のつ

めたい光も、遠く見るこゝろで過ぎた。汽車がたへられぬ程長かつた。名古屋についたのは深夜だつたとおもふ。

兵庫の港を日の出頃出て、風に吹かれながら、甲板に立つて艫に長くひく水尾みづびの上にまきこむやうにひくゝうねる煙を見ながら、胸が塞がるやうな気がした。こゝで意志的力をとりもどした。先生はもう亡くなつてをられるかも知れない。或はまだこの世に息を保つてをられるのかも知れない。しかし、僕はたゞさびしいといふ気はしなかつた。動乱は、水尾と煙のもつれにも感ぜられた。波を分ける船の震動にも身うちみうちの力を感じた。元来先生が病気になられてからも、また亡くなられてからも、僕には抜きさしならぬ気もちがつもりつもつて来るだけで、大して悲しいとおもはぬのである。午後徳島に着いた。先生の家に急いだ。しかし苦しい息をつゞけてをられる先生に会ふ術は得られなかつた。僕は先生の家のまへの商業銀行に連れてゆかれて、先生の家の執事のやうなことをしてゐる冷酷で狡猾な銀行員に、面会の到底不可能な由を告げられたのである。憤怒は胸につかへたが、眼の前の人間の顔面に浮かんで消える商業都市の無人情が、どうにもならないものゝやうに思はれた。それでも僕等と会ふよろこびに先生の息の絶えることを、お祖母さんが極度に恐れてをられるためだ、といふ事がやつとわかつた。しかし、その恐怖には明らかに先生をかうまでしてしまつた僕等に対する憎悪が、こめられてゐることが感ぜられ

て、時代に対する無感覚・無知に言ひやうのない憤りを覚えずにはゐられなかつた。

徳島に着いた翌日。薄暗い仏壇の間で幾時間待ったことであろう。先生は奥の部屋に臥してをられることが家の気配からわかつたが、先生が僕等の来てゐることを覺つてをられるかどうかといふことは、どうしてもわからぬのである。先生のおもひは、家庭よりも、自分の生死よりも、先生の志をつぐべく集つてをる僕等同志の上にあることは、先生その人のやうに僕等は知つてをるのだ。周田の人々がどう考へようと、先生は、僕等に最後の一言を伝へたがつてをられることは、僕等が先生の心のやうに知つてをるのである。それは神のごとく通ふことなのである。僕等に会はせないと云ふことは、先生の最後の慰めを奪ふことである。この最後の慰めが得られるならば、先生はその瞬間に亡くなられてもよいのだと確信してをる。町家造りの暗い部屋を二つ程通り抜けて奥の間の隣座敷に通されたのは、夕暮近い頃であつた。

衝動を抑制し、手足の震へを堪へる時間が長く続いた。天に哭するとは、このことであるか。眼のまへに、二間と離れぬところに先生は臥してをられるのだ。薄暗い家であるのに、なほ太陽の光線が神経に強すぎるといふ訴へから、障子には故らに幕が垂れてあつた。暗い谷底のやうな寢床であつた。頬のこけた上に、結核菌が顔面までも侵したといふ生ける人とも見えぬ先生の顔が、すぐそこに、しかしかすかにそれと見られた。胸の上に重ねられた腕、といふより骨であつ

た。身じろぎもしない先生、すべての色は沈み、たゞほの白い光線が枕辺におちて、動くものは一つだにない。

一切のものを見たこゝちがした。襖を一寸余り開いて、ともかく先生を見ることが許されたのだ。先生にたゞ一つの意志を伝へる手段も禁ぜられてゐる。感覚と行為との強制的分離に、心の中は逆巻く苦悶をたへねばならぬのか。泣くことすらも許されぬのだ。先生の為にといふ名の下に、かくして永遠の別離が行はれた。先生は、僕等が隣の部屋で悶え泣いたことを知つて逝かれたであらうか。これは今日迄神秘的な謎であつた。しかし、先生の靈魂は、たしかに知つてをられることを信じてをる。否、もうそのとき既に先生の靈魂は、先生の感覚を超えて磅礴はうはくしてをられたのだ。異常に鋭敏になつてをつた神経が、何ものかを感知してゐたことは確かである。しかし、先生は一言も発せられなかつたし、恐らく発する生氣も失つてをられたのであらう。否、僕等の苦悶を知つて、自らも沈黙に堪へてをられたのであらう。

かくして、我等の苦惱は始まり、同信生活の實質的基礎が確立された。「一粒の麦」と、地に墮ちて実り多き将来は、既に行手に見えてゐる。僕は先生が逝かれたことを信じない。徳島の彼の日より十二年の歳月が流れた。僕は、この十二年を一瞬に圧縮することが出来る。先生在りし日、それは過去のことであらうか。否！

天皇に直属する生

——浅野晃氏著の「楠木正成」を読む——

〔新指導者〕
昭和十六年五月号

我々は、日本国民生活の何千年の伝統的である忠義感情から、「大政翼賛会」のイデオロギ―と伝へらるゝごときものに対して、殆ど本能的反感を懐くものであるが、その成立時代、即ち昨年秋（注、昭和十五年）九月頃、幾度か「最高指導者」の語が新聞にあらはれ、かゝる言葉が、何の嫌悪も況や苦痛もなく、国民生活の間に瀰散せられて顧みられぬ現状に、心底よりの憤りを感じずにはゐられなかつた。当時我等同志が用ひた警戒の句は、「我等は 天皇に直属し奉る。我等は、最高指導者を通じて、天皇に属し奉るものでは断じてない」といふことであつた。「正成一人、まだ生きてありと聞召され候はゞ、聖運遂に開かるべしと思召され候へ」と奉答した正成の言葉に、我等は、 天皇に直属し奉る臣民の直接感情を感得するのである。

小田村寅二郎兄は、三月初め、関西大学に起つた「学生協会」学生の弾圧問題を解決すべく、大阪に下つたが、その下阪の車中、浅野晃氏の「楠木正成」を読み、「著者の心境に絶大の共感を覚えしめられたと共に、新たな感覚が、決死の覚悟を自己の心中によみがへらしめたことを告

白します」と記しつゝ、在京在寮の同志に、現下死敵せまる思想的内乱の日本に激烈無比忠義思想戦を展開せねばならぬ我等の決意について、警告と告白にみちた切々たる長文の手紙をよせた。それは、同信旬報「たゝかひ」第六号に掲載せられてゐるが、その小田村兄の手紙には、

「『正成一人、未だ生きてありと聞召され候はゞ聖運遂に聞かるべしと思召され候へ』、と表白した悲痛の言葉を、今更に感ぜしめられ、戦は、合成威力により究極の目標に邁進すると雖も、戦の具現は、個人を通じ、個人の貫徹せる至誠により、具現せしめられることを顧みしめられました」と言ひ、「関大学生諸兄に対しても、生徒主事等は所謂赤化運動に対すると同様に、親、殊に母親の愛情を以て之を動揺せしめ反省せしめようとしてゐるのでありますから、学生自身としては、忠孝の問題についての確固たる見解と志操を持つことが、何よりも肝要であります。国家の為には又大君の御為に生死する為には、如何に生くべきか、といふ生活原理を確保する時に、不孝の孝を切実に体感出来ると考へられます。然し、そこに展開される親子の憶念の世界は、実に深刻切実のものであり、その内的苦悶が常に大御心にすべをさめられつゝ、みおやの神を祈りまつり仕へまつる微衷に辛うじて人生随順の依拠を得られる所に、日本人として臣民として生くることの有難さを、しみ／＼感ぜしめられて来ると存じます。個人が苦しむことは、臣民の必然的運命であり、臣民たる以上は、忠義に人生を貫くために苦悶すること

は、不可避の運命と反省せしめられます。親も子も、この問題の前には、一臣民たるの立場が冷酷に要請されてゐると、云はざるを得ないのでありませう。妻子を捨て親を残して維新に活躍した志士の心が、今更のごとくなつかしく崇高に思はしめられます。現実人生の矛盾を解決しようとして出発する時、常にそこには劣弱精神が支配してゐると、反省すべきであります。口に悲劇的人生といひ、言葉に決死的精進と言ふとも、それだけでは空虚なひびきにすぎぬのであります。事ある時に雄々しき大和魂を發揮し得るに非ざれば、何事もなすことが出来ないこと、今更に感ぜしめられます。全体的運動をつゞけるわれらには、不断に外部からの反撃と反駁が止まぬのでありますが、この反撃が、運動全体又我等の同志全体にふりかゝつて来ると思ふのは大きな錯覚であります。それらは、時に応じ事にあたつて、全体の中の一個人に偶然にふりかゝつてくるのであります。強硬に志を貫いて戦ふ人にふりかゝるといふよりも、むしろ運動の間隙に襲ひ来るものであり、決意の十分ならざる同志の上に、訪れ来る傾向を実感します。その時その個人が、如何に一人で誠心を以て相手に対しても、一個人の至誠にして相手が動き問題を円満に解決することは、不可能に近いことであります。何故ならば時代風潮の「学生協会」に対する恐怖が、そこに精神的暴力の形を以て襲ひ来るからです。故に、至誠を死守し忠義に殉ずる覚悟と行動のみが、之を切り抜ける唯一の武器であり、一時の不遇を通じて、

千秋の志を発揚する事が、何よりも大切であります。水戸高校での「学生協会」の学生に対する処分にしても、「学生協会」の文部省・学校に対する戦ひが、総合的に言つて大局を見失つた感があり、それは、復校を以て勝利と思惟した点でありませう。改革途上の苦節戦闘のさなかにあつては、形の如何に到着するを問はず、志をあくまでも貫徹死守すると言ふことが、問題の眼目であり、従つて如何なる事態の到来に対しても、喜んでその危難を甘受する決意と覚悟を、当事者学生の心中によびめさますることが第一と存じます。これを前提として之を背景としてはじめて運動は、実績を挙げ、相手を震撼することも可能であり、よしそれが不可能にしても、勝利は我に帰することを感ぜしめられます。戦が激化し、我らの志が強化すればする程、不可避の危難が思はざる時所に襲来するのであります。それは白だすき決死隊に加はるべしといふ勅令としてかしくみまつらねばならぬことであり、死所の来りたるを当人は実感すべきであります。そしてそのときの時の到来を見誤らざらしめぬといふ事が、本部並に先輩同輩同志の配慮であります。切腹を命ぜられた同志に、泰然自若の心がまへを備へしめ、涙をふるつて介しやくするのが、時に臨んでの同志の心得でなければならぬと存じます。

幾度か死線を切り抜けて、しかも死線に多くの優秀な同志俊才を失ひつゝなしとげられた明治維新の実相を、異つた形に於て、我々も切実に回想すべき時と存じます。死線を回避せぬ、

といふことは、事に當つて忠義を以て日々の行動の価値規準として一貫する、と言ふ事であり、親の具体的の心の動きの如きに心が動揺することは、武士の名折であり、ものゝぶの資格すらない者と考へて行きたいと存じます。天命はいつ下るとも図り難く、ふりかゝる苦難を神のみ旨としてかしくみまつることを、何よりも心に銘じてゆきませう。神のまに／＼大君のみことかしくみ、といふことは、さういふことでもあらう、と感ぜしめられました。全体と個人の問題を、新たな感覚と思想を以て追求し明らかめゆくことは、何よりも大切な緊急なことゝと存じます。友に支へられてゆく、といふことは、友を励ましてゆくといふ主体性を要件とします。

共に一つの家に起居し、一つの研究所に集つて運動をし、志を貫いてゆくといふことは、一つの天恵であり、別れるときは、又強制的に分離せしめられるときは、いよ／＼出征の時と考へてゆきませう。分れ／＼心がゆるみ、家庭の恩愛に敗れ去る様では、牢にでも入れられたら、それこそ沈潜して自己反省におそはれるばかりでせう。

松陰先生が野山獄中で講孟余話を講じ、不滅の至誠を一貫せられた崇高雄大・悲痛雄渾の心情が目に見えて参ります。」

この戦の記録をよんで心打たれぬものがあらうか。何たる苛烈なる反省であらうか。こゝに小田村兄が説かむとしたのは、天皇に直屬し奉る臣道感覚の上のみ展開せらるべき我等の運動

の、一点も崩すことを許されぬ性質についてである。集団といふ一つの手段としての力を頼むことなく、直接に忠義の道を踏み行はむとする我等の運動は、従つて到達すべき究極の理想形態というものを持たない。それ故、「正成一人」といつたのは、「個人」といふよりも、直接感情の表白であつたのである。しかしながらそれが、歴史の上に客観的に唯一人の個人の至誠として証明されねばならなくなつた時、こゝに日本歴史の悲惨なる結果が生まれて了つたのである。我等は、この「一人」を個人たらしめざるべく戦ふのである。それ故に協力するのである。また協力しうる基拠を得るのである。小田村兄が「しかしそこに展開される親子の憶念の世界は、実に深刻切実のものであり、その内的苦悶が常に大御心にすべをさめられつゝ」といふ、こゝに、我等の詩の源泉がある。論理の楨杆を握つて放さぬ間は、忠義の道から遠くして遠い。

「正成は歌はざる詩人であつた」といみじくも浅野晃氏はいふ。「正成一人、未だ生きてありと聞召され候はゞ」といつた「一人」が、「個人」として描かれねばならなかつたところに、歴史としての悲惨事があるが、しかし、「太平記」が単なる史書でなかつたといふことは、個人を個人たらしめなかつた日本国民の深刻なる情意の生成連続である。正成その人は歌はなかつたかも知れないが、日本民族の正成は、悲劇であり史詩である。「太平記」を歌つたのである。浅野氏が描かうとしたものが、何よりも「太平記」の正成であることを忘れてはならぬ。詩は再生の表徴であること

は、正しく歴史が示したのである。悲劇は悲劇として読まねばならぬ。それは、永久に悲しみに生くるおもひである。それ故まことの悲劇は、われらにとつて日本歴史の上に求める外はない。

世阿弥の芸術は、まことに優れて高いものがある。しかし我等にとつては、そこに残る最高の作為が心にかゝるのである。もとより彼は「イカニスルトモ、能ニヨキ時アレバ、必ズマタワルキコトアルベシ、コレチカラナキ因果ナリ」と言つてはをる。しかし「サレバコノ道ヲキハメヲハリテ見レバ、花トテベチニハナキモノナリ、奥義ヲキハメテ、ヨロヅニメヅラシキコトヲ知ルナラデハ、花ハアルベカラズ」と言ふのである。われらは、この微妙の工夫を参考としつゝも、最後には、かゝる煩瑣の人生解剖によつて生くることを欲しない。ことに兎角そこに現はれる階層的人生観は厭はしいのである。正成より隔ること遠からざる時代、殊に、「太平記」の生まるゝと大差なき時代、足利義満——義持の傍に出たこの大芸術家の運命を、悲しくおもふのである。「能」は、世阿弥の厳格周到なる工作によつて連綿として続いたが、果して再生の重大の機会に会つたであらうか。我等はそれを知らぬのである。

浅野氏は、真淵の実朝評に「嫌らぬものがあるとして、「物いはぬよものけだものすらだにもあはれなるかなや親の子を思ふ」や「大海の磯もとどろに寄する浪われてくだけて裂けて散るかも」などを低く評価してゐることを指摘し、それは真淵が「肝腎な実朝その人の生活その時代とその

運命に立入つては、少しも考へようとしてゐない」ことを論じてゐることは卓見である。また、その後に引用される

大君は神にしませば天雲の雷いづづちの上にいほりせるかも

山川も依りて仕ふる神ながらたぎつ河内に舟出せすかも

の人麿呂の整つた格調よりも、

道の辺うまろの荆うれの末うれに這ふ豆のからまる君を別わかれかゆかむ

大君の命みことかしこみ出で来れば我ぬとりつきて言ひし子なはも

唐衣からざる褌すそにとりつき泣く子らを置きてぞ来ぬや母お母なしにして

等の防人さきもりの歌に心ひかるゝとおなじく、実朝の歌にも

ゆふづく夜さすや川壽の水馴なれなれもうとき波の音かな

なよ竹のちぢのさ枝のはは枝のその節々によよはこもれり

梓弓あつちゆみいそべにたてるひとつまつあなつれづれげ友なしにして

さとみこがみ湯たて笹のそよそよに靡きおきふしよしや世の中

ほのほのみ虚空にみてる阿鼻地獄ゆくへもなしといふもはかなし

等の歌があることに注目したい。

さて、再生は我等自らのことである。浅野氏が「いまさきもり」を最終章としてかゝげ、明治、大正、昭和思想史に簡単ながら重大要点をつきつゝ触れてをられるのを、当然のことながら有難くおもふ。個人を個人たらしめぬ再生のねがひは、現代にあり、究極の意味に於ける政治にある。われらは、歴代の天皇が、詩人であらせられ学者であらせらるゝ以上に、真の政治家といふよりも、政治を遊ばされし御方であることを忘れてはならぬ。何よりも歴代御製集が、それを証明してをる。徳川時代の幕府専横のときに当つても、なほ、天皇は国民の上に大御心をそゝがせたまひ、嘆かせたまふのである。われらの願ふところもまた、この天皇の大政にかゝつてをる。われらは詩人たるべく欲するのではない。学者たるべく欲するのではない。たゞ一つ忠臣たらむことを神にいのりこひのみまつるのである。浅野氏は、漱石の「こゝろ」の一節をひき、蘆花の言葉をひいている。「明治の精神が 天皇に始つて 天皇に終つたやうな気がしました」といふ漱石の言葉、又それに似た蘆花の言葉には、再生、七生報国の念願がかけてゐるのである。再生の念願をもつてふるひ起ち、今日その精神に動かされ、ふるひたゝしめられてをるもの、それは、長詩「九月十三日」の作者（注、三井甲之氏）とその後輩である。浅野氏が引用し、こゝに「いまさきもり」ありとの論証たらしめむとする

出でゝゆかばこゝの港に再びを降りたゝざらむ思ひに眺む

といふ事変の歌が、その冷静を装へる低俗論理主義によつて、到底日露戦争歌集「山桜集」の
とこしへにみ旗まもらむ大君に捧げし命よし絶ゆるとも

に及ぶべくもないことをおもひ、我等は思想改革・教育改革に勇往直進せむとするのである——
読者の一読を期待する、浅野氏の「楠木正成」はかくわれらに切実なる故に。(三月二十四日)

概念思弁の対立抗争より直接経験の協力世界へ

——責任、指導者、創造的綜合——

〔新〕指導者
昭和十六年六月号

所謂革新派と現状維持派との相剋が如何に夥おびたしい民族的エネルギーを国内で濫費してゐるか、またそれが如何に深刻なる結果を導くべきかについて、国民は最早之を等閑視するを許されざるに至つてをることを覚悟せねばならぬ。革新官僚として謳はれる奥村喜和男氏は、その著書で「斯様に時を同じくしてヒットラー、ムツソリーニといふ愛国の士が祖国復興運動に著手した時に、我が祖国日本の姿は如何なるものであつたでせうか。ヴェルサイユ会議に於て日本が提案した人種平等権が弊履の如く捨てられたことは諸君御承知の通りであります。また山東に於

ける權益の問題を統つて種々の好ましくない交渉もまた御記憶の所でありませう。……またその後のワシントン会議に於ては五・五・三といふ劣勢海軍比率を日本は強制された。これだけでも日本国民としては堪へ難く忍び難い国辱であります。更に九箇国条約を結ぶことに依り支那の独立保全といふ美名の下に、日本と支那との地理的・政治的或は経済的特殊關係を断絶し、スペイン・オランダ・ポルトガル等の支那に対する關係と同様にいたします。」と言ひ、「それから更にまた、太平洋無防備条約を締結致しました。もう戦争はあるべきでない。故に太平洋の平和の為に無防禦で居らうといふ提議を強制され、而も諸君に是非覚えて貰ひたいことは、これは無防禦条約といひながらも、パナマとシンガポールは例外になつて居つたことであります。今日の切迫した国際情勢に於て日本を最も脅威し、日本人の夢寐にも忘れられないのは、シンガポール要塞であります」

と続け、当時大学では国際公法の教授が「国家の成立と滅亡」については最早之を説く必要なしといつて、未だ教科書に載つてゐない「国際連盟」について一年間論議をしたことを説き、学生はと見れば、「多くはマルクス・ボーイらしくマルクスの本をその書齋に持ち、これを持たぬ者は学生らしくないと自他共に思ふやうな風潮に乗つて居りました。実に危険な流行でありました」と嘆じてゐる。これは奥村氏の「変革期日本の政治経済」の一節である。

われらは、これらの言葉が決して空虚な出まかせだとは思はない。實際氏が言つてゐるやうに、「現在までのやうなダランナイ政治や、経済や、教育や、或は文化である限り日本は國際危局に押込められて、吾々の大切な、三千年の日本が或は衰亡を迎るのかも知れないといふやうな大切な時に臨んで居るのであります」と、その通りである。しかも氏が、一方で、

「謂ふまでもなく我が明治の維新革命は、三つの要因から惹き起された。第一は右に述べた封建制度の頽廢、第二は當時に於ける早期資本主義の發展、第三は世界資本主義の圧迫である」
（『日本政治の革新』）と言ひ

「然るに日本は必ずしもさうでない。事変処理もなか／＼難かしい。東亜の新秩序も非常に荆棘があり多難である。これは要するに、滿洲事変、國際連盟脱退をやつた時から、それに相応するやうに日本の政治経済の仕組をやらなかつた。国内革新をやらなかつた。新体制をやらなかつた。昭和維新をやらなかつたことに基くものであらうと思ふ」（前記著書）

と言つて、殆どマルキシズムや公式社会主義理論を展開してゐるのは如何なることであらうか。

こゝにわれらは、この革新論者の思想的内面分裂が、現代知性の笑へぬ悲劇であるとおもふ。奥村氏の憂國の感情が、かくも歪曲され、殆ど氏自身の意志の及ばざる力によつて変形されてしま

つてをること、国民凡べては同情の涙を灑^そがねばならぬ。何となれば、それは奥村氏一個の問題では断じてなく、所謂革新派の殆どすべての人々、否々、全日本青年知識層の傷ましき運命であるからである。また同情を抱くが故に、我等は、氏等のマルキシズム感染を徹底的に糾弾せむとするのである。我等日本国民は、これらの思想的惑乱を匡救する力を持たぬまでに無力なのであるか！ 何よりもこれが刻下の問題である。

今少しく率直に言はう。「新指導者」の同志が最近苦慮を禁じ得ぬことは、革新、現状維持兩陣營の頑固な確執である。我等は両方に相通するものを見出しつゝ、兩つながら満足し得ぬのである。具体的に言はうならば、経済問題に関する限り、我等は革新論者とは徹底的に相容れざるものであり、現状派に与^よするものである。革新派のいふマルキシズム塗かへの新体制論のごとき、それが国民生活を破壊に導くものであつて、それは国民の物質的生活のみではない、全秩序の、やがて国体の破滅を誘導するからして、我等はどこ迄も戦ふであらう。しかし、今日程独伊と提携することに於いて兎角の紛議をやめず、思想改革・教育改革について無関心な所謂現状維持派には、その点につき如何なる障害が起らうとも戦はむとするものである。この様相の中にあつて我等は如何なる道を進まむとするのであるか。しかし、我等は少しもわれらの進路について絶望をしてゐない。否、それがどの様の苦心を必要としようと、この社会的様相こそ、我等の国体の

信の間はるべきところ、我等の力量の試みらるべきところと勇躍を禁じえぬのである。たゞ、我等のことはそれでよい。しかし国家のことゝなつたとき、この状態の持続は、まことに憂慮すべきであるのだ。

そこで何よりも、この両者の争ひが全く問題の表相に関するものに過ぎぬことを明らかにせねばならぬ。角突き合して論ずべきではなく、先づ相共に信すべくして而して後に語り合ふべきであることを明らかにせねばならぬ。革新論と雖も、教育とか思想について、決して深い省察をしてをるのではない。現状派のいふ経済も、人間生活の支配的要素たる思想との関係に於いて、教育、政治方策との並行実施を以て、国家経済処理根本策を考察し主張してをるのではない。我等をして言はしむるならば、共に、明治以来の教育の犠牲である点に変わりはない。共に概念的思想の虜となつてをるのだ。概念的思考傾向が強度化すれば、一切のものを対立的に考へるのは当然である。かくして国内の相剋となる。

救済の方法は唯一つしかない。直接経験に関する修養に国民が向ふこと、即ち是。感情と意志と、詩と宗教と、美と力とが、とり戻されねばならぬ。かくすればこゝに、人生が蘇へる。和解と協力とが来る。国民生活の中に人生がなかつたことが、対立の原因であり、国難の原因であつた。その人生は全一を欲する。国家はこゝにある。国民生活に人生の全き姿が実現されたなら

ば、国境をこえて、それは全人類にも通はう。これこそ、「中外ニ施シテ悖ラズ」と教へたまひし道、やがて八紘一字の大御稜威である。かくして臣道は全うせらるゝのである。自由主義にあらずして真の自由無碍！ 日本国民の至上幸福は、かく確保せらるゝ。我等は全国民の情意を負へる故に、両陣営対立の仮相を信ぜず、その合一を希求し、やがて間もなく実現するであらう。またつひに、全人類の統一をも、神の御稜威のまに／＼。国難打開の道はこゝにこそ開かれる。責任とは、この直接経験の自己認識であり、この責任を感じるものを指導者といふ。指導的人格の没我奉公に創造的綜合の大世界が現前するのである。

人間性の復活に開導せらるゝ現代神話の生成

〔新〕指導者
昭和十六年八月号

満洲事変以後、「昭和維新」といふ言葉が何処からともなく用ひられるやうになり、その意味内容が不明のままに支那事変の勃発を見たことについては、日本主義陣営の懈怠の罪覆ふべからざるものである。かく言ふ我等も、かゝる言葉——言葉それ自体が生きたるものとして一つの活動をなし影響を及ぼすのであるが——を、夙くその幼穉ちひなの中に根絶しなかつたことは、深く自ら責

むるところがある。昨年頃より「昭和維新」なる用語に連る一連の思想を掃蕩すべきことを我等は提唱したが、時既におそくして今や容易ならざる局面に至れるを悔いざるを得ない。すべてかかる思想は明治維新の意義を没却せむとするものである。昭和維新論者は、まづ革命と言はずして維新と言つたことによつて、——それは全く言葉の手法で兇戯に類したことであつたが——日本の感情を持てるものを惹きつけた。次に、徳川氏に代つて大権を私するものを討つべき、を説いて煽動した。こゝで一応日本人的意識をもてるものは、今日親政の御代なるを述べて、名分上徳川氏のごときものゝ今日あらざることを主張するが、論者は、事实上或は徳川氏以上の大権擅私のものがをる場合之を放任するか、と反問して反駁を封じたのである。日本の感覺を有するものも、この反問にたじろいだ。彼等は、自ら非尊王論者の如く言はるゝことを懼るゝ私情によつて、名分論の大義を貫くことが出来なかつた。しかし彼等は、今一度反省する必要がある。まづ、明治天皇の大業が僅々数十年にして壞え去るやうな脆弱のものであるかどうか、といふことに就いて。次に、明治維新が日本歴史上、後鳥羽天皇以来の歴代天皇の一貫不斷に累積せられたる叡慮によつて、成就せられたることについて。言ふならば、明治維新は半途にして未だ成らずとせらるべきであつて、その意味で、明治維新の大業が、中途停滞せるを、今や 今上陛下の大業に於いて一気に成就すべき時と言ふべく、国民は今日に於いて、今一度明治維新の重大意義を

反省せねばならぬのである。

明治維新を直接に指導せられたものは、言ふまでもなく、孝明天皇の叡慮である。維新の志士は、みな孝明天皇の叡慮を慕ひまつりつゝ活動したのであつて、今日の革新派のごとく、社会革新理論から自己自身の判断のみに基いて行動したものでなかつたことが、今日と比較考量する場合、重大の問題である。

孝明天皇御製

天晴有鶴声

あさ庇日影うらゝに空みればさもうれしげにたづ鳴きわたる (安政三年)

春 懐

皆人のこゝろも花の紐とけてへだてぬ中の春のさかづき (安政二年)

一声山鳥

なくからはいま一声も二声もらせやもらせ山ほとゝぎす (文久元年)

薄 風

夕嵐吹くにつけても花薄^{すさ}あだなるかたになびくまじきぞ (文久二年)

惜風

花は根に鳥はふるすにかへるなり名残も惜しき春のくれかな (元治元年)

恋笛

笛竹のよをかさねけりいつしかはあな嬉しとも吹ならしてん (元治二年)

述懐

天がした人といふ人こゝろあはせよるづのことにおもふどちなれ (同)

述懐

さまざまになきみわらひみかたりあふも国を思ひつ民おもふため (同)

述懐

神ごゝろいかにあらむと位山くらやまおろかなる身の居まるもくるしき (安政五年)

寄風述懐

こと国もなづめる人も残りなく攘ひつくさむ神風もがな (安政六年)

寄弓述懐

梓弓まゆみつき弓年をへず治まれる世に引かへさなむ (文久三年)

擗衣

音にたてゝ百度千たびうてやうて夜寒を業の賤かさごろも (元治元年)

述懐

すましえぬ水にわが身は沈むともにごしはせじなよろづ国民 (年月不詳)

戈とりてままれ宮人こゝのへのみはしのさくら風そよぐなり (同)

あぢきなやまたあぢきなや葦原のたのむかひなき武蔵野の原 (同)

これらの御製を拝誦しつゝ、少しく私見を申述ぶるならば、如何にも柔かにして強靱、またなまなましき御表現と仰がるゝのである。申すも畏きことであるが、敏感にして無限の憧憬を抱かせたまふ英邁なる叡慮の直接的御表現と申しまつるべく、天皇は殊に、直接の感情を重んぜさせ給うたことが戴かれる。「さもうれしげにたづ鳴きわたる」、また「あな嬉しとも吹きならしてん」といふ、幼児の歓喜にも似たる素朴雄健なる御表現は、まことに抒情詩の極致であつて、かゝる語法は、古来の短歌にも類例きはめて少く、語調の整正に、芸術的效果を意図する専門歌人の到底能くするところではない。「夕嵐ふくにつけても」「すましえぬ水にわが身は沈むとも」等の御製は、この直接御感情に、全御体験をこめしめて歌はせ給うたものであるが、かやうの感ずるままにおもひたまふ叡慮が、如何に大なる政治的統一力となつたかは、維新史の明証するところ

ある。いふ迄もなく千万の民、一向に叡慮を仰ぎまつゝたことは、「皆人のこゝろも花の紐とけてへだてぬなか」と詠ませたまひしなながらに仕へまつるやうに、尊かせ給うた故であつた。

もし、徳川家茂に賜りたる勅書を拝誦するならば、一層この間の深義をうかゞひまつることが出来る。

嗚呼、汝、方今之形勢如何ト願ル。内ハ則紀綱廢弛、上下解体、百姓塗炭ニ苦ム。殆ド瓦解土崩ノ色ヲ顯シ、外ハ則驕虜五大洲ノ凌侮ヲ受ケ、正ニ併呑ノ禍ニ罹ラントス。其危実ニ如ニ累卵、又如ニ燒眉。朕思レ之、夜不能レ寝、食不能レ下咽、嗚呼、汝、夫是ヲ如何ト願ル。是則汝ノ罪ニ非ズ。朕ガ不徳ノ致ス所、其罪在ニ朕躬。天地鬼神、夫朕ヲ何トカ云ハン。何ヲ以テ祖宗ノ地下ニ見ルコトヲ得ンヤ。由テ思ヘラク、汝ハ、朕ガ赤子、朕、汝ヲ愛スルコト如レ子。汝、朕ヲ親ムコト如レ父、セヨ、其親睦ノ厚薄、天下挽回ノ成否ニ關係ス。豈重キニ非ズヤ。嗚呼、汝、夙夜心ヲ尽シ、思ヲ焦シ、勉テ征夷府ノ職掌ヲ尽シ、天下人心ノ企望ニ対答セヨ。(謹中略)嗚呼、朕、与レ汝誓テ衰運ヲ挽回シ、上ハ先皇ノ靈ニ報ジ、下ハ万民ノ急ヲ救ハント欲ス。若シ怠惰ニシテ、成功ナクンバ、殊ニ是朕ト汝ノ罪也。天地鬼神、夫是ヲ殛スベシ。汝、勉旃、勉旃。

「其親睦ノ厚薄、天下挽回ノ成否ニ關係ス」と仰せられたことは、天皇御治世を一貫する御統

治の根本精神で、所謂「激家」を好ませ給はざりしといふことも、彼等が深く叡慮を憶念しまつることよりも、先づ外面的形態に示さるゝ国家革新の効果を急いだからに外ならぬ。天皇におかせられては、天下挽回のことは、一に叡慮に統一せられたる現実的億兆一心の、一切の歴史的契機をその中に包摂せる創造的威力によつて始めて可能のことであつたので、それは、維新史の確實に証明せる如くである。「激家」に対しても、その君をおもひ国をおもふ激情を汲ませたまへること漏したまひ、また所謂二十二卿列参事件の暴状にも、直ちにこれを形式の上よりして敵罰に処し給ふ如きことなく、彼等のあまりにも整理せられざる粗漫の衷情をも捨てず納めたまうた等、急湍激流の維新の大変局に當つて、天皇の大政が、如何に振幅の広き生命的弾力に富めるものであつたかど、拝察せらるゝのである。京都守護職松平容保のごとき、京都所司代——酒井忠義のごときが、全く天皇に心服し奉りたることゝともに、光格天皇御父宮典仁親王御追諡に関する幕府の臣節を弁へざる反対も、和宮御降嫁の強請も、その他凡ゆる幕府の僭濫横暴も、たゞそれとしてのみ解すべきではなく、それを通して、却て万世に顕示せらるゝ天皇御統治の重大意義に於いて解すべきが、日本歴史の正しき解釈である。そこには、一切の対立はあとを絶して、国民は各自の経験と環境とのまゝに、さまざまのおもひをなし振舞を致しつゝ、つひに、大統一に導かるゝ現実さながら理想的世界が、国民の内心より、やがて歴史の事実として展開せらるゝ光景を見る。

申すも畏きことながら、

「神ごゝろいかにあらむと位山おろかなる身のをるもくるしき」と御述懐あらせられ、「朕、思
レ之、夜不レ能レ寝、食不レ下レ咽、嗚呼、汝、夫是ヲ如何ト顧ル」と、また「就中、嘉永六年以来、洋夷
頻ニ猖獗来港シ、国体殆ド云ベカラズ、諸酋沸騰シ、生民塗炭ニ困ム、天地鬼神、夫朕ヲ何トカ
云ハン」と勅諭あらせらるゝ、それは決して思考せらるゝけれども実在することなき、万能絶対
神の威力を以て統治遊ばさるゝに非ざることを示してゐる。讓位を決意したまひつゝ、左右の直
諫によつて思ひ止まらせ給うた叡慮を憶念しまつるとき、大御心は皇国をおもはせたまひ、国民
を憐ませたまふ故に、幾度か迷はせたまひし、と拝察せらるゝのである。それはさまざまに思は
せ給ふたのである。「神ごゝろいかにあらむと」と、それは、神の心をうつゝにある人のこゝろ
のごとく、推察し給ふのである。かくのごとくにして、すべてを大御心の中に、御直接経験とし
てをさめ給ふたのである。凡ゆる場合に最も重大の問題は、直接経験に連絡せられぬかぎり、人
生に於いて凡べては虚偽と化する、といふことである。

徳川幕府時代二百数十年間、徳川氏には水戸光圀、田安宗武のごとき歌人が出た。しかし將軍
には、殆ど「しきしまのみち」の伝統を見ることが出来ない。もし、歴朝の御製を拝誦するなら

ば、政治的権力を殆ど幕府が僭し奉つてをるに拘らず、歴朝が、如何に直接に、国民の上をおもはせ給ひたるかを仰ぎまつることが出来る。

後水尾天皇御製

懐 旧

見ず知らぬ昔人さへしのぶかなわがくらき世をおもふあまりに

祝

たえせじなその神代より人の世にうけてたゞしき敷島のみち

寄日祝

つきせじな天津日嗣もくもりなく出で入る影の照らすかぎりは

独述懐

ともかくもなさばなりなむ心もてこの身一つを歎くおるかさ

後西天皇御製

寄国祝

あしはらの中つ国の名国の風このみちならでなにをあふがむ

靈元天皇御製

寄神祝

朝な朝な神の御前にひく鈴のおのづから澄むこゝろをぞ思ふ

苗代水

春の田をこゝろにまかす民も知れ苗代みづのゆたかなる世は

桜町天皇御製

暁天鵝

おどろかす鳥の初音におきなれて夜深くいそぐ朝まつりごと

神祇

天てらす神ぞしるらむ末ながき代代のひつぎを祈るこゝろは

桃園天皇御製

貴賤迎春

いやしきもよきもへだてず我が国の春まち得たるやまと諸人

祝

神代より世世にかはらで君と臣の道すなほなる国はわがくに

後桜町天皇御製

述 懐

ゆひそむる初元結の末ながくさかえむ世をもおもふうれしさ

述 懐

おろかなる心ながらに国民のなほやすかれとおもふあけくれ

光格天皇御製

里 擣 衣

秋風のさそふを聞けばいく里かきぬたの音のうちもたゆまぬ

政治の真意義が国民の全精神の統一にあることを確認するならば、こゝに形式的意味に於いてではなく、大政の至上権は、徳川三百年間依然として皇室の確保したまふところなるを論じようとするのである。それは、しきしまのみちの重大意義を論ぜねばならぬことになるのであるが、後水尾天皇宸翰御教訓書に、

一、御芸能の事は、禁秘鈔に委く載られて候へども、今の世にては、和歌第一に御心にかかれ、御稽古あるべき事にや、云々

と仰せられつゝ、その御教訓が「むかしこそ、何事も勅定をばそむかれぬ事のやうに候へ。今は仰出し候事、さらにそのかひなく候、武家は權威ほしきまゝなる時節の事に候へば、仰にしたがひ候はぬも、ことほりとも申すべく候歟云々」と仰せられ、「一、御短慮又深くつゝしまるべき事也云々」「一、いかにも御柔契ねんにあり度事候云々」「一、敬神は第一にあそばし候事条、努ゆめ々をろそかになるまじく候云々」として、之に続けたまうたことを憶ひまつるべきで、「和歌第一」は、大権の最後の而も最根本の拠所を、皇室に確保せさせ給ふ深謀遠慮にましましたと拝察せしめらるゝ。この「しきしまのみち」こそ、は直接経験の道である。それが、孝明天皇に伝へられ、全國民の一心協力を指導実現したまひつゝ、維新の完き基礎を築かせたまひ、明治天皇に至つて、古事記さながらの自然にしてをゝしき大みしらべに、神武復古の言葉のまゝの大御代を開かせ給うたのである。明治維新の意義は、「しきしまのみち」の運命であるからして、過去の史実の研究ではなく、国家生活の現体的体験のうちにあつてはじめて悟りうるのである。

明治以来、法律学者・国家学者は皆国体について論じ、天皇の御本質について論じて来た。しかし元来 天皇の御統治は、概念的に規定せらるべきものでは断じてない。大権の至上絶対といふことも、それがもし概念的に規定せらるゝかぎり、そのとき時に全精神生活の上に至上の權威を以て臨むものではない。天皇親政の重大意義は、凡ゆる生活の契機にあつて、全経験の生

きたる精神の脈動の上に把握せられねばならぬ。通過するお召列車を遙かに伏しをがむ畑中の農夫の写真にも、日本国民としての全一的経験はこめられてをる。その小さけれども全一的経験を、国家政治の全局面に、学術研究の全分野に、展開脈絡あらしめねばならぬ。

全一的経験、それは、分析測量せられつゝ、分析量定せられざる原経験に連るところの経験の全展開を、全国家生活の上に把持する為には、この経験を直接に思惟の反省を経ざる強力を以て表現する方法を国民が修得せねばならぬ。それはまた、直接に経験することを学ぶことである。この直接経験は、全一的整合を保たうとするが故に、結局規定し得られざるものである。

「機械的科学は科学の精神に則つてなく、間違つた形而上学的觀念に拠つて人間を造り上げたのであるが、今こそこの偏狭な見地を放棄すべきである。……ガリレエは、事物の一次的性質で測られ得る「拡がり」と重さと、形状とか色とか臭ひとか云ふやうな測られ得ない二次的性質とを区別した。……事物の一次的性質を抜き出したのは正しい事であつたが、二次的性質を忘れ去つたことは甚しい間違ひだったので、吾々はそれから由々しい結果をうける事になつたのである。なぜなら、人間にとつて測られ得るものよりも、測られ得ないものゝ方が一層重要だからである。」(アルキシス・カレル「人間、即是不可思議」桜沢如一氏訳)

「照明の強度を充分弱めると色の差別は消失する。陰の側から見れば、如何なる物も黒く見えるものである。更に照明を弱くすると、遂には所謂『客観的な』ものは何も見えなくなる。然し『客観的な』光が全然無くとも、我々の視野は決して空虚とはならない。夜間部屋に入つて来る光が全然なくとも、尚ほ視野は明るく見える。我々は、平常この明るさには余り注意しないが、或る種の人々には、それが色や形をとつて顕はれる事も稀ではない。この『主観的な』明るさは、前述の明るさ或は可視性が、照明の『客観的な』強さに比例しない、といふ事実と共に、生理学上極めて重視さるべきことである。これは、我々の視覚作用に於ける全視野が、生理的に規定せられるものであると共に、内容の点で変化することはあつても、生理的な全視野は常に存在し、決して消滅する事がないと云ふことを意味してゐる。而して視野の局部局部の明るさや色彩は変る事があつても、視野全体としての生理的な明るさ及び色彩は、その際、物理的にみて照明の強度又は性質がどうあらうと、又は物理的意味の照明があらうとなからうと、常に一定の均衡状態に保たれ様とするのである。

即ち我々の生理的視野なるものは、一般的生命と同様、一つの全体として存在せんとするものであり、又空間的な限界を有しないものなのである。而もその全体性は、視野の性質としてのあらゆる細部にも現はれてゐる。局部的の明るさも色彩も全視野との關係を離れては意味を

なさない。」(ホールデン「生物学の哲學的基礎」山泉氏訳一〇三―四頁)

「自然科学に於て我々の到達せんと欲してゐる所のものは、従つて究極的實在なのではなく、実は實際上有用なる解釈に過ぎないのであり、其処には、直ちに完全なる知識が要求されてゐるのでもなく、又その達成が可能な訳でもない。例へば、植物の行動であれ、我々の体内の個々の細胞の行動であれ、乃至は原子或は分子の行動であれ、其等が我々に充分知悉された曉には、我々は或ひはそれ等を意識的の行動と見做さねばならぬかも知れぬ」(同上二〇八頁)

「……何故ならば知覚は、我々の関心を表現するものであるからである。換言すれば、我々の知覚する世界は、我々の存在とは関係のない単なる画像ではなく、過去にも未来にも達する我々の人格的関心の具現であり、斯くて過去と未来とは共に現在に包含せられてゐるのである。

総ての知覚、総ての行為は、夫々経験から習得、従つて反省と予見との具体化である。何となれば習得とは、我々のもつ過去の経験に鑑みての未来の行動の教導を内包するものであるからである。一つの行動にこの徴候が明らかに看取される時、我々は、その行動を意識的なものと解釈する。意識的行動には従つて時間的にも空間的にも散在した諸事象を総括する一つの統一が認められる」(同上二一三頁)

「もし誰かど、人間とは物質と精神との集りであると云ふならば、それは全く意味のない定義

である。なぜかと言へば、肉体を作る物質と精神との関係は、今日までの所まだ実験台の上に乗せる事が出来てゐないではないか。しかし人間に「コンセンサス・オブ・インテリジェンス 実地概念」の定義を下す事はできる。それには人間を一個の分解する事の出来ない全体で、物理化学的、生理的、心理的活動をなすものと考へればよいのである。」(同上)

「吾々が自分で観察出来るもの以外何物をも知る事が實際出来ないと云ふことは、きまり切つた事である。」(同上)

「人間は総てのものゝ尺度であるべきだつた。然るに人間は、今自分が作つた世界では全くの異国人である。人間が真に自分を知らなかつた為に、此の世界を人間自身の為に向く様に建築することが出来なかつたのである。あらゆる物質の科学が、生物の科学をぐつと追抜いて発達したことは、まことに人間の歴史の最も悲惨な出来事の一つである。人間を知らない人間の頭で作り出したこの世界は、人間の体力にも精神にも適いぬものであつた。」(同上)

例へば支那事変が聖戦五年の今日なほ、「解決の曙光すら見出されぬ」といふことも、統制經濟の人生無視偏理主義が国民困苦の原因になつてをること、大政翼賛会が本質を変化せしむる程の改組を余儀なくされたことも、すべてかゝる見地から改めて熟考さるべきであつて、さうでない限り、批評は文化の根本問題を離れた空虚のものに墮し去り、解決策はかへつて混乱誘致の

思ひ付き或は試案の域を脱せぬものとなる。事変勃発後、国民の面前で行はれた殆ど凡べての政治的工事が、「人間を知らない人間の頭で作り出した」慎しみのない遊戯であつたが故に失敗であつたことを、国民のすべてが知る、ことこそ、時局匡救の最緊急要件である。人間を知ることとは、直接経験に随順することである。

元来日本が凡ゆる矛盾を克服して全東洋文化をその中に包摂してきたことも、日本国民生活に全一的人間が保持されたことを意味してゐる。そしてそれはまた、測定し計量し得られざる経験の全展開に於いて、唯一の人格の直接経験に統一せらるべき 天皇を仰ぎいたゞきまつり來つた事実である。人間を知るといふことは、天皇を仰ぎまつるといふことである。日本に於いては、国境は決して空間に画されたる線ではない。それは、そこに全人類の希求する真の人間生活が実現せらるゝ境域である。

全東洋民族が統一せられてこゝに第二建国神話が生成せらるべきとき、機械的思弁よりの解放は、神意の命令である。最高の国防とは、この意味に於いて、神意の実現にその意義を求められねばならぬ。もし支那事變の測るべからざる犠牲に於いて、なほかつ惜しからざる代償があるとすれば、日本国民がこの重大事を知ること以外にはない。我等は、かくの如きが無辺の 皇恩と申しまつるべきものである、とおもふのであるが。

現代の性格

——ヒポテーゼの時代——

〔新指導者〕
昭和十六年十一月号

一つのヒポテーゼから出発する生活の体系を飽まで保存し、之に対する根本的検討を回避しようとすることを定義して、「現状維持」といふならば、今日以上に現状維持の時代はあるまい。我々国民は今日それについて批評することも、考へることも許されぬ幾多の公理を持つてゐる。これは実に深刻に考へねばならぬ問題である。勿論、さういふ状態も、その存続は事実上畢竟不可能であるのみならず、我々自身この考へらるゝこと少き問題を進んで考へ、積極的に「根本的検討」を用意して居るのである。何となれば、人生の凡ゆるヒポテーゼは、結局容易に崩壊するものであるからして、その固執は、やがて生命そのものを脅かすものとなる。それ許りではない。国家生活に於いては、常に一つの党派的権勢がその永続性を欲求する。吉田松陰先生の留魂録に、「幕府三尺の布衣国を憂ふるを許さず」と言つた言葉は、日本民族の悲しき雄叫びであつた。即ちその意味は、三尺の布衣国を憂ふるを許さざるもの、即ち是れ幕府である。如何なる時代と雖も幕末の如き時代はないのである。それ故に我等は、今日決して卑怯であつてはならない。然り、我等は

断じて卑怯ではない。

田辺元博士は十月号中央公論に「国家の道義性」、同改造に「思想報国の道」を、各々巻頭論文として書いて、政府が個人の思想の自由を極度に制限するときは、国家自体の普遍的価値内容を維持する力を喪失するおそれあることを警告する一方、国家には、個人生活に於いてのみ通用する道徳の適用せられざる故を以て、之に無関心たらむとする現代知識人に対して強硬に注意を喚起して居るが、それだけの趣旨に關しては我等もまたもとより同感である。しかし氏が例へば次の如く言ふのを見ると、氏は果して、政府と国民との何れか一方に対してさへも、警告を發し得る資格があるかと問はざるを得ない。否、氏の如き思想こそは、あまりにも氏の名が有名であることが立証することく、あまりにも現代の国民思想を代表するものとして、氏自身警告する政府・国民双方の共通する欠陥の基底として、氏自ら反省すべきであると警告せざるを得ない。

「絶対と相對との対立は、一方に於て兩者を隔絶せしめ、いはゆる絶対他者として之を分離するものでなければならぬ。兩者の間に量的連続的推移のあることを許さない。何となれば、それは絶対を絶対たらしめずして、相對たらしめるものだからである。従つて相對存在たる我々が、如何に思想し如何に行爲するも、それは絶対にとつて無差別であり、それによつて左右せられる所がないのが、絶対の絶対たる所以であるといはれる。飽くまで相對の立場に立つ我々の

方から絶対に昇る途はないのも、これが為である。併し逆に絶対が下降し、我々に於て自己を現成する為に、我々に自己を啓示するにも、また相対であつて同時に絶対である如き媒介存在を必要とする。而して我々の絶対に対する關係も亦、かゝる二重性を有する媒介存在に於て自覚せられるのである。国家は此様な媒介存在に外ならない。」

氏の媒介といふ用語が甚だ不正確のものであることは、本来二つの異なるものゝ間に介在して、両者を結ぶことを媒介と言ふのに、「絶対と相対とが交互媒介の關係」といふやうな論理學上の重大誤謬を犯して居ることによつてもはつきりするが、「国家なくして個人が絶対に触れる媒介はない」とは、繰返して説かれて居る言葉なのである。氏も

「今日の実存哲学は、斯かる宗教的仲介者（註、神）を否定して、而も国家の如きこれに代る媒介者を認めない点に於いて抽象に陥る」

と言つて、媒介的實在といふものに、矛盾を統一する生成的實在といふやうな意味をもたせようとする意図はあつても、「国家は個人が絶対に触れる媒介である」とは、抑々何ごとであらう。元來、單なる絶対などといふものは、それこそ抽象的なもので、相対的世界にある人間にとつて、判断し得ざるものであるが、生活意志の緊張によつて高まつた感情が、絶対的のものを味はむとするので、この要求は、實在する心理的事実である。そしてその感得せらるゝものは、論理的表現

を超出した実感であり、実感なき人には容易に通はぬのである。併しながら、この実感は、生きむとする意志によつて生成しました確保されるので、かゝる意志が実際に相続せらるゝものを、絶対的尊厳の対象として人は之に礼拝し帰依するのである。我等は、かゝる実感を確保する累積生成せらるゝ無量の意志の実体として、日本を信知するのである。

もし氏のごとく「絶対」には相触るゝことを得ず、而も国家は単なる媒介に過ぎぬ、とするならば、人間の至極絶対を要求する心は、如何にして満されるのであらうか。「媒介」は一つの手段である。国家を一つの手段である点に於いて、氏の思想は、本地垂迹説や国家契約説と些かも変るところはない。それは断じて、人間の内心の己むべからざる絶対的要求に応ふるものではない。理由は、氏の言ふ「絶対」が、全く一つのヒポテーゼに終つて居るからである。元来絶対とは、対を絶するといふ形容詞に過ぎぬのである。

「幕府三尺の布衣国を憂ふるを許さず」といふのは、畢竟本来幕府には自ら国を憂ふる能力なきが故である。「国家の危急今日の如くに切迫せることは未だ嘗て無い」と冒頭する田辺氏は、国家は個人が絶対に至る媒介であると言つて、国を憂ふる至情と能力との欠如を自ら告げたが、而もなお氏に求めたいことは、氏が自ら抽象を排しつゝ、一度も日本とその現状とについて論ずることなく、一般普遍的国家を扱つたことに気付かれむことである。そして、「今日哲学は、歴史を

最も具体的なる存在の内容として、歴史哲学に力を集中する観がある。併し国家なくして歴史はあり得ない、「国家哲学なき歴史哲学は、抽象に過ぎない」と言ふ氏が、日本国体の究極の絶対性を、日本文化史の具体的内容に於いて見、それは決して、「相対的にして絶対的」といふ二重性ではなく、相対し得るものなき創造的総合力と価値基準とを持つて居ることを実知してもらひたいのである。国を憂ふる能力は、實際的体験に基いた学問なくしては備はらぬのである。而して国を憂ふる力なきものは、権力をもつとき、幕府となる。

事実を見ず研究書の孫引が流行するのである。なるべく抽象的に物を言ふのが、此の頃の風習である。相反するものも今日では同じであり、相連続する関係も絶対に相容れぬ矛盾関係となるのである。例へば国家社会主義も、国家の二字を以て国家主義と同視せられ、勤勉と私益とは峻別されてしまった。戦争と事変とは、名が違ふのである。新体制と旧体制とは全く異なるのである。日本も満洲国も、支那も暹羅も、国家としては同じなのである。物質的要求のないのが神聖といふ言葉の意味内容である。現状維持のことを今日は革新と言はねばならぬのである。さうしてこれら一切のことは、現代国民生活のヒポテーゼであり常識にさせられてしまった。

弁証法の計算機を借りねば、現代の解答は出て来ぬとされる。意志を喚びおこす実感の時代は去つた。間接の時代である。結合せらるべき両端は、中間の介在物によつて隔絶されて居る。か

昭和16年(31歳)

く、現代の性格における誤謬は、明確に認識されねばならぬ。しかし、直接経験の学は、いま興らむとしつゝある。それは次代を用意するものである。過去と未来とが結合されよう。かしこかれどもみ民のおもひは、集りて大御心に達せしめられよう。ヒポテーゼは撤去せられよう。天日はかゞやき出でるであらう。

日本必勝戦論

〔新指導者〕
昭和十六年十一月号

本巻頭言は、特に謹んで詔勅を反覆拝誦し奉り、ともすれば我見を立て、聖諭奉戴の重大事を忘れむとする我等国民のこゝろに、再び三度、大御教を仰ぎ奉らむの自督の心より出でたるものである。忠義臣節を期するものにとつては、それは、共通の念願であると確信する。本来忠義を尽すべき日本国民にとつて、絶対に正しきものは、聖諭の外になかるべきである。心を空くして聖諭を仰ぎ奉る、そこに国民相互の融和協力の根拠がある。それ故に、政府をも含めて、日本国民たるものは、この一事に志を励まさねばならない。聖徳太子は「詔を承りては必ず謹め」と宣ひ、臣道の実践は、一にこゝに基くことを教へさせ給うた。また、「群臣共に信あらば何事か成

らざらむ、群臣信なきときは万事悉く敗る」と示し給うた。その信は、言ふ迄もなく「承諾必謹」の信である。今、支那事変既に五年の歳月を閲し乍ら、殆ど成功と言ひ得ない。このとき、我等もし詔勅を仰ぎ奉ること足らざる為か、聖諭に随ひ奉ること重からざる為か、と反省することは、之臣民の忠義感情の自然であると確信する。「故に詔を承りては必ず謹め、謹まずんば自ら敗れむ」の戒戒威訓を、我等は怖れざるを得ない。支那事変は、戦争なるが故に絶対である、と我等は考ふることは出来ない。それは、詔勅によりて命じ給ふものなるが故に絶対である、と我等は信知してをる。然らば、絶対なるは、詔勅であり、事変遂行の万般は 詔勅に従ひ奉りてのみ、全うせらるべきは言ふ迄もない。もし現代に於いて、詔勅を承りて謹まざるものあらば、我等は共に、その非を改めしむべく起たむと念ずるものである。

本誌九月号巻頭言に、「戦争論の改訂を要求す」なる一文を草してから、既に数月を閲したが、事態は、いよ／＼我等の予言警告した通りに展開して来た。戦争論紛淆による支那事変の無限消耗戦への移行を策した裏面一部の陰謀が、白日のもとに曝される時も遠くはあるまい。我等はそれが成功してゐると言ふのではない。成功してゐたら大変なことになるのである。しかし決して全く不成功に終つてゐるとは言へない。むしろ、相当に成功してゐると見てゐる。それは怖るべきことである。国家存亡に関する重大事である。しかし我等は今更これに驚かうとはしない。何と

なれば、「思想のあるところには、事実がある」といふ我等の標語が、こゝでも悲しむべきこと乍ら、その真実の例を示さうとして居るに過ぎぬからである。我等には、それ位のものに対する用意は出来てゐる。出来てゐるからこそ、こゝに敢て事実を思想的關係を辿つて天下に暴露するのだ。

事変以来、無数の「戦争論」が出た。その凡ゆる戦争論が、意識的無意識的に、支那事変に対する国民の正当なる感情を歪曲し、正しき考へ方を誤謬に導いて行つた。今や国民は、支那事変について考へる能力を完全に喪失したかの如くである。もし言はるゝがごとく、愛国心今日より盛なるときなしと言ふならば、何故に支那事変そのものに対して国民は積極的に論じようとせぬのか、と、我々は久しく深い疑惑を懐いてゐた。しかしながら、国民は自らの意志によつて黙して居るのではなかつた。問題は一層深刻である。国民は、黙するやうに性格づけられたのである。先づ「戦争論」に於いて、国民の思想が絶大なる虚妄の觀念に結合せられてから、爾後実行される一切のことがその觀念の実現であるが為に、国民は盲目的満足の意志表示をこそすれ、現実事態に対して批判する基底を失つてしまつたのである。同時に、統制が国民から一切の思慮の時間を奪つたために、こゝでも、複雑の問題を究明する余裕を失つたのである。時代は、思想的に言つて、大正昭和思想混乱時代より、人民戦線運動を経て、その「実績」の上に、統制固着せしめ

られてしまつたと言つてよい。

事実の概略を記さう。昭和十一年十二月、西安事件は、ソ連の強要によつて、蒋介石が、連ソ抗日戦争を確約せざるを得なかつた事件であるが、前後して起つた成都事件、北海事件、大山大尉暗殺事件と一連の対日挑発事件の関連に於いて、盧溝橋事件がおこり支那事変に入つたとき、日本に於いては、人民戦線の雰囲気極めて濃く、帝國主義戦争絶対反対は、共產主義者の宣伝と共に、一般インテリ層を支配する無視すべからざる空気であつた。日支平等、無賠償、不割譲は、殆ど完全にこの空気に対する弁解として、一般に利用された。如何なる思想が近衛首相に作用したかを問ふ必要はこゝではない。近衛声明は、帝國主義戦争絶対反対派と同一思想を代表するものとして、国民に受取られざるを得なかつた。それは事変に対する政府の公定解釈として通用した。しかし帝國主義戦争絶対反対といふことが、如何なる思想によつて唱導されたかを考へて見るがよい。たしかに、それは政府の意図ではない。しかしながら、首相の声明が、かゝる思想の宣伝に役立つたことは、実に悲しむべきことであるけれども、如何なる弁解も成立の余地がない事実なのである。

戦争に対する武力的經濟的不用意といふことは周知の事実であるが、それが不用意であればあるだけ、事変が思想的所産であるといふ性格を顯著ならしめる。もう少し具体的に言ふならば、歴代当局者の不勉強に乘じて、或る思想が、戦争を物の見事にリードしてしまつたといふことであ

る。勿論事変は事変であつて、戦争ではない。この政府をして、戦争の字を避け、事変の名を選ばしめたことについては、幾多のことが連想せしめられる。直接国民の感覚に訴ふる、戦争といふ字を避くることによつて、戦争それ自身を実感のない超感覚的のもの、観念的のものとすることが可能であつた。戦争といふ二字には、国民の心になほ新鮮なる直接感覚を以て日清・日露戦争の神聖なる記憶が、その戦争形態の記憶と共に喚起せしめられることを忘れてはならない。しかしながら、事変の二字は、戦争の名によつて呼ばれざる戦争、憲法第十三条に規定せられざる戦争が、日本国家生活の中に存在し得ることを国民に知らしめた。殊に今日は、かゝる戦争こそ必要なるものであることを国民の心に刻銘した。詔勅は下された。しかし、それは宣戦の大詔ではなく、議會に賜りたる詔勅であつた。かくして憲法第十三条によらざる戦争、外交大権によらざる戦争が、宣戦せられたるよりも大いなる戦争、従つてまた歴史的に重大意義を有せる未曾有の戦争なりとして国民は知り、その知識を以て憲法と大権とを眺めたのである。かくの如くにして、「一つの思想が生める戦争」といふ日本歴史上画期的の事件が成立した。即ちそれは一定の「戦争論」より起りたる戦争であつたのである。それは国民をして戦争を遂行しつゝ戦争を実感せしめず、戦争の名によつて戦争以外のことを遂行せしむべき運命に陥らしめたのである。それは一に思想の力である。それ故、支那事変そのものは従来用法に於いては、戦争といふより以上に思想問題であ

るといへる。さて、その思想とは抑々如何なるものであるか。当初にかへつて考へて見よ。歴然たるものがあらう。而して、慄然たるものがあらう。

こゝで断つて置かねばならぬことは、筆者は飽まで思想の問題を問題として居ることである。法律上の又政治上の問題を、当面問題として居るのではない。それは直接その責任を問はるべき法律的政治的事実を指すものではないが、しかしそれは明らかに、国民生活上の一つの確実なる実存せる事実である点に於いてこれらの問題より輕易であるとはいへない。ヘーゲルの観念弁証法と共に、その同一方法論に従ふマルクスの唯物弁証法が（言ふまでもなく、共に観念の矛盾関係による配合である）、わが国民思想を痲痺させてしまつて、国民はこの弁証法の観念の詐術にかゝつたのである。日本国民は、固有の観念を騙取されて、別のものを与へられたのである。もし、帝國主義戦争の名を怖るゝ故に、天皇の宣戰大権による戦争を回避した如く解する者があつたとき、国民は、自己の騙取され換置されたる観念に対して、如何なる責任を取らむとするのであらうか。支那事變はこれだけ見ても、それが戦争ではなく思想問題であり、對外戦争といふよりも国民の根本觀念の變革であることが明らかであるが、今日迄誰人も思想問題として之を扱つた者はない。支那事變は凡べての前提であり、そこからして今日のすべての考へ方は生れた、と一般に考へられてゐる。しかしそれが元来先行する思想の所産であつたことは、上來説いて尽したところ

なのである。

長期戦といふことが新しき戦争の方式であると言はれたとき、更に新たなる観念の变革が行はれた。総力戦といふ言葉は、その上に三度観念の变革を附加したものであつた。総力戦のための国家総動員、物資動員のための計画経済、自給自足のための東亜共榮圏、東亜協同体東亜連盟、世界新秩序と国内新体制、これらは、最初の変革から導出された「必然的」推論であつた。しかし、孫子の「其用_レ戦也貴_レ勝、久則鈍_レ兵挫_レ銳、攻_レ城則力屈、久暴_レ師則国用不_レ足」を引くまでもなく、長期戦は、古来戦争の観念に根本的に反するものである。それは人間心理法則に反し、国家社会生活の根本法則に背反する。それは、戦争といふもの自身を否定する故に反戦論である。戦争の神聖、緊急の拠所たる非常の事態、非常の処置を否定する故に、根本的戦争反対理論である。といふよりも、それは一層端的に言つて違勅である。即ち、第七十二議會開院式に賜りたる勅語に、「速ニ東亜ノ平和ヲ確立セムトスルニ外ナラス」と宣ひ、支那事変一周年記念日に賜りたる勅語に、「今ニシテ積年ノ禍根ヲ断ツニ非ムハ東亜ノ安定永久ニ得テ望ムヘカラス……速ニ所期ノ目的ヲ達成セムコトヲ期セヨ」と仰せられ、三国同盟成立に際し賜りたる詔書に、「朕ハ禍乱ノ戡定平和ノ克復ノ一日モ速ナランコトニ軫念極メテ切ナリ」と教へ示させ給へるを拝誦せよ。

現代戦争は当然長期戦なり、といふことの違勅は、断然として責められねばならぬ。而も、国家生活に対する国民の根本觀念の变革を計る一連の思想も、亦当然その違勅を責められねばならぬ。われらは提唱する。

一、詔勅奉戴の運動をおこし、支那事変は、日清・日露戦争の如く、本来、当然短期戦たるべきものなることを徹底せしめよ。

二、長期戦また、それに基づく流行的な総力戦体制論が、違勅なることを明らかにせよ。

三、所謂近衛声明が、無賠償、不割譲を以て聖戦の意義たるが如き感を与へ来りたるにより、速かに之を根本的に修正せよ。

この要求は生ける国民の声である。戦争遂行をその根本に於いて阻害し、戦争を単なる破壊に導かむとする長期戦論と、それに連絡する思想とを掃蕩せよ。戦争をして、凡ゆる意味に於いて真実の戦争たらしめよ。戦争の名に於いて、戦争を行ふ力を喪失せしめむとする悪魔の所行を折伏せよ。勅命を奉ずる道を拓け。神靈に應へまつる道を講ぜよ。国民はいまこそ、如何なる方法によつてはじめて祖国を防衛すべきかの問題を明らかにせねばならぬ。誰人が之を阻害しよう。もし之を阻害するものあらば、そは反国・逆賊である。我等之をきりそけて進まむのみ。友よ、決意を新たにせよ。

歴史を経験する者

〔新指導者〕
昭和十七年二月号

三分出^レ蘆^ヲ兮諸葛己^ヤ矣夫^ハ
心師^ニ貫^テ高^ク兮而無^ク素立^リ名^一
讀書無^ク功兮朴学三十年
人譏^リ狂頑^ト兮郷党衆不^レ容^レ
至誠^ニ不^レ動兮自古未^レ之有^一

一身入^レ洛兮買彪安在哉^ハ
志仰^テ魚連^ト兮遂乏^ク積難^才
滅賊失^レ計兮猛氣廿一回
身許^テ家國^ニ兮死生吾久^ク齊^ス
古人難^レ及兮聖賢敢^テ追陪^セ

安政六年五月十六日、吉田松陰先生はその肖像に、自贊の詩を書きつけた。また、「鳴かずて
は誰か知るらむ郭公舉月雨くらく降りつづく夜は」とも歌ひ、

吾豈無^ク情者^ヤ 相知^ル生前^ニ離^レ
雖^レ然^ト何^レ用^レ説^フ 梅雨有^ク晴^ム

とも歌つた。かくのごときが、維新の志士のおもひであつた。切断せらるべくもあらぬ生の欲求が、「至誠不動兮自古未之有」といひ、「梅雨有時晴」ともなる。外面的障害はつねに内面的衝発力の強化の契機となる。それが一貫せる人間の歴史であつた。

生命とは蓄積である、といふのが、宇宙人生の定理であると共に、永遠の謎であるのだ。否、日本精神といひ、民族生命といふ、それは悉く、外面の障害をのり超えて迸発する内面的衝動以外の何ものでもない。人生とは、元來かくのごときものであつた。詩といひ、芸術といひ、やがて宗教といふも、本來かくのごときものであつた。明治天皇は、その御製に

滝

岩がねにせかれざりせば滝つ瀬の水のひゞきも世にはきこえじ (明治三十七年)

と詠ませたまうた。われらは何をか悲しまうや。流転の行路も、悠悠の人生も、それはわれらに急速の生の実現を刺戟こそすれ、沈湎のたゞ一つの誘因ともならない。日本永久の興亡を分つた帝国海軍の赫々たる戦果の蔭に、統帥大権干犯を言はれた華盛頓、倫敦条約の、無極の屈辱と、目を覆はしむる悲惨の犠牲があつたことを回想せざるを得ない。それは無きに若かざるものであつた。しかし、この無きに若かざるものが、永遠に人生と国家との力源に作用する因子であるといふことは、達人のみよくこれを知る。日本思想言論界の行方にも、またかくのごときものがあ

らう。最もよきものが生れる為には、最も苦しく悲しき経験が必要であることについて、我等は今更疑を容るゝほど愚かではない。日本国民は、すべてかくのごとく愚かではない。日本国民は、凡べてを知つて居る。この事実について、心より恐れ慎むものはまことの忠臣である。知らざるもの、慎まざるものは不忠の逆臣である。彼等の運命は滅亡の外はない。

我々は言ひたいことが山積してゐる。全国民凡べて然りであらう。しかし、今日は言はぬが言ふに数等優るのであらう。何となれば、大東亜戦争の展開する将来に於いて、今日言はねばならぬと思つてゐたことも無駄なりしと思ふことが多からう。我々はその時をおもひ、その時の用意をしよう。否、その時を、如何なる障害ありとも来らしめねばならぬ。既に着々準備を整へつゝある。堪へつゝ生くるは、大いなる希望の故である。忍耐とは、現実の条件の顧慮である。遠き謀あるものにしてはじめて、眼前の問題をその隅々まで見透してゆくことが出来よう。国民がそのすべてのおもひを懸ける大東亜戦争の展開する彼方に、未だ何人も描かざる形を描き、未だ何人も思はざる機微を察し、形成の力を呈示しよう。任務は確定してをる。無量のおもひはこゝにこめられよう。それは空想家の夢想ではない。現実の惨ましき衝迫に堪へつゝ、はるかに超えて憧憬する高き標識の把握であり、表現である。現実の条件を与へられてをる幸慶を、われらはおもふ。大創造力は、悲しきねがひのみより生れる。驕りたかぶるものは、亡びの途に行くであらう。それ

は人生の法則である。

言葉に表はれざる思念の凝固が、古来、歴史を内面より支持する力であつた。歴史を経験するものとは、かゝる力を実感するものゝ謂である。また歴史哲学とは、かゝる力を自らの体験の中に感得し、その力を顕現することである。同信の友らよ。我等は如何なる困難ありとも、日本国民の信の涸れざることを信じよう。その涸れざる信の全き姿に顕はるゝ時に対して、自他共に戒慎し、精進すべきを忘れまい。さうして全国民一人たりとも、この信につまづかさらしむるやう、共に励むべきことを言ひ交さう。「教行信証」の序に親鸞は

ひそかにおもんみれば、難思なんしの弘誓ぐせいは難度海を度する大船たいせん、無礙むげの光明は無明むみやうの闇を破する慧日けにちなり。しかればすなはち淨邦縁熟して、調達ちやうたつ闍世せをして逆害を興たぜしむ。淨業じやうごう機きあらはれて、釈迦章提をして安養をえらばしめたまへり。これすなはち權化ごんげの仁にんひとしく苦惱の群萌ぐんもうを救済し、世雄の悲まさしく逆誘せんたい闍提たいをめぐまんとおぼす。かるがゆゑに知んぬ。円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳をなす正智、難信金剛なんしんこんがうの信樂しんがくは、うたがひをのぞき徳をえしむる真理なり。と言つた。まことに、難思難信である、人生は、日本は。

「己むを得ざる、これを誠といふ」と、山鹿素行は言つた。至誠とは身にせまる逆運に屈せず、いよく高まる生命の衝動に外ならぬ。単に至誠といふものを我等は空想することは出来ない。

追ひ迫る障害の中に実感するのみだ。さうして、人間は遂に生きむとするものであることを、人といふ人、生けるかぎりの人は忘れざるべきである。呪詛もあらう。神明の加被もあらう。神譴もあらう。神寵もあらう。日本国民は日本の前途に、大東亜戦争の将来に熱禱を捧ぐべきである。靈魂の作用は事実となつて支配しよう。それこそは、第二建国神話の時代である。現つ御神天皇の大御稜威が、世界の人の心の底に照りとほる代である。凡べてを捧ぐるものゝ忠魂に、神靈の被光があらう。

文武論

〔新指導者〕
昭和十七年四月号

「改造」三月号に、大串兎代夫氏の「軍政論」といふ論文があり、その表題の重要性から注目して読んだ。然しながらその冒頭の一節に、

「今やわれわれの前に新しい建設の世紀がある。その生命に満つる道義的秩序への歓喜がなくして、どうして真に旧き闇を克服することが出来ようか。われらは旧き秩序によつて新しき世界を想見してはならない。旧き世紀の夜は正に克服せられつゝあるのである。」

と言つてをる。我々はこの美文を批評する気持になれないが、前大戦の後、当時筆者は小学生であつたが、家の女たちも、「二十世紀の文明」とかいふことを口にし、「世界平和」が通り言葉となり、新聞は、「平民的な宮様」といふ勝手な造語を事毎にならべ立て、尼港事件が起り、デモクラシー、ストライキが児童仲間の流行語となり、英国皇太子プリンス・オブ・ウェールズの日本訪問に際して、学校側からゴッド・セーブ・ザ・キングを暗記させられた忌はしい記憶が蘇つて来る。日本国民としての自然の歓喜から遠ざかつた、抽象的觀念に結合せられた空虚なセンチメンタリズムが、どういふ作用を民族の歴史上に及ぼすか、といふことを考へて見れば、今の日本国民は、到底呑気に東亜共栄圏など、言つてをられぬ筈である。今日は「民族」といふ言葉そのものが国際語なのである。センチメンタルな甲高い雄弁が流行することに於いても、大正中末期と今日とは選ぶところがない。毎日のラジオをきけばよいのである。日本の知識層（無論軍人官吏をふくめて）には、いま重大な反省が要求されてゐるのである。

大串氏は言つてをる。

「軍政といふことも、その意味するところは、従来考へられたやうな特殊の事態に於ける特殊の政治形態といふのではなく、それは、世界史の情勢に対応する原理的秩序としての意味を獲得してゐるのである。これが今日『軍政』を考へる場合の秘訣である。軍政を憲法専門家的に考へ

ることは大した意味がない。今日に於ける軍政は、世界史の展開者としての国家の体制が、全体としてとるべき性質を表はしてゐるのである。……曠古の大国難に當つて、わが国力を真に強力緊急に發揮しうる如き、国家全体の軍政的性格を、十分に考慮せられんことを望んで止まないのである。従来の所謂法律学的、技術的考慮のみを以ては、何等のエネルギー的体制は考へられないのである。」

大串氏にとつては、「原理的秩序」は「秘訣」であり、法律的・技術的考慮では出て来ないといふ「エネルギー的体制」を、この「秘訣」で打出の小槌のやうに打出さうと考へてをられるのであろう。しかし、この「改造」三月号は、二月二十一日印刷納本であるから、その後大串氏は、海軍特別攻撃隊勇士の発表を読まれたことゝもふ。

その一人である岩佐中佐の生前の手紙には、

「(前文省略)殊更に感激、一意奉公の決意を愈々鞏固にし大任貫徹の目的に邁進せるも、生来の鈍器鈍腦を發揮し献身的御指導御鞭撻とを賜はりつゝも、御期待に副ふ何事をも為し得ず今日に及べるを衷心御詫び申上候、惟ふに、時局は益々急迫し、帝国存亡の秋トキに至り、帝国は愈々日本の存続のため大和民族の活路を拓く為、遂に最後の一石を投ずるの已むなきに至りしは、又々時局打開の第一石を投ずるの任を受く小官の光榮之に過ぐるなし、誓つて大任を達成せん、

今ぞ身を以て御指導に報ぜん、若し大任を果し得ざる事あらんも、それは小官の足らざる所（中略）此処に生前の御指導に対し奉感謝候（後略）」

とあり、横山少佐の遺書には

「皇国非常の秋に際し死処を得たるは、小官の榮譽之に過ぎたるは無し、謹みて天皇陛下下の万歳を奉唱し奉る、二十有三年の間、亡父上、母上様始め家族御一同様の御恩、小学校・中学校の諸先生並に海軍に於て御指導を賜はりたる教官、上官、先輩の御高恩に対し、衷心より御礼申上候、同乗の上田兵曹の遺族に対しては、気の毒に堪へず、最後に皇恩の万分の一にも酬ゆることなく死する身を、深くはづるものに有之候」

とある。もし、真珠湾攻撃が何程のエネルギーとして測定せられるか、といふならば、皇軍に対する侮辱之より甚しきはない。その考へ方は、原価計算によつて利益率を算出し、経営方針を抜目なく立て、行かうとする商業的方法をもち込んだ米英的打算主義だとも言へる。「曠古の大国難」が、論者机上の秤にかけらるゝものであるならば、「エネルギー的体制」の構築、まことに当を得たる処置であらう。戦争に対する日本知識層の感覚の鈍磨は、恐るべきものを包蔵してゐる。現代日本のインテリは、世界最終戦とか、「米英世界旧秩序の徹底的覆滅！」との、外面だけは勢のよことを言ふが、戦争そのものについては、知るところも、そして信ずるところもない。戦争の意

義を信ずることが出来ないで、果して忠節を為し得るであらうか。「日本評論」四月号には、「軍政と占領後統治の形態」なる題下に、中村哲氏の論文がのつてをるが、

「新しき諸地域が国内経済の従属的な対象とされるのではなく、これらの新しき植民地が、かへつて国内経済の再編成を必要ならしめ、逆作用をなすといふ点にあるとすれば、これはひとり経済現象についてのみ生ずる問題ではないのである。現在に於ける軍政と民政との抱合は、国内における統帥部と執政部との協合を促進し、ひいては、国務と統帥とを対立的に考へる憲法の解釈にも影響を与へることになると思はれる。」

と言ひ、

「国務と統帥とを峻別するのは、憲法の解釈に基くのであるが、政党政治時代において、統帥権の独立が国務の機関に対して強く叫ばれて来た意味は、すでに変化しつゝあるといふことも出来る。統帥権の独立が政治に対して、ことさらに主張されたのは、政治が政党政治によつて腐敗してゐた場合に意味をもつものであつて、統帥機関は、腐敗した政党政治に対してその独立を主張して来たのである。しかるに政党政治は消滅し、政治は革新され、肅清された今日においては、統帥に対立する政治なるものは存してないのみならず、……」

と言ふ。

その昔、山県大武は、「柳子新論」の文武第五の中で、

「柳子曰く、政の関東に移るや、鄙人其威を奪ひ、陪臣其の權を専らにす。爾來五百有余年。人唯だ武を尚ぶを知り文を尚ぶを知らず。文を尚ばざるの弊、礼楽並に壞れ、士その鄙俗に勝へず。武を尚ぶの弊、刑罰孤り行はれ、民その苛刻に勝へず。俗吏乃ち謂へらく、文を用ふるの迂、武に任ずの急に如かず。礼を為すの難、刑を為すの易きに如かず。…且夫れ文武誓へば猶權衡の如し。一昂一低、治乱乃ち知る。一重一輕、盛衰乃ち見はる。突ぞ以て偏廢すべけむや。」と論じてゐる。帆足万里は「東潜夫論」の中で、

「上古の如く武勇の人は氏族に限らず、是を用ひ給ふは誠に可なり。若源平二氏のみ武士を司どらしめ、此を左右大臣の位に升する田村麻呂の如くば、王室の政を奪ふこと、清盛、頼朝を待す。源平二氏、兵權は執りながら、王室猶盛なりし故、時々背反の者ありしも、皆誅戮せられたれども、保元の頃に至て、先賢の論の如く名倫の教乱れて、父子兄弟、位を争ひ給ひしより、傑傲清盛が如きもの、間に乘じて天下の權を擅にせり。清盛は横恣なれど、未だ叛臣とはいはれず、叛臣の首は頼朝にして、義時、尊氏皆叛臣なり。」

と、言つてゐる。帆足万里が、「若源平二氏にのみ武士を司どらしめ、此を左右大臣の位に升する田村麻呂の如くは云々」と言ふのは、文武を分たざる弊を論じてをるものである。氏族といふ

のは、固定した一つの党派をいふのであつて、それがその勢力によつて、必ず持続的に政治的実行力を有するのであるから、「軍権」との協会は、恐るべきであるといふのである。政治上には、党派がゆるされるのは、政治的行動は、必ず一つの効果を目標とし、その効果が表はれる為には、一定時間の延長が必要で、その為には、同一目的に集合したものと持続的結合が要求される、といふことゝ関係する。又それ故にこそ、責任もそこに課せられ、功罪が問はれるのであるから、今回の選挙の推薦母体としての「協議会」が、選挙の為のみの政治結社であるといふなどは、それが政治といふものゝ意味を否定するといふことに於て、慎重に考慮せらるべきである。しかしながら、軍事上は絶対にこの党派はゆるされぬのである。国家が滅亡したその後にのこる党派など、考へられぬからである。

「国務」と「統帥」との協合が許されぬことは、以上のことよりしても当然のことで、中村氏が「憲法の解釈」といふのは、現行憲法に対する解釈といふのであるか、憲法のとつてをる解釈といふのであるか。筆者には、後者としか考へられぬのであるが、それは実に重大問題である。かゝる思想は、厳に警戒せられねばならない。「軍人勅諭」と「憲法」とに別個の解釈がとらるゝといふことは、絶対に考へられぬことである。

今上陛下は御即位礼当日に賜りたる勅語に、「皇祖考古今ニ鑒かんがミテ維新ノ鴻図ヲ關かキ中外ニ徴

シテ立憲ノ遠猷ヲ敷キ文ヲ経トシ武ヲ緯トシ以テ曠世ノ大業ヲ建ツ」と宣ひ、國際連盟脱退に關する詔書に、「文武互ニ其ノ職分ニ恪循シ衆庶各々其ノ業務ニ淬勵シ嚮フ所正ヲ履ミ行フ所中ヲ執リ」と教へ給うた。現代日本の薄弱なる知識層は、自己の無力無信を反省せず、却て外部的強權に依頼して、その空想を現実化せむとする。かゝる「軍政論」が、忠勇なる皇軍將士の誠心に報いる所以であるか。

「武」は國家興亡に処して、細目をかへりみず全一の威力を發揮すべきものである。全一的威力が、体制によつて計算構成せらるゝものでないことは、言ふまでもない。それは、生命の威力であるからして、先づ以て生命体であることが要求される。「軍政」は、古より悉く國家を弱体化してしまつてゐる。ローマが容易にキリスト教に征服され、中産階級の没落からその滅亡を招來したことをおもへ。鎌倉、室町、徳川幕府以上に、日本の弱体を示したことがあつたであらうか。聖徳太子以前、外征悉く利あらざりし時代、軍閥の政治が、國民生活の細目を調整する力を失ひ、権力の横使によつて、國民はその生くる原理をも失つたことは、忌はしくも忌はしき崇峻天皇弑逆事件が、之を証して余りある。この國家生活原理を見失つた時代に、聖徳太子は最早「武」によつて恢復すべくもない混乱を洞察されて、こゝに「文」を興し、位階を定め、憲法を撰し、経を講せられて、國民靈性の養育につとめ給うた。しかしその御理想は、容易に實現され

ず、明治天皇に至つてやうやく実現されたことをおもふとき、再び、かゝる歴史の悲劇をくりかへさざるべく、「文」にいそしむものは、死を以てその忠誠心を貫かねばならぬ。「武」に死ぬものは古来多い。「文」に死ぬものは少い。しかし、今日は国家の歴史がそれを要求してゐる。

軍政論

〔田中「国策叢書」
昭和十七年六月〕

一、「軍政論」は実際上の必要からではなく、一つの理念に基いてをることを注意すべきこと

最近流行雑誌上に、「軍政論」が現はれるやうになつて来たことは、注目すべき現象である。こゝに「軍政論」といふのは、軍の力によつて一般国務を急速強力に実行して行かうといふので、それは一局部一地域に一定期間施行すべし、といふのではなく、時代の性質上、政治全体がさうならねばならぬといふので、国家制度の上に包括的に実現を要求する政治原則であるから、警戒せねばならぬのである。さて包括的原則的であるから、それは必要といふことよりも、一つの理念を実現せむとするものであることが知られる。それ故に一層警戒せねばならぬ。例へば、前にも引用したが、大串兎代夫氏は、「改造」三月号の「軍政論」で、

「軍政といふことも、その意味するところは、従来考へられたやうな特殊の事態に於ける特殊の政治形態といふのではなく、それは、世界史の情勢に対応する原理的秩序としての意味を獲得しているのである。これが今日「軍政」を考へる場合の秘訣である。」

と言つてをる。

従来軍人の中にも、深い考へからではなく「軍政」といふことを、事を手取り早く処置してしまふ為に必要なと考へる人がなきにしもあらず、それは、簡単に何でも命令で行くものとの、錯覚から来るもので、かういふ民間の理論が、この簡単に考へがちの軍人の頭に、自分のかねて考へてきたことはこれだ、と思はせるおそれが多分にあるので、軍当局は充分これに注意を払はねばならぬ。問題は、「軍政」によつて、統帥権が果して守られるか否かといふことである。さうして統帥権は、全国民が、国民皆兵の立場より之を擁護せねばならぬ。学者・評論家の任務は、俗論から軍人の忠誠心を守ることである。【註】以下軍政とのみ言ふ場合には、かゝる軍政論にいふ軍政のこと。

二、文・武の性質の根本的相違と、両者の相互補足的關係

「武」は、国家の興亡に関する問題である。「軍」は国家の固有の生命力の発現機制である。故に、「軍」は一般に「軍部」といふが、決して国家の中の一つの部局ではない。さうして「武」

の特徴は、国家の最大問題たる興亡を決する全一的作用であるから、生活の一切の細目的問題を犠牲に供するのである。それを一々顧慮してゐては、到底戦争は出来ぬ。故に国家はかゝる戦争の爲の用意を、平素整へておかねばならぬ。その用意即ち力の蓄積を、一旦緩急ある場合に、一挙に目的に投じて、興亡を決するのである。故に、戦争は元来短期でなければならぬ。孫子に「故に兵は拙速を聞く、未だ巧の久しきを睹みざるなり、夫れ兵久しうして国利なるもの未だこれ有らざるなり」と言つてゐる。それ故に戦争は非常時である。

この非常時に採るべき処置乃至機構を、平常時に延長移行すると、その方法の本質的誤りから却て目的達成が不可能になる。生活の細目的問題を犠牲に供することは、非常時には許されるが、平常時には許されぬ。例へば、決闘をしてゐるときは、動脈硬化であらうと、神経痛であらうと、斬り合をせねばならぬが、毛細管の機能を長く病的状態においては、死因となると同じである。放置してはならぬのである。国民生活の末端を調整せずに放置すると、その生活の混乱から、結局国家生活の原理、国体観念までも見失ふに至るのである。それは、戦争の惨禍よりも悲惨なものがある。「文」は、この生活末端である。政治は「文」である。

文弱に流れて勇氣を養ふ努力がなくなれば、民族の危機が迫る如くに、武断に偏して文教・文政・文化がなくなれば、精神的危機が近づき、容易に謀略にかゝるのである。前大戦のドイツ、

またローマ帝国等は、その好例である。「文」は分れたものゝ関係を秩序づけることである。それ故、国務上の機関としても、陸・海軍は二省であるに對し、文政は、内閣及他の十省を以て執行することになつてゐる。

「軍」は、統帥権により全く一元的統率がなされ、星一つちがへば、死地にも赴かせることが出来、軍隊生活では、その規律が平時にも保たれて、上下秩序の嚴守が絶対条件である。しかし、「文」の方は、官吏の間ではともかく上下の統制が嚴であるが、国務大臣の輔弼の責任は、議會その他で問はれるもので、それは国民の批判の対象となるのである。殊に一般国民生活では、無数の複雑な条件、学殖、識見、家柄、地位、徳望、才能、財力等、いろ／＼の標準の総合的評価に於いて人間の評価が行はれ、それも固定したものではなく、そのとき／＼に色々の基準から人が選ばれ、秩序ある結合が行はれる。それはそれでよいのである。

かう、「文」と「武」とでは、その性質が異つてをり、それ故にそれは相補足するのであるが、これを一元的に統制しようとすれば、必ず生命の固定を來し、生命自らの危険が到來すること。「文」は平常のことで、この平常時に遠く慮り深く謀るところがなくてはならぬ。さうして、高い生命体の複雑に分化した機能を簡明に統一する原理を發見してゆくことは、「文」の任務である。「軍政論」は、かゝる「文」とか學問とかの任務を忘れたものである。

三、「軍政論」は統帥権の神聖を犯すもの、従つて国家を弱体化するもの

實際的に言つて、政治的行動といふことは、国民の批判を受けるものであり、又それ故にその健全を保ちうるのである。厳格な規律の下に行はれる軍組織での統制を、この政治生活の範囲にもち込むことになれば、批判は凡べて封ぜられ、強権のみが事を決し、自由の創意はなくなり、活発の機能の發揮は望まれず、剩^{あまり}へ、必ず批判の対象となるからして、軍の威信は地に墜ちることとなる。かくすれば、一旦緩急の場合、統帥権の万全の発動が困難になる。軍人が自ら統帥権を汚辱することである。軍は絶対的であるが、政治は相対的である。軍の神聖を守るとは、軍が部局でなく、国家全体にわたる機制であることを保障すること、それは国民の任務である。

文・武は相対するものであるが、武は単一に統帥権であらはせるとして、文は、所謂國務といふことでは尽せぬ。それ以上に重大な又神聖の祭祀大権といふものゝ範囲がある。これは統帥権の如く天皇御親らのとらせ給ふところで、大綱を臣下に委ね給ふことは絶対にならない。政治が相当に自由に行はれてよく又行はれるやうにされ、それ故に活発に運行せしめられるのは、元来政治が文の一部局であるからに過ぎない。軍が包括的にかゝるものに携はることは、軍を部局化することであるからして、統帥権の神聖と軍の權威をまもるために、絶対に避けねばならぬのである。

四、戦時強力政治運用の正しき実際的方法は如何

現行機構である大本營は、戦時政治施行の枢軸である。大本營は、統帥大権発動によつて設置される。それは平時、統帥部（參謀本部及軍令部）と軍政部（陸・海両省）とに分掌されてゐる統帥関係事項を、一元化するもので、大本營設置により、戦時急速の必要から、一般国務もまた統帥権の発動に随伴的立場をとるのである。

陸・海両省は、統帥部の必要に應じて、軍備を整へる意味での「軍政」——本論でいふ国務の一元的軍統制としての「軍政」と異なる——を平時より行ふが、戦時には、一般国務の各省も、統帥部の必要を満す為に協力せねばならぬのである。否、戦時には、国家の全機能を戦争目的に向けて動かすのであるが、その必要性の方向と限度とを指示するものは、統帥部を中心とする大本營である。こゝに、政戦両略の一致が行はれる。大本營會議に、内閣総理大臣はじめ関係閣僚が出席するのはそれである。さうして、この文政閣僚は、自己の全能力をあげて、軍の必要に應じ戦時輔弼の責を果さねばならぬ。しかるに、謂ふところの「軍政」は、統帥部そのものによる文政の執行で、これは天皇親裁の大本營會議の機能を否定するものである。國務大臣（陸海軍大臣をも含めて）輔弼の責任を撓無するものであるからである。現行大本營の完全なる組織を否定して、

故らに「軍政論」を呼号すべき必要如何。

それ故に、軍政論は冒頭述べし如く實際の必要上より起つたものではない。何らかの理念、或は何らかの目的（現実には戦争は明確なる目的をもつてゐる。その目的以外の目的、即ち戦争以外の目的）を意図して主張する議論である、と言ふべきである。その目的とは何であるか。多くの論者はそれについて明確なる概念をもつてゐないが、マルキストは、「戦争と革命とは酷似してゐる、のみならず、それは常に併行的事実であつた」と言つて、一つの目標を見つめるのである。酷似するものが一つの目的として掲げられ、言論界が誤謬論に導かれることなし、と断言出来ようか。

五、「軍政」の歴史は、国家を必ず弱体化してゐることを証してゐる

「幕府」といふことは、現代語を以てすれば恒久軍政といふことである。何となれば、天皇親政の下に於いては、大本營が設置され、「軍政」は行はれぬ、また行ふ必要はないからである。天皇親政とは、国家の根本体制（文武相補足）を、如何なる非常時にも保存せらるゝことで、この保存は、戦争より平和への弾機ともなる。それは戦争遂行上最も重要な問題である。軍隊の力で、国内の政治を強力を以て統制実行してゆかうとすれば、それは「幕府」である。軍は国家興亡に対処する全国的機制たるの性格を失ひ、一個の行政部局化し、これが軍権をもつこととな

つて大権は臣民の手に奪はれる。天皇の軍ではなくなる。そして国家は極度に弱体となる。

欽明天皇の時代前後、日本は外征を幾度かして悉く失敗した。軍閥（大伴・物部）は外で敗れながら、外交上の折衝で儲け、その財力・兵力を以て「軍政」を行つた。これが国民生活を最大限の混乱に陥れ、国体觀念をも不明瞭ならしめたことは、蘇我馬子の大逆事件の発生によつて知られる。聖徳太子はこの時出現したまうて、教化・文政につとめられ、国民の精神生活を養育せられて、日本国体を防護されたのである。

鎌倉幕府時代の外戦は元寇であるが、もとよりあの戦勝は、龜山天皇の大御稜威であり時宗の功ではない。しかも、博多までよせつけたのは、幕府の罪と言ふ外はない。室町、徳川幕府に至つては、国威の失墜これより甚しきはなく、徳川時代は、伸張すべき民族生命を悉く日本列島の中に閉ぢ込めてしまった。ローマが容易にキリスト教に征服されたことにも、その軍政的傾向の殷鑑を見るべく、前大戦時ドイツの実例も遠きにはない。「軍政論」は、かくの如く凡ゆる点よりしてその可なる所以を見ない。全国民協力の道なくして、如何にして戦争目的を遂行し得ようか。

六、「軍政論」横行を憂ふるものゝ祈念する全国民協力の具体的方途如何

孤忠といふ言葉があるが、元來単独で忠義を尽すことは出来ぬ。天皇陛下は、孤忠よりも全国

民の和合協力をこそ望みたまふのである。それ故、全国民協力の上にはじめて忠義が成立する。

分を守ることは、協力の最小限度の条件である。たとひ誤りがあらうとも、他を責むることは決して協力の最後の道ではない。殊に軍人精神の伝統を信ずる国民としては、軍政的傾向の兆候が現実に見られるとしても、かゝる要求の動機原因を洞察せねばならぬ。言ふ迄もなくその原因は、支那事変以前の、或は満洲事変以前の、反国体的デモクラシー的政治傾向や、その現はれとしての軟弱外交等であつて、今日は、その余効がなほ当時よりも著しく、マルキシズムの影響下に現はれ、殊に一般思想界・言論界を支配してゐる。かゝるものに誤られるやうなことがあれば、——軍人の政治進出といふことがあつたとすれば、それこそその端的の表はれである——それは、反国体思想の統帥権干犯であつて、かゝるものから軍を防衛すること、つまり、思想・言論界の反国体的傾向の一擲こそは、国民が軍人の立場をおもひつゝ、之と協力し、之を助けて、真にその忠を致さしむる所以の道であつて、戦時下一般国民の任務これより重きはない。

軍は、国民の批判の前面に立つ内閣とは異り、天皇の統帥大権に直属するものであるから、たとひ軍人に諸種の足らざるところありとも、これに対して兎角の論議を挿むことは、忠良なる国民の好まざるところである。たゞに思想・言論界の振肅を行ふべし。これ以上に正しく、又簡易の道はなかるべきである。

戦争遂行の内面的力

〔新指揮者〕
昭和十七年六月号

支那事変以来、派遣軍又は方面軍最高指揮官といふ名称が用ひらるゝに至つたのであるが、この「最高」といふ文字に、余裕を残さぬ思想の不調和が感得されたのであつた。その不調和が大砲何門の不足に換算せられ、師団幾つの損傷に割出されるかは我々の知るところではない。しかし、明治三十七年六月二十日満洲軍総司令部編成案御裁可に先ち、五月二十五日參謀総長大山巖に賜うた御沙汰覚書には「出征陸軍満洲に於て行動する數軍の作戰を指揮せしむる為高等司令部を編成し」と拜せられるのである。日露戦争は、当局非常の憂慮の下に開始され、殆ど数字的成算は無かつたと言はれ、上下の覚悟を要求せらるゝこと、到底支那事變の比ではないのであるが、なほかつ「最高指揮官」の名は冠せられなかつたのである。而も当時総司令官は一人で、今日のやうに最高指揮官が十指を屈するに足り、最高指揮官の上に、又最高指揮官があるのと異なるのである。戦勝の原因は意外のところにあることを、我等は深思せねばならぬのである。

英国軍事評論家リデルハートは、前世界大戦に於いて、独軍、連合軍何れの側も、武力戦の徹底的勝利を求めたことの誤謬を指摘し、それが一方にはヴェルサイユ条約の桎梏として結果し、

一方には再度の戦争に於ける強力なる報復として結果したことを強調して、

「無制限戦争といふ概念が空理的な概念であることは、討究すれば明瞭である。従つて近代の世界には、一度も此種の戦争はなかつた」(「英帝国崩壊の真因」二六頁)と言ひ、

「敗戦の主なる危険は、戦場に於ける決戦の勝利といふ幻想を追求して、戦に勝たうとする所にある。終局の平和到来の見透しにとつても、それはまた、最悪の危険である。戦後の余波を全然考慮せず、若し、勝利に一意専念すれば、疲弊し果て、平和克服による取得は絶無となるであらう。更に一方、その平和は、次期の戦争の芽蒔えを含む悪性の平和である。第一次大戦の最悪の欠点は、独逸の攻勢力が無力となり、経済的逼迫により消耗し切つた時に、その実状に満足せず、独逸の屈辱的降伏に依る勝利の外観を得る迄、我々が戦ひ続けた事であつた」(右、一二頁)

と言つて自ら反省し、

「戦争は国家の興廃といふ点から云つて、一介の戦略家だけに依つて勝手に行はれるのには、余りにも嚴肅な大業である。そこで、戦争後の平和状態をも含む大戦略に依る広い視野が必要となつて来る」(同、二六頁)

と述べてゐるのは、行詰れる歐洲文化に対する正しい自己批判と言つていゝのである。日本文化

の勝利、従つて大東亜戦争の勝利は、かゝる歐洲の妄断謬想に対する、調和ある精神の勝利でなければならぬのである。リデルハートの憂国の熱誠は、真に容れらるゝに至らず、英国最大の軍事研究家であつた彼自身、かゝる反省にもかゝはらず、日本が如何なるものであるかを認識することが出来なかつた如きところに、今次世界大動乱の悲劇の真因は存して居る。日本はいま、戦争の手段を以て、日本精神の特質を提示し、その理解を世界に求めて居る。然し、單なる軍事的手段のみを以て、その目的を全うし得るものとは考へられない。文化政策の徹底攻勢が要求せらるゝのである。総力戦と言ひながら、それは専ら武力戦を中心としてその經濟戦との協合のみが考究され、思想戦の主導的役割が忘れられて、それが内外共通の不測の不自由の原因となつてゐることは、支那事变以来の覆ふべからざる重大事実である。

アウトノミーの為のアウトルキーといふときは、その目的である自治に、重点がおかれるのである。しかし、この痛切なる實際的要求を机上にうつして計算し考量すると、自然に經濟戦を強調することに、神聖なるべき戦争は、物取り戦争と化するのである。「持てる国と持たざる国」といふ言ひ廻しは、大東亜戦争以後あまり見られなくなつたが、軍事的の南方進出が、そのまゝ經濟力の獲得を意味するとおもつたらなば、それは、經濟戦すら知らぬ幼稚の思想であると言はねばならぬ。といふことは、經濟戦といふ如きものが、偏重的に考へらるべくもないといふことの証明で

あり、資源の為の戦争といふものは、本来戦争としては存在すべからざるものであるといふことであり、同時に武力戦と経済力伸張といふことは、異つた法則に従ふものであることの証明である。

しかし、このことはまた、この異つた法則に従つてゐるものを併行して両立せしめねばならぬところに、戦争の苦難が深刻化するものである、といふことの証左でもある。アウタルキーよりラウム・ウイルトンシャフトへと痛切なる具体的政治的要求を理論化し、ブロック経済論を強調しすぎると、戦争それ自身の遂行不能を結果することを考へねばならぬ。要求が稀薄化したとき戦争は不可能となり、それを可能ならしめむとして反正義となり、国家の衰亡に誘導せしめる。政治も戦争も、それは理論ではないのである。生ける国家の要求である。生ま／＼しき要求である。

井上孚磨氏は、雑誌「理想日本」四月号に、「戦争に就て、就中宣戦の大権に就て」といふ一文を発表されたが、次の一節は殊に注目されたのである。

「殊に況んや勅定宸断を仰がざる以前に於ては、國務大臣は一に謀猷措画に専念すべきであつて、軽々に自家の所見を他に向つて公洩することは許されぬ。かくの如きが、敵国乃至は第三国をして、我が最重極秘の機密を窺知せしむる等の危険もさることながら、それよりも何よりも第一に、かゝる所業は、和戦決定の大権の円融無礙なる行使を制肘し奉る結果をも生ずる懼れがあるからである。若し斯くの如き結果を生ずるに至るとせば、それは最早輔弼ではなくして、

制肘となり、本来は輔翼行為たるべかりしものが、統治権の行使作用と対立し、又は之に代位せむとするの勢を馴致するに至るであらう」

生ける国家の本源的要求が、空理空論化して、国民意識の表皮に漂流することは、法制的に之を言へば大権干犯である。井上氏が、統治権作用に「代位せむとする」と宣言はるゝ事実についての鋭利なる論述は、天皇の大権の中に深く収めらるべき謀猷措画が公洩して通俗化し、殊に敵国の人為的考量測定の対象となることを警告されたものであつて、それ以上に、国策についての俗論化は、当面眼に見えずとも、大なる反統治権作用として結果する。それは、敵国に対してよりも、国内に於ける作用の方が大きいのである。国内の作用こそ、敵国に対する悪影響よりも重大である。支那事変以来、日本国民は総理大臣から匹夫匹婦に至るまで、決して敵愾なる国体観念を把持してゐたとは言へぬことを我等は懺悔せねばならぬ。「持てる国・持たざる国」、「現状維持・現状打破」、「自由主義・資本主義打倒、全体主義国家体制確立」等々一連の俗論は、なほ向後対外問題としてよりも、国内問題としてその余動長く警戒すべきものがある。たゞ、もとより生命の弾撥力に富む神国日本には、転禍為福の道決して逼塞せず、むしろ激揚の時却て近かるべきをおもふが、その躍進の方途は、的確刻切なる反省なくしては見出されない。

渡辺幾治郎氏著「明治天皇の聖徳」は、正確なる史実に基き聖徳を伝へ奉つて、披読するに恐懼

を覚えるが、日露戦争開戦のときを叙して、「御軫念」の項を設け、「寢食安からず」「勝負は眼中になし」の二小分けのもとに、かしこしともかしこき聖慮を伝へ奉つてをる。そして、「神威の奥に御涙あり」の項の下に、

「明治三十七年五月十四日、我が戦艦初瀬・八島、巡洋艦吉野、砲艦宮古の四隻が、旅順沖で一瞬の間に撃沈されたといふ電報が東郷司令長官からあつた。しかしこれより先には、露西亜の名提督マカロフ中将の旅順入りと共に、敵は八隻の潜航水雷艇を分解して、旅順に送つたといふ電報も到着してゐたのである。

当時我には、戦艦は六隻しかないのに、内二隻を一日に失ひ、折角アルゼンチンから買入れた巡洋艦二隻を飲ぶ間もなかつたのである。大本營の心配は一通りでない。とにかく御前會議が開かれて御報告申上ることゝなつた。控席の参謀総長・軍令部長・大臣・元老何れも悲痛の態で、誰も口を利く者もなく、鉛のやうな重苦しい雰囲気に包まれてゐた。

その内、出御しゅつごの御知らせに各々著席した。伊東軍令部長は極めて沈痛の態度を以て、この事件を奏上し、尋ついで伊集院軍令部次長が詳細に伏奏した。一語一句、腸はらわたを引裂かるゝ思ひ、列席の者、誰一人として顔を上げ得る者がなかつた。

しかるに 大元帥陛下の御態度は、実に泰然自若として少しも平素の御様子と御変りなく、時

折、何時もの如く、「ハア」「ハア」と莊重なる御返事を賜はるのみである。やがて奏上が畢ると、岡沢侍従武官長を従へさせられ、悠然と入御あそばされた。

越えて一年、三十八年五月二十八日、日本海大海戦の大勝利を伏奏するために、同様御前会議が宮中東溜の間で開かれた。(中略)

例のごとく伊東軍令部長の口開きに引続き、伊集院次長が大勝利の有様を逐一伏奏した。長岡次長は、前年の海軍大不祥事を想起して、今日こそは御飲の天顔を拝せんものと、瞬きもせず、じつと拝んで居つた。

しかし、大元帥陛下の御態度には、前年の今月泣くに泣かれぬ当時と、少しの御変りも拝せられない。時折り何時もの莊重な御返事を賜はるのみであつた。」

参謀総長・軍令部長も窺知し奉り得ぬこの大御心こそ、国家生活の最大の秘密である。一切の弾撥の妙機は、こゝに包蔵せしめられる。戦争の概論化は、この弾機を固化、定着せしめ、行動の自由が障碍せらるゝことになるから、嚴重な警戒を要するのである。支那事變を通じて横行した空想的戦争論が、実際に戦争を誤導した過程は、国家生活の生ける事実として、臣民の忠誠心との関連に於いて検討せらるゝことを要するのである。

岩波新書として訳出されてをるフォン・ゼークトの「一軍人の思想」の第一章は、「標語」とい

ふ一文である。冒頭は次の如くである。

「人間精神がこれと抗争して遂に徒爾に終るものは、愚昧・官僚主義及び標語（スローガン）の三事である。この三者は、なんらかの意味に於て必要であるといふ点に於ても、互に相似てゐる。そのなかで、愚昧との絶望的な闘争は、これを世の賢明な人士に委ねたい。また軍部官僚主義との戦は、完全に私の敗北であつたことを潔よく告白する。そこで私は、我国の軍人社会に現在流通してゐる若干の標語に対して、戦を挑まうと思ふのである。」

この三者は、固定概念の象徴であるといふ意味に於いて、同一のものである。ゼークトはなほ次のやうに言つてゐる。

「^{オキコト}定に標語は致命的である。

『戦争は他の手段をもつてする政治の継続である。』クラウゼヴィッツの『戦争論』第八編の草案から引用せられて標語となつたこの句の危険は、それが真意を解せずして使用せられ、甚しく誤れる結論の前提とせられるところである。』

前大戦の経験に基いて、独逸国軍の再建を遂げたゼークトの告白の意味を看過してはならぬ。ことに、かゝる戦争遂行力の見えざる作用についての外国人の反省を、それが国家の最も根源的なる力として、日本国民としては、忠義の問題と相関せしめて考察することを忘れてはならぬ。

四月二十六日、クロール・オペラに於けるヒットラー総統の国会演説に於いて、

「(前略)すなはち諸君は余に対して、将来の問題の解決に關する権限を賦与してもらひたいのである。前線と銃後を問はず、輸送、国家奉仕、政治の運用および秩序の維持は、単一思想、すなはち『完勝』といふ決意のなかに包含されねばならぬ。ゆゑに余は、各人をして各々その任務を遂行せしむる法的權利を余が保持してゐる、といふ事実を、国会に確認してもらひたい、と望むものである。義務の遂行を怠る人は、その人がいかに大きな權力を有するとも、その地位からそれを却けるだけの權利を有してゐることを、確認していただきたい。」

議長ゲーリング元帥が之に対して、総統に無上絶対権を附与することを提議可決したことは、最高ものを法制化し概念化したものであつた。国家的苦悶は覆はれぬのである。ゼークトは

「将帥はかくの如き心構へをもつて自己の任務に向ふのである。彼がその任務を遂行するに際して心奥深く蔵するところのものは、行為にとつて本質的なものでありながら、然も一切の規矩に従はず、一切の語言を絶つものである。寔に天才は性格である。」と言つてをる。

ナチス・ドイツの哲学者シェリングの「戦争哲学」は、哲学と称しながら、戦争を一科学の対象として扱つてをるところに、重大な背信が蔵されてゐる。これも最近訳出されたニーダーマイヤーの「国防政治学」は、科学者としての立場を守つてをるところはいゝが、哲学はない。

今日の日本はどうか。「戦争論」に幾多の謬論が横行し、それは日常の標語を構成し、戦争の弾機を失はしめるおそれが多分にある。戦争の最中に包括的政治体制が結成され、それが戦争に關する理論を信念化して、統帥権の電撃的発動の効果を控制する危険が予見せらるゝとき、我等の學術改革の戦は、激化せしめられねばならぬ。いまは詳細を記してをる時間がない。

附記、前々号発表した「文武論」にひきつゞくこの論文は、論題の大に比して、余りに紙数少く意をつくせぬのみか、筆者自身この大問題に面して今更国体の偉大を痛感し、自己の力の微弱なるを反省せしめられる。従つて、「文武論」も、誤解のまゝに読了し筆者の真意を察するを得ざりし人々も多く、多くの波紋を投じたことは、責任の一半は筆者にあると信じてをる。しかし、筆者の念願は、戦争に対する流行思想の重大誤謬を正し、こゝに從來謬れる理論によつて余りに滅殺されし総合的戦争遂行力を万全に發揮せしめ、戦前戦後を通じての渾一的戦争意義の確信の下に、全国民一塊石とならむの一点に存する。ともかく、「戦争論」の問題が注視せられ、そこに大東亜戦争の意義が明確に観念せられる道程を作ることが出来れば、目的の半ばは達せらるゝことになる。筆者は、誤解せられることを惧れるものではない。問題は、単に筆者の議論が万全のものであるといふことではなく、況んや万人から受入れられることでは断じてない。国

体の信が、全国民の間に確立せらるゝことである。たゞ、筆者の論旨貧しきに拘らず、問題の大を見逃されざらむことを読者に祈る。「文武論」中批判した大串兎代夫氏の考へ方に対しても、大串氏の全思想についての検討に入る暇なく、従つて不完全であつたことについては、大串氏並びに読者に謝するものである。些か心境の表白になるが、最近出刊の「外政家としての大久保利通」(清沢潤氏著)の一卷は政治といふことについて、筆者の万感を誘ふものがあつた。「征韓論」については、我等の大いに研究を要することを痛感した。それが「西南の役」に発展し、宸襟を悩まし奉り国家の禍殃となつたことは、もとより遺憾至極のことで、明治元勳の思想的内容について仮借なき検討を要することであるが、兩派とも、国家の大事に身を挺し、莫逆の友西郷・大久保は遂に相容れざる敵となり、一は西南の役で自ら果て、一は遠からず兇漢の手にたふれ、双つながら非業の最期を遂げたことは、政治の何たるかを想見せしむるに足る悲劇である。しかしながら、両者の念願は、共にかしくも 明治天皇の勅慮のうちに収めしめられた。今日は、余りに表面の対立を回避し、形式的挙国一致を作為する時代である。今日は、既に政治がないと言はるのである。それはまた余りにも、国体の不可思議威力を信ぜざる思想である。臣節は、遂に完きを得ることはない。我等臣民は、非難攻撃を教訓と自らおもひ、他に対しては、国家の大事に関することならば、言を尽して責むることもあり得よう。共に祖国日本に死せむの念

願を出でない。かくして、政治はある。五ヶ条の御誓文に「人心ヲシテ倦マザラシメン事ヲ要ス」と教示せらるゝ。変革期といふならば、「我国未曾有ノ変革ヲ為ントシ」て示し給ひしこの御誓文を忘れてはならぬ。かくしてこゝに、国家生活の生成がある。国家の生成に参ぜむこゝとこそ我等の悲願である。

歴史必然論とソ聯礼讃論

——細川嘉六氏の「世界史の動向と日本」について——

「思想国策叢書」
昭和十七年八月

国際謀報団ゾルケ事件については、我々は論ずる自由をもたないし又、事件の内容を覗知することも容易ではないのであるが、尾崎秀実と思想的に全く同一のものである平貞蔵、橋樸、細川嘉六氏等々の言論が、尾崎の論文より更に露骨な理論を展開しつゝ公開されてをることは、まことに遺憾である。ソ連の間諜行為は、思想政治工作の上に行はれることをおもふと、現代日本の思想取締は容易でない、といふ感が深いのである。「改造」八月号は、細川氏の「世界史の動向と日本」といふ長篇論文と、橋氏をかこむ「土の教訓」といふ座談会とが、特輯として編纂されてを

る。この両氏は尾崎の下にあつて、「満鉄支那研究室」を協力運営してをつたことは注目すべきで、故ら両氏を特輯にかつぎ出した編輯の意図が注意をひくのである。こゝでは、細川氏の論文について短評を試みる。無論、戦時下思想宣伝の見地からする批判である。細川氏の論旨を要約すると、

- 1、「現在当面の世界情勢は、人類史上未曾有の危機に由来し、これを示現してゐる。」

- 2、現前の第二次世界戦争は、第一次世界戦争と次の二つの点に於いて深刻且つ本質的相異を示してゐる。

イ、前大戦は、資本主義国家間に於ける戦争であつて、諸国の内乱（やがて革命）は、戦争末期又は戦後におこつた。しかるに、今大戦は、資本主義国家間の戦争ではなく、「資本主義世界と、之が対立者として共産主義を建国の理想とするソ連とをもつ世界に於ける戦争である。第一次世界大戦は、その最も重大なる結果として、帝政ロシアにおける革命の裡からソヴェト・ロシアを出現せしめた。」「英米両国のソ連への追隨」が、之を顕著に示してゐる。（筆者註、このソ連をもつ世界は、この第二次世界大戦を通して、次第に世界の決定的趨勢となりつゝある）そこで、各国に於いて既に内乱の状態を戦争の最中に示してゐる。

ロ、前大戦では、同盟国と協商国との対立であつたが、「この前の世界戦争がかくの如き二個の対立陣営の順を追ふての成長を先行条件としてゐない。」さうではなく、ソ連的世界が

前項のごとく、次第に決定的となりつゝある。そこで、英米も追隨したし、一九四〇年の日独伊三国同盟も、一九三六年の防共協定があるに拘らず、「ソ連と三国との政治的関係に変化なきことを条件として結成され」、又、「今のところ日本とソヴェト・ロシアとの間に友好不可侵条約が維持されて居ることは事実である。」この世界的傾向は、「不可避の物力を以て勃発」した世界戦争によつて、決定的「必、迫、力」をもつものである。

3、そこで、これらの事情は、「現在の世界戦争が、第一次世界戦争と異なる特殊性を内包し、いかに人類史上未曾有重大なる世界事態に基づいてゐるかの認識を、世界人類社会に要請するものである。」

4、「戦争はその結果として、旧秩序の混乱をもたらすことは、過去の歴史の実証するところである。史上未曾有の大戦争と考へられた第一次世界戦争に比較し、更に大規模に更に深刻に展開し、既に戦争の過程に或ひはその直後に、惹起するべき重大の情勢を内包しつゝある現世界戦争が、第一次世界戦争の場合よりも更に大規模にして更に深刻なる混乱と現在予感し想像する以上の世界的変化とをもたらすであらうことは否定されうべきであらうか。」

5、そこで、「上述の如き未曾有重大なる世界的変局の發展は、必然的に日本民族の運命を決定せずには止まない。いかに巧妙精緻なるにせよ、抽象的独善的理論(筆者註、日本精神の信念を

指すことは、從來左翼思想家の通論によつて明らか)を以てしては、民族的死活の問題が解決されうべきものでないことは明かである。我々は本編によつて、我が民族のもつ八紘一宇の政治的理念が真実に大東亜に限らず、全世界二十億民心を収攬すべき雄渾なる政治的良識たり、従つて又雄渾なる世界政策の基礎たるがために、必要不可欠の前提として、現世界の混乱を惹起しつゝある世界史的発展の根本問題を検討し、それによつて、敢へて我が民族の光輝あるべき将来のために資せんとするものである。」

これが、この論文の骨子であつて、その後の議論は、この論旨を展開する為の材料に過ぎない。——こゝでは細川氏に対する学問的反駁ではないから、一々、学術的批判はしない。しかし、事柄は学術的批判を要せぬ程に明らかである。今日は、このやうなものにも、一々学術的批判をすべき程、又さうせねば、論述の正確性が保たれぬ程、日本の国体は湮没されてをるとは、断じて信ずることが出来ぬのである。時代は平和ではないのである。時代は切迫してをるのである。時代の波は高まつてをるのである。我々は、時代の思想的切迫に対して、敏感な忠誠心のある識者や当局者に訴へようとするのである。それは少数でも、国家を動かす、危局を救ふ力であると思じてをるのである。

かういふ議論は、極めて学問的形態をとつて一般言論機関に現はれ、一つには取締当局の眼をく

らまし、一つには国民の意識せざる心に、或は学問的形態に惹きつけられた心に、重大な影響を及ぼし、更に彼等同志の間の一つの合図としての役割をも果すのである。「これだけのことが言へた、これ位のこと迄は書いても検閲が通る」と言ふのは、実行意志をもつたものが、時代の動きと、政治の方向とを測定探求する為に、不断に行ふ巧妙なる方法であることを忘れてはならない。当局の取締の寛厳は、直接実行意志にひびいてそれを抑制したり、その発動を促したりするからして、極めて重要である。従来「改造」、「中央公論」等の言論界にラディカルな議論が表はれたときは、裏面で何ごとかの実行行為の用意（左翼の中核組織）がされたときであつた、といふ歴史的事実が、顧みしめられるのである。言論は行動の尖兵である。「改造」・「中央公論」等の論調は、大正末年からして、時代の（それは発表されなかつたとしても）実際の動きと共に、消長し波動して来た。実行意志は極めて臆病である。しかし、それ丈用意周到である。決して悔つてはならぬ。弛みや隙に乗じて一挙に激発するものであるから。

世の識者は、彼等の言行に監視の眼を曇らせてはならない。第一次世界大戦に於ける最大の結果は、共産主義を理想とするソヴェト・ロシアの誕生である、と言ひ、それは戦争末期に於ける革命によつて生れたが、今次大戦に當つては、既に各国内の対立によつて、かゝる情勢、即ち革命と共産主義国家の誕生とがはじまらうとしてを、と言ふ。「現世界大戦は、資本主義世界とこれ

が対立者として共産主義を建国の理想とするソ連とを、持つ世界に於ける戦争である」と言ふことばに注意せられよ。それは、資本主義世界対共産主義世界の戦争といふのではない。「二個の対立陣営に分裂せしめてゐるといふに止らない。即ち既に、それは四分五裂されてゐるのである」といふ。即ちソ連は第一次世界戦争の必然的結果として発生し、今次大戦に於いて愈々成長しつゝあり、それは世界史の発展の証拠として見るべきであつて、またそれは、世界史発展の必然的方向であるから、各国とも、その内部に於ける対立内乱の相視を示し、「現世界戦争が、第一次世界戦争の場合よりも、更に大規模にして更に深刻なる混乱と現在予感し想像する以上の世界的変化とをもたらすであらうことは、否定されうべきであらうか」と、まことに必然らしく述べるのである。

前世界大戦がソ連を生んだことは、すべてのマルキストが如何にも重大な歴史的必然性として述べるところである。それは一面その通りであるが、それは前大戦が、西欧文化の破局であつたこととの証明以上の意味をもたない。さういふ意味からして、細川氏が、カイヨーの「科学を窒息せしむべきである」といふ解答も、ヒットラーのアリアン民族至上主義も共に、この前大戦の破局に表はれた西欧文化の没落を救ひうる文化体系でない、といふ議論は正しい。しかし、それは飽まで、西欧文化について言はるべきで、細川氏が、東洋文化を鈍重不活発、とるに足らずとし、更に日本文化には一言のふれる力も示し得ないことは、氏の悲しむべき無知に起因する。それが

氏をマルキシズム讚美に走らせたものである。現代インテリ層を支配する無知も同じであり、やがて、日本文化・日本国体に対する無信でもある。いまは、細川氏がかゝる議論を公に、おそるるところなく発表し得る大胆さの根底に横はる信念といふよりも意志を、問題とすべきである。

「世界史の必然」といふ言葉が、事変以来、如何に屢々用ひられたか。而もこれ程不敵に、その内容を規定したものが、大雑誌に掲載されたことは無かつた。尾崎秀実の思想的共犯者たる、研究上の協力者、その人々がいま、時を得顔にふるまつてをることについて、我々は責任の重大性を痛感する。彼等が目的とするところは、ともかくも、日本の知識層（軍人官吏をも含めて）が、ソ連又は共産主義に対して、何等かの畏敬、恐怖、神秘、魅惑の念を懐かむことである。手を替へ品をかへて努力するのが、この一事である。それは決して、ソ連や共産主義を全面的に研究することでも、（全面的研究は却てその真価を知らしめて不利になることがある）又全面的帰依者たらしむることでもない。しかし、ソ連を少しでも進歩したもの、世界史必然の産物なるかにおもはしめれば、自分らの信念の満足が得られるのである。さらに、「それほどいゝものならば、ソ連のやつてをることを、一つ真似して見よう。試験的にやつて見よう。」と来れば、もうしめたものである。それでソ連の謀略は、こゝである程度成功したものと成る。それで、目的は達せられるのである。その表現の仕方は、近頃極めてカムフラージュが巧妙となつて来たのである。カムフラージュ

ユの巧妙は、陰謀性と、その執拗なる実行意志との逆表示である。かういふ表示を見て、而も、そこに何らの意図も計画もないと断言出来るほど、国民は、ことに取締当局は大膽であつてはならぬと信ずるのである。我々は、その思想を分析する能力を幸にして恵まれた。我々は、かゝるものと徹底的に戦はねばならぬ。神かけてかゝる思想の払拭を、その人々の上に、国民思想に、実現しようとして祈念し努力してをる。思想は、実行につらなる。忠義の実行へつらなる忠誠の思想に、すべての国民が導入せしめられねばならぬ。

人間性の危機

〔新指導者〕
昭和十七年八月号

「教育思潮研究」第十五卷第一輯は、「海外教育の動向」として編輯されてをるが、吉田熊次博士の「蘇連に於ける最近教育の動向」は、その取扱つてをる問題の重要性が注目されたのである。この問題は、それ自身として決して新しい問題ではない。しかし、今日まで充分論ぜられなかつたことゝ、今日、この問題は、我々が以て重要な反省の資料とすべき点に於いて、新しい問題である。要約して見ると、ソ連の歴史を、第一期・戦後共産主義時代、第二期・新経済政策時代（共

にレーニン在世時代)、第三期・第一次五ヶ年計画時代、第四期・第二次五ヶ年計画時代、及びそれ以後の第五期に分けてゐる。その第一期・第二期時代は、ダルトン・プランとか、プロゼクト・メソッドとか生活学校とか生徒の自治とかの如き、英米の資本主義・自由主義国家内に繁栄せる教育法が、そのまゝ一層徹底的に実行されたとし、第三期以後スターリンの独裁が確立すると、教育法は一変したといふ。殊に一九三一年、即ち第一次五ヶ年計画の末年には、根本方針に一大転換を加へ、翌一九三二年と三四年には新に教育令を發し、一九三四年五月十六日首相モロトフ・黨書記長スターリンの名で、国民歴史教育の教授に關する決定を發表し、三五年六月迄に、新歴史教科書を作成することゝなつた。しかし、この編纂委員によつては、スターリンの所望する教科書が出来ず、スターリンが一歴史家に託して所期の歴史教科書を編纂せしめ、之を全国に採用せしめることゝなつた。教育内容では、以前は、学制として一九一八年ルナチャルスキー文相の下に、九年制の統一労働学校が制定され、(しかし實際は皆四年で終るものであつた)はじめは飽まで平等主義であつたが、後には、公然と七年制・九年制に分けた。又大学専門学校も、はじめは皆職業教育であつたが、次第に一般教育化して行き、又、一九二三年頃には普通教育では、労働・自然・社会の三欄内に於いて、合科的に授業が行はれたが、次第に国語・地理・数学等を独立科目としてユムプレックス以外に置くやうになつたこと、最初は共產主義的イデオロギーの教授に

力を用ひてゐたが、次第に之を減じて、一般的陶冶に復帰するやうになつたことを記してをる。殊に、歴史教育改革の理由として、吉田氏の引用は、注目に価するものである。

『連邦人民委員会及共産党中央委員会へ、ソ連邦ノ学校ニ於ケル歴史ノ教授方法ガ不完全ナルコトヲ認ム。教科書及教授方法ハ抽象的・表解的性質ヲ有シ居レリ。国民歴史ニ付、重要事件及事實ヲ編年体ニ叙述シ、歴史的人物ノ特徴ヲ挙ゲテ生氣アリ興味アル形式ニヨリ教授スルコトナク、生徒ニ対シ社会的經濟的形態ニ関スル抽象的ナル定義ヲ与へ、斯シテ国民歴史ハ、連関セル叙述ニ代フルニ社会学的表解ヲ以テシ居レリ』

『生徒ガ歴史科ヲ十分習得スル為最モ重要ナル条件ハ、歴史的事件ノ叙述ニ付、史伝的・編年の順序ヲ守リ主要ナル史的現象、史的人物編年の月日ヲ必ず生徒ノ記憶ニ刻マシムルニアリ』

かういふ根本的事実があるに不拘、日本の知識人は、なぜソ連を見誤るのであらうか。例へば、「ソ連には共産主義は今日なくなつてゐる。スターリンの独裁権は確立し、特権階級は出来、民族主義さへも強調されてゐる。だから思想的に恐れることはない。しかし、その計画経済はおそるべき力をもつてゐる」と言ふ議論がある。彼国からの帰朝者などの談話にも、屢々之に類する言辭があるのである。これは、第一に共産主義はおそろしいものであるが、今日のソ連にはそ

れが無いから恐るゝに足らぬ、といふ議論であるばかりではなく、元來共產主義が如何なる者にとつて恐るべきであるか、といふことを知らぬ幼稚な考へ方である。はつきり言へば、共產主義は少しも恐るゝに足りない誤謬思想であるのだが、かういふ共產主義の何たるかを知らぬ低級な考へ方の者どもにとつては、恐るべき猛毒を包蔵してをるのだ。

上述引用した資料によつて、最早今日のソ連には共產主義はなくなつてゐる、と言ふ考へ方を引出し得ぬことはない。しかし、今日に於いてもソ連が依然共產主義国であることに變りはない。ソ連は、共產主義を世界政策の具として、一貫して世界赤化を策動してをる。今も對独戦争の国家的死活事件に直面し乍ら、而もコミンテルンの世界赤化工作は、少しも消極化せしめられ、てをらぬ事実を見なければならぬ。国内政策に於いても然りである。プロレタリアの独裁、否、共產党の専制が、元來共產社会の理想とは全く相反するものであるに拘らず、共產主義の宣伝に依つて保持されてをる事実を見るべきである。こゝに理論の迷信がある。スターリンと共產党とは、共產主義理論実践の英雄として、ロシア國民を支配することゝなつた。

平等主義の理論といふ、反人生的、非人間的理論が、狂暴な実行的英雄の破壊力を必要とするに至ることも、またその妄念が、人間生活を全体として病的不安定に陥れることも、ともに歴史に見られるおそるべき法則である。しかし、共產主義が生れてきた動機の中には、極端な社会生

活の不平等に対する、倫理的感情がある。

しかし、歴史的に見られる現実の国家社会生活では、この倫理感情が、暴力を伴つたり、理論の力を伴つたりして、はじめてその感情が満されるやうになつてしまふので、こゝに悲しむべき歴史の執拗な残留影響力が生れてくる。この影響力が現実にあることを念頭に入れて、共産主義の害毒を考へるべきである。それゆへ、西欧の歴史に対する総括的觀察が要求されるのである。マルキシズムが生れた国、独逸に於ては、それに先行してカント・ヘーゲルの觀念論が流行したが、日本でも同じであつたのである。日本でのカント哲学の流行は、徳川時代の朱子学の道徳論や形式主義の残痕が、その基因である。それ故に、共産主義理論といふものがおそるべきではなく、それを生み出し、それ故に悩み、それに駆使された諸民族生活の歴史的・累積的影響が、深刻の注意を要する問題である。その共鳴振動の作用がおそるべきものである。それは、思想や理論そのものゝ理解といふ問題よりも、民族生活の歴史的運動の問題である。それは敏感に作用し合ひ、急速に伝播し、深刻な影響を及ぼすのである。そこで、連は、依然として共産主義を表にかゝげること出来、またその政策としての教育を、自己の根本政策の反省修正なくして改革することが出来る、といふことの意味も、はつきりする。また共産主義理論がおそるべきでないからとて、直ちにコミンテルンの世界政策の破壊力を侮るわけにはゆかぬ。そこで理論的批

判のみでなく、このコミンテルンの世界赤化政策に対する適確な政治的戦闘も、敏活に行ふべきであり、根本的には人間の歴史は、余効の連続であるといふ、この余効影響を総合的に洞察し、これに対処する途を講ぜざる限り、対ソ政策は確立すべくもないのである。同時に、日本の対世界政策は立たぬのである。

○

上掲引用のごとく従来の教育を反省して、「教科書及教授方法ハ抽象的表解的性質ヲ有シ居レリ」といひ、「生氣アリ興味アル形式ニヨリ教授スルコトナク、生徒ニ対シ社会的經濟的形態ニ関スル抽象的ナル定義ヲ与へ、斯シテ国民歴史ハ連関セル叙述ニ代フルニ社会学的表解ヲ以テシ居レリ」と言つて居るのは、随分勝手な言ひ方で、一切を「教育者」の責任に嫁して、少しもソ連の教育方法を生み出した自分らの理論や国家観・人生観についての反省を示して居らぬ。それであるから、共産主義的イデオロギーの講義を減じた、といふことも、単なる政策に過ぎない。ソ連に於いては、教育は全く政策に墮してをる。教育は、自分らの当局者のヘゲモニーを確保する為の——無論そこには一種のフナティックな信念があるけれども——手段に過ぎぬ。彼等は従つて、思想を、自分の生活から生み出し、自分の生をそこに託するところの精神として見ないで、自分の意志を実現する為の道具として見てゐる。それは、徹底的な唯物主義である。意志は

理論の外にあるからして、その理論は極端化し、その意志は一切の法則を超越しようとする。反省はそこにはない。彼等は超人である。しかし却て、結局その意志は、政治的野心に過ぎぬこととなる。よつて以て立つべき根拠と法則とのない意欲は、その時々々の勝手気儘な企図を生み、支配者と被支配者を含めて、人間を一時的意欲の奴隷たらしめてしまふ。個人の恣意によつて人間性は破壊されるのである。

しかし、ソ連がその教育政策の初期に於いて、ダルトン・プランや、プロジェクト・メソツドの如き「自由主義」的方法を無反省に採用した、といふことは、看過すべからざる事実である。ソ連邦建設者は、政治家としてはたしかに相当の手腕があつた、と見るべきであるが、教育に関しては、全く確信のない単なる政治家であつた、と言はねばならぬ。それ許りではない。かういふ米國で案出された教育方法が、元來人間精神に対する不信な実験である。それは、社会的生活の矛盾が人間精神の抛るべき中心を失はしめた結果である。思惟傾向の極端化は、生活の調和を喪失したところに生ずる精神の悲劇である。かういふ国家社会生活の調和の喪失が、人間精神の未完成或は失敗の累積の結果として、西欧に支配的となつたとき、前世界大戦はおこり、その大戦を機会に、人間性に対する根本的不信を、人間に対する悪魔的力として運用するソ連が起つたのである。

今日は、人間性の復活が世界的に要求せらるゝのである。しかし、西欧文化の欠陥に対する自己修正から出発したナチス独逸が、ソ連と一度は和してポーランドを略し、遂に開戦して既に二年を経て勝敗はなほ未決定のままに戦が続けられてをる。コミンテルンと、それと連絡する最有力共産党たる中国共産党とを根こそぎ世界から掃蕩せぬかぎり、人類は人間性の復活を誇示する資格はない。もし、世界に於ける共産党の征伐が出来ず、人間性の復活が出来ぬならば、今日の世界的禍乱は到底やむときはなからう。世界的動乱の克服といふことは、今日に於ては人間性の復活と同義語であり、同時存在である。さうして、その実際的手段は、先づ共産主義の廢滅である。

こゝ二十年来愈々深刻化してをるコミンテルンの対各国間諜行為は、実に徹底したものであつて、それは、他国のスパイとはその本質を異にしてゐる。一般的に言つても、何れかの国に於いて国家の重大機密が広汎な範囲にわたつて漏洩してゐたとしたら、それは、部分的材料を集めて判断するスパイとは、根本から違ふのである。コミンテルンが各国に対して行つて来たものは、第一が思想工作であり、第二が政治工作である。さうして、その上で余すところのない間諜をやつてのけるといふのが、その常套手段であつたから、機密を知るといふことは、既にこれら思想工作・政治工作が或程度成功してゐることを意味してをるのである。それであるから、「共産

主義はなくなつてゐるからして、思想的にコミンテルンをおそるゝ必要はない、その計画経済は、莫大な数の大砲や戦車や航空機を作つたものであるからおそろしい」等と言つてゐる迂濶は、おそろしいものである。さういうふ迂濶な考へ方が、厳肅な人生を甘く見る不信の結果としての天罰を蒙ることになる。コミンテルンは、たしかに共産主義といふ思想を武器として、侵略して来る。さうして、その上に政治工作を行ふ。共産主義は、彼等にとつては元来一つの武器であり、手段に過ぎない。であるから、彼等はそれをどのやうにでも変へてしまふ。レーニンの新経済政策が、それであつた。スターリンに至つては、全くマルキシズムを勝手気儘に変形してしまつたのである。人民戦線といふ曖昧な、わけのわからぬ思想の雑炊^{ドロすい}、人生観の妥協が、共産主義者の人生観そのものに内在するごまかしを証明してゐる。かういふ風に変形してしまふのは、思想は、彼等にとつて武器に過ぎぬからである。共産主義は、はじめから武器であつたのである。それが変形しても、彼等の意図がそこに藏されてゐるものである限り、それが彼等の武器であることに変わりはなく、従つて、「共産主義はなくなつたから、ソ連は思想的におそるゝに足りない」と言ふことは出来ぬ。共産主義の理論的外形は變つても、思想的には、依然破壊工作を行つてをるからである。共産主義の本質は、唯物主義とファナティズムと陰謀性にあるのであるから、これが残つてゐる限り、共産主義は外形の変化をこえて一貫してゐる、と見てよい。日本

に共産主義に対する根本的批判が行はれぬかぎり、コミンテルンは依然として日本にとって怖るべきものである。少くとも、「計画経済は、莫大な数の大砲や機械化部隊をつつたからおそろしい」といふやうな唯物主義の迷信が横行してをる限り、唯物宗教のファティチズムの陰謀は、おそろしいのである。

共産主義の現代の変形は、我々の眼には余りに多く映ずる。それを一々記してをる暇はない。これらの例を一つ／＼分析して批判する必要はたしかにあるから、それは後の機会にやることゝして、今回は、支那事変を通じての筆者の時代観を記すに止める。それは、支那事変五ヶ年を経て遂に残つたものが、支那共産党の問題であつた、といふことである。支那事変の直接の原因である西安事件が、国民党と共産党の究極の提携であつたこと、さうして日本は、蒋介石の国民党を討つことに主力をそゞぎ、南方作戦に専念して行つたこと等を思ひ合はすと、北支の共産党問題に対する方策、又中国共産党が、ソ連邦以外の唯一の政治的軍事的独立能力あるものであることについての認識等について、日本が、真剣且つ周到なる研究をなし来つたか否か、といふことを考へると、今後も樂觀を許さぬものがあることだけを一言するに止める。

もう一つは、大東亜諸民族のすべての独立運動は、多かれ少かれ共産党と結合した民族解放運動であるといふことである。今後、大東亜が日本の内政的範囲に入つて来る上から重大な関心を

かけられねばならぬことであるが、その対策が果して出来てをるかどうか。今日迄の日本は、これら独立運動に依頼協力したし又してゆかねばならぬ状態にあることを忘れてはならない。

近頃、科学主義工業社から技術論についての色々の書物が出版され、技術論はこの頃の流行となつた。これは例へば、一元的計画経済といふやうな人間能力の限界を忘れた龐大計画を遮二無二遂行しようとして、やりあぐねて求めた万能薬や護符のやうなもので、實際上結論が出るものではない。技術が大事だと言ふ間はまだよいが、それを求める余り、それさへあればどんな困難でも突破出来るやうに考へて、かへつて計画それ自身に、或は計画者の人生観それ自身に過誤がある場合でも、その反省の動機を失はしめ、人間生活の計画を空想妄想の域まで駆り立てゝしまふおそれが充分にある。人間生活は自ら規制せねばならぬのであるが、それが技術論といふ魔法に対する過信から失はしめられるとき、人間生活は破局に向つて突進する外はない。

技術院の多田礼吉陸軍中将が、科学主義工業社から、出版された「国防技術」といふ書物の書き出しは、「生物本能である生存慾が生存競争となり、戦争となる。従つて広意義の戦争とは、生存競争の別名である。即ち生存競争によつて生物が進化しつゝ生存して行く動向が、又戦争の絶えざる動向である。」といふのである。根本觀念は要するに進化論である。さうしてアミーバから

進化して人間といふ複雑優秀なものが出来た。更に進化して野蛮人が文明人となつた。「万物の靈長たる人間を作り上げた生存競争は、更らに進んで第二期の進化に入りつゝある。それは文明人類が其の発達した智能力によつて、より以上の生存競争を増強する為めに団結し、組織化して、第二の大生命体を作りつゝある事である」と言ひ、国家はチャイアントであり、そのチャイアントとチャイアントとの闘争が近代戦争であるといふ、著者なりの不動の信念が披歴されてゐる。

「之等の国家群が進化の度によりて優勝劣敗し、併合離脱の大模様が今地球上に展開されつゝあるのを見るのである」

「近代戦が其の戦力の対象として、智能に置くやうになつたのも、結局其の智能の対象は物質である故に、物質の変化現象を取扱ふ科学技術が自然、戦力の対象である。従つて国防国家の総合戦力体制が、又総合科学技術の体制の別名となる」

「生理体が、神通的諸臓器の技術により能率的に組織の活動をなす如く、国家の諸臓器諸組織も、人工の技術によつて其の生活力を而して其の生存能力を發揮する」

「科学が生んだ近代戦、近代戦が齎した科学は、凡て物を求むる赤裸の表現である。生存のため、物が要る。其の物を得る為に戦争するが、其の戦争に又物が要る。……一にも物、二にも技術である。換言すれば、生存の凡てを人工化する事が文化であり、進化であり、近代文明で

あり、近代戦があり、科学戦がある」

「かくて近代文化は近代科学を以て進みつゝあるが、こゝに遺憾なのは吾日本の文化である。

……物質により、科学技術を以て基底となす所謂近代文化は、皆外国の輸入品であつて、附焼刃式のもので自ら発育する根柢がない。之れも誤りたる国際主義、自由経済主義の弊から来てゐるので、此頃漸く気がついて経済の新体制が出来ようとしてゐる。」

といった論調である。

チャイアントとチャイアントとの永久闘争説は、一種の童話的空想を含んでゐて、著者の人生観の稚拙を感じせしめるが、この幼童的觀念を、国家の重大問題についてまで貫かうとするのは、複雑困難な人生に対する無経験、経験無視、ひいて無信を示すものである。かゝる觀念のうちには、人間がその魂を憩はしむる人生、そこに帰向統一せしめらるゝ原理は遂に求められない。進化論はゆきつくところがないから、これを人生に適用すれば、目的が失はれてしまふのである。進化は要するに、現在を頂点として考へた過去の過程の結果に対する一偏的説明に過ぎぬので、もし、進化論をとつて、自ら悦に入つてをつつても、一度頭をめぐらして現在には不完全なものだといふことを感じ出したら、却て不安は無限に増大して、たまらなくなるのである。要するに進化論は、英国の国運が頂点に達した時代の一種の自己満足の表白に過ぎない。それはそれから何もものも開展し

ないものであるから、また事実しなかつたから、その意味で、決定的に過去のものである。英国の歴史は、ダーウインの時代を頂点として下り坂になつて来たのである。今日進化論を口にするのは、英国人と共に過去の英国を讚美する以外の何ものでもない。英国と戦つてゐる日本が、かういふ敵国の過去を崇拜してゐる現状をこそ、打開しなければならぬ。打開しなければ、到底最後の勝利を得ることは出来ぬ。戦争は英国に対する勝利でなければならぬ。英国の歴史と文化とに対する勝利でなければならぬのである。英国の資源を掠奪するといふのでは、断じて日本の国体が許さぬ。右の著者のごときは、英国がいけない、とも言つてゐない、「自由主義経済がいけない」と言つてゐるに止つてゐる。かういふことでは、技術論も出来ぬ。従つて戦争技術もかういふ精神では確立しない。戦争には勝てず、否戦争は出来ぬのである。

国家をチャイアントだと考へ、その生存闘争が戦争である、といふ史観・戦争観で、戦争が出来ると考へるこそ、無痛感の極である。戦争とは、そこに個人がその生命をさゝげるのである。人間は、これ以上のものはない、と信ずるものに対してこそ、進んで生命を捨てることのできる。その無上のものに帰向統一せしめられるのが、日本では「忠義」である。過去・現在・未来を貫いて、無上のもの——かゝるものこそ、唯一の至上価値である——に対して、帰一しようといふ要求、それを生命といふ。この生命といふ概念は、それ以上分析することが出来ぬもので

あり、この生命には統一力が内在する。生命のこの統一力が、その時々々の色々の環境に出会つてその様相を変化せしめてゆくのを、結果的に見て進化といふ言葉で説明することは可能であらう。しかし、進化といつてみても、その根源は生命の統一力である。人類はアミーバから進化したといふが、今日人類が生存してをるときにも、なほアミーバは存在してをる。人間はチャムピオンだといふのであらうが、何故にチャムピオンが生れたかは、進化論だけでは説明できぬ。著者の技術観には、肝心のものが欠けてゐる。たゞ、

「唯茲に如何に解剖し、如何に組織しても、物と技術とを以ては遂に達し得ざるものがある。人間生命の魂である。現代否永代、科学技術を以て解決し得ざる生命の神秘力が、常に無形に非科学的に、非機関的に、人体に君臨して身体全細胞を生育し、神意を継ぐかの如く、生物人間の意志を護る」と言ひ

「吾皇国民は、恐れ多くも万世一系の 天皇君臨下に、神代の昔より有機的なる組織を以て国防日本の体制を整へて来た。外国民に例のない国体、而して其の組織は、昔より近代戦型であつて、自ら其の進化を誇るに値すると思ふ」

と言つてをられるのは、上來批判した点についての修正であるが、しかし、生命は飽まで外部から観測されてをり、かへつて生命に遠いものとなつてをる。この生命と技術とが遂に結合せしめ

られぬところに、著者の結論のない思想の放散状態が見られる。技術は、一種の空想に過ぎなかつたのである。かゝる技術を以て獲得せらるべき物質が、遂に、人間生活の外部に堆積する剰余価値となるのは当然であつて、日本国民は、かゝるものを修正せぬかぎり、現下の戦争を遂行する資格は生ぜぬのである。

この書の著者は技術者であるから、直接思想問題について責任ある人ではない。しかし、重要な地位にあることを反省されて、進化論的戦争観を改めて頂きたいのである。皇軍の忠義感情をやがて紛消するものであるから、修正して頂きたいのである。

○

併し、かういふ技術論や、同類の国家観・戦争観が、現代日本を風靡してをるといふことは、戦時下殊に憂慮すべき現象である。前掲の著者の言ふように、「生存のために物が要る。其の物を得るために戦争をする」といふ考へ方が、畏くも宣戦の大詔を奉戴する今日の大東亜戦争下に、その南方作戦に対して懐かれてをらぬであらうか。本誌前号には水野正次氏が、日本はその対外放送で、日本は資源を必要として戦を開いた、とくりかへし言つてをることを報じてゐる。かういふことでは、開戦の意義が唯物論にされてしまつてをり、これでは、コミンテルンに対して非常に危険な立場に立つと言はねばならぬ。米英は、物質獲得の手段に於いて、實際的に巧妙

であつたにとゞまるが、コミンテルン共産主義は、日本国民の精神に対する意図的侵寇であるから、一層深刻に考へねばならぬ。かういふ資源戦争の觀念が、實際に支那事變の根本問題についての省察を妨げ、事變を長期化せしめた原因であつた、といふことは、重大な史実である。南方發展、その資源の整理再組織といふことに大童おはわらとなり、又この發展を、国威の發揚というやうに簡単に考へ、結果と動因とを混同し、外面現象と内面の力との區別を見誤る現状は、断じて來るべき事態に備へうるものではない。否、現在の事態に役立たぬ。北支より直ちに全支を覆ふべき、又、全東亞民族獨立運動に巣くへる、共産党勢力の処理は、刻下の問題となつてゐる。具体的に言つて、日本は之を着々解決し得なかつたのである。

○

マルキストが繰返して言ふやうに、前世界大戦によつてソ連は生れたのである。その大戦は、西欧文化の没落の結果であり、それを戦争の犠牲に於いて遂に修正し得なかつた。ヴェルサイユ條約が、西欧文化の没落を明文を以て、數十国の代表立会のもとに保証したのである。英國の真似をしたウイルヘルム二世が、遂に開戦の余儀なき事態に陥られ、自ら進んで、その野望の達成のために乗出し、戦争中途にして、ソ連革命を幫助し、ブレスト・リトウスク條約を締結して、かへつてソ連の革命の魔手にたふれてしまつた。残つたものは、西欧文化のチャムピオンと

しての英仏と、その鬼子としてのソ連とであつた。ドイツは、この文化に対する訂正を企図して起上り、ナチス革命によつて最大の軍備を用意し、今次大戦をヴェルサイユの修正として意図しつつ戦つてゐる。しかし、先づ思想的に決定的に処置すべきソ連と、政治的軍事的に処置しつゝやがて共に西欧文化の修正に提携しうべき英米とを、二正面作戦によつて撃破せねばならぬ独逸の立場は、甚だ苦しい。今日の如き状態では、ソ連は軍事的に敗れても、コミンテルンの存在は続けられるのである。而もその勢力は、いま英米の中にも侵入し、支那、印度、大東亜諸民族の中にも強大な生存力をもつてゐる。これは、文化的に決定的に処置せねばならぬ問題である。今次大戦は、日本が重要な役割を有してゐることよりしても、前大戦の修正でなければならぬ。具体的には、前大戦の生んだ、西欧文化没落の著明なる結果としてのコミンテルンの掃滅以上に、重大なる問題はない。

冒頭論じたソ連教育改革問題に於いても知られるように、ソ連は教育も思想も、手段として駆使用する。そしてその思想戦・宣伝戦を徹底して行ふに當つて、その方法は精緻を極め、その実行は至つて犀利である。しかし、究極のよるべき原理、帰向する思想の対象ははじめから無い。その最もはじめに存在する原理、分析しがたい原理に帰向することを忘れ、一切の思想を手段として見たところの飽なき不信不逞は、自らの生をやぶるのみならず、他の生を敗る毒素である。思

想戦は実に兩刃の剣であつて、他を損すれば自らを傷つけるのである。

ローゼンベルグの言ふやうに、自らの信仰を失つた西欧諸民族の不信が、あらゆる生活条件の悪化を累積し、生活の調和均衡を破り、現実生活の外に理想を求め安業を追及し、一挙改革の後の失敗の惨苦を繰返して、かちえたものは、生に対する絶望と空想とであつた。近代文学美術はその著しき例である。この空想が、中世にはなほ一つの抽象的迷信にとどまつてゐたが、空想は、本来、現実生活の不满と改革意志の歪曲変形されたものであるから、つねに現実生活を反省するのである。近代科学は、この空想と結合し、現実生活の破壊を救ひがたいものとした。唯物論は、空想と自然科学との合の子である。更にそれに社会的倫理観とが結合し、現実的であるだけ一層ファナティックになつたものとしての共産主義が、西欧文化の没落期に猖獗を極めるのは当然である。しかし、この場合、現実的といふのは要求についてであり、思想内容そのものゝ全体についてはない。そこで、陰謀は、空想（ファナティズム）と現実的要求との結合実行方策として選ばれ、その地上国家が、ソ連である。

もし、西欧文化全体に対する嚴重な批判が行はれぬならば、前大戦後のやうに、戦争で疲弊した国には、西欧文化の排泄毒素としての共産主義が、益々広汎に蔓延して行くこと、火を見るよりも瞭然である。たとひ枢軸側の勝利が来ようとも、もし英米とその植民地との全部が赤化して

しまふことゝなれば、枢軸の勝利も、無意味に近いものとなり、第三次世界大戦は、免るべくもないのである。日本は今のうちに、共産主義を日本の関係する内外凡ゆる範圍に於いて処置せねばならぬ。それが、一切に先行すべき準備であり、将来に備へらるべき唯一の道筋としてきりひられねばならぬ。

思想戦が、宣伝戦と同義語として考へられ、戦争の手段に思想が用ひられるといふことになれば、ソ連の思想工作は、世界に徹底したことになる。ソ連は、自らそれを以て主義としてをるのであつて、その為に自らの生を犠牲にしてゐるのである。人生が戦である、といふ意味に於いて言はるゝる思想戦といふ言葉も、いつのまにか、闘争のための手段の意味に化してゆくとき、人間性の没却は決定的となる。今日の世界は、かゝる思想戦の時代である。それが、所謂国防国家の時代なのである。日本が対コミンテルン思想戦を行ふのは、思想を手段としようとする思想に、戦を宣するのであつて、人間性の没却、人生に対する不信に戦を挑むのである。しかし、その不信は、西欧諸民族の数千年の歴史の結果であるから、軽々しく考へることは出来ぬのである。

日本国内に於いて数千年来、日本国民は分析しがたきおもひの中に、その生の原理を見失ふことがなかつた。そこでは遂に、思想を生存闘争の手段とする必要のごとき、予想だにされなかつ

た。思想は、ありのまゝに表現せられ、それが限りなくひろがる事実を知つてをつた。技術、手段にたよるよりも、直ちに生の実際に直接した。それはまことに、人間性そのものの生活であつた。人間性の喪失からおこつた近世の大争乱と比較して、日本の国境は、人間性の国土標識であり、その標識は、全人類の魂を呼ぶのである。皇化は、人間性の実現と復活を意味してをる。日本国民は如何なる動乱に際会しても、この事実を見失つてはならぬのである。

大東亜戦争は、数千年の不信に対する数千年の純信の勝利でなければならぬ。人間性の、人類そのもの、勝利たらしめねばならぬ。しかし、現代日本国民の信を見るとき、筆者は深憂を禁じ得ない。それは、人間性の危機の相貌を呈してゐる。我等日本国民がこの信を守りえぬならば、人類永劫の流転は免るべからざるものである。唯一の原理、日本国体に帰依するの信に此かでもそむくならば、かく世界史を信知する我等の責は、まことに重い。それ故にわれらの同信生活は、おそひくる無量の障害を超え、内心の凡ゆる弛緩を戒めつゝ、苦しくとも朗らかに戦ひつゞけられねばならぬ。そこには、成否をこえた神威摂受の世界がひらかれよう。予定を立て、成果を計量し、執拗の戦をつゞくる我等も、遂に、かく一ときにひらけ永久に実在する国家生命帰入の世界身を托すのである。これこそは、現実に、人間性の復活である。実践は、その道に於いてくりひろげらるゝのである。

昭和17年(32歳)

現実感覚の鈍磨

〔新〕指導者
昭和十七年十二月号

過ぎ去らざるもの、即ち現在するものこそは、永遠なるものである。それは、いまのうつゝに生ける人の実感の中に生成するのである。「日本永久生命」は、現実の世にはかなく生くる国民の、別して、いまのこの大御代に、この時代に生くる人、即ち我等の感覚の中に、實在するのである。それは、その外の何れの処にも、決して實在せぬのである。

イエス・キリストが、ゲツセマネの丘に於いて、「わが父よ、もし得べくば此の酒杯を我より過ぎ去らせ給へ。されど我が意の儘にはあらず、御意のまゝに為し給へ」と、その布教の最後に於いて言はざるを得なかつた歴史の悲劇を思ふべきである。「最後まで堪へ忍ぶものは、救はるべし」と、その民に向つて教へたところの偉人も、遂に、現実世界の苦患には堪へざりしことが伝へられたのであるが、その現実世界の苦患は、人類の永久生命がその民に附したる課題であつた。その苦患は、永久生命そのものである。然るに、その苦患を一人の偉人に見課せしめて、その最後の告白を愧づることなく伝唱せしめた民族の魂こそは、呪はるべきである。

かくすればかくなるものと知りながらやむにやまれぬ大和魂

と吉田松陰先生は歌つたのであるが、その現実肯定の精神は、最後まで持続せられて変るところがなかつたのである。日本国民の永遠の信念は、そこに表現せられて、永久の世に伝へらるゝのである。キリストがその一身に負荷した苦患は、或は松陰先生のそれよりも大きかつたかも知れない。しかし、松陰先生の信は、その死が告げられるキリストと同一の場面に於いて一貫せしめられて些かも変化することが無かつた。松陰先生の歌は、無数の志士の思ひの表現であつたからして、即ち、民族の苦しみは、無数の純粹なる魂によつて分たれたる故に、その信は「祝福された」のである。また松陰先生は

身はたとひ武蔵の野辺に朽ぬとも留置とどめがかまし大和魂

と歌つたが、その「留魂」とは、「吾の祈念を籠こめる所は、同志の士甲斐々々しく吾志を継紹して尊攘の大功を建てよかしなり。吾死すとも、堀・鮎二子の如きは、海外に在りとも獄中に在りとも、吾か同志たらん者願ねがくは志を結むすべかし」の念願である。松陰先生は、自分が日本の危機を実感した如くに感ぜよ、と言ひ、そを感じる人こそは同志である、と言ひ、その感覚を永久に伝へよ、と教へたのであつた。

副島蒼海先生の詩に「神道並序」(蒼海全集第二卷所載)

論黃老者、以玄為婦、語仏者以無為宗、說耶穌者、以性惡為要、是皆外道、不足掛齒牙也、惟孔子專言人事、固有性与天道存焉、天者神也、神者道也、性者道之賦与也、子貢之徒不能悟之、故作此詩也、

神是道、道是神、道也者不可須臾離、神也者不可須臾分、孔子之言不失道、孔子之道不去神、茫茫宇宙何所有、但見神氣紛氤氳、古往今來道不違、奚別古人与今人、道以造人我有身、神以領身我有魂、學問思弁無遺力、雖不能聖亦清真、松自翠、梅自芬、柳自娜、春則春。

「神是道、道是神」といふのは、礼拝信順の対象たるべき神は、人生の現実的体験の中に於いてのみ存する、と言ふのである。神といひ、精神といひ、かゝるものを抽象概念化してはならぬといふのである。道とは、経験の順路である。

「中庸」では

天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教。道也者、不可須臾離也。可離非道也。是故君子戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞。莫見乎隱、莫顯乎微。故君子慎其獨也。喜怒哀樂之未發、謂之中。一發而皆中節、謂之和。中也者、天下之

大本也。和也者、天下之達道也。致中和、天地位焉、万物育焉。

といふ、「不可須臾離也。可離非道」と続く語法は、論理的解明に墮する。「是故君子戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞」といふに至つては、現実人生の切実の体験からして、礼拝の対象に指觸せらるゝ精神生活の自然の展開を遮断して、個人道德の反省に陥つてしまつてゐる。「莫見乎隱、莫顯乎微」といふ言葉には、微妙の人生を表現せむとする宗教的・芸術的感情が残存し、「中也者、天下之大本也。和也者、天下之達道也」といふ言葉には、政治哲學的実行意志が感得せられて、秀逸の句章ではあるが、「故君子慎其独也」は、そこに、祈念精進の孤独感の嚴肅に迫るものがあるといつても、その表現は、あまりに道德的雰囲気露骨であるために、宗教・芸術的感情、政治的意志に、功利的感覺を伴はしめて低俗化してしまふのである。

しかしながら、蒼海先生の詩は、「道也者不可須臾離」より、「神也者不可須臾分」と続くのである。中庸の「可離非道」と論理的に反証しようとするときに、道は、既に概念として定立せられて、新鮮なる実感を失つてしまふのに反して、「道也者不可須臾離」の切実の痛感からして、直ちに、「神也者不可須臾分」と礼拝の対象に向はむとして、更に、ともすればそれを分析抽象して思惟せむとする人間の弱点を、敲戒するのである。蒼海先生の詩は、日本精神

の威厳を示すものである。「分」は、分析論理学問思弁である。「茫茫宇宙何所有、但見神氣紛亂」^{カミ}、氣は「氣の盛なる貌」、又「氣」の字に「天地の氣の合ひて盛なる貌」と「字源」は註して居る。それ故に、この神氣を直覺しつゝ生くる者のみが、真実の信に生くるのである。天壤無窮の神勅は、日本民族の生ける心に感得せられ信知せられたる精神的事実である。

それ故に、亡国と敗戦とは、信の欠落、即ち現実的感覚の麻痺より結果せしめらるゝのである。分析抽象論理の横行は、大東亜戦下の重大凶兆である。現実感覚の失はれたるところには、「日本永久生命」の威力は実在せぬからである。

大東亜戦争の将来は、今や凡ゆる困難を予想せしむるに至つた。現下の世界戦争の相貌は、之を整理しつゝそこに予測を逞くするには、余りに複雑である。全ての人為的施策が、この非常時局の前に既に無力に等しいことを、国民は次第に確信するに至つた。それは、本質的には、寧ろ喜ぶべきことである。宣戦の大詔に「蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ」と教へさせ給ひ、又、「皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ」と嚴訓せさせ給ふ。大陸より、また海洋より、やがて迫りくる無量の危機は、全日本国民を、学問思弁の余裕ある生活の弛緩より覚醒せしめて、神氣紛亂の直観の中に、最後の蹶起を促すのである。

「百年戦争論」が、遂に国民の精神を振起するに至らなかつた理由は、この戦争が、如何に長

期のものであると言はれても、その後には、人類の理想社会が実現するといふ、劣弱なる根本理念をその背後に持つていたが為に外ならない。その百年が、実感としては、十年にも五年にも感ぜられるのは、この描かれたる理想の弱さが、持続的意志を鈍磨せしめるからである。今やかゝる風潮は日本の上下に浸透しつゝある。然し乍ら、神意は、現実に日本の上に加被せられて居ると確信する。詔勅に空言あらせらるべくもない。米国生産力の増大の前に、声を大にして危機を叫ぶよりも、退いて日本国民の感覚の鈍磨に戒慎するところあるべきである。危機は勿論問題ではない。神意の降鑑こそは、問題であるが故に。

既に過ぎ去りたるもの、未だ来らざるもの、それは考へられ描かれたるものであるからして、實在せぬものである。かくの如きものを去つて、現実の危機を、大詔のまに／＼直視せよ。又、如何に危機を呼号すると、又日本精神を説述すると、大詔を奉戴することを忘れ、尊皇攘夷を口にするも、天皇親政を忘れたるものゝ言を、悉く葬り去るべきである。かくして我等は、日本精神の顕揚さるべき時はいまこゝに在ることを確信してをる。

詩歌

白浜

〔新指導者〕
昭和十七年五月号

紀の国の湯崎の磯に陸をこひよる波ともしひきてまたよる

白浜の名に負ふ白砂うらゝかに松のかけおちてゆく人もなし

この世のおもひわれに絶えねばひとたびはたのしむことのあらばとねがひき

とこしへのおもひとや言はむ安らぎししばしのおもひはかなけれども

山のごときつとめ行手にわれをまつおもへばふるひ起たざらめやも

紀の国の湯崎の磯にうつ波のくだけちるともやまず寄りなむ

詩歌

九月十九日

〔新指導者〕
昭和十七年十月号

朝よりひまなく降りし秋の雨に家も木も土もしとどに濡れぬ

夕やみのせまるいよ／＼つりの来る雨ものすごし風もそひきて

たえ間まちて家路につかむとあかりともし友と語ればさびしくもあるか

なき人のみたままつりの近づきて友らとをれど思ひはみだる

十とせまり三年の昔ふるさとをのぞむがごとくふりかへりみる

在りし日に変らぬおもひ持ちてあれど友らと共に年は壮りぬ

うつし世のからきをともに凌ぎゆく行手はさらにも偲ぶなり
風つりのりふりしきる雨のひまもなき音にいよ／＼思ひはまさる
滝つ瀬と降る雨ぬちに傘さしていづれば頬にしぶき来るかな
夕ぐれの大木のもとの闇ぬちに光る雨つぶをかしつゝ出でぬ
街にともる電灯かそけく二三台の自動車まな先を疾走しゆきぬ
水たまりに雨水あふれ家々の門のあたりは急流なせり

平河町の停留場に立てば雨に暮るゝあたりの景色の美しきかな
ふりしきる雨を照して近づき来る電車うれしもはや乗らむとす
家に帰りて机に向へば雨にまじり虫の音窓の外にしきりなり

幾匹の虫の音ならむ眼とちてきけばなつかしきほふその声

心ありて鳴くとも知らぬ虫の音の皆ことなれりしづかにきけば
いそぎても鳴く音のあればをり／＼に鳴きてはやむる声もありけり
鳴きやみし音もまたしきり鳴きいでゝあはれなるかなとよもす虫の音
いつしかに雨はふりやみ雨だれの音虫の音と共にきこゆる

廂うつ音水たまりうつ音一つ／＼が皆ことなりものいふごとし

雨だれのいつか間遠になりゆきて雨はやうやくあがるとすらむ
しづかなる夜半とはなりぬ虫をきゝつゝ歌よみてあれば時のうつりて

詩歌

北白川宮永久王殿下御二年祭献進歌

おはしますその日のごとおもへども世にいまさぬが悲しかりけり
天がけるいかしき神となりまして見たてまつれぬことぞ悲しき
うつゝなき夢のなかにはいくそたびあひまつりてぞ慕ひまつりし
偲びまつればみこゑはいまもかゝるごととおもへどもあゝ如何にかなしき
天皇の大みうまごと思生かれまして外とつ国の野辺に戦死ましましき
うつしよはかなしともへどかくのごと悲しきことのありと思へや
いかならむ神のみ旨むねか日の本をまもらす大さ神のみ旨か
み民われ生くるともなし大神のいかしきみ旨あふぎまつれば
年月のめぐりはかなししかれどもみあと一すぢにしたひまつらむ

〔新〕指導者
昭和十七年十一月号

詩 歌

無 題

故郷の風もふけよとをりくくに君がとるらむこの扇かも
み国おもひ友らをしのぶ君の胸に涼しき風の通へとぞおもふ

御製拝誦

朝なく御製拝誦しまつるときのがしきおもひはなにたとへむ
大み歌ををろがみよみつゝ大みしらべにしたがひまつればうつゝともなし
ひとりおもへばくるしきときも大みこゝろしのびまつれば胸ははれつゝ

〔新指導者〕
昭和十八年二月号

昭和二十年 — 三十五歳 —

「病床雜詠」抄

（自 昭和二十年八月八日
至 同 九月二十一日）

「病床雑詠」は、田所さんが岩手県盛町に疎開した時の遺稿で、昭和二十年八月八日から九月二十二日に至る日記体の歌集である。粗末な薬半紙のノート二冊で、第一冊目の表紙には「病床雑詠」とあり、第二冊目は「雑詠集」と書かれてゐる。連作短歌が主たる内容であるが、時事に対する感想文も記されてゐる。病床で書かれたもので、走り書きであるが、歌には推敲のあとが見えるし、散文の箇所にも、誤字や脱字などほとんどない。

田所さんが死をかけて警告しつづけたのは、この敗戦の日の到来であつた。その日を病床に迎えなければならなかつた田所さんの痛酷な思いが、歌に文章に表現されたのである。紙数の都合もあつて全部を載せることのできないのが残念である。この抄録は、右のノート全体の三分の一くらいにならう。この後の記録も書きつづけられたに違いないが、私どもの手もとには人らなかつた。

抄出の歌及び文章は原文のまゝとしたが、若い読者を考えてふり仮名をつけた。(夜久)

〔昭和二十年八月八日〕

みちのくの旅路に病みて臥りつゝ碎くるおもひ人の知らなく

我を柱とたのます母や妻子らの面見るごとに心に泣かゆ

玉敷の都のわぎへいで立ちて何さ迷ひしこの一年か

年の三年年の五とせ病みし身を養へといふ人もありけり
たまさかに血くれ出でしを立ちさわ言ふしが心何こゝろぞも
家びとの心やすめむいへをさのつとめはつねに我おもふものを

みいくさの時にあらずばあ子を生ふるたづきもあまたあるべきものを
父も母も病をもちて汝ひとりあに健かに生ひ立つべきか

病める身をひとりにはげまし我をみとりあ子を哺むわぎもなりけり
あ兄とあ子と先づ健かにあらせむと常にこたふるわぎもなりけり

汗あえし身をころぶして力なくかもひかくもひたづきを知らず
胸病みを容るゝ家なしとひやゝかに言ひしときけど笑ひ過ぐしぬ
夕日影かくろひはてし西山の木々たちこめてひぐらしの啼く
乳房吸ふあ子がふる手のうらもなきその手を見れば心ぞいたき

〔八月九日〕

あかときの空襲警報に病める身をおこしつゝあ子を如何にせむかと思ふ

(連作成らず、病に気力衰へし為か)

かくの如めづらしき子がひよわしと聞けどまことのことゝ思へず

疲れはてし身と今更におもふなり二十日まり床に打臥りつゝ

さわやかに目覚るごとき熟睡のみ朝も夕も願ひくらしぬ

日の半ばは日毎いねつゝ来る日も来る日も疲れのいえむとはせず

六つきまり人屋のうちにいたづきし時のつかれの未だ去らぬなり

汚なき心いだけのゝ手にかゝり我身はかくもやれはてにしか

海の彼方には英雄あれど大み国おこさむとする益良雄はなし

大みこゝろいたゞきまつり民草のねがひを負ひて起つ人はなし

大みこゝろにそむきまつりて私のたはれをつのる奴のみなり

アメリカの奴ら岸に船なめてみ国撃つとも追ふ術もなし

遠くひゞくアメリカ船の砲音の一日つゞきぬ曇れる空に

うるはしき言葉を列ねことゝくに事敗れにしみいくさなりし

かしかかる大みいくさをたはれらが私せりし正しき報いぞ
み祖神のはげしきいかり神すゑの民らはいましかしこみまつれ
国は敗れ民亡ぶともきたなかる私ごゝろ捨てずといふか
み軍のやぶるゝまにま天雲の高き位にのぼりしやつこら
四方の海みなはらからと歌はしゝみかどのみいつかくろひはてぬ

ソ聯対日宣戦布告をきゝて

国まもる道を知らねば国といふ国はみ国の仇となりけり
海の外にたのまむ友はあらずして国まもらむや国おこさむや
八統一宇とうるはしき言葉もてあそびしやからの仕業ぞこのありさまは

〔八月十日〕

国を憂ふる人をしりぞけたはれらが専らおごりし十年なりしか
み軍のかしこきよそひまとへども君にまつらふ心はもたず
み国の滅びまなさきにあれど今もなほたはれら朝廷に群れてたむろす

しがたむらそ根芽つなぎて私はば国とこしへに滅びなむとす
妻をつれ乳飲子をつれ来れどもわれは倒れつ妻も倒れむとす
年月のつかれかさなり一とくに病にたふれしことのくやしき
あ子はひよわく妻の病はいとまなき起き居に日毎重るがごとし
胸病みと言立てたりしその日より人のこゝろはわれを離りぬ
病ゆゑ人のこゝろのそむきにし町は次第に居づらくなりぬ
頼むべき人はなくなり疎開者はさ迷ふ民となり果てむとす

〔八月十一日〕

朝よりとのぐもりつゝひやゝけきけふ夕まけてわれは入院す
みちのくの旅にやまひてたゞひとり病人の家に今宵よりねむ
あ子が泣くこゑもきこえずさびしかる宵々ならむ今日よりの後
家人よ睦びくらせよあはそこに在らずともつねにおもひくらせば
健かにわがなる為とおもひなば母よわぎもよ睦びくらさむ

わがおもひいさゝかにても軽くしてはやく健かにならしめたまへ

〔八月十四日〕

葬送の秘曲をひとりきくごときうましき感覚我を誘ひぬ

痰あえていねられぬ夜を胸おさへうつぶしてあれば我をよぶものあり
天上よりか地中よりかうつし世をいたくさかりし声のうましさ

われひそかにこの声きゝてわが若きいのち消えむかと思ひてありけり

現世の個人的欲望はなけれども国につくしたき家おこしたき

我死なば母や妻子を如何にせむとそれのみおもふ我となりけり

(消灯後ニ記シ乱雑ヲ極ム)

畏こかるみいつを知らず外つ国に驕りし心人は持ちけり

おごるこゝろ持ちにし日より皇国のみだれはいでてだてなくなりぬ
大御業のかたきを知りて仕へたる人ありし世は遠からねども

大御稜威四方にあがらばいよくにかしこみまつるぞまことなるべき

己おのれらかまつりごとすと思ひしゆみいつはいつかかくろ隠ひはてぬ

〔八月十五日〕

九重の松のみどりにたゞさしてうごくともなき朝日影かな

思へば、乃木將軍・ステツセルノ会见ト、山下・パーシヴァル会见トノ相違ノ大ナルカナ。前者ニハ、大ミコトノリカシコミテ征キシ人ノ余裕アリ、情アリ、涙アル、美シキ情景アリ。ソハ、ソレノミニテ一個ノ劇トイフベシ。ソノ会见ハ、一ツノ完結セル意義ヲ有ス。後者ハ、ワレ顔ニ威圧ヲ示セルノミニシテ、何ラノ劇的情景モナク、人生的意義モナシ。コ、ニ、日露戦争ト大東亞戦争トノ相違アリ。シンガポール会见ト久里浜会见トハ、一ハオソレ一ハオゴリ、ソコニ異ルトコロアレドモ、ソノ索漠トシテ価値ナキニ於イテハ、一ナリ。即チツナツナガラ民政意志ノ表現ナレバナリ。

つゝしみておもへる人のこゝろにはひろくゆたけきうつし世のあり

妻が里にかへらばまたも母そばはあを責めまさむあが妻ゆゑに

みこゝろの昂ぶるまゝにのりたまふきくが悲しさかしこき母ゆゑ

彼が悪しきか己れ悪しきかうつし世にたゞひとつのみありと思せり

霞かゝる浦みくをめぐり経て来り住みにしこの盛なり

都より来ぬとしいへばうとましく人は迎へぬなにか知らねど

生くることの難きをいよゝ病してわれら知りなき見知らぬ里に

勅語御放送(正午ニアリ)

たふとかる天のみ声をみいくさのこの時にして仰ぐ悲しさ

政府ハ遂ニ一切ノ責任ヲ 至尊ニ帰シ奉ルノ措置ヲトリヌ。国民ハ勅語ヲ拝承シテ泣カヌ
モノナキナリ。シカルニ政府ハ国民ヲシテ納得セシムルニ足ル何事モ、ソノ前ニ行ヒタル
コトナシ。予ラハ、チャール等日本ニ在リテトラム行動ノ方、ハルカニ今ノ政府重臣等
ヨリ忠節ヲ存スルナラント思フ。ジョージ六世ハ幸福ニシテ 今上陛下ハマコトニ不幸ニ
マシマス。

今日勅語拝誦ノ後、急ニ元氣出テ、午後三時 七度三分、五時 六度九分トナリ、オモヘ

バ、滿洲事變ノ直後ニ発シタル病、大東亞戦争ノ終結ト共ニ終熄セヨ。

〔八月十六日〕

みいくさのかくなり果てむことわりを早く認めし我等なれども
かゝることなかれと祈るこゝろより憂ひついかりつ論あやつちひ来し
予期せざることおこりぬのおもひのみ今更ふかし何か知らねど
大御心いかゞあらむと朝夕にかしこみまつる愚かなる身は

仇国あなくにのしこのやつこら玉敷の都を汚けがす日は遂に來ぬ

この日来むことを警め言ひし我を人らは多く国賊とよびし
忍びえぬこと次々に眼先まなまきにあらはれ來らむ今日より後は

あまりにもあきらかなりしけふの日のこの有様を見るがくやしき

国体を内にやぶれば外国は外よりみ国をやぶりはてにし

うけばりてみ国みだりし奴等やつこらはしこめき仇に裁さばかれむとす

君に抗ひ民に驕りししこやつこいや醜しき仇のとりことならむ

しやこしや二年まへのその面のいまはいかなる形とならむ

〔八月十八日〕（午前五時半 六度、午後三時 六度七分）

敗戦降伏ノコト、痛恨限りナシ、シカレドモ予ハ、之ヲオモフノ情ヲ制限セザルヲ得ズ。

予ハ、ナホ病床ノ人ナリ。痛憤ハ予ノ身体ヲ害ハザルコトナシ。痛恨ハ病竈ニ撃痕ヲアタヘザルアタハズ。国家ノ大事ヲナゲク能ハズ、国家ノ将来ヲオモフアタハズ、ア、コレ何事ゾ。

現人神あらひとがみわが大君はしこやつこ仇のまがごと聴きたまひけり

神ながらたふときみ身をやつこらのまへにかどませ給ふぞ悲しき

（之等ノ歌ハ何トナク誤リナルヲ感ズ、ナホ後ニ検討セム。）

十六日、東久邇宮稔彦王殿下ニ組閣ノ大命降ル。

国おこり国亡びにしことわりを究めむとする人はあらじか

あまりにもしるけきあやまり誤あやまり今の世に多きぞ悲しき昨日も今日も

〔八月十九日〕（午前五時 五度八分、脈六〇、正午 六度三分、脈七〇、午後三時 六度二分）

咳嗽せきいでていねられぬ夜をあかしつゝ母をおもいつ妻をおもひつ

もろもろの怒りの言葉われに告げて母もわぎも熟睡うまするらし

かゝることにひとり心をくだくかとおもへば男の子われ生けりともなし

母そぼと君は死ぬまで二人のみ生くるぞよきと妻はいふなり

われをおもはゞかたみになごみたまへやと言ひてあまたの日は過ぎぬものを

憂うれれたさの限りも知らず家やぬちだにをさめかねたる我とし思へば

親につかへ家ぬちおだしく和なめてぞ君につかふる道は立つものを

妻ゆゑに母は責めます母ゆゑに妻はあらがふ何の態さまぞも

われはそをとりとゝのふる術すべ知らずたゞに迷へりうち歎なげきつゝ

いとけなきあ子の手足をつくぐと手にとりもちて見るかこの頃

わがいのちこゝに生れるか何といふうるはしきものよかなしきものよ

柔なく白しろきその膚かみたに手ぎればその手は手またくわが手たな中かなり

幾月かまたわかれすむこともへば父のさびしさ言はむかたなし
かたはらにあればよろこび手をふりて笑ふ子の顔いつ忘れむや
をしくも育ちてをあれやがて汝を見むときいつと我知らなくに
父は病み母も病をもちてあればわかれ住まむとた計りはせり
名をよべば笑みてこたふるなはやがて片言もいはむ這ひ／＼もせむ
発育のあしき汝いつまる／＼と肥りて来むかわが知らぬ間に
たへがたきさびしさ父をおそひ来むなれ父おきてわかれて往かば
汝が生くるあたりを日ごと夢のごと心にゑがきわれくらさむに
ふたゝびの男の子の道をひとりゆく雄々しきわれにかへりゆくべし
いつの日にあ子をわが見むふりそけて一人の道をまたふみゆかむ
ひとりをればおもひはてなし益良雄のこゝろもいつかふるふばかりに
現し世の幸われ知らず動乱の中ぞさびしわが住処なる
荒れよ／＼乱れに乱れよわれくだけ噴き上げ逆巻けわが人生よ

東久邇宮殿下ニ大命降下ノコト、内府御下問ニヨラズ、一ニ 聖断ニ出デサセタマフトイ

フ。コレ、從來ノ形式ニヨラズノ謂ニシテ、モトヨリ内府、内ニ在リテ御下問ニ奉答ノコトアリシナラム。サレバ内府ノ責、遂ニマヌカレズトイヘドモ、御決定ニ至ルマデ 聖斷最モ重キニ出ズト承ルハ、一ニ大御身ヲ以テコノ時局ニ当ラセタマハムノ 聖慮ナルコト、アキラケシ。真ニ恐懼ノ至ニタヘズ。

〔八月二十一日〕

きそ昨日のごと日は照せども晴れわたるみ空の色も暗むばかりに
大みこゝろしぬびまつれば夏空の晴れたる見るも悲しかりけり
くはしほこ千足ちたなのみいつかくろひて常夜とこよゆくなり大和やまとの民は

何方いづかたにゆくと知らなく行先をいそぐ夢見る昨日も今日も

電車にのり汽車に乗りかへ知る知らぬひとらと語り行手を急ぐ
きのふみし夢今日みし夢とあひつぎて忘るとしもなきその情景よ
外にいづることなく過ぐすひとつきのくるしさ夢をゑがくとすらむ
部屋ぬちに起きふすひとつきうつそ身のおきどころなし心ふたぎて

八月二十二日

夜來、まぐろノ中毒ニテ、嘔吐七回、下痢四回、ソノ苦痛イフベカラズ(下略)

東京ニ於テハ、飛行機屋根ノ上ヲカスメテ飛ビ、「我軍ニハナホ飛行機アリ、戦ヲ中止スベキニアラズ、鈴木首相以下ヲ殺シ戦争ヲ継続セム」トノビラヲ撒キ、物情騒然、各駅ヨリ無蓋貨車ヲ出シ、旅客貨物ノ區別ナク送り出シ居ル由、東久邇首相宮ノ御放送ハ、全クコレラニ対スルモノナルベシ。

〔八月二十四日〕

われはひとりふみもよみてむ千万ちよろの歌もうたはむひとよせこむ一年は

ひとりつむ言の葉ぐさの誰か見む時ときも知らなく朽ちはてなむに

いねられぬ夜をふかしつゝわが家のいまゆくすゑをおもひめぐらす

しめやかに蛙なくこゑ山やま辺へよりきこえくるなり夜はくだちつゝ

家つくり未だ成らねばこゝらくのおもひは胸にうづまくならむ

家のことおもひてつひにあかしつるひと夜なりけりすべなきまゝに

〔八月二十七日〕

祭礼ノ提灯、町ニミユ

山神のまつりのともしにぎやかに町ゆく人のゆきかひしばし
たゝかひのをはりしるしか心なごみ人はゆくなり祭の夕に

あ子はけふ重湯、粉乳、林檎汁、みそしる、トマト汁こゝだくのみし

新しき味知るごとに新たなる智恵つくごとしみつゝをあれば

梅干の汁ものませよ塩辛もたまには与へよ将来のため

〔八月三十一日〕

コノ敗戦コソハ、三千年ノ歴史ニ未曾有ノコトナリ。ソハ決シテ決シテ三四、施策ノ誤ヨ
リ出デシモノニアラズ。モトヨリ根本的誤謬ヨリ出デシモノ、ソハ即チ、国体破壊タルコ
ト言ハズシテ明ケシ。シカルニ、ソノ一言ダニ敢然主張警告スルモノナシ。カクノ如クン

バ、何ヲ以テ祖宗神靈ノ神怒ヲトクコトヲ得ム。国体ハ破壊セラレタルマ、ナリ。如何ニシテ戦後ノ復興ヲ言フコトヲ得ム。日本ハツヒニ三等国ニ墮シヲハラムノミ。

大みことのりかしこみまつらば外つ国をあなづることもなかりしものを
みことのりかしこみまつらず戦は敗れしことをあきらかにせよ

日清戦争のまへにかへるといふはおろか維新のまへにかへりはてにき

いかにして明治維新がおこりしかそのことわりを思はざるべからず

もろもろの罪はことごと大君にまつろはざるに起るなりけり

仇人をうやまふそこに戦の勝のもとゐは常にありしか

いかならむ凶しまごとか皇国の人のこゝろはいつかおごりぬ

戦はをはりしものとおほろかに思ひ迷ふな大八洲びと

風はおこり雲立ち騒ぎ皇国の四方のあたりはやすけくもあらず

ふりくらすあめりか人もつはものを未だ解かずと人はいふものを

〔九月一日〕

今ははや誰をとがめむ憂れたさの限りも知らぬ時は来にけり
かくなるとかねて知りせば魂の緒のつきはつるまでおもひしものを
まつろはむ心うしなひたかぶりし人らをつひに正し得ざりき
もろともに罪をこそおへ今更に責めてすむべきことわりのなき
人を責め汝はかくあれと言挙げせしこと大いなる誤なりし

〔九月五日〕

世の中のうきふしを経て清らけきこゝろは人にそなはるものか
己がこゝろのまがれるさまを知らずして何知るべしや人のまことを
己がことをはかりて人をうつし世をおもはぬ己がこゝろなりけり
三十あまり六年生き来てかくのごと悲しきことを知るとふものか
己がこゝろまがれるを知りしことのほか我知りしこと一つだになき

敗戦ノコトヲ思ヘバ、食モ喉ニ通ラズ、安眠モ能ハズ、呆ケタル人ノゴトクナルベキニ、
何ノ痴者ゾ、予ハ、些カモ狂ハムトモセズ。

み国のことおもへばおもへばいかにして我狂はざるかあはれこのこゝろ

〔九月八日〕

九重ここのへのみ垣のもとにかしこまり刃やいばにふしゝますらをあはれ

仇の言いまは受けむとみことのりのらすをいかなげきしならむ

荒夫あらむらはいくなげきしてもろともにかへりみもせずいのち絶ちけむ

(日比和一氏の自刃をきゝて右三首)

おとろへし人の心をまなさきに早くも見たりされどなげかず

をれをれのやすきをねがふこゝろのみ世をおほひけりくらきこの世や

み国おこすことのかたきを事にふれいよゝあきらかにわれは知るなり

長き汽笛夜空にひゞき旅枕おもひは遠し都かたの方に

をやみけむ雨の夜道をかたらひてゆく人ごゑにこの世をおもふ

いきどほり身にみたくとやあまりにも静かなる世をけふもなげきつ

〔九月九日〕

まがなしき母のみことに言責ことせめしわが罪ふかしあゝいかにせむ

汝が言は心にふかくをさめつとのたまふきゝてわが胸いたむ
おろかなるわが責め言をみこゝろにうけたまひしかわれは悲しき
天地の神よゆるさせ家のことおもふばかりのわがおろかさを
みこゝろをやすめまつらむそがために仕へまつらむいのちの限り
わが罪の消ゆるなくともひたすらに母なぐさむる道をつとめむ

〔九月十二日〕（午前五時 六度五分、正午 七度四分、午後三時 七度六分）

今日はいかなるみこゝろならむ暁のねざめもくるし家おもひつゝ
至らざる妻をおもへど何故にかくもきびしく責めたまふらむ
ひたすらになごみたまへとけふの日をねざめの床に子は祈るなり
みこゝろの平らぎまさばわが家はさきはへゆくとおぼせ日ごとに
みこゝろのまた荒れますは今日かはた明日かともへばをごころぞなき

〔九月十三日〕 雨（午前六時半 六度八分、正午 八度二分、午後三時 九度三分、午後六時 九度一分、午後九時 八度八分）

東条自決ヲハカル、ソノコトタル既ニ許スベカラズ、而モソノ行動、全ク天地モ容レザルモノ、彼ハ日本逆臣伝中ノ人物トナラム。

〔九月二十一日〕 快晴 (午前五時半 六度六分、午後三時 七度二分)

十六日ヨリコノ方、予ノ病勢、咳嗽去ラズ、又、微熱去ラズ、一種ノ膠着状態ヲ示スニ至ル。コレ全ク予ノ精神的疲弊ニヨルナリ。単ニ咳嗽ノ為ノミニアラズ、何トナク安眠ヲトリガタク、夢ノミ見統クル有様ニテ、安息得テノゾムトコロニアラズ。コ、ニ於テ予ノ健康ノ害セラル、ハ当然ナリ。タゞ予ハ、諦観セムトス。ソハ悪ヲ免レムトニハアラズ、進ンデ善ヲ成サムノ意ナリ。ソノ為ニ全人生ニタヘムトスルナリ。(後略)

最近、国家ノ状勢マコトニ見ルニ忍ビザルモノ多シ。国体ノ滅却セラレタルコト、言語ニ絶ス。(後略)

田所廣泰 年譜

田所廣泰 年譜 (一九一〇—一九四六)

(年 月 日)

満年齢

明治四三・九・二八

〇

大正 六・四・

七

大正十二・四・

一三

昭和 三・三・

一八

昭和 三・四・

一八

昭和 三・五・

一九

昭和 四・二・

一九

三・五

三・二七

四・一三

五・五

八・

(関 係 事 項)

古川弘・梅子のあいだに生まれる。出生と同時に、海軍中将、田所廣海・ます、の子として届出る(古川梅子は田所ます、の実妹)

学習院初等科に入学 北白川宮永久王殿下の御同級生となる

東京府立第一中学校に入学

この年、父、田所廣海歿す

東京府立一中卒業

第一高等学校文科甲類に入学

第一高等学校内の文化団体「瑞穂会」の主催にかかる黒上正一郎氏の講演を聴き、それが縁となって黒上氏(当時二十九才)に師事することとなる

右の「瑞穂会」から分れて、黒上正一郎氏を中心にした「一高昭信会」をおこすことを決意する

黒上正一郎氏及び会員と共に水戸の大洗に親睦旅行をし「一高昭信会」の

発会の機運を進める

黒上正一郎氏及び会員と共に大阪府河内磯長かわちしながの太子廟に詣でた

一高昭信会員、梅木紹男氏(東大生)肺結核にて逝去

「一高昭信会」発会式を挙行

黒上氏の郷里近くの徳島県「由岐海岸」にて、「一高昭信会」の初めての

合宿を行なう

昭和四・一二	一	
昭和五・三	五	二〇
昭和六・三	七	
昭和七・一	一	
昭和八・三	四	二二
昭和九・一八	七	
昭和一〇・一	九・一八	
昭和一一・一	一	
昭和一二・一	一	
昭和一三・二	二	二二
昭和一四・五	五	
昭和一五・一五	五	
昭和一六・三	三	二三
昭和一七・三	三	

黒上正一郎氏肺結核のため、徳島市の実家に帰省せらる

東京府「武州御嶽」にて「一高昭信会」合宿（高木尚一氏、初参加）

「一高昭信会」により、黒上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」を「謄写刷り本」として出版（菊版二八〇ページ）

神奈川県衣笠村にて「一高昭信会」合宿（桑原暁一・加納祐五両氏、初参加）

一高昭信会員と共に伊香保に旅行

静岡県戸田海岸にて「一高昭信会」合宿、この月に一高文科甲類を卒業

東京帝国大学法学部法律学科に入学

静岡県三島の龍沢寺にて「一高昭信会」合宿

満洲事変勃発

慶応義塾大学における満洲事変に関する講演会の日、感冒におそわれ肺結核発病、自宅にて長期療養生活に入る

「一高昭信会」創立時からの同志、東大生 新井兼吉氏肺結核のため逝去

「一高昭信会」創立時からの同志、一高生 河野稔氏肺結核のため逝去

「一高昭信会」において、機関誌「伊都之男建」（いづのをたけび）創刊す
この頃より病勢快方に向い、「伊都男之建」第二号に新井・河野両兄に対する追悼のりとを掲載し、爾後執筆活動を始める

五・一五事件おこる

神奈川県二俣川「畠山靈堂」にて「一高昭信会」合宿、病癒えて参加

日本政府、満洲事変に対する国際連盟加盟諸国の無理解により、**国際連盟**に対し**脱退を通告す**

五・

昭和八・七・

一一・五

一一・二九

昭和九・三・

七・

一二・

昭和一〇・二・一五

二五

三・

七・

九・一三

二四

一高昭信会員数名と共に東北地方を旅行し、同信連絡の道が開かれた。郡山市安積中学、福島市福島中学（大節会）、福島高商（稽照会）の各校を訪問す（「稽照会」の創立者、丹治正平氏これに先立ち卒業）

猪苗代湖畔、川桁の「観音寺」にて「一高昭信会」合宿。夜久正雄・宮脇昌三・南波忍一・小田村寅二郎氏らいずれも一高の一年生として初めて昭信会合宿に参加、また福島、郡山の諸友（阿部隆一・葛西毅夫氏ら）も合同して参加山梨県の甲府の御自宅に三井甲之氏を訪ねる

一高昭信会員とともに、山梨県の昇仙峽に旅行

千葉県安房郡東条村「永明寺」にて「一高昭信会」合宿

群馬県箕輪町「法峯寺」にて「一高昭信会」合宿

一年來提唱してきた「向岡神社建設運動（第一高等学校内に神社を建立しようとする運動）」を積極的に推進

「一高昭信会」の提案にかかる「向岡神社建立案」は、一高寄宿寮の「総代会」といわれる全寮制下の全学生の議決機関に上提されたが、圧倒的反対に会って否決された

伊豆白浜村「白浜神社」で「一高昭信会」合宿

伊豆竹麻村「正善寺」で「一高昭信会」合宿

一高が五十年の歴史を持つ本郷の地から、現在の東大教養部のある駒場の土地に移転（東大農学部と一高とが校地交換を実現し、東大の全学部が本郷に結集することになった）

この日、一高では森巻吉校長以下全教職員と、全寮制のもとにおける全学

昭和一一・二・二六

五・

七・

二六

昭和一一・(年間)

一一・

二七

昭和一一・三・

七・

七・

一一・

六

生とが真夏の市中を、本郷から駒場に徒步行進し、全寮委員長小田村寅二郎氏(現、国文研理事長)の捧持する校旗(護国旗と名づけられる由緒深い校旗)を先頭に、途中皇居前で天皇陛下の聖寿を祈念し、肅々として駒場に向かい、新しい学風を古い伝統の上に加味して高揚すべく、駒場に到着するや直ちに全教官・全学生の前で、「一高昭信会」員でもある小田村寄宿寮委員長によって、長文の「開寮宣言」が宣示された。田所廣泰氏が一高の将来のために、後輩に当たるこの小田村委員長の一高寄宿寮施政に寄せた期待は、一方ならぬものがあつた

二・二六事件おこる

年来の肺患も、疲労のため体調思わしからず、思い切つて静養のため、神奈川県「辻堂海岸」に借家を求め、母上とともに転居に踏み切つた

この頃から健康やや回復に向い、その間、一高昭信会員のあいだの文通連絡に意を用う

健康かなり快方に向い、三日間の上京ができた

この年を通じ、なお辻堂において静養を続け、研究、創作、執筆活動に専念し、それらは「一高昭信会」月刊誌「伊都之男建(いづのをたけび)」に次々に掲載された

千葉県の「安房神社」にて「一高昭信会」合宿

北支那の「溝橋」において、日支事変、勃発す

神奈川県「寒川神社」にて「一高昭信会」合宿

日・独・伊三国間に防共協定成立す

昭和一三・一・

二八

南京陥落に際し、静養中の辻堂より上京、靖国神社に参拝す
この月から「伊都之男建」誌上にて「明治天皇御製」の共同研究を始める
鎌倉材木座の「補陀洛寺」にて「一高昭信会」合宿

国家総動員法が施行される

辻堂より大学に通学して追試験を受け、この月、東京帝国大学法学部を卒業（病氣のため在学期間七年二ヶ月に及ぶ）辻堂を引揚げ東京に転居

（海軍大将）末次信正内務大臣の秘書官である（海軍大佐）山下知彦氏の補佐に任せられ、内務大臣室詰めとなる

東大生高木尚一・小田村寅二郎氏らが「東大精神科学研究会」（東大の学内公認団体）を設立するに際して強力に支援し、これを全国各大学における学生運動の拠点にする

東京西多摩郡「雲慶院」にて「一高昭信会」合宿

学内団体としての「東大精神科学研究会」とは別個に、学外団体としての「東大文化科学研究会」を新たに設立し、その代表者となる

「東大文化科学研究会」において、雑誌「学生生活」を創刊して学生運動の機関誌とする

小田村寅二郎氏は、この年九月に総合雑誌「いのち」九月号に発表した論文「東大法学部における講義と学生思想生活」（約一二、三〇〇字）のため、田中耕太郎法学部長から「無期停学処分」を受ける。この処分を契機として全国的学生運動が展開しはじめることとなる

同志学生による「第一回全国学生連絡遊説旅行」が、五名の東大生によつ

昭和一三・六・

七・

九・

一〇・

一一・八

一二・

昭和一四・一・

昭和一四・一・

二・

六・

七・

七・二二

八・

九・一

九・

二九

て三班に分かれて全国大学・高専校に向けて出発した

内務大臣秘書官補佐を辞し、内務省文書課調査係に勤務する

学生運動の拠点として東京本郷区曙町に六室の小家屋（借家）「正大寮」

が開寮された

この年、「一高昭信会」の例会において、連続講義を行なうなど、同信相
続に力を注いだ

「東大文化科学研究会」の名において、大学改革宣言「平賀爾学事件の事
実分析と帝大改革の順路抽出」の一文を発表す

「第二回学生全国歴訪」が、同志学生七名によって二班（東日本、西日本）
に分かれて行なわれた

全国の大学、高専校の学生を集めての最初の「合同合宿」が、神奈川県原
当麻の「無量光寺」において「全国学生夏季合宿訓練」（八泊九日・二八
校・一三〇名）として行なわれ、「我等の進路」と題して講義した

この「合同合宿」の全参加者が上京し、「全国学生撰英大会」を、東京・
九段の軍人会館（現在の九段会館）において開催す

「地方別全国学生合同合宿」が、七班（東北、関東、近畿、中国、四国、
九州南部、九州北部）に分かれて行なわれた

欧州において第二次世界大戦始まる

内務省勤務を辞した

元公使の伊藤述史氏が秋山光材氏を中心に「日本学研究所」を設立される
に当たり、「一高昭信会」出身者七、八名とともにその所員となる

昭和一四・一〇・

一一・

(紀元二六〇〇年)

一二・

昭和一五・五・一三

五・

六・一五

昭和一五・六・

七・一六

三〇

政府主管の「国民精神総動員中央本部」勤務を兼ねる
賞金統制令、物価統制令が公布される

東京・小金井の「浴恩館」において「明治節都下諸校合同合宿」が行なわれ講演する

「第三回学生全国歴訪」が同志学生二十五名によって九班に分かれて行なわれた

「学校別全国学生合宿」が行われた

近衛文麿氏らを顧問として、「日本学生協会」を設立し、理事長に就任

「東大文化科学研究会」は、ここに発展的に解消した

「日本学生協会」成立記念として少壮社会人と在学生による「全国歴訪」が行なわれた

「日本学生協会記念大講演会」が、東京神田の共立講堂で行なわれ、「日本思想の正系を将来に指示する新日本学生運動」と題して講演。日本学生協会会歌「神洲不滅」行進曲「進めこのみち」が三井甲之氏の作詞と信時潔氏の作曲で作られ、日本学生協会に連なる全国の青年・学生によって力強く歌唱されることになった

近衛文麿氏が「新体制運動」の決意を表明

「全国学生菅平合同合宿」(九泊十日・八四校・三九一名)が、長野県「菅平高原山の家」で行なわれ、満洲の建国大学、台湾の台北高商の学生をはじめ約四〇〇名の全国高専大学生参集。「不滅の国家生命は興亡の史

七・二四

八・
九・

九・二七
一〇・一五

一〇・一二
一一・一

一一・二九

実と生死の運命の最中（なか）において客証せらる」と題して講義を行なった
「合同合宿」参加の約四〇〇名全員信州より上京、日比谷公会堂において
夕五時から満場の都民に対して、報告演説会を行なった。故尾崎士郎氏も
激励のため壇上に立った

「地方別思想訓練合宿」が行なわれた

「正大寮」本郷より三鷹の井の頭公園わきに拡大移転した。部屋数三十有

余室（借家）

日・独・伊三国同盟条約調印

「新体制の力源、教学刷新」講演会を、東京日比谷公会堂で行ない、「時
代の教育」と題して講演

大政翼賛会発足

七月に行なわれた四〇〇名の学生の九泊十日間の「菅平合宿」と日比谷公
会堂での「報告演説会」とをトキキフィルム三巻（36ミリ）におさめた
「文化の戦い」が、この日、内務省によって検閲に合格し、また同日文部
省によって「一般用映画」としての認定を受けた。この映画のアナウンサ
ーはNHKの竹脇昌作氏を煩わしたものであった

二年有余、無期停学で放置せられた小田村寅二郎氏は、あくまで東大法学
部学風の誤まれることを強調し続け、かつ、二年前の処分の際に田中耕太
郎法学部長が行なった思想の自由と学問の自由を自ら踏みにじった一方的
措置の誤りを指摘し続けたために、ついに東京帝国大学から退学処分をう
けることになった

一一・三〇

昭和一六・二

三一

四

伊藤述史氏が初代情報局総裁に推される気運となるとともに、その主宰する「日本学研究所」は解散となった

六

「精神科学研究所」を設立して、理事長に就任する

昭和一六・六・二三

「新指導者」の発行所を「日本学生協会」から「精神科学研究所」に変更

七

独・ソ戦争始まる

昭和一六・六・二三

「全日本学生青年比叡山合同合宿」(七泊八日・一二〇名)を、比叡山の

八

「延暦寺宿坊」にて、また「全日本学生青年御嶽合同合宿」(六泊七日・

一〇

二三〇名)を東京府下の「御嶽神社宿坊」にて行ない、「回顧と前進」と題して講義を行なった

一一

「日本世界観大学夏季講座」を、はじめて東京にて開催、これを主宰した

一二

「第一回日本世界観大学講座」を東京赤坂の「三會堂」において、全十二

一三

日にわたって八〇〇余名の参会のもとに開催、「日本世界観」と題して講

一四

義した

一五

大東亜戦争(太平洋戦争)勃発。わが陸・海・空軍は、ハワイ島に、マレ

一六

ー沖海戦に、赫々たる戦果を挙げ続けた

昭和一七・一

三二

一七

「第二回日本世界観大学講座」を東京及び大阪にて開催、東京での演題は

一八

「民族の審判」、大阪での演題は「世界平和建設論」であった

一九

「第三回日本世界観大学講座」を東京及び大阪にて開催、「日本世界政策

二〇

宣言」と題して講演す

二一

「全日本学生青年合同合宿」が滋賀県坂本の「西教寺」で行なわれた

昭和一七・一〇・

「第四回日本世界観大学講座」を大阪にて開催、「世界戦局の最終段階を決定するもの」と題して講演す

「第四回日本世界観大学講座」を名古屋及び東京にて開催、「世界戦局の帰結するところ」と題して講演す

一一・

「第四回日本世界観大学講座」を京都にて開催、「日本世界観の体系」と題して講演す

一二・

昭和一八・二・一五

三三三

学徒出陣などの時勢となり、三鷹の「正大寮」は解散のやむなきに至る。東条英機首相ならびに側近者は、田所廣泰を中心とする「精神科学研究所」の活動が、若さと勉学の努力の上に展開する思想運動・政治的発言の率直強烈なるを封じようとして、内務省・検事局などにその取締り方を要求した模様であるが、両者とも、この運動が、真摯かつ憂国の至情に発して展開していることを知るがゆえに、軽々にその命に従わなかった。

かくてこの日、東条首相はついにその輩下の東京憲兵隊（隊長四方大佐）をもって田所をはじめ同所員約十名の検挙にふみ切った。と同時に、翼賛議会といわれる帝国議会において今井新造議員と、情報局次長奥村喜和男氏とのあいだにおける、狎れ合い式の質疑応答によって、「精神科学研究所」の諸活動が反戦・反軍・反国家の思想であるという指摘がなされた。

（詳しくは、二月十五日の第81回帝国議会、衆議院の決算委員会の第三回会議速記録23（25ページ参照）そして百余日に及ぶ拘留生活がはじまったこの日の帝国議会においても、再度、今井新造議員と内務大臣湯沢三千男氏とのあいだの質疑応答の狎れ合い式問答によって、かざわて田所廣泰は

昭和一九・四・七	八・	三四
昭和一九・四・七	一〇・三〇	
昭和一九・四・七	一一・一六	
昭和二〇・三・一	一二・	三五
昭和二〇・三・一	七・	
昭和二〇・三・一	八・一五	
昭和二一・六・一八	以後	三六

か同志の「不逞性？」が追求されている（詳しくは、二月二十五日の第81回帝国議会、衆議院の決算委員会の第十回会議速記録176～179ページ参照）
 拘置中に、四方憲兵隊長同席にて拘置中の全所員が集められ、「精神科学研究所」と「日本学生協会」の自発的解散を条件にして、「不起訴処分」にする旨の宣告あり、間もなく釈放された

雑誌「新指導者」を「思想界」と改題、一、二号にて廃刊

「精神科学研究所」ならびに「日本学生協会」の解散完了。釈放後、他の二、三の所員と同じく常に憲兵の尾行をうけることとなる

福島県人森愛子と結婚

福島県若松市に疎開

同志との文通活動に関する嫌疑のため、再び憲兵隊に拘置される
 憲兵隊を釈放される。この度の憲兵隊拘置により著しく健康を害し、それが原因となって再帰不能に至った

風邪（結核）悪化したため、年内帰京を志して果さず

長男宏之君、福島県若松市にて出生

福島県若松市より岩手県盛町に再疎開す

終戦

物資欠乏、生活環境悪化のため健康状態思わしからず病勢進む

盛町にてついに病没。病床枕元には、和とじの漢籍など積み重ねられ、病魔と戦いつつ、日本の運命を深く憂えること、まことにきびしくかつ深痛のものがあつた

昭和四十五年三月十日 二、〇〇〇部

資料Ⅱ非売品

憂国の光と影

——田所廣泰遺稿集——

編者 小田村寅二郎

発行所 社団法人 国民文化研究会

(理事長 小田村寅二郎)

東京都中央区銀座七一〇—一八(柳瀬ビル)

電話〇三—五七二—一五二六〇七

印刷所 奥村印刷株式会社

東京都千代田区西神田一—一四





